

とめでて、ささめき騒ぐ声、いとしるし。人びと、いと苦しと思ふに、声いときはやかにて、

「沖つ舟よるべ波路に漂はば

棹さし寄らむ泊り教へよ

棚なし小舟漕ぎ返り、同じ人をや。あな、悪や」

と言ふを、いとあやしう、

「この御方には、かう用意なきこと聞こえぬものを」と思ひまはすに、「この聞く人なりけり」

と、をかしうて、

「よるべなみ風の騒がす舟人も

思はぬ方に磯伝ひせず」

とて、はしたなかめり、とや。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuyya/index.html>)

の尚侍の君を、いとつかしきはらからにて、睦びきこえたまふものから、さすがなる御けしきうちまぜつつ、

「宮仕ひに、かひありてものしたまはましものを」

と、この若君のうつくしきにつけても、

「今まで皇子たちのおはせぬ嘆きを見たてまつるに、いかに面目あらまし」

と、あまりのことをぞ思ひてのたまふ。

公事は、あるべきさまに知りなどしつつ、参りたまふことぞ、やがてかくてやみぬべかめる。さてもありぬべきことなりかし。

まことや、かの内の大殿の御女の、尚侍のぞみし君も、さるものの癖なれば、色めかしう、さまよふ心さへ添ひて、もてわづらひたまふ。女御も、「つひに、あはあはしきこと、この君ぞ引き出でむ」と、ともすれば、御胸つぶしたまへど、大臣の、

「今は、なまじらひそ」

と、制しのたまふをだに聞き入れず、まじらひ出でてものしたまふ。

いかなる折にかありけむ、殿上人あまた、おぼえことなる限り、この女御の御方に参りて、物の音など調べ、なつかしきほどの拍子打ち加へてあそぶ。秋の夕べのただならぬに、宰相中将も寄りおはして、例ならず乱れてものなどのたまふを、人びとめづらしがりて、

「なほ、人よりことにも」

とめづるに、この近江の君、人びとの中を押し分けて出でるたまふ。

「あな、うたてや。こはなぞ」

と引き入るれど、いとさがなげににらみて、張りゐたれば、わづらはしくて、

「あうなきことや、のたまひ出でむ」

と、つき交はすに、この世に目馴れぬまめ人をしも、

「これぞな、これぞな」

よろしからぬ御けしきにおどろきて。すぎずきしや」

と聞こえたまへり。

「この大将の、かかるはかなしごと言ひたるも、まだこそ聞かざりつれ。めづらしう」

とて、笑ひたまふ。心のうちには、かく領じたるを、いとからしと思す。

かの、もとの北の方は、月日隔たるままに、あさましと、ものを思ひ沈み、いよいよ呆け疾れてものしたまふ。大将殿のおほかたの訪らひ、何ごとをも詳しく思しおきて、君達をば、変はらず思ひかしづきたまへば、えしもかけ離れたまはず、まめやかなる方の頼みは、同じことにてなむものしたまひける。

姫君をぞ、堪へがたく恋ひきこえたまへど、絶えて見せたてまつりたまはず。若き御心のうちに、この父君を、誰れも誰れも、許しなう恨みきこえて、いよいよ隔てたまふことのみまされば、心細く悲しきに、男君たちは、常に参り馴れつつ、尚侍の君の御ありさまなどをも、おのづからことにふれてうち語りて、

「まろらをも、らうたくなつかしうなむしたまふ。明け暮れをかしきことを好みてものしたまふ」

など言ふに、うらやましう、かやうにても安らかに振る舞ふ身ならざりけむを嘆きたまふ。あやしう、男女につけつつ、人にもものを思はする尚侍の君にぞおはしける。

その年の十一月に、いとをかしき稚児をさへ抱き出でたまへれば、大将も、思ふやうにめでたしと、もてかしづきたまふこと、限りなし。そのほどのありさま、言はずとも思ひやりつべきことぞかし。父大臣も、おのづから思ふやうなる御宿世と思したり。

わざとかしづきたまふ君達にも、御容貌などは劣りたまはず。頭中将も、こ

言はでぞ恋ふる山吹の花

顔に見えつつ」

などのたまふも、聞く人なし。かく、さすがにもて離れたることは、このたびぞ思しける。げに、あやしき御心のすさびなりや。

かりの子のいと多かるを御覧じて、柑子、橘などやうに紛らはして、わぎとならずたてまつれたまふ。御文は、「あまり人もぞ目立つる」など思して、すくよかに、

「おぼつかなき月日も重なりぬるを、思はずなる御もてなしなりと恨みきこゆるも、御心ひとつにのみはあるまじう聞きはべれば、ことなるついでならば、対面の難からむを、口惜しう思ひたまふる」

など、親めき書きたまひて、

「同じ巢にかへりしかひの見えぬかな

いかなる人か手ににぎるらむ

などか、さしもなど、心やましうなむ」

などあるを、大将も見たまひて、うち笑ひて、

「女は、まことの親の御あたりにも、たはやすくうち渡り見えたてまつりたまはむこと、ついでなくてあるべきことにあらず。まして、なぞ、この大臣の、をりをり思ひ放たず、恨み言はしたまふ」

と、つぶやくも、憎しと聞きたまふ。

「御返り、ここにはえ聞こえじ」

と、書きにくくおぼいたれば、

「まる聞こえむ」

と代はるも、かたはらいたしや。

「巢隠れて数にもあらぬかりの子を
いづ方にかは取り隠すべき

と、つれなくもてなしたまへど、胸に満つ心地して、かの昔の、尚侍の君を朱雀院の後の切に取り籠めたまひし折など思し出づれど、さしあたりたることなればにや、これは世づかずぞあはれなりける。

「好いたる人は、心からやすかるまじきわぎなりけり。今は何につけてか心をも乱らまし。似げなき恋のつまなりや」

と、さましわびたまひて、御琴掻き鳴らして、なつかしう弾きなしたまひし爪音、思ひ出でられたまふ。あづまの調べを、すが掻きて、

「玉藻はな刈りそ」

と、歌ひすさびたまふも、恋しき人に見せたらば、あはれ過ぐすまじき御さまなり。

内にも、ほのかに御覽ぜし御容貌ありさまを、心にかけてたまひて、

「赤裳垂れ引き去にし姿を」

と、憎げなる古事なれど、御言種になりてなむ、眺めさせたまひける。御文は、忍び忍びにありけり。身を憂きものに思ひしみたまひて、かやうのすさびごとをも、あいなく思しければ、心とけたる御いらへも聞こえたまはず。

なほ、かの、ありがたかりし御心おきてを、かたがたにつけて思ひしみたまへる御ことぞ、忘れざりける。

三月になりて、六条殿の御前の、藤、山吹のおもしろき夕ばえを見たまふにつけても、まづ見るかひありてゐたまへりし御さまのみ思し出でらるれば、春の御前をうち捨てて、こなたに渡りて御覽ず。

呉竹の籬に、わぎとなう咲きかかりたるにほひ、いとおもしろし。

「色に衣を」

などのたまひて、

「思はずに井手の中道隔つとも」

と、起き臥し面影にぞ見えたまふ。

大将の、をかしやかに、わららかなる気もなき人に添ひるたらむに、はかなき戯れごともつつまじう、あいなく思されて、念じたまふを、雨いたう降りて、いとのだやかなるころ、かやうのつれづれも紛らはし所に渡りたまひて、語らひたまひしきまなどの、いみじう恋しければ、御文たてまつりたまふ。

右近がもとに忍びて遣はすも、かつは、思はむことを思すに、何ごともえ続けたまはで、ただ思はせたることどもぞありける。

「かきたれてのどけきころの春雨に

ふるさと人をいかに偲ぶや

つれづれに添へて、うらめしう思ひ出でらること多うはべるを、いかでか分き聞こゆべからむ」

などあり。

隙に忍びて見せたてまつれば、うち泣きて、わが心にも、ほど経るままに思ひ出でられたまふ御さまを、まほに、「恋しや、いかで見たてまつらむ」などは、えのたまはぬ親にて、「げに、いかでかは対面もあらむ」と、あはれなり。

時々、むつかしかりし御けしきを、心づきなう思ひきこえしなどは、この人にも知らせたまはぬことなれば、心ひとつに思し続くれど、右近は、ほのけしき見けり。いかなりけることならむとは、今に心得がたく思ひける。

御返り、「聞こゆるも恥づかしけれど、おぼつかなくやは」とて、書きたまふ。

「眺めする軒の雫に袖ぬれて

うたかた人を偲ばざらめや

ほどふるころは、げに、ことなるつれづれもまさりはべりけり。あなかしこ」と、ゐやゐやしく書きなしたまへり。

引き広げて、玉水のこぼるるやうに思さるるを、「人も見ば、うたてあるべし」

やがて今宵、かの殿にと思しまうけたるを、かねては許されあるまじきにより、漏らしきこえたまはで、

「にはかにいと乱り風邪の悩ましきを、心やすき所にうち休みはべらむほど、よそよそにてはいとおぼつかなくはべらむを」

と、おいらかに申しないたまひて、やがて渡したてまつりたまふ。

父大臣、にはかなるを、「儀式なきやうにや」と思せど、「あながちに、さばかりのことを言ひ妨げむも、人の心おくべし」と思せば、

「ともかくも。もとより進退ならぬ人の御ことなれば」

とぞ、聞こえたまひける。

六条殿ぞ、「いとゆくりなく本意なし」と思せど、などかはあらむ。女も、塩やく煙のなびきけるかたを、あさましと思せど、盗みもて行きたらましと思しなずらへて、いとうれしく心地おちるぬ。

かの、入りみさせたまへりしことを、いみじう怨じきこえさせたまふも、心づきなく、なほなほしき心地して、世には心解けぬ御もてなし、いよいよけしき悪し。

かの宮にも、さこそたけうのたまひしか、いみじう思しわぶれど、絶えて訪れず。ただ思ふことかなひぬる御かしづきに、明け暮れいとなみて過ぐしたまふ。

二月にもなりぬ。大殿は、

「さて、つれなきわざなりや。いとかう際々しうとしも思はで、たゆめられたるねたさを、人悪ろく、すべて御心にかからぬ折なく、恋しう思ひ出でられたまふ。

「宿世などいふもの、おろかならぬことなれど、わがあまりなる心にて、かく人やりならぬものは思ふぞかし」

「さらば。物懲りして、また出だし立てぬ人もぞある。いとこそからけれ。人より先に進みにし心ぎしの、人に後れて、けしき取り従ふよ。昔のなにがしが例も、引き出でつべき心地なむする」

とて、まことにいと口惜しと思し召したり。

聞こし召ししにも、こよなき近まさを、はじめよりさる御心なからむにてだにも、御覧じ過ぐすまじきを、まいていとねたう、飽かず思さる。

されど、ひたぶるに浅き方に、思ひ疎まれじとて、いみじう心深きさまにのたまひ契りて、なつけたまふも、かたじけなう、「われは、われ、と思ふものを」と思す。

御輦車寄せて、こなた、かなたの、御かしづき人ども心もとながり、大将も、いとものむつかしうたち添ひ、騒ぎたまふまで、えおはしまし離れず。

「かういと厳しき近き守りこそむつかしけれ」と憎ませたまふ。

「九重に霞隔てば梅の花

ただ香ばかりも匂ひ来じとや」

殊なることなきことなれども、御ありさま、けはひを見たてまつるほどは、をかしくもやありけむ。

「野をなつかしみ、明かいつべき夜を、惜しむべかめる人も、身をつみて心苦しうなむ。いかでか聞こゆべき」

と思し悩むも、「いとかたじけなし」と、見たてまつる。

「香ばかりは風にもつてよ花の枝に

立ち並ぶべき匂ひなくとも」

さすがにかけ離れぬけはひを、あはれと思しつつ、返り見がちにて渡らせたまひぬ。

「あやしうおぼつかなきわざかな。よろこびなども、思ひ知りたまはむと思ふことあるを、聞き入れたまはぬさまにのみあるは、かかる御癖なりけり」

とのたまはせて、

「などでかく灰あひがたき紫を

心に深く思ひそめけむ

濃くなり果つまじきにや」

と仰せらるるさま、いと若くきよらに恥づかしきを、「違ひたまへるところやある」と思ひ慰めて、聞こえたまふ。宮仕への労もなくて、今年、加階したまへる心にや。

「いかならむ色とも知らぬ紫を

心してこそ人は染めけれ

今よりなむ思ひたまへ知るべき」

と聞こえたまへば、うち笑みて、

「その、今より染めたまはむこそ、かひなかべいことなれ。愁ふべき人あらば、ことわり聞かまほしくなむ」

と、いたう怨みさせたまふ御けしきの、まめやかにわづらはしければ、「いとうたてもあるかな」とおぼえて、「をかしきさまをも見えたてまつらじ、むつかしき世の癖なりけり」と思ふに、まめだちてさぶらひたまへば、え思すさまなる乱れごともうち出でさせたまはで、「やうやうこそは目馴れめ」と思しけり。

大将は、かく渡らせたまへるを聞きたまひて、いとど静心なければ、急ぎまどはしたまふ。みづからも、「似げなきことも出で来ぬべき身なりけり」と心憂きに、えのどめたまはず、まかでさせたまふべきさま、つきづきしきことづけども作り出でて、父大臣など、かしこくたばかりたまひてなむ、御暇許されたまひける。

宿直所にゐたまひて、日一日、聞こえ暮らしたまふことは、

「夜さり、まかでさせたてまつりてむ。かかるついでにと、思し移るらむ御宮仕へなむ、やすからぬ」

とのみ、同じことを責めきこえたまへど、御返りなし。さぶらふ人びとぞ、

「大臣の、『心あわたたしきほどならで、まれまれの御参りなれば、御心ゆかせたまふばかり。許されありてを、まかでさせたまへ』と、聞こえさせたまひしかば、今宵は、あまりすがすがしうや」

と聞こえたるを、いとつらしと思ひて、

「さばかり聞こえしものを、さも心になはぬ世かな」

とうち嘆きてゐたまへり。

兵部卿宮、御前の御遊びにさぶらひたまひて、静心なく、この御局のあたり思ひやられたまへば、念じあまりて聞こえたまへり。大将は、司の御曹司にぞおはしける。「これより」とて取り入れたれば、しぶしぶに見たまふ。

「深山木に羽うち交はしゐる鳥の

またなくねたき春にもあるかな

さへづる声も耳とどめられてなむ」

とあり。いとほしう、面赤みて、聞こえむかたなく思ひゐたまへるに、主上渡らせたまふ。

月の明かきに、御容貌はいふよしなくきよらにて、ただ、かの大臣の御けはひに違ふところなくおはします。「かかる人はまたもおはしけり」と、見たてまつりたまふ。かの御心ばへは浅からぬも、うたてもの思ひ加はりしを、これは、などかはさしもおぼえさせたまはむ。いとなつかしげに、思ひしことの違ひにたる怨みをのたまはするに、面おかむかたなくぞおぼえたまふや。顔をもて隠して、御応へもえ聞こえたまはねば、

しき更衣たち、あまたもさぶらひたまはず。

中宮、弘徽殿女御、この宮の女御、左の大殿の女御などさぶらひたまふ。さては、中納言、宰相の御女二人ばかりぞさぶらひたまひける。

踏歌は、方々に里人参り、さまことに、けににぎははしき見物なれば、誰も誰もきよらを尽くし、袖口の重なり、こちたくめでたくとのへたまふ。春宮の女御も、いとほなやかにもてなしたまひて、宮は、まだ若くおはしませど、すべていと今めかし。

御前、中宮の御方、朱雀院とに参りて、夜いたう更けにければ、六条の院には、このたびは所狭しとはぶきたまふ。朱雀院より帰り参りて、春宮の御方々めぐるほどに、夜明けぬ。

ほのぼのとをかしき朝ぼらけに、いたく酔ひ乱れたるさまして、「竹河」謡ひけるほどを見れば、内の大殿の君達は、四、五人ばかり、殿上人のなかに、声すぐれ、容貌きよげにて、うち続きたまへる、いとめでたし。

童なる八郎君は、むかひ腹にて、いみじうかしづきたまふが、いとうつくしうて、大将殿の太郎君と立ち並みたるを、尚侍の君も、よそ人と見たまはねば、御目とまりけり。やむごとなくまじらひ馴れたまへる御方々よりも、この御局の袖口、おほかたのけはひ今めかしう、同じものの色あひ、襲なりなれど、ものよりことにはなやかなり。

正身も女房たちも、かやうに御心やりて、しばしは過ぐいたまはまし、と思ひあへり。

皆同じごと、かづけわたす綿のさまも、匂ひ香ことにらうらうじうしないたまひて、こなたは水駅なりけれど、けはひにぎははしく、人びと心懸想しそして、限りある御饗などのことどもも、したるさま、ことに用意ありてなむ、大将殿せさせたまへりける。

うち絶えて訪れもせず、はしたなかりしにことづけ顔なるを、宮には、いみじうめざましがり嘆きたまふ。

春の上も聞きたまひて、

「ここにさへ、恨みらるるゆゑになるが苦しきこと」

と嘆きたまふを、大臣の君、いとほしと思して、

「難きことなり。おのが心ひとつにもあらぬ人のゆかりに、内にも心おきたるさまに思したなり。兵部卿宮なども、怨じたまふと聞きしを、さいへど、思ひやり深うおはする人にて、聞きあきらめ、恨み解けたまひにたなり。おのづから人の仲らひは、忍ぶることと思へど、隠れなきものなれば、しか思ふべき罪もなし、となむ思ひはべる」

とのたまふ。

かかることどもの騒ぎに、尚侍の君の御けしき、いよいよ晴れ間なきを、大将は、いとほしと思ひあつかひきこえて、

「この参りたまはむとありしことも、絶え切れて、妨げきこえつるを、内にも、なめく心あるさまに聞こしめし、人びとも思すところあらむ。公人を頼みたる人はなくやはある」

と思ひ返して、年返りて、参らせたてまつりたまふ。男踏歌ありければ、やがてそのほどに、儀式いといまめかしく、二なくて参りたまふ。

かたがたの大臣たち、この大将の御勢ひさへさしあひ、宰相中將、ねむごろに心しらひきこえたまふ。兄弟の君達も、かかる折にと集ひ、追従し寄りて、かしづきたまふさま、いとめでたし。

承香殿の東面に御局したり。西に宮の女御はおはしければ、馬道ばかりの隔てなるに、御心のうちは、遙かに隔たりけむかし。御方々、いづれとなく挑み交はしたまひて、内わたり、心にくくをかしきころほひなり。ことに乱りがは

ひうかれたまふさま、聞きわたりても久しくなりぬるを、いづくをまた思ひ直るべき折とか待たむ。いとどひがひがしきさまにのみこそ見え果てたまはめ」と諫め申したまふ、ことわりなり。

「いと、若々しき心地もしはべるかな。思ほし捨つまじき人びともはべればと、のどかに思ひはべりける心のおこたりを、かへすがへす聞こえてもやるかたなし。今はただ、なだらかに御覧じ許して、罪さりどころなう、世人にもことわらせてこそ、かやうにももてないたまはめ」

など、聞こえわづらひておはす。「姫君をだに見たてまつらむ」と聞こえたまへれど、出だしたてまつるべくもあらず。

男君たち、十なるは、殿上したまふ。いとうつくし。人にほめられて、容貌などようはあらねど、いとらうらうじう、ものの心やうやう知りたまへり。

次の君は、八つばかりにて、いとらうたげに、姫君にもおぼえたれば、かき撫でつつ、

「あこをこそは、恋しき御形見にも見るべかめれ」

など、うち泣きて語らひたまふ。宮にも、御けしき賜はらせたまへど、

「風邪おこりて、ためらひはべるほどにて」

とあれば、はしたなくて出でたまひぬ。

小君達をば車に乗せて、語らひおはす。六条殿には、え率ておはせねば、殿にとどめて、

「なほ、ここにあれ。来て見むにも心やすかるべく」

とのたまふ。うち眺めて、いと心細げに見送りたるさまども、いとあはれなるに、もの思ひ加はりぬる心地すれど、女君の御さまの、見るかひありてめでたきに、ひがひがしき御さまを思ひ比ぶるにも、こよなくて、よろづを慰めたまふ。

かな。正身は、しかひききりに際々しき心もなきものを、宮のかく軽々しうおはする」

と思ひて、君達もあり、人目もいとほしきに、思ひ乱れて、尚侍の君に、

「かくあやしきことなむはべる。なかなか心やすくは思ひたまへなせど、さて片隅に隠ろへてもありぬべき人の心やすさを、おだしう思ひたまへつるに、にはかにかの宮ものしたまふならむ。人の聞き見ることも情けなきを、うちほのめきて、参り来なむ」

とて出でたまふ。

よき上の御衣、柳の下襲、青鈍の綺の指貫着たまひて、引きつくろひたまへる、いとものものし。「などかは似げなからむ」と、人びとは見たてまつるを、尚侍の君は、かかることどもを聞きたまふにつけても、身の心づきなう思し知らるれば、見もやりたまはず。

宮に恨み聞こえむとて、参うでたまふままに、まづ、殿におはしたれば、木工の君など出で来て、ありしさま語りきこゆ。姫君の御ありさま聞きたまひて、男々しく念じたまへど、ほろほろとこぼるる御けしき、いとあはれなり。

「さて、世の人にも似ず、あやしきことどもを見過ぐすこちらの年ごろの心ざしを、見知りたまはずありけるかな。いと思ひのままならむ人は、今までも立ちとまるべくやはある。よし、かの正身は、とてもかくても、いたづら人と見えたまへば、同じことなり。幼き人びとも、いかやうにもてなしたまはむとすらむ」

と、うち嘆きつつ、かの真木柱を見たまふに、手も幼けれど、心ばへのあはれに恋しきままに、道すがら涙おしのごひつつ参うでたまへれば、対面したまふべくもあらず。

「何か。ただ時に移る心の、今はじめて変はりたまふにもあらず。年ごろ思

梢をも目とどめて、隠るるまでぞ返り見たまひける。君が住むゆゑにはあらで、
こころ年経たまへる御住みかの、いかでか偲びどころなくはあらむ。

宮には待ち取り、いみじう思したり。母北の方、泣き騒ぎたまひて、

「太政大臣を、めでたきよすがと思ひきこえたまへれど、いかばかりの昔の
仇敵にかおはしけむとこそ思ほゆれ。

女御をも、ことに触れ、はしたなくもてなしたまひしかど、それは、御仲の
恨み解けざりしほど、思ひ知れとにこそはありけめと思しのたまひ、世の人も
言ひなししだに、なほ、さやはあるべき。

人一人を思ひかしづきたまはむゆゑは、ほとりまでもにほふ例こそあれと、
心得ざりしを、まして、かく末に、すずろなる継子かしづきをして、おのれ古
したまへるいとほしみに、実法なる人のゆるぎどころあるまじきをとて、取り
寄せもてかしづきたまふは、いかがつらからぬ」

と、言ひ続けののしりたまへば、宮は、

「あな、聞きにくや。世に難つけられたまはぬ大臣を、口にまかせてなおと
しめたまひそ。かしこき人は、思ひおき、かかる報いもがなと、思ふことこそ
はものせられけめ。さ思はるるわが身の不幸なるにこそはあらめ。

つれなうて、皆かの沈みたまひし世の報いは、浮かべ沈め、いとかしこくこ
そは思ひわたいたまふめれ。おのれ一人をば、さるべきゆかりと思ひてこそは、
一年も、さる世の響きに、家よりあまることどももありしか。それをこの生の
面目にてやみぬべきなめり」

とのたまふに、いよいよ腹立ちて、まがまがしきことなどを言ひ散らしたま
ふ。この大北の方ぞ、さがな者なりける。

大将の君、かく渡りたまひにけるを聞きて、

「いとあやしう、若々しき仲らひのやうに、ふすべ顔にてもしたまひける

うもこそあれ」

と思ほすに、うつぶし伏して、「え渡るまじ」と思ほしたるを、

「かく思したるなむ、いと心憂き」

など、こしらへきこえたまふ。「ただ今も渡りたまはなむ」と、待ちきこえたまへど、かく暮れなむに、まさに動きたまひなむや。

常に寄りゐたまふ東面の柱を、人に譲る心地したまふもあはれにて、姫君、桧皮色の紙の重ね、ただいささかに書いて、柱の干割れたるはさまに、笄の先して押し入れたまふ。

「今はとて宿かれぬとも馴れ来つる

真木の柱はわれを忘るな」

えも書きやらで泣きたまふ。母君、「いでや」とて、

「馴れきとは思ひ出づとも何により

立ちとまるべき真木の柱ぞ」

御前なる人びとも、さまざまに悲しく、「さしも思はぬ木草のときへ恋しからむこと」と、目とどめて、鼻すすりあへり。

木工の君は、殿の御方の人にてとどまるに、中將の御許、

「浅けれど石間の水は澄み果てて

宿もる君やかけ離るべき

思ひかけざりしことなり。かくて別れたてまつらむことよ」

と言へば、木工、

「ともかくも岩間の水の結ぼほれ

かけとむべくも思ほえぬ世を

いでや」

とてうち泣く。

御車引き出でて振り返るも、「またはいかでは見む」と、はかなき心地す。

乱れ散るべし。御調度どもは、さるべきは皆したため置きなどするままに、上
下泣き騒ぎたるは、いとゆゆしく見ゆ。

君たちは、何心もなくてありきたまふを、母君、皆呼び据ゑたまひて、

「みづからは、かく心憂き宿世、今は見果てつれば、この世に跡とむべきに
もあらず、ともかくもさすらへなむ。生ひ先遠うて、さすがに、散りぼひたま
はむありさまどもの、悲しうもあべいかな。

姫君は、となるともかうなるとも、おのれに添ひたまへ。なかなか、男君た
ちは、えさらず参うで通ひ見えたてまつらむに、人の心とどめたまふべくもあ
らず、はしたなうてこそただよはめ。

宮のおはせむほど、形のやうに交じらひをすとも、かの大臣たちの御心にか
かれる世にて、かく心おくべきわたりぞと、さすがに知られて、人にもなり立
たむこと難し。さりとて、山林に引き続きまじらむこと、後の世までいみじき
こと」

と泣きたまふに、皆、深き心は思ひ分かねど、うちひそみて泣きおはさうず。

「昔物語などを見るにも、世の常の心ざし深き親だに、時に移ろひ、人に従
へば、おろかにのみこそなりけれ。まして、形のやうにて、見る前にだに名残
なき心は、かかりどころありてももてないたまはじ」

と、御乳母どもさし集ひて、のたまひ嘆く。

日も暮れ、雪降りぬべき空のけしきも、心細う見ゆる夕べなり。

「いたう荒れはべりなむ。早う」

と、御迎への君達そそのかしきこえて、御目おし拭ひつつ眺めおはす。姫君
は、殿いとかなしうしたてまつりたまふならひに、

「見たてまつらではいかでかあらむ。『今』なども聞こえて、また会ひ見ぬや

修法などし騒げど、御もののけこちたくおこりてののしるを聞きたまへば、「あるまじき疵もつき、恥ぢがましきこと、かならずありなむ」と、恐ろしうて寄りつきたまはず。

殿に渡りたまふ時も、異方に離れるたまひて、君達ばかりをぞ呼び放ちて見たてまつりたまふ。女一所、十二、三ばかりにて、また次々、男二人なむおはしける。近き年ごろとなりては、御仲も隔たりがちにてならはしたまへれど、やむごとなう、立ち並ぶ方なくてならひたまへれば、「今は限り」と見たまふに、さぶらふ人びとも、「いみじう悲し」と思ふ。

父宮、聞きたまひて、

「今は、しかかけ離れて、もて出でたまふらむに、さて、心強くものしたまふ、いと面なう人笑へなることなり。おのがあらむ世の限りは、ひたぶるにしも、などか従ひくづほれたまはむ」

と聞こえたまひて、にはかに御迎へあり。

北の方、御心地すこし例になりて、世の中をあさましう思ひ嘆きたまふに、かくと聞こえたまへれば、

「しひて立ちとまりて、人の絶え果てむさまを見果てて、思ひとぢめむも、今すこし人笑へにこそあらめ」

など思し立つ。

御兄弟の君達、兵衛督は、上達部におはすれば、ことごとしとて、中将、侍従、民部大輔など、御車三つばかりしておはしたり。「さこそはあべかめれ」と、かねて思ひつることなれど、さしあたりて今日を限りと思へば、さぶらふ人びとも、ほろほろと泣きあへり。

「年ごろならひたまはぬ旅住みに、狭くはしたなくては、いかでかあまたはさぶらはむ。かたへは、おのおの里にまかでて、しづませたまひなむに」
など定めて、人びとおのがじし、はかなきものどもなど、里に払ひやりつつ、

うちにも、「このころばかりだに、ことなく、うつし心にあらせたまへ」と念じたまふ。「まことの心ばへのあはれなるを見ず知らずは、かうまで思ひ過ぐすべくもなきけ疎さかな」と、思ひゐたまへり。

暮るれば、例の、急ぎ出でたまふ。御装束のことなども、めやすくしなしたまはず、世にあやしう、うちあはぬさまにのみむつかりたまふを、あざやかなる御直衣なども、え取りあへたまはで、いと見苦し。

昨夜のは、焼けとほりて、疎ましげに焦れたるにほひなども、ことやうなり。御衣どもに移り香もしみたり。ふすべられけるほどあらはに、人も倦じたまひぬべければ、脱ぎ替へて、御湯殿など、いたうつくろひたまふ。

木工の君、御薫物しつつ、

「ひとりゐて焦がるる胸の苦しきに

思ひあまれる炎とぞ見し

名残なき御もてなしは、見たてまつる人だに、ただにやは」

と、口おほひてゐたる、まみ、いといたし。されど、「いかなる心にて、かやうの人にもを言ひけむ」などのみぞおぼえたまひける。情けなきことよ。

「憂きことを思ひ騒げばさまさまに

くゆる煙ぞいとど立ちそふ

いとことのほかなることどもの、もし聞こえあらば、中間になりぬべき身なめり」

と、うち嘆きて出でたまひぬ。

一夜ばかりの隔てだに、まためづらしう、をかしさまさりておぼえたまふありさまに、いとど心を分くべくもあらずおぼえて、心憂ければ、久しう籠もりたまへり。

「例の御もののけの、人に疎ませむとするわざ」

と、御前なる人びとも、いとほしう見たてまつる。

立ち騒ぎて、御衣どもたてまつり替へなどすれど、そこらの灰の、鬢のわたりにも立ちのぼり、よろづの所に満ちたる心地すれば、きよらを尽くしたまふわたりに、さながら参うでたまふべきにもあらず。

「心違ひとはいひながら、なほめづらしう、見知らぬ人の御ありさまなりや」と爪弾きせられ、疎ましうなりて、あはれと思ひつる心も残らねど、「このころ、荒立てては、いみじきこと出で来なむ」と思ししづめて、夜中になりぬれど、僧など召して、加持参り騒ぐ。呼ばひののしりたまふ声など、思ひ疎みたまはむにことわりなり。

夜一夜、打たれ引かれ、泣きまどひ明かしたまひて、すこしうち休みたまへるほどに、かしこへ御文たてまつれたまふ。

「昨夜、にはかに消え入る人のほしにより、雪のけしきもふり出でがたく、やすらひはべしに、身さへ冷えてなむ。御心をばさるものにて、人いかに取りなしはべりけむ」

と、きすくに書きたまへり。

「心さへ空に乱れし雪もよに

ひとり冴えつる片敷の袖

堪へがたくこそ」

と、白き薄様に、つつやかに書いたまへれど、ことにをかしきところもなし。手はいときよげなり。才かしくくなどぞものしたまひける。

尚侍の君、夜がれを何とも思されぬに、かく心ときめきしたまへるを、見も入れたまはねば、御返りなし。男、胸つぶれて、思ひ暮らしたまふ。

北の方は、なほいと苦しげにしたまへば、御修法など始めさせたまふ。心の

けれ。よそにても、思ひだにおこせたまはば、袖の氷も解けなむかし」
など、なごやかに言ひるたまへり。

御火取り召して、いよいよ焚きしめさせたてまつりたまふ。みづからは、萎えたる御衣ども、うちとけたる御姿、いとど細う、か弱げなり。しめりておはする、いと心苦し。御目のいたう泣き腫れたるぞ、すこしものしけれど、いとあはれと見る時は、罪なう思して、

「いかで過ぐしつる年月ぞ」と、「名残なう移ろふ心のいと軽きぞや」とは思ふ思ふ、なほ心懸想は進みて、そら嘆きをうちしつつ、なほ装束したまひて、小さき火取り取り寄せて、袖に引き入れてしめるたまへり。

なつかしきほどに萎えたる御装束に、容貌も、かの並びなき御光にこそ圧されるれど、いとあざやかに男々しきさまして、ただ人と見えぬ、心恥づかしげなり。

侍に、人びと声して、

「雪すこし隙あり。夜は更けぬらむかし」

など、さすがにまほにはあらで、そそのかしきこえて、声づくりあへり。

中將、木工など、「あはれの世や」などうち嘆きつつ、語らひて臥したるに、正身は、いみじう思ひしづめて、らうたげに寄り臥したまへり、と見るほどに、にはかに起き上がりて、大きな籠の下なりつる火取りを取り寄せて、殿の後ろに寄りて、さと沃かけたまふほど、人のややみあふるほどもなう、あさましきに、あきれてものしたまふ。

さるこまかなる灰の、目鼻にも入りて、おぼはれてものもおぼえず。払ひ捨てたまへど、立ち満ちたれば、御衣ども脱ぎたまひつ。

うつし心にてかくしたまふぞと思はば、またかへりみすべくもあらずあさましけれど、

「いとよようのたまふを、例の御心違ひにや、苦しきことも出で来む。大殿の北の方の知りたまふことにもはべらず。いつき女のやうにてもものしたまへば、かく思ひ落とされたる人の上までは知りたまひなむや。人の御親げなくこそものしたまふべかめれ。かかることの聞こえあらば、いとど苦しかるべきこと」など、日一日入りみて、語らひ申したまふ。

暮れぬれば、心も空に浮きたちて、いかで出でなむと思ほすに、雪かきたれて降る。かかる空にふり出でむも、人目いとほしう、この御けしきも、憎げにふすべ恨みなどしたまはば、なかなかことつけて、われも迎ひ火つくりであるべきを、いとおいらかに、つれなうもてなしたまへるさまの、いと心苦しければ、いかにせむ、と思ひ乱れつつ、格子などもさながら、端近ううち眺めてゐたまへり。

北の方けしきを見て、
「あやにくなめる雪を、いかで分けたまはむとすらむ。夜も更けぬめりや」
とそそのかしたまふ。「今は限り、とどむとも」と思ひめぐらしたまへるけしき、いとあはれなり。

「かかるには、いかでか」
とのたまふものから、

「なほ、このころばかり。心のほどを知らで、とかく人の言ひなし、大臣たちも、左右に聞き思さむことを憚りてなむ、とだえあらむはいとほしき。思ひしづめて、なほ見果てたまへ。ここになど渡しては、心やすくはべりなむ。かく世の常なる御けしき見えたまふ時は、ほかぎまに分くる心も失せてなむ、あはれに思ひきこゆる」

など、語らひたまへば、

「立ちとまりたまひても、御心のほかならむは、なかなか苦しうこそあるべ

ず、涙にまつはれたるは、いとあはれなり。

こまかに匂へるところはなくて、父宮に似たてまつりて、なまめいたる容貌したまへるを、もてやつしたまへれば、いづこのはなやかなるけはひかはあらむ。

「宮の御ことを、軽くはいかが聞こゆる。恐ろしう、人聞きかたはにのたまひなしそ」とこしらへて、

「かの通ひはべる所の、いとまぼゆき玉の台に、うひうひしう、きすくなるさまにて出で入るほども、かたがたに人目たつらむと、かたはらいたければ、心やすく移ろはしてむと思ひはべるなり。

太政大臣の、さる世にたぐひなき御おぼえをば、さらにも聞こえず、心恥づかしう、いたり深うおはすめる御あたりに、憎げなること漏り聞こえば、いとなむいとほしう、かたじけなかるべき。

なだらかにて、御仲よくて、語らひてものしたまへ。宮に渡りたまへりとも、忘るることははべらじ。とてもかうても、今さらに心ぎしの隔たることはあるまじけれど、世の聞こえ人笑へに、まろがためにも軽々しうなむはべるべきを、年ごろの契り違へず、かたみに後見むと、思せ」

と、こしらへ聞こえたまへば、

「人の御つらさは、ともかくも知りきこえず。世の人にも似ぬ身の憂きをなむ、宮にも思し嘆きて、今さらに人笑へなることと、御心を乱りたまふなれば、いとほしう、いかでか見えたてまつらむ、となむ。

大殿の北の方と聞こゆるも、異人にやはものしたまふ。かれは、知らぬさまにて生ひ出でたまへる人の、末の世に、かく人の親だちもてないたまふつらさをなむ、思ほしのたまふなれど、ここにはともかくも思はずや。もてないたまはむさまを見るばかり」

とのたまへば、

「昨日今日の、いと浅はかなる人の御仲らひだに、よろしき際になれば、皆思ひのどむる方ありてこそ見果つなれ。いと身も苦しげにもてなしたまひつれば、聞こゆべきこともうち出で聞こえにくくなむ。

年ごろ契りきこゆることにはあらずや。世の人にも似ぬ御ありさまを、見たてまつり果てむとこそは、こころ思ひしづめつつ過ぐし来るに、えさしもあり果つまじき御心おきてに、思し疎むな。

幼き人びともはべれば、とぎまかうぎまにつけて、おろかにはあらずと聞こえわたるを、女の御心の乱りがはしきままに、かく恨みわたりたまふ。ひとり見果てたまはぬほど、さもありぬべきことなれど、まかせてこそ、今しばし御覧じ果てめ。

宮の聞こし召し疎みて、さはやかにふと渡したてまつりてむと思しのたまふなむ、かへりていと軽々しき。まことに思しおきつることにやあらむ、しばし勘事したまふべきにやあらむ」

と、うち笑ひてのたまへる、いとねたげに心やまし。

御召人だちて、仕うまつり馴れたる木工の君、中将の御許などいふ人びとだに、ほどにつけつつ、「やすからずつらし」と思ひきこえたるを、北の方は、うつし心ものしたまふほどにて、いとなつかしううち泣きてゐたまへり。

「みづからを、ほけたり、ひがひがし、とのたまひ、恥ぢしむるは、ことわりなることになむ。宮の御ことをさへ取り混ぜのたまふぞ、漏り聞きたまはむはいとほしう、憂き身のゆかり軽々しきやうなる。耳馴れにてはべれば、今はじめていかにもものを思ひはべらず」

とて、うち背きたまへる、らうたげなり。

いとさきやかなる人の、常の御悩みに痩せ衰へ、ひはづにて、髪いとけうらにて長かりけるが、わけたるやうに落ち細りて、削ることもをさをさしたまは

ろもありけれ、ひたおもむきにすくみたまへる御心にて、人の御心動きぬべきこと多かり。

女君、人に劣りたまふべきことなし。人の御本性も、さるやむごとなき父親王の、いみじうかしづきたてまつりたまへるおぼえ、世に軽からず、御容貌なども、いとようおはしけるを、あやしう、執念き御もののけにわづらひたまひて、この年ごろ、人にも似たまはず、うつし心なき折々多くものしたまひて、御仲もあくがれてほど経にけれど、やむごとなきものとは、また並ぶ人なく思ひきこえたまへるを、めづらしう御心移る方の、なのめにだにあらず、人にすぐれたまへる御ありさまよりも、かの疑ひおきて、皆人の推し量りしことさへ、心きよくて過ぐいたまひけるなどを、ありがたうあはれと、思ひましきこえたまふも、ことわりになむ。

式部卿宮聞こし召して、

「今は、しか今めかしき人を渡して、もてかしづかむ片隅に、人悪ろくて添ひものしたまはむも、人聞きやさしかるべし。おのがあらむこなたは、いと人笑へなるさまに従ひなびかでも、ものしたまひなむ」

とのたまひて、宮の東の対を払ひしつらひて、「渡したてまつらむ」と思ひのたまふを、「親の御あたりといひながら、今は限りの身にて、たち返り見えたてまつらむこと」と、思ひ乱れたまふに、いとど御心地もあやまりて、うちはへ臥しわづらひたまふ。

本性は、いと静かに心よく、子めきたまへる人の、時々、心あやまりして、人に疎まれぬべきことなむ、うち混じりたまひける。

住まひなどの、あやしうしどけなく、もののきよらもなくやつして、いと埋れいたくもてなしたまへるを、玉を磨ける目移しに、心もとまらねど、年ごろの心ざしひき替ふるものならねば、心には、いとあはれと思ひきこえたまふ。

涙の滯の泡と消えなむ」

「心幼なの御消えどころや。さても、かの瀬は避き道かななるを、御手の先ばかりは、引き助けきこえてむや」と、ほほ笑みたまひて、

「まめやかには、思し知ることもあらむかし。世になき痴れ痴れしきも、またうしろやすさも、この世にたぐひなきほどを、さりともとなむ、頼もしき」

と聞こえたまふを、いとわりなう、聞き苦しと思いたれば、いとほしうて、のたまひ紛らはしつつ、

「内にのたまはすることなむいとほしきを、なほ、あからさまに参らせたまつらむ。おのがものと領じ果てては、さやうの御交じらひもかたげなめる世なめり。思ひそめきこえし心は違ふさまなめれど、二条の大臣は、心ゆきたまふなれば、心やすくなむ」

など、こまかに聞こえたまふ。あはれにも恥づかしくも聞きたまふこと多かれど、ただ涙にまつはれておはす。いとかう思したるさまの心苦しければ、思すさまにも乱れたまはず、ただ、あるべきやう、御心づかひを教へきこえたまふ。かしこに渡りたまはむことを、とみにも許しきこえたまふまじき御けしきなり。

内へ参りたまはむことを、やすからぬことに大将思せど、そのついでにや、まかでさせたてまつらむの御心つきたまひて、ただあからさまのほどを許しきこえたまふ。かく忍び隠ろへたまふ御ふるまひも、ならひたまはぬ心地に苦しければ、わが殿のうち修理ししつらひて、年ごろは荒らし埋もれ、うち捨てたまへりつる御しつらひ、よろづの儀式を改めいそぎたまふ。

北の方の思し嘆くらむ御心も知りたまはず、かなしうしたまひし君達をも、目にもとめたまはず、なよびかに情け情けしき心うちまじりたる人こそ、とぎまかうぎまにつけても、人のため恥がましからむことをば、推し量り思ふとこ

に、「恥づかしう、口惜しう」のみ思ほすに、もの心づきなき御けしき絶えず。殿も、いとほしう人びとも思ひ疑ひける筋を、心きよくあらはしたまひて、「わが心ながら、うちつけにねぢけたることは好まずかし」と、昔よりのことも思し出でて、紫の上にも、

「思し疑ひたりしよ」

など聞こえたまふ。「今さらに人の心癖もこそ」と思しながら、ものの苦しう思されし時、「さてもや」と、思し寄りたまひしことなれば、なほ思しも絶えず。

大将のおはせぬ昼つ方渡りたまへり。女君、あやしう悩ましげにのみもてないたまひて、すぐよかなる折もなくしをれたまへるを、かくて渡りたまへれば、すこし起き上がりたまひて、御几帳にはた隠れておはす。

殿も、用意ことに、すこしけけしきさまにもてないたまひて、おほかたのとどもなど聞こえたまふ。すぐよかなる世の常の人にならひては、まして言ふ方なき御けはひありさまを見知りたまふにも、思ひのほかなる身の、置きどころなく恥づかしきにも、涙ぞこぼれける。

やうやう、こまやかなる御物語になりて、近き御脇息に寄りかかりて、すこのぞきつつ、聞こえたまふ。いとをかしげに面瘦せたまへるさまの、見まほしう、らうたいことの添ひたまへるにつけても、「よそに見放つも、あまりなる心のすさびぞかし」と口惜し。

「おりたちて汲みは見ねども渡り川

人の瀬とはた契らざりしを

思ひのほかなりや」

とて、鼻うちかみたまふけはひ、なつかしうあはれなり。

女は顔を隠して、

「みつせ川渡らぬさきにいかでなほ

など、忍びてのたまひけり。げに、帝と聞こゆとも、人に思し落とし、はかなきほどに見えたてまつりたまひて、ものものしくもてなしたまはずは、あはつけきやうにもあべかりけり。

三日の夜の御消息ども、聞こえ交はしたまひけるけしきを伝へ聞きたまひてなむ、この大臣の君の御心を、「あはれにかたじけなく、ありがたし」とは思ひきこえたまひける。

かう忍びたまふ御仲らひのことなれど、おのづから、人のをかしきことに語り伝へつつ、次々に聞き洩らしつつ、ありがたき世語りにぞささめきける。内にも聞こし召してけり。

「口惜しう、宿世異なりける人なれど、さ思しし本意もあるを。宮仕へなど、かけかけしき筋ならばこそは、思ひ絶えたまはめ」
などのたまはせけり。

霜月になりぬ。神事などしげく、内侍所にもこと多かるころにて、女官ども、内侍ども参りつつ、今めかしう人騒がしきに、大将殿、昼もいと隠ろへたるさまにもてなして、籠もりおはするを、いと心づきなく、尚侍の君は思したり。

宮などは、まいていみじう口惜しと思す。兵衛督は、妹の北の方の御ことをさへ、人笑へに思ひ嘆きて、とり重ねもの思ほしけれど、「をこがましう、恨み寄りても、今はかひなし」と思ひ返す。

大将は、名に立てるまめ人の、年ごろいささか乱れたるふるまひなくて過ぐしたまへる、名残なく心ゆきて、あらざりしさまに好ましう、宵暁のうち忍びたまへる出で入りも、艶にしなしたまへるを、をかすと人びと見たてまつる。

女は、わららかににぎははしくもてなしたまふ本性も、もて隠して、いといたう思ひ結ぼほれ、心もてあらぬさまはしるきことなれど、「大臣の思すらむこと、宮の御心ぎまの、心深う、情け情けしうおはせし」などを思ひ出でたまふ

「内に聞こし召さむこともかしこし。しばし人にあまねく漏らさじ」と諫め
きこえたまへど、さしもえつつみあへたまはず。ほど経れど、いささかうちと
けたる御けしきもなく、「思はずに憂き宿世なりけり」と、思ひ入りたまへるさ
まのためみなきを、「いみじうつらし」と思へど、おぼろけならぬ契りのほど、
あはれにうれしく思ふ。

見るままにめでたく、思ふさまなる御容貌、ありさまを、「よそのものに見果
ててやみなましよ」と思ふだに胸つぶれて、石山の仏をも、弁の御許をも、並
べて戴かまほしう思へど、女君の、深くものしと疎みにければ、え交じらはで
籠もりるにけり。

げに、そこら心苦しげなることどもを、とりどりに見しかど、心浅き人のた
めにぞ、寺の験も現はれける。

大臣も、「心ゆかず口惜し」と思せど、いふかひなきことにて、「誰れも誰れ
もかく許しそめたまへることなれば、引き返し許さぬけしきを見せむも、人の
ためいとほしう、あいなし」と思して、儀式いと二なくもてかしづきたまふ。
いつしかと、わが殿に渡いたてまつらむことを思ひいそぎたまへど、軽々し
くふとうちとけ渡りたまはむに、かしこに待ち取りて、よくも思ふまじき人の
ものしたまふなるが、いとほしさにことづけたまひて、

「なほ、心のどかに、なだらかなるさまにて、音なく、いづ方にも、人のそ
しり恨みなかるべくをもてなしたまへ」

とぞ聞こえたまふ。

父大臣は、

「なかなかめやすかめり。ことにこまかなる後見なき人の、なまほの好いた
る宮仕へに出で立ちて、苦しげにやあらむとぞ、うしろめたかりし。心ざしは
ありながら、女御かくてもものしたまふをおきて、いかがもてなさまし」

真木柱

真
木
柱

思しだに知らば、慰む方もありぬべくなむ」

とて、いとかしけたる下折れの霜も落とさず持て参れる御使さへぞ、うちあひたるや。

式部卿宮の左兵衛督は、殿の上の御はらからぞかし。親しく参りなどしたまふ君なれば、おのづからいとよくものの案内も聞きて、いみじくぞ思ひわびける。いと多く怨み続けて、

「忘れなむと思ふものの悲しきを

いかさまにしていかさまにせむ」

紙の色、墨つき、しめたる匂ひも、さまざまなるを、人びとも皆、

「思し絶えぬべかめるこそ、さうざうしけれ」

など言ふ。

宮の御返りをぞ、いかが思すらむ、ただいささかにて、

「心もて光に向かふ葵だに

朝おく霜をおのれやは消つ」

とほのかなるを、いとめづらしと見たまふに、みづからはあはれを知りぬべき御けしきにかけたまひつれば、つゆばかりなれど、いとうれしかりけり。

かやうに何となけれど、さまざまなる人びとの、御わびことも多かり。

女の御心ばへは、この君をなむ本にすべきと、大臣たち定めきこえたまひけりとや。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

まつりて、さしつぎの御おぼえ、いとやむごとなき君なり。年三十二三のほどにものしたまふ。

北の方は、紫の上の御姉ぞかし。式部卿宮の御大君よ。年のほど三つ四つがこのかみは、ことなるかたはにもあらぬを、人柄やいかがおはしけむ、「嫗」とつけて心にも入れず、いかで背きなむと思へり。

その筋により、六条の大臣は、大将の御ことは、「似げなくいとほしからむ」と思したるなめり。色めかしくうち乱れたるところなきさまながら、いみじくぞ心を尽くしありきたまひける。

「かの大臣も、もて離れても思したらざなり。女は、宮仕へをもの憂げに思いたなり」と、うちうちのけしきも、さる詳しきたよりあれば、漏り聞きて、

「ただ大殿の御おもむけの異なるにこそはあなれ。まことの親の御心だに違はずは」

と、この弁の御許にも責ためたまふ。

九月にもなりぬ。初霜むすぼほれ、艶なる朝に、例の、とりどりなる御後見どもの、引きそばみつつ持て参る御文どもを、見たまふこともなくて、読みきこゆるばかりを聞きたまふ。大将殿のには、

「なほ頼み来しも、過ぎゆく空のけしきこそ、心尽くしに、

数ならば厭ひもせまし長月に

命をかくるほどぞはかなき」

「月たたば」とある定めを、いとよく聞きたまふなめり。

兵部卿宮は、

「いふかひなき世は、聞こえむ方なきを、

朝日さす光を見ても玉笹の

葉分けの霜を消たずもあらなむ

「妹背山深き道をば尋ねずて
緒絶の橋に踏み迷ひける

よ」

と恨むるも、人やりならず。

「惑ひける道をば知らず妹背山

たどたどしくぞ誰も踏み見し」

「いづ方のゆゑとなむ、え思し分かぎめりし。何ごとも、わりなきまで、おほかたの世を憚らせたまふめれば、え聞こえさせたまはぬになむ。おのづからかくのみもはべらじ」

と聞こゆるも、さることなれば、

「よし、長居しはべらむも、すさまじきほどなり。やうやう労積もりてこそは、かことをも」

とて、立ちたまふ。

月隈なくさし上がりて、空のけしきも艶なるに、いとあてやかにきよげなる容貌して、御直衣の姿、好ましくはなやかにて、いとをかし。

宰相中將のけはひありさまには、え並びたまはねど、これもをかしかめるは、
「いかでかかる御仲らひなりけむ」と、若き人びとは、例の、さるまじきことをも取り立ててめであへり。

大將は、この中將は同じ右の次將なれば、常に呼び取りつつ、ねむごろに語らひ、大臣にも申させたまひけり。人柄もいとよく、朝廷の御後見となるべかめる下形なるを、「などかはあらむ」と思しながら、「かの大臣のかくしたまへることを、いかがは聞こえ返すべからむ。さるやうあることにこそ」と、心得たまへる筋さへあれば、任せきこえたまへり。

この大將は、春宮の女御の御はらからにぞおはしける。大臣たちをおきたて

もはべらねど、絶えぬたとひもはべなるは。いかにぞや、古代のことなれど、頼もしくぞ思ひたまへける」

とて、ものしと思ひたまへり。

「げに、年ごろの積もりも取り添へて、聞こえまほしけれど、日ごろあやしく悩ましくはべれば、起き上がりなどもえしはべらでなむ。かくまでとがめたまふも、なかなか疎々しき心地なむしはべりける」

と、いとまめだちて聞こえ出だしたまへり。

「悩ましく思さるらむ御几帳のものをば、許させたまふまじくや。よしよし。げに、聞こえさするも、心地なかりけり」

とて、大臣の御消息ども忍びやかに聞こえたまふ用意など、人には劣りたまはず、いとめやすし。

「参りたまはむほどの案内、詳しくさまもえ聞かぬを、うちうちにのたまはむなむよからむ。何ごとも人目に憚りて、え参り来ず、聞こえぬことをなむ、なかなかいぶせく思したる」

など、語りきこえたまふついでに、

「いでや、をこがましきことも、えぞ聞こえさせぬや。いづ方につけても、あはれをば御覧じ過ぐすべくやはありけると、いよいよ恨めしきも添ひはべるかな。まづは、今宵などの御もてなしよ。北面だつ方に召し入れて、君達こそめざましくも思し召さめ、下仕へなどやうの人びととだに、うち語らはばや。またかかるやうはあらじかし。さまざまにめづらしき世なりかし」

と、うち傾きつつ、恨み続けたるもをかしければ、かくなむと聞こゆ。

「げに、人聞きを、うちつけなるやうにやと憚りはべるほどに、年ごろの埋れいたさをも、あきらめはべらぬは、いとなかなかなること多くなむ」

と、ただすくよかに聞こえなしたまふに、まばゆくて、よろづおしこめたり。

と思すにぞ、「げに、宮仕への筋にて、けぎやかなるまじく紛れたるおぼえを、かしこくも思ひ寄りたまひけるかな」と、むくつけく思さる。

かくて御服など脱ぎたまひて、

「月立たば、なほ参りたまはむこと忌あるべし。十月ばかりに」

と思しのたまふを、内にも心もとなく聞こし召し、聞こえたまふ人びとは、誰も誰も、いと口惜しくて、この御参りの先にと、心寄せのよすががよすがに責めわびたまへど、

「吉野の滝を堰かむよりも難きことなれば、いとわりなし」

と、おのおの応ふ。

中将も、なかなかなることをうち出でて、「いかに思すらむ」と苦しきままに、駆けりありきて、いとねむごろに、おほかたの御後見を思ひあつかひたるさまにて、追従しありきたまふ。たはやすく、軽らかにうち出でては聞こえかかりたまはず、めやすくもてしづめたまへり。

まことの御はらからの君たちは、え寄り来ず、「宮仕へのほどの御後見を」と、おのおの心もとなくぞ思ひける。

頭中将、心を尽くしわびしことは、かき絶えにたるを、「うちつけなりける御心かな」と、人びとはをかしがるに、殿の御使にておはしたり。なほもて出でず、忍びやかに御消息なども聞こえ交はしたまひければ、月の明かき夜、桂の蔭に隠れてものしたまへり。見聞き入るべくもあらざりしを、名残なく南の御簾の前に据ゑたてまつる。

みづから聞こえたまはむことはしも、なほつつましなければ、宰相の君して応へ聞こえたまふ。

「なにがしらを選びてたてまつりたまへるは、人伝てならぬ御消息にこそはべらめ。かくもの遠くては、いかが聞こえさすべからむ。みづからこそ、数に

ものの、公事などにもおぼめかしからず、はかばかしくて、主上の常に願はせたまふ御心には、違ふまじ」

などのたまふけしきの見まほしければ、

「年ごろかくて育みきこえたまひける御心ぎしを、ひがさまにこそ人は申すなれ。かの大臣も、さやうになむおもむけて、大将の、あなたさまのたよりにけしきばみたりけるにも、応へける」

と聞こえたまへば、うち笑ひて、

「かたがたいと似げなきことかな。なほ、宮仕へをも、御心許して、かくなむと思されむさまにぞ従ふべき。女は三つに従ふものにこそあなれど、ついでを違へて、おのが心にまかせむことは、あるまじきことなり」

とのたまふ。

「うちうちにも、やむごとなきこれかれ、年ごろを経てもものしたまへば、えその筋の人数にはものしたまはで、捨てがてらにかく譲りつけ、おほぞうの宮仕への筋に、領ぜむと思しおきつる、いとかしこくかどあることなりとなむ、よろこび申されけると、たしかに人の語り申しはべりしなり」

と、いとうるはしきさまに語り申したまへば、「げに、さは思ひたまふらむかし」と思すに、いとほしくて、

「いとまがまがしき筋にも思ひ寄りたまひけるかな。いたり深き御心ならひならむかし。今おのづから、いづ方につけても、あらはなることありなむ。思ひ隈なしや」

と笑ひたまふ。御けしきはげやかなれど、なほ、疑ひは置かる。大臣も、

「さりや。かく人の推し量る、案に落つることもあらましかば、いと口惜しくねぢけたらまし。かの大臣に、いかで、かく心清きさまを知らせたてまつらむ」

て、いと心深きあはれを尽くし、言ひ悩ましたまふになむ、心やしみたまふらむと思ふになむ、心苦しき。

されど、大原野の行幸に、主上を見たてまつりたまひては、いとめでたくおはしけり、と思ひたまへりき。若き人は、ほのかにも見たてまつりて、えしも宮仕への筋もて離れじ。さ思ひてなむ、このこともかくものせし」

などのたまへば、

「さて、人ぎまは、いづ方につけてかは、たぐひてものしたまふらむ。中宮、かく並びなき筋にておはしまし、また、弘徽殿、やむごとなく、おぼえことにてものしたまへば、いみじき御思ひありとも、立ち並びたまふこと、かたくこそはべらめ。

宮は、いとねむごろに思したなるを、わざと、さる筋の御宮仕へにもあらぬものから、ひき違へたらむさまに御心おきたまはむも、さる御仲らひにては、いといとほしくなむ聞きたまふる」

と、おとなおとなしく申したまふ。

「かたしや。わが心ひとつなる人の上にもあらぬを、大将さへ、我をこそ恨むなれ。すべて、かかることの心苦しきを見過ぐさで、あやなき人の恨み負ふ、かへりては軽々しきわざなりけり。かの母君の、あはれに言ひおきしことの忘れざりしかば、心細き山里になど聞きしを、かの大臣、はた、聞き入れたまふべくもあらずと愁へしに、いとほしくて、かく渡しはじめたるなり。ここにかくものめかすとて、かの大臣も人めかいたまふなめり」

と、つきづきしくのたまひなす。

「人柄は、宮の御人にていとよかるべし。今めかしく、いとなまめきたるさまして、さすがにかしこく、過ちすまじくなどして、あはひはめやすからむ。さてまた、宮仕へにも、いとよく足らひたらむかし。容貌よく、らうらうじき

薄紫やかことならまし

かやうにて聞こゆるより、深きゆゑはいかが」

とのたまへば、すこしうち笑ひて、

「浅きも深きも、思し分く方ははべりなむと思ひたまふる。まめやかには、いとかたじけなき筋を思ひ知りながら、えしづめはべらぬ心のうちを、いかでかしろしめさるべき。なかなか思し疎まむがわびしきに、いみじく籠めはべるを、今はた同じと、思ひたまへわびてなむ。

頭中将のけしきは御覧じ知りきや。人の上に、なんと思ひはべりけむ。身にこそ、いとをこがましく、かつは思ひたまへ知られけれ。なかなか、かの君は思ひさまして、つひに、御あたり離るまじき頼みに、思ひ慰めたるけしきなど見はべるも、いとうらやましくねたきに、あはれとだに思しおけよ」
など、こまかに聞こえ知らせたまふこと多かれど、かたはらいたければ書かぬなり。

尚侍の君、やうやう引き入りつつ、むつかしと思したれば、

「心憂き御けしきかな。過ちすまじき心のほどは、おのづから御覧じ知らるるやうもはべらむものを」

とて、かかるついでに、今すこし漏らさまほしけれど、

「あやしくなやましくなむ」

とて、入り果てたまひぬれば、いといたくうち嘆きて立ちたまひぬ。

「なかなかにもうち出でてけるかな」と、口惜しきにつけても、かの、今すこし身にしみておぼえし御けはひを、かばかりの物越しにても、「ほのかに御声をだに、いかならむついでにか聞かむ」と、やすからず思ひつつ、御前に参りたまへれば、出でたまひて、御返りなど聞こえたまふ。

「この宮仕へを、しづげにこそ思ひたまへれ。宮などの、練じたまへる人に

にさぶらふべくなむ思ひたまふる」

と聞こえたまへば、

「たぐひたまはむもこととしきやうにやはべらむ。忍びやかにてこそよくはべらめ」

とのたまふ。この御服などの詳しきさまを、人にあまねく知らせじとおもむけたまへるけしき、いと労あり。中将も、

「漏らさじと、つつませたまふらむこそ、心憂けれ。忍びがたく思ひたまへらるる形見なれば、脱ぎ捨てはべらむことも、いとの憂くはべるものを。さても、あやしうもて離れぬことの、また心得がたきにこそはべれ。この御あらはし衣の色なくは、えこそ思ひたまへ分くまじかりけれ」

とのたまへば、

「何ごとも思ひ分かぬ心には、ましてともかくも思ひたまへたどられはべらねど、かかる色こそ、あやしくものあはれなるわざにはべりけれ」

とて、例よりもしめりたる御けしき、いとらうたげにをかし。

かかるついでにとや思ひ寄りけむ、蘭の花のいとおもしろきを持たまへりけるを、御簾のつまよりさし入れて、

「これも御覧すべきゆゑはありけり」

とて、とみにも許きで持たまへれば、うつたへに思ひ寄らで取りたまふ御袖を、引き動かしたり。

「同じ野の露にやつるる藤袴

あはれはかけよかことばかりも」

「道の果てなる」とかや、いと心づきなくうたてなりぬれど、見知らぬさまに、やをら引き入りて、

「尋ぬるにはるけき野辺の露ならば

みて見たてまつるに、宰相中将、同じ色の、今すこしまやかなる直衣姿にて、
櫻巻きたまへる姿しも、またいとなまめかしくきよらにておはしたり。

初めより、ものまめやかに心寄せきこえたまへば、もて離れて疎々しきさま
には、もてなしたまはざりしならひに、今、あらざりけりとて、こよなく変は
らむもうたてあれば、なほ御簾に几帳添へたる御対面は、人伝てならでありけ
り。殿の御消息にて、内より仰せ言あるさま、やがてこの君のうけたまはりた
まへるなりけり。

御返り、おほどかなるものから、いとめやすく聞こえなしたまふけはひの、
らうらうじくなつかしきにつけても、かの野分の朝の御朝顔は、心にかかりて
恋しきを、うたてある筋に思ひし、聞き明らめて後は、なほもあらぬ心地添ひ
て、

「この宮仕ひを、おほかたにしも思し放たじかし。さばかり見所ある御あは
ひどもにて、をかしきさまなることのわづらはしき、はた、かならず出で来な
むかし」

と思ふに、ただならず、胸ふたがる心地すれど、つれなくすくよかにて、

「人に聞かすまじとはべりつることを聞こえさせむに、いかがはべるべき」

とけしき立てば、近くさぶらふ人も、すこし退きつつ、御几帳のうしろなど
にそばみあへり。

そら消息をつきづきしくとり続けて、こまやかに聞こえたまふ。主上の御け
しきのただならぬ筋を、さる御心したまへ、などやうの筋なり。いらへたまは
む言もなくて、ただうち嘆きたまへるほど、忍びやかに、うつくしくいとなつ
かしきに、なほえ忍ぶまじく、

「御服も、この月には脱がせたまふべきを、日ついでなむ吉ろしからざりけ
る。十三日に、河原へ出でさせたまふべきよしのたまはせつ。なにがしも御供

尚侍の御宮仕へのことを、誰れも誰れもそそのかしたまふも、

「いかならむ。親と思ひきこゆる人の御心だに、うちとくまじき世なりければ、ましてきやうの交じらひにつけて、心よりほかに便なきこともあらば、中宮も女御も、方がたにつけて心おきたまはば、はしたなからむに、わが身はかくはかなきさまにて、いづ方にも深く思ひとどめられたてまつれるほどもなく、浅きおぼえにて、ただならず思ひ言ひ、いかで人笑へなるさまに見聞きなきむと、うけひたまふ人びとも多く、とかくにつけて、やすからぬことのみありぬべき」を、もの思し知るまじきほどにしあらねば、さまさまに思ほし乱れ、人知れずもの嘆かし。

「さりとて、かかるありさまも悪しきことはなけれど、この大臣の御心ばへの、むつかしく心づきなきも、いかなるついでにかは、もて離れて、人の推し量るべかめる筋を、心きよくもあり果つべき。

まことの父大臣も、この殿の思さむところ、憚りたまひて、うけばりてとり放ち、けぎやぎたまふべきことにもあらねば、なほとてもかくても、見苦しう、かけかけしきありさまにて、心を悩まし、人にもて騒がるべき身なめり」

と、なかなかこの親尋ねきこえたまひて後は、ことに憚りたまふけしきもなき大臣の君の御もてなしを取り加へつつ、人知れずなむ嘆かしかりける。

思ふことを、まほならずとも、片端にてもうちかすめつべき女親もおはせず、いづ方もいづ方も、いと恥づかしげに、いとうるはしき御さまどもには、何ごとをかは、さなむ、かくなむとも聞こえ分きたまはむ。世の人に似ぬ身のありさまを、うち眺めつつ、夕暮の空のあはれげなるけしきを、端近うて見出だしたまへるさま、いとをかし。

薄き鈍色の御衣、なつかしきほどにやつれて、例に変はりたる色あひにしも、容貌はいとはなやかにもてはやされておはするを、御前なる人びとは、うち笑

藤 袴

藤

袴

なご、ちまぢまぢま言ひけり。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuyra/index.html>)

と召せば、

「を」

と、いとけぎやかに聞こえて、出で来たり。

「いと、仕へたる御けはひ、公人にて、げにいかにあひたらむ。尚侍のことは、などか、おのれに疾くはものせざりし」

と、いとまめやかにてのたまへば、いとうれしと思ひて、

「さも、御けしき賜はらまほしうはべりしかど、この女御殿など、おのづから伝へ聞こえさせたまひてむと、頼みふくれてなむさぶらひつるを、なるべき人ものしたまふやうに聞きたまふれば、夢に富したる心地しはべりてなむ、胸に手を置きたるやうにはべる」

と申したまふ。舌ぶりいともさはやかなり。笑みたまひぬべきを念じて、

「いとあやしう、おぼつかなき御癖なりや。さも思しのたまはましかば、まづ人の先に奏してまし。太政大臣の御女、やむごとなくとも、ここに切に申さむことは、聞こし召さぬやうあらざらまし。今にても、申し文を取り作りて、びびしう書き出だされよ。長歌などの心ばへあらむを御覧ぜむには、捨てさせたまはじ。主上は、そのうちに情け捨てずおはしませば」

など、いとようすかしたまふ。人の親げなく、かたはなりや。

「大和歌は、悪し悪しも続けはべりなむ。むねむねしき方のことはた、殿より申させたまはば、つま声のやうにて、御徳をもかうぶりはべらむ」

とて、手を押しすりて聞こえりたり。御几帳のうしろなどにて聞く女房、死ぬべくおぼゆ。もの笑ひに堪へぬは、すべり出でてなむ、慰めける。女御も御面赤みて、わりなう見苦しと思したり。殿も、

「ものむつかしき折は、近江の君見るこそ、よろづ紛るれ」

とて、ただ笑ひ種につくりたまへど、世人は、

「恥ぢがてら、はしたなめたまふ」

などのたまふに、腹立ちて、

「めでたき御仲に、数ならぬ人は、混じるまじかりけり。中将の君ぞつらくおはする。さかしらに迎へたまひて、軽めあざけりたまふ。せうせうの人は、え立てるまじき殿の内かな。あな、かしこ。あな、かしこ」

と、後へさまにゐざり退きて、見おこせたまふ。憎げもなけれど、いと腹悪しげに目尻引き上げたり。

中将は、かく言ふにつけても、「げにし過ちたること」と思へば、まめやかにてもものしたまふ。少将は、

「かかる方にも、類ひなき御ありさまを、おろかにはよも思さじ。御心しづめたまうてこそ。堅き巖も沫雪になしたまうつべき御けしきなれば、いとよう思ひかなひたまふ時もありなむ」

と、ほほ笑みて言ひゐたまへり。中将も、

「天の岩門鎖し籠もりたまひなむや、めやすく」

とて、立ちぬれば、ほろほろと泣きて、

「この君達さへ、皆すげなくしたまふに、ただ御前の御心のあはれにおはしませば、さぶらふなり」

とて、いとかやすく、いそしく、下臈童女などの仕うまつりたらぬ雑役をも、立ち走り、やすく惑ひありきつつ、心ざしを尽くして宮仕へしありきて、

「尚侍に、おれを、申しなしたまへ」

と責めきこゆれば、あさまじう、「いかに思ひて言ふことならむ」と思すに、ものも言はれたまはず。

大臣、この望みを聞きたまひて、いとはなやかにうち笑ひたまひて、女御の御方に参りたまへるついでに、

「いづら、この、近江の君。こなたに」

とぞ聞こえさせたまひける。

父大臣は、

「ほのかなりしさまを、いかでさやかにまた見む。なまかたほなること見えたまはば、かうまでことごとしうもてなし思さじ」

など、なかなか心もとなう恋しう思ひきこえたまふ。

今ぞ、かの御夢も、まことに思しあはせける。女御ばかりには、さだかなることのさまを聞こえたまうけり。

世の人聞きに、「しばしこのこと出ださじ」と、切に籠めたまへど、口さがないものは世の人なりけり。自然に言ひ漏らしつつ、やうやう聞こえ出で来るを、かのさがな者の君聞きて、女御の御前に、中将、少将さぶらひたまふに出でて、

「殿は、御女まうけたまふべかなり。あな、めでたや。いかなる人、二方にもてなさるらむ。聞けば、かれも劣り腹なり」

と、あふなげにのたまへば、女御、かたはらいたしと思して、ものものたまはず。中将、

「しか、かしづかるべきゆるこそものしたまふらめ。さても、誰が言ひしことを、かくゆくりなくうち出でたまふぞ。もの言ひただならぬ女房などこそ、耳とどむれ」

とのたまへば、

「あなかま。皆聞きてはべり。尚侍になるべかなり。宮仕へにと急ぎ出で立ちはべりしことは、さやうの御かへりみもやとてこそ、なべての女房たちだけに仕うまつらぬことまで、おりたち仕うまつれ。御前のつらくおはしますなり」と、恨みかくれば、皆ほほ笑みて、

「尚侍あかば、なにがしこそ望まむと思ふを、非道にも思しかけるかな」

親王たち、次々、人びと残るなく集ひたまへり。御懸想人もあまた混じりたまへれば、この大臣、かく入りおはしてほど経るを、いかなることにかと疑ひたまへり。

かの殿の君達、中将、弁の君ばかりぞ、ほの知りたまへりける。人知れず思ひしことを、からうも、うれしうも思ひなりたまふ。弁は、

「よくぞうち出でざりける」とささめきて、「さま異なる大臣の御好みどもなめり。中宮の御類ひに仕立てたまはむとや思すらむ」

など、おのおの言ふよしを聞きたまへど、

「なほ、しばしは御心づかひしたまうて、世にそしりなきさまにもてなさせたまへ。何ごとも、心やすきほどの人こそ、乱りがはしう、ともかくもはべべかめれ、こなたをもそなたをも、さまざま人の聞こえ悩まさむ、ただならむよりはあぢきなきを、なだらかに、やうやう人目をも馴らすなむ、よきことにははべるべき」

と申したまへば、

「ただ御もてなしになむ従ひはべるべき。かうまで御覧ぜられ、ありがたき御育みに隠ろへはべりけるも、前の世の契りおろかならじ」

と申したまふ。

御贈物など、さらにもいはず、すべて引出物、禄ども、品々につけて、例あること限りあれど、またこと加へ、二なくせさせたまへり。大宮の御悩みにことづけたまうし名残もあれば、ことことしき御遊びなどはなし。

兵部卿宮、

「今はことづけやりたまふべき滞りもなきを」

と、おりたち聞こえたまへど、

「内より御けしきあること、かへさひ奏し、またまた仰せ言に従ひてなむ、異ざまのことは、ともかくも思ひ定むべき」

ら、やう変はりて思さる。

亥の時にて、入れたてまつりたまふ。例の御まうけをばさるものにて、内の御座いと二なくしつらはせたまうて、御肴参らせたまふ。御殿油、例のかかる所よりは、すこし光見せて、をかしきほどにもてなしきこえたまへり。

いみじうゆかしう思ひきこえたまへど、今宵はいとゆくりかなべければ、引き結びたまふほど、え忍びたまはぬけしきなり。

主人の大臣、

「今宵は、いにしへさまのことはかけはべらねば、何のあやめも分かせたまふまじくなむ。心知らぬ人目を飾りて、なほ世の常の作法に」

と聞こえたまふ。

「げに、さらに聞こえさせやるべき方はべらずなむ」

御土器参るほどに、

「限りなきかしこまりをば、世に例なきことと聞こえさせながら、今までかく忍びこめさせたまひける恨みも、いかが添へはべらざらむ」

と聞こえたまふ。

「恨めしや沖つ玉藻をかづくまで

磯がくれける海人の心よ」

とて、なほつつみもあへずしほたれたまふ。姫君は、いと恥づかしき御さまどものさし集ひ、つつましきに、え聞こえたまはねば、殿、

「よるべなみかかる渚にうち寄せて

海人も尋ねぬ藻屑とぞ見し

いとわりなき御うちつけごとになむ」

と聞こえたまへば、

「いとことわりになむ」

と、聞こえやる方なくて、出でたまひぬ。

なく思ひなむ。父親王の、いとかなしうしたまひける、思ひ出づれば、人に落さむはいと心苦しき人なり」

と聞こえたまふ。御小桂の袂に、例の、同じ筋の歌ありけり。

「わが身こそ恨みられけれ唐衣

君が袂に馴れずと思へば」

御手は、昔だにありしを、いとわりなうしじかみ、彫深う、強う、堅う書きたまへり。大臣、憎きものの、をかしさをばえ念じたまはで、

「この歌詠みつらむほどこそ。まして今は力なくて、所狭かりけむ」

と、いとほしがりたまふ。

「いで、この返りこと、騒がしうとも、われせむ」

とのたまひて、

「あやしう、人の思ひ寄るまじき御心ばへこそ、あらでもありぬべけれ」

と、憎さに書きたまうて、

「唐衣また唐衣唐衣

かへすがへすも唐衣なる」

とて、

「いとまめやかに、かの人の立てて好む筋なれば、ものしてはべるなり」

とて、見せたてまつりたまへば、君、いとにほひやかに笑ひたまひて、

「あな、いとほし。弄じたるやうにもはべるかな」

と、苦しがりたまふ。ようなしごといと多かりや。

内大臣は、さしも急がれたまふまじき御心なれど、めづらかに聞きたまうし後は、いつしかと御心にかかりたれば、疾く参りたまへり。

儀式など、あべい限りにまた過ぎて、めづらしきさまにしなさせたまへり。「げにわざと御心とどめたまうけること」と見たまふも、かたじけなきものか

手ふるひにけり」

など、うち返し見たまうて、

「よくも玉櫛笥にまつはれたるかな。三十一字の中に、異文字は少なく添へたることのかたきなり」

と、忍びて笑ひたまふ。

中宮より、白き御裳、唐衣、御装束、御髪上の具など、いと二なくて、例の、壺どもに、唐の薫物、心ことに香り深くてたてまつりたまへり。

御方々、皆心々に、御装束、人びとの料に、櫛扇まで、とりどりにし出でたまへるありさま、劣りまさらず、さまざまにつけて、かばかりの御心ばせどもに、挑み尽くしたまへれば、をかしう見ゆるを、東の院の人びとも、かかる御いそぎは聞きたまうけれども、訪らひきこえたまふべき数ならねば、ただ聞き過ぐしたるに、常陸の宮の御方、あやしうものうるはしう、さるべきことの折過ぐさぬ古代の御心にて、いかでかこの御いそぎを、よそのこととは聞き過ぐさむ、と思して、形のごとなむし出でたまうける。

あはれなる御心ざしなりかし。青鈍の細長一襲、落栗とかや、何とかや、昔の人のめでたうしける袷の袴一具、紫のしらきり見ゆる霰地の御小桂と、よき衣篋に入れて、包いとうるはしうて、たてまつれたまへり。

御文には、

「知らせたまふべき数にもはべらねば、つつましかれど、かかる折は思たまへ忍びがたくなむ。これ、いとあやしけれど、人にも賜はせよ」

と、おいらかなり。殿、御覧じつけて、いとあさましう、例の、と思すに、御顔赤みぬ。

「あやしき古人にこそあれ。かくものづつみしたる人は、引き入り沈み入るたるこそよけれ。さすがに恥ぢがましや」とて、「返りことはつかはせ。はした

と、よろづに思しけり。

かくのたまふは、二月朔日ころなりけり。十六日、彼岸の初めにて、いと吉き日なりけり。近うまた吉き日なしと勘へ申しけるうちに、宮よろしうおはしませば、いそぎ立ちたまうて、例の渡りたまうても、大臣に申しあらはししまなど、いとこまかにあべきことも教へきこえたまへば、

「あはれなる御心は、親と聞こえながらも、ありがたからむを」と思すものから、いとなむうれしかりける。

かくて後は、中將の君にも、忍びてかかることの心のたまひ知らせけり。

「あやしのことどもや。むべなりけり」
と、思ひあはすることどもあるに、かのつれなき人の御ありさまよりも、なほもあらず思ひ出でられて、「思ひ寄らざりけることよ」と、しれじれしき心地す。されど、「あるまじう、ねじけたるべきほどなりけり」と、思ひ返すことこそは、ありがたきまめしきなめれ。

かくてその日になりて、三条の宮より、忍びやかに御使あり。御櫛の筥など、にはかなれど、ことどもいとよらにしたまうて、御文には、

「聞こえむにも、いまいましきありさまを、今日は忍びこめはべれど、さるかたにても、長き例ばかりを思し許すべうや、とてなむ。あはれにうけたまはり、あきらめたる筋をかけきこえむも、いかが。御けしきに従ひてなむ。

ふたかたに言ひもてゆけば玉櫛笥

わが身はなれぬ懸子なりけり」

と、いと古めかしうわななきたまへるを、殿もこなたにおはしまして、ことども御覧じ定むるほどなれば、見たまうて、

「古代なる御文書きなれど、いたしや、この御手よ。昔は上手にものしたまひけるを、年に添へて、あやしく老いゆくものにこそありけれ。いとからく御

し用意なしと思しおきてければ、口入れむことも人悪く思しとどめ、かの大臣はた、人の御けしきなきに、さし過ぐしがたくて、さすがにむすぼほれたる心地したまうけり。

「今宵も御供にさぶらふべきを、うちつけに騒がしくもやとてなむ。今日のかしこまりは、ことさらになむ参るべくはべる」

と申したまへば、

「さらば、この御悩みもよろしう見えたまふを、かならず聞こえし日違へさせたまはず、渡りたまふべき」よし、聞こえ契りたまふ。

御けしきどもようて、おのおの出でたまふ響き、いといかめし。君達の御供の人びと、

「何ごとありつるならむ。めづらしき御対面に、いと御けしきよげなりつるは」

「また、いかなる御譲りあるべきにか」

など、ひが心を得つつ、かかる筋とは思ひ寄りざりけり。

大臣、うちつけにいといぶかしう、心もとなうおぼえたまへど、

「ふと、しか受けとり、親がらむも便なからむ。尋ね得たまへらむ初めを思ふに、定めて心きよう見放ちたまはじ。やむごとなき方々を憚りて、うけばりてその際にはもてなさず、さすがにわづらはしう、ものの聞こえを思ひて、かく明かしたまふなめり」

と思すは、口惜しけれど、

「それを疵とすべきことかは。ことさらにも、かの御あたりに触ればはせむに、などかおぼえの劣らむ。宮仕へざまにおもむきたまへらば、女御などの思さむこともあぢきなし」と思せど、」ともかくも、思ひ寄りのたまはむおきてを違ふべきことかは」

に隔つることなく御覽ぜられしを、朝廷に仕うまつりし際は、羽翼を並べたる数にも思ひはべらで、うれしき御かへりみをこそ、はかばかしからぬ身にて、かかる位に及びはべりて、朝廷に仕うまつりはべることに添へても、思うたまへ知らぬにははべらぬを、齡の積もりには、げにおのづからうちゆるぶことのみなむ、多くはべりける」

などかしこまり申したまふ。

そのついでに、ほのめかし出でたまひてけり。大臣、

「いとあはれに、めづらかなることにもはべるかな」と、まづうち泣きたまひて、「そのかみより、いかになりにけむと尋ね思うたまへしさまは、何のついでにかはべりけむ、愁へに堪へず、漏らし聞こしめさせし心地なむしはべる。今かく、すこし人数にもなりはべるにつけて、はかばかしからぬ者どもの、かたがたにつけてさまよひはべるを、かたくなしく、見苦しと見はべるにつけても、またさるさまにて、数々に連ねては、あはれに思うたまへらるる折に添へても、まづなむ思ひたまへ出でらるる」

とのたまふついでに、かのいにしへの雨夜の物語に、いろいろなりし御睦言の定めを思し出でて、泣きみ笑ひみ、皆うち乱れたまひぬ。

夜いたう更けて、おのおのあかれたまふ。

「かく参り来あひては、さらに、久しくなりぬる世の古事、思うたまへ出でられ、恋しきことの忍びがたきに、立ち出でむ心地もしはべらず」

とて、をさをさ心弱くおはしまさぬ六条殿も、酔ひ泣きにや、うちしほれたまふ。宮はたまいて、姫君の御ことを思し出づるに、ありしにまさる御ありさま、勢ひを見たてまつりたまふに、飽かず悲しくて、とどめがたく、しほしほと泣きたまふ尼衣は、げに心ことなりけり。

かかるついでなれど、中将の御ことをば、うち出でたまはずなりぬ。ひとふ

近衛の中、少将、弁官など、人柄はなやかにあるべかしき、十余人集ひたまへれば、いかめしう、次々のただ人も多くて、土器あまたたび流れ、皆酔ひになりて、おのおのかう幸ひ人にすぐれたまへる御ありさまを物語にしけり。

大臣も、めづらしき御対面に、昔のことと思し出でられて、よそよそにてこそ、はかなきことにつけて、挑ましき御心も添ふべかめれ、さし向かひきこえたまひては、かたみにいとあはれなることの数々思し出でつつ、例の、隔てなく、昔今のことも、年ごろの御物語に、日暮れゆく。御土器など勧め参りたまふ。

「さぶらはでは悪しかりぬべかりけるを、召しなきに憚りて。うけたまはり過ぐしてましかば、御勘事や添はまし」

と申したまふに、

「勘当は、こなたさまになむ。勘事と思ふこと多くはべる」

など、けしきばみたまふに、このことにやと思せば、わづらはしうて、かしこまりたるさまにてもものしたまふ。

「昔より、公私のことにつけて、心の隔てなく、大小のこと聞こえうけたまはり、羽翼を並ぶるやうにて、朝廷の御後見をも仕うまつるとなむ思うたまへしを、末の世となりて、そのかみ思うたまへし本意なきやうなること、うち交りはべれど、うちうちの私事にこそは。

おほかたの心ざしは、さらに移ろふことなくなむ。何ともなくて積もりはべる年齢に添へて、いにしへのことなむ恋しかりけるを、対面賜はることもいともまれにのみはべれば、こと限りありて、世だけき御ふるまひとは思うたまへながら、親しきほどには、その御勢ひをも、引きしじめたまひてこそは、訪らひものしたまはめとなむ、恨めしき折々はべる」

と聞こえたまへば、

「いにしへは、げに面馴れて、あやしくだいだいしきまで馴れさぶらひ、心

あらで、渡りたまひなむや。対面に聞こえまほしげなることもあなり」

と聞こえたまへり。

「何ごとにかはあらむ。この姫君の御こと、中将の愁へにや」と思しまはすに、「宮もかう御世残りなげにて、このことと切にのたまひ、大臣も憎からぬさまに一言うち出で恨みたまはむに、とかく申しかへさふことえあらじかし。つれなくて思ひ入れぬを見るにはやすからず、さるべきついであらば、人の御言になびき顔にて許してむ」と思す。

「御心をさしあはせてのたまはむこと」と思ひ寄りたまふに、「いとど否びどころなからむが、また、なかさしもあらむ」とやすらはるる、いとけしからぬ御あやにく心なりかし。「されど、宮かくのたまひ、大臣も対面すべく待ちおはするにや、かたがたにかたじけなし。参りてこそは、御けしきに従はめ」

など思ほしなりて、御装束心ことにひきつくろひて、御前などもことことしきさまにはあらで渡りたまふ。

君達いとあまた引きつれて入りたまふさま、ものものしう頼もしげなり。丈だちそぞろかにもものしたまふに、太さもあひて、いと宿徳に、面もち、歩まひ、大臣といはむに足らひたまへり。

葡萄染の御指貫、桜の下襲、いと長うは裾引きて、ゆるゆるとことさらびたる御もてなし、あなきらきらしと見えたまへるに、六条殿は、桜の唐の綺の御直衣、今様色の御衣ひき重ねて、しどけなき大君姿、いよいよたとへむものなし。光こそまさりたまへ、かうしたたかにひきつくろひたまへる御ありさまに、なずらへても見えたまはざりけり。

君達次々に、いとものきよげなる御仲らひにて、集ひたまへり。藤大納言、春宮大夫など、今は聞こゆる子どもも、皆なり出でつつものしたまふ。おのづから、わざともなきに、おぼえ高くやむごとなき殿上人、蔵人頭、五位の蔵人、

げに、折しも便なう思ひとまりはべるに、よろしうものせさせたまひければ、なほ、かう思ひおこせるついでにとなむ思うたまふる。さやうに伝へものせさせたまへ」

と聞こえたまふ。宮、

「いかに、いかに、はべりけることにか。かしこには、さまさまにかかる名のりする人を、厭ふことなく拾ひ集めらるるに、いかなる心にて、かくひき違へかこちきこえらるらむ。この年ごろ、うけたまはりて、なりぬるにや」

と、聞こえたまへば、

「さるやうはべることなり。詳しきさまは、かの大臣もおのづから尋ね聞きたまうてむ。くだくだしき直人の仲らひに似たることにはべれば、明かさむにつけても、らうがはしう人言ひ伝へはべらむを、中将の朝臣にだに、まだわきまへ知らせはべらず。人にも漏らさせたまふまじ」

と、御口かためきこえたまふ。

内の大殿、かく二条の宮に太政大臣渡りおはしまいたるよし、聞きたまひて、

「いかに寂しげにて、いつかしき御さまを待ちうけきこえたまふらむ。御前どももてはやし、御座ひきつくろふ人も、はかばかしうあらじかし。中将は、御供にこそものせられつらめ」

など、おどろきたまうて、御子ども君達、睦ましうさるべきまうち君たち、たてまつれたまふ。

「御くだもの、御酒など、さりぬべく参らせよ。みづからも参るべきを、かへりてもの騒がしきやうならむ」

などのたまふほどに、大宮の御文あり。

「六条の大臣の訪らひに渡りたまへるを、もの寂しげにはべれば、人目のいとほしうも、かたじけなうもあるを、ことことう、かう聞こえたるやうには

「さるは、かの知りたまふべき人をなむ、思ひまがふることはべりて、不意に尋ね取りてはべるを、その折は、さるひがわぎとも明かしはべらずありしかば、あながちにことの心を尋ね返さふこともはべらで、たださるものの種の少なきを、かことにても、何かはと思うたまへ許して、をさをさ睦びも見はべらずして、年月はべりつるを、いかでか聞こしめしけむ、内に仰せらるるやうなむある。

尚侍、宮仕へする人なくては、かの所のまつりごとしどけなく、女官なども公事を仕うまつるに、たづきなく、こと乱るるやうになむありけるを、ただ今、主上にさぶらふ古老の典侍二人、またさるべき人びと、さまざまに申さするを、はかばかしく選ばせたまはむ尋ねに、類ふべき人なむなき。

なほ、家高う、人のおぼえ軽からで、家のいとなみたてたらぬ人なむ、いにしへより来にける。したたかにかしこきかたの選びにては、その人ならでも、年月の労になりのおぼる類ひあれど、しか類ふべきもなしとならば、おほかたのおぼえをだに選らせたまはむとなむ、うちうちに仰せられたりしを、似げなきこととしも、何かは思ひたまはむ。

宮仕へは、さるべき筋にて、上も下も思ひ及び、出で立つこそ心高きことなれ。公様にて、さる所のことをつかさどり、まつりごとのおもぶきをしたため知らむことは、はかばかしからず、あはつけきやうにおぼえたれど、などかまたさしもあらむ。ただ、わが身のありさまからこそ、よろづのことはべめれと、思ひ弱りはべりしついでになむ。

齢のほどなど問ひ聞きはべれば、かの御尋ねあべいことになむありけるを、いかなべいことぞとも、申しあきらめまほしうはべる。ついでなくては対面はべるべきにもはべらず。やがてかかることなむと、あらはし申すべきやうを思ひめぐらして、消息申ししを、御悩みにことづけて、もの憂げにすまひたまへりし。

りしかば、出で立ちいそぎをなむ、思ひもよほされはべるに、この中將の、いとあはれにあやしきまで思ひあつかひ、心を騒がいたまふ見はべるになむ、さまさまにかけとめられて、今まで長びきはべる」

と、ただ泣きに泣きて、御声のわななくも、をこがましけれど、さることどもなれば、いとあはれなり。

御物語ども、昔今のとり集め聞こえたまふついでに、

「内の大臣は、日隔てず参りたまふことしげからむを、かかるついでに對面のあらば、いかにうれしからむ。いかで聞こえ知らせむと思ふことのはべるを、さるべきついでなくては、對面もありがたければ、おぼつかなくてなむ」

と聞こえたまふ。

「公事のしげきにや、私の心ざしの深からぬにや、さしもとぶらひものしはべらず。のたまはずべからむことは、何さまのことにかは。中將の恨めしげに思はれたることもはべるを、『初めのことは知らねど、今はけに聞きにくくもてなすにつけて、立ちそめにし名の、取り返さるるものにもあらず、をこがましきやうに、かへりては世人も言ひ漏らすなるを』などものはれば、立てたるところ、昔よりいと解けがたき人の本性にて、心得ずなむ見たまふる」

と、この中將の御ことと思してのたまへば、うち笑ひたまひて、

「いふかひなきに、許し捨てたまふこともやと聞きはべりて、ここにさへなむかすめ申すやうありしかど、いと厳しう諫めたまふよしを見はべりし後、何にさまで言をもませはべりけむと、人悪う悔い思うたまへてなむ。

よろづのことにつけて、清めといふことはべれば、いかがは、さもとり返すすいたまはざらむとは思ふたまへながら、かう口惜しき濁りの末に、待ちとり深う住むべき水こそ出で来がたかべい世なれ。何ごとにつけても、末になれば、落ちゆくけぢめこそやすくはべめれ。いとほしう聞きたまふる」

など申したまうて、

中将の君も、夜昼、三条にぞさぶらひたまひて、心の隙なくものしたまうて、折悪しきを、いかにせましと思す。

「世も、いと定めなし。宮も亡せさせたまはば、御服あるべきを、知らず顔にてもものしたまはむ、罪深きこと多からむ。おはする世に、このこと表はしてむ」

と思し取りて、三条の宮に、御訪らひがてら渡りたまふ。

今はまして、忍びやかにふるまひたまへど、行幸に劣らずよそほしく、いよ光をのみ添へたまふ御容貌などの、この世に見えぬ心地して、めづらしう見たてまつりたまふには、いとど御心地の悩ましきも、取り捨てらるる心地して、起きゐたまへり。御脇息にかかりて、弱げなれど、ものなどいとよく聞こえたまふ。

「けしうはおはしまさざりけるを、なにがしの朝臣の心惑はして、おどろおどろしう嘆ききこえきすめれば、いかやうにもせさせたまふにかとなむ、おぼつかながりきこえさせつる。内などにも、ことなるついでなき限りは参らず、朝廷に仕ふる人ともなくて籠もりはべれば、よろづうひうひしう、よだけくなりにてはべり。齡など、これよりまさる人、腰堪へぬまで屈まりありく例、昔も今もはべめれど、あやしくおれおれしき本性に、添ふもの憂さになむはべるべき」

など聞こえたまふ。

「年の積もりの悩みと思うたまへつつ、月ごろになりぬるを、今年となりては、頼み少なきやうにおぼえはべれば、今一度、かく見たてまつりきこえきすることもなくてやと、心細く思ひたまへつるを、今日こそ、またすこし延びぬる心地しはべれ。今は惜しみとむべきほどにもはべらず。さべき人びとにも立ち後れ、世の末に残りとまれる類ひを、人の上にて、いと心づきなしと見はべ

「あな、うたて。めでたしと見たてまつるとも、心もて宮仕ひ思ひ立たむこそ、いとさし過ぎたる心ならぬ」

とて、笑ひたまふ。

「いで、そこにしもぞ、めできこえたまはむ」

などのたまうて、また御返り、

「あかねさす光は空に曇らぬを

などて行幸に目をきらしけむ

なほ、思し立て」

など、絶えず勧めたまふ。

「とてもかうても、まづ御裳着のことをこそは」と思して、その御まうけの御調度の、こまかなるきよらども加へさせたまひ、何くれの儀式を、御心にはいとも思ほさぬことをだに、おのづからよだけいかめしくなるを、まして、「内の大臣にも、やがてこのついでにや知らせたてまつりてまし」と思し寄れば、いとめでたくなむ。「年返りて、二月に」と思す。

「女は、聞こえ高く、名隠したまふべきほどならぬも、人の御女とて、籠もりおはするほどは、かならずしも、氏神の御つとめなど、あらはならぬほどなればこそ、年月はまぎれ過ぐしたまへ、この、もし思し寄ることもあらむには、春日の神の御心違ひぬべきも、つひには隠れてやむまじきものから、あぢきなく、わぎとがましき後の名まで、うたたあるべし。なほなほしき人の際こそ、今様とては、氏改むることのたはやすきもあれ」など思しめぐらすに、「親子の御契り、絶ゆべきやうなし。同じくは、わが心許してを、知らせたてまつらむ」など思し定めて、この御腰結には、かの大臣をなむ、御消息聞こえたまうければ、大宮、去年の冬つ方より悩みたまふこと、さらにおこたりたまはねば、かかるに合はせて、便なかるべきよし、聞こえたまへり。

古き跡をも今日は尋ねよ」

太政大臣の、かかる野の行幸に仕うまつりたまへる例などやありけむ。大臣、御使をかしこまりもてなさせたまふ。

「小塩山深雪積もれる松原に

今日ばかりなる跡やなからむ」

と、そのころほひ聞きしことの、そばそば思ひ出でらるるは、ひがことにやあらむ。

またの日、大臣、西の対に、

「昨日、主上は見たてまつりたまひきや。かのことは、思しなびきぬらむや」と聞こえたまへり。白き色紙に、いとうちとけたる文、こまかにけしきばみてもあらぬが、をかしきを見たまうて、

「あいなのことや」

と笑ひたまふものから、「よくも推し量らせたまふものかな」と思す。御返りに、

「昨日は、

うちきらし朝ぐもりせし行幸には

さやかに空の光やは見し

おぼつかなき御ことどもになむ」

とあるを、上も見たまふ。

「ささのことをそそのかししかど、中宮かくておはす、ここながらのおぼえには、便なかるべし。かの大臣に知られても、女御かくてまたさぶらひたまへばなど、思ひ乱るめりし筋なり。若人の、さも馴れ仕うまつらむに、憚る思ひなからむは、主上をほの見たてまつりて、えかけ離れて思ふはあらじ」

とのたまへば、

と見えて、御輿のうちよりほかに、目移るべくもあらず。

まして、容貌ありや、をかしやなど、若き御達の消えかへり心うつす中少将、何くれの殿上人やうの人は、何にもあらず消えわたれるは、さらに類ひなうおはしますなりけり。源氏の大臣の御顔さまは、異ものとも見えたまはぬを、思ひなしの今すこしいつかしう、かたじけなくめでたきなり。

さは、かかる類ひはおはしがたかりけり。あてなる人は、皆ものきよげにけはひ異なるべいものとのみ、大臣、中将などの御にほひに目馴れたまへるを、出で消えどものかたはなるにやあらむ、同じ目鼻とも見えず、口惜しうぞ圧されたるや。

兵部卿宮もおはす。右大将の、さばかり重りかによしめくも、今日によそひいとなまめきて、やなぐひなど負ひて、仕うまつりたまへり。色黒く鬚がちに見えて、いと心づきなし。いかでかは、女のつくろひたてたる顔の色あひには似たらむ。いとわりなきことを、若き御心地には、見おとしたまうてけり。

大臣の君の思し寄りてのたまふことを、「いかがはあらむ、宮仕へは、心にもあらで、見苦しきありさまにや」と思ひつつみたまふを、「馴れ馴れしき筋などをばもて離れて、おほかたに仕うまつり御覧ぜられむは、をかしうもありなむかし」とぞ、思ひ寄りたまうける。

かうて、野におはしまし着きて、御輿とどめ、上達部の平張にももの参り、御装束ども、直衣、狩のよそひなどに改めたまふほどに、六条院より、御酒、御くだものなどたてまつらせたまへり。今日仕うまつりたまふべく、かねて御けしきありけれど、御物忌のよしを奏せさせたまへりけるなりけり。

蔵人の左衛門尉を御使にて、雉一枝たてまつらせたまふ。仰せ言には何とかや、さやうの折のことまねぶに、わづらはしくなむ。

「雪深き小塩山にたつ雉の

かく思しいたらぬことなく、いかでよからむことはと、思し扱ひたまへど、この音無の滝こそ、うたていとほしく、南の上の御推し量りごとにかなひて、軽々しかるべき御名なれ。かの大い臣、何ごとにつけても、きはぎはしう、すこしもかたはなるさまのことを、思し忍ばずなどものしたまふ御心ぎさまを、「さて思ひ隈なく、けぎやかなる御もてなしなどのあらむにつけては、をこがましうもや」など、思し返さふ。

その師走に、大原野の行幸とて、世に残る人なく見騒ぐを、六条院よりも、御方々引き出でつつ見たまふ。卯の時に出でたまうて、朱雀より五条の大路を、西ぎまに折れたまふ。桂川のもとまで、物見車隙なし。

行幸といへど、かならずかうしもあらぬを、今日は親王たち、上達部も、皆心ことに、御馬鞍をととのへ、隨身、馬副の容貌丈だち、装束を飾りたまうつつ、めづらかにをかし。左右大い臣、内大い臣、納言より下はた、まして残らず仕うまつりたまへり。青色の袍、葡萄染の下襲を、殿上人、五位六位まで着たり。雪ただいささかづつうち散りて、道の空さへ艶なり。親王たち、上達部なども、鷹にかかづらひたまへるは、めづらしき狩の御よそひどもをまうけたまふ。近衛の鷹飼どもは、まして世に目馴れぬ摺衣を乱れ着つつ、けしきことなり。めづらしうをかしきことに競ひ出でつつ、その人ともなく、かすかなる足弱き車など、輪を押しひしがれ、あはれげなるもあり。浮橋のもとなどにも、好ましう立ちさまよふよき車多かり。

西の対の姫君も立ち出でたまへり。そこばく挑み尽くしたまへる人の御容貌ありさまを見たまふに、帝の、赤色の御衣たてまつりて、うるはしう動きなき御かたはらめに、なずらひきこゆべき人なし。

わが父大い臣を、人知れず目をつけたてまつりたまへど、きらきらしうものきよげに、盛りにはものしたまへど、限りありかし。いと人にすぐれたるただ人

行 幸

行

幸

「今このごろのほどに参らせむ。心づからもの思はしげにて、口惜しう衰へにてなむはべめる。女こそ、よく言はば、持ちはべるまじきものなりけれ。とあるにつけても、心のみなむ尽くされはべりける」

など、なほ心解けず思ひおきたるけしきしてのたまへば、心憂くて、切にも聞こえたまはず。そのついでにも、

「いと不調なる娘まうけはべりて、もてわづらひはべりぬ」

と、愁へきこえたまひて、笑ひたまふ。宮、

「いで、あやし。女といふ名はして、さがなかるやうやある」

とのたまへば、

「それなむ見苦しきことになむはべる。いかで、御覽せさせむ」

と、聞こえたまふとや。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

隨身などに、うちささめきて取らするを、若き人びと、ただならずゆかしがる。

渡らせたまふとて、人びとうちそよめき、几帳引き直しなどす。見つる花の顔どもも、思ひ比べまほしうて、例はものゆかしからぬ心地に、あながちに、妻戸の御簾を引き着て、几帳のほころびより見れば、もののそばより、ただはひ渡りたまふほどぞ、ふとうち見えたる。

人のしげくまがへば、何のあやめも見えぬほどに、いと心もとなし。薄色の御衣に、髪はまだ丈にははづれたる末の、引き広げたるやうにて、いと細く小さき様体、らうたげに心苦し。

「一昨年ばかりは、たまさかにもほの見たてまつりしに、またこよなく生ひまさりたまふなめりかし。まして盛りいかならむ」と思ふ。「かの見つる先々の、桜、山吹といはば、これは藤の花とやいふべからむ。木高き木より咲きかかりて、風になびきたるにほひは、かくぞあるかし」と思ひよそへらる。「かかる人びとを、心にまかせて明け暮れ見たてまつらばや。さもありぬべきほどながら、隔て隔てのけぎやかなるこそつらけれ」など思ふに、まめ心も、なまあくがる心地す。

祖母宮の御もとも参りたまへれば、のどやかにて御行なひしたまふ。よろしき若人など、ここにもさぶらへど、もてなしけはひ、装束どもも、盛りなるあたりには似るべくもあらず。容貌よき尼君たちの、墨染にやつれたるぞ、なかなかかかる所につけては、さるかたにてあはれなりける。

内の大臣も参りたまへるに、御殿油など参りて、のどやかに御物語など聞こえたまふ。

「姫君を久しく見たてまつらぬがあさましきこと」
とて、ただ泣きに泣きたまふ。

「まだあなたになむおはします。風に懼ぢさせたまひて、今朝はえ起き上がりたまはざりつる」

と、御乳母ぞ聞こゆる。

「もの騒がしげなりしかば、宿直も仕うまつらむと思ひたまへしを、宮の、いとも心苦しう思いたりしかばなむ。雛の殿は、いかがおはすらむ」

と問ひたまへば、人びと笑ひて、

「扇の風だに参れば、いみじきことに思いたるを、ほとほとしくこそ吹き乱りはべりしか。この御殿あつかひに、わびにてはべり」など語る。

「ことごとしからぬ紙やはべる。御局の硯」

と乞ひたまへば、御厨子に寄りて、紙一卷、御硯の蓋に取りおろしてたてまつれば、

「いな、これはかたはらいたし」

とのたまへど、北の御殿のおぼえを思ふに、すこしなめなる心地して、文書きたまふ。

紫の薄様なりけり。墨、心とめておしすり、筆の先うち見つつ、こまやかに書きやすらひたまへる、いとよし。されど、あやしく定まりて、憎き口つきこそものしたまへ。

「風騒ぎむら雲まがふ夕べにも

忘るる間なく忘れぬ君」

吹き乱れたる菫萱につけたまへれば、人びと、

「交野の少将は、紙の色にこそとのへはべりけれ」と聞こゆ。

「さばかりの色も思ひ分かざりけりや。いづこの野辺のほとりの花」

など、かやうの人びとにも、言少なに見えて、心解くべくもてなさず、いとすくすくしう気高し。

またも書いたまうて、馬の助に賜へれば、をかしき童、またいと馴れたる御

しをれしぬべき心地こそすれ」

詳しくも聞こえぬに、うち誦じたまふをほの聞くに、憎きものをかしければ、なほ見果てまほしけれど、「近かりけりと見えたてまつらじ」と思ひて、立ち去りぬ。

御返り、

「下露になびかましかば女郎花

荒き風にはしをれざらまし

なよ竹を見たまへかし」

など、ひが耳にやありけむ、聞きよくもあらずぞ。

東の御方へ、これよりぞ渡りたまふ。今朝の朝寒なるうちとけわざにや、もの裁ちなどするねび御達、御前にあまたして、細櫃めくものに、綿引きかけてまさぐる若人どもあり。いとぎよらなる朽葉の羅、今様色の二なく擣ちたるなど、引き散らしたまへり。

「中将の下襲か。御前の壺前裁の宴も止まりぬらむかし。かく吹き散らしてむには、何事かせられむ。すさまじかるべき秋なめり」

などのたまひて、何にかあらむ、さまざまなるものの色どもの、いとぎよらなれば、「かやうなる方は、南の上にも劣らずかし」と思す。御直衣、花文綾を、このころ摘み出だしたる花して、はかなく染め出でたまへる、いとあらまほしき色したり。

「中将にこそ、かやうにては着せたまはめ。若き人のにてめやすかめり」
などやうのことを聞こえたまひて、渡りたまひぬ。

むつかしき方々めぐりたまふ御供に歩いて、中将は、なま心やましよう、書かまほしき文など、日たけぬるを思ひつつ、姫君の御方に参りたまへり。

中将、いとこまやかに聞こえたまふを、「いかでこの御容貌見てしがな」と思ひわたる心にて、隅の間の御簾の、几帳は添ひながらしどけなきを、やをら引き上げて見るに、紛るるものどもも取りやりたれば、いとよく見ゆ。かく戯れたまふけしきのしるきを、

「あやしのわざや。親子と聞こえながら、かく懐離れず、もの近かべきほどかは」

と目とまりぬ。「見やつけたまはむ」と恐ろしけれど、あやしきに、心もおどろきて、なほ見れば、柱隠れにすこしそばみたまへりつるを、引き寄せたまへるに、御髪の並み寄りて、はらはらとこぼれかかりたるほど、女も、いとむつかしく苦しと思うたまへるけしきながら、さすがにいとなごやかなるさまして、寄りかかりたまへるは、

「ことと馴れ馴れしきにこそあめれ。いで、あなうたて。いかなることにかあらむ。思ひ寄らぬ隈なくおはしける御心にて、もとより見馴れ生ほしたてたまはぬは、かかる御思ひ添ひたまへるなめり。むべなりけりや。あな、疎まし」と思ふ心も恥づかし。「女の御さま、げに、はらからといふとも、すこし立ち退きて、異腹ぞかし」など思はむは、「なか、心あやまりもせざらむ」とおぼゆ。

昨日見し御けはひには、け劣りたれど、見るに笑まるるさまは、立ちも並ぶぬべく見ゆる。八重山吹の咲き乱れたる盛りに、露のかかれる夕映えぞ、ふと思ひ出でらるる。折にあはぬよそへどもなれど、なほ、うちおぼゆるやうよ。花は限りこそあれ、そそけたるしべなどもまじるかし、人の御容貌のよきは、たとへむ方なきものなりけり。

御前に人も出で来ず、いとこまやかにうちささめき語らひ聞こえたまふに、いかがあらむ、まめだちてぞ立ちたまふ。女君、

「吹き乱る風のけしきに女郎花

もののはれにおぼえけるままに、箏の琴を掻きまさぐりつつ、端近うみたまへるに、御前駆追ふ声のしければ、うちとけ萎えばめる姿に、小桂ひき落として、けぢめ見せたる、いといたし。端の方についゐたまひて、風の騒ぎばかりをとぶらひたまひて、つれなく立ち帰りたまふ、心やましげなり。

「おほかたに萩の葉過ぐる風の音も

憂き身ひとつにしむ心地して」

とひとりごちけり。

西の対には、恐ろしと思ひ明かしたまひける、名残に、寝過ぐして、今ぞ鏡なども見たまひける。

「ことごとしく前駆、な追ひそ」

とのたまへば、ことに音せで入りたまふ。屏風なども皆畳み寄せ、ものしどけなくしなしたるに、日はなやかにさし出でたるほど、けざけざと、ものきよげなるさましてゐたまへり。近くゐたまひて、例の、風につけても同じ筋に、むつかしう聞こえ戯れたまへば、堪へずうたてと思ひて、

「かう心憂ければこそ、今宵の風にもあくがれなまほしくはべりつれ」

と、むつかりたまへば、いとよくうち笑ひたまひて、

「風につきてあくがれたまはむや、軽々しからむ。さりとも、止まる方ありなむかし。やうやうかかる御心むけこそ添ひにけれ。ことわりや」

とのたまへば、

「げに、うち思ひのままに聞こえてけるかな」

と思して、みづからもうち笑ひたまへる、いとをかしき色あひ、つらつきなり。酸漿などいふめるやうにふくらかにて、髪のかかれる隙々うつくしうおぼゆ。まみのあまりわららかなるぞ、いとしも品高く見えざりける。その他は、つゆ難つくべうもあらず。

殿、御鏡など見たまひて、忍びて、

「中将の朝けの姿は、きよげなりな。ただ今は、きびはなるべきほどを、かたくなしからず見ゆるも、心の闇にや」

とて、わが御顔は、古りがたくよしと見たまふべかめり。いといたう心懸想したまひて、

「宮に見えたてまつるは、恥づかしうこそあれ。何ばかりあらはなるゆゑゆゑしきも、見えたまはぬ人の、奥ゆかしく心づかひせられたまふぞかし。いとおほどかに女しきものから、けしきづきてぞおはするや」

とて、出でたまふに、中将ながめ入りて、とみにもおどろくまじきけしきにてみたまへるを、心疾き人の御目にはいかが見たまひけむ、立ちかへり、女君に、

「昨日、風の紛れに、中将は見たてまつりやしてけむ。かの戸の開きたりしによ」

とのたまへば、面うち赤みて、

「いかでか、さはあらむ。渡殿の方には、人の音もせざりしものと聞こえたまふ。」

「なほ、あやし」とひとりごちて、渡りたまひぬ。

御簾の内に入りたまひぬれば、中将、渡殿の戸口に人びとのけはひするに寄りて、ものなど言ひ戯るれど、思ふことの筋々嘆かしくて、例よりもしめりてみたまへり。

こなたより、やがて北に通りて、明石の御方を見やりたまへば、はかばかしき家司だつ人なども見え、馴れたる下仕ひどもぞ、草の中にまじりて歩く。童女など、をかしき相姿うちとけて、心とどめ取り分き植ゑたまふ龍胆、朝顔のはひまじれる籬も、みな散り乱れたるを、とかく引き出で尋ぬるなるべし。

濃き薄き相どもに、女郎花の汗衫などやうの、時にあひたるさまにて、四、五人連れて、ここかしこの草むらに寄りて、色々の籠どもを持ってさまよひ、撫子などの、いとあはれげなる枝ども取り持て参る、霧のまよひは、いと艶にぞ見えける。

吹き来る追風は、紫苑ことごとくに匂ふ空も、香のかをりも、触ればひたまへる御けはひにやと、いと思ひやりめでたく、心懸想せられて、立ち出でにくけれど、忍びやかにうちおとなひて、歩み出でたまへるに、人びと、けぎやかにおどろき顔にはあらねど、皆すべり入りぬ。

御参りのほどなど、童なりしに、入り立ち馴れたまへる、女房なども、いとけうとくはあらず。御消息啓せさせたまひて、宰相の君、内侍など、けはひすれば、私事も忍びやかに語らひたまふ。これはた、さいへど、気高く住みたるけはひありさまを見るにも、さまさまにも思ひ出でらる。

南の御殿には、御格子参りわたして、昨夜、見捨てがたかりし花どもの、行方も知らぬやうにてしをれ伏したるを見たまひけり。中将、御階にゐたまひて、御返り聞こえたまふ。

「荒き風をも防がせたまふべくやと、若々しく心細くおぼえはべるを、今なむ慰みはべりぬる」

と聞こえたまへれば、

「あやしくあえかにおはする宮なり。女どちは、もの恐ろしく思しぬべかりつる夜のさまなれば、げに、おろかなりとも思いつらむ」

とて、やがて参りたまふ。御直衣などたてまつるとて、御簾引き上げて入りたまふに、「短き御几帳引き寄せて、はつかに見ゆる御袖口は、さにこそはあらめ」と思ふに、胸つぶつぶと鳴る心地するも、うたてあれば、他さまに見やりつ。

「いかにぞ。昨夜、宮は待ちよろこびたまひきや」

「しか。はかなきことにつけても、涙もろにものしたまへば、いと不便にこそはべれ」

と申したまへば、笑ひたまひて、

「今いくばくもおはせじ。まめやかに仕うまつり見えたてまつれ。内大臣は、こまかにしもあるまじうこそ、愁へたまひしか。人柄あやしうはなやかに、男々しき方によりて、親などの御孝をも、いかめしきさまをば立てて、人にも見おどろかさむの心あり、まことにしみて深きところはなき人になむ、ものせられける。さるは、心の隈多く、いとかしこき人の、末の世にあまるまで、才類ひなく、うるさながら。人として、かく難なきことはかたかりける」

などのたまふ。

「いとおどろおどろしかりつる風に、中宮に、はかばかしき宮司などさぶらひつらむや」

とて、この君して、御消息聞こえたまふ。

「夜の風の音は、いかが聞こし召しつらむ。吹き乱りはべりしに、おこりあひはべりて、いと堪へがたき、ためらひはべるほどになむ」

と聞こえたまふ。

中将下りて、中の廊の戸より通りて、参りたまふ。朝ぼらけの容貌、いとめでたくをかしげなり。東の対の南の側に立ちて、御前の方を見やりたまへば、御格子、まだ二間ばかり上げて、ほのかなる朝ぼらけのほどに、御簾巻き上げて人びとみたり。

高欄に押しかかりつつ、若やかなる限りあまた見ゆ。うちとけたるはいかがあらむ、さやかならぬ明けぼののほど、色々なる姿は、いづれともなくをかし。

童女下ろさせたまひて、虫の籠どもに露飼はせたまふなりけり。紫苑、撫子、

とおどろきたまひて、まだほのぼのとするに参りたまふ。

道のほど、横さま雨いと冷やかに吹き入る。空のけしきもすぎきに、あやし
くあくがれたる心地して、

「何ごとぞや。またわが心に思ひ加はれるよ」と思ひ出づれば、「いと似げな
きことなりけり。あな、もの狂ほし」

と、とぎまかうざまに思ひつつ、東の御方に、まづまうでたまへれば、懼ぢ
極じておはしけるに、とかく聞こえ慰めて、人召して、所々つくるはすべきよ
しなど言ひおきて、南の御殿に参りたまへれば、まだ御格子も参らず。

おはしますに当れる高欄に押しかかりて、見わたせば、山の木どもも吹きな
びかして、枝ども多く折れ伏したり。草むらはさらにもいはず、桧皮、瓦、所々
の立葩、透垣などやうのもの乱りがはし。

日のわづかにさし出でたるに、憂へ顔なる庭の露きらきらとして、空はいと
すぐく霧りわたれるに、そこはかとなく涙の落つるを、おし拭ひ隠して、うち
しはぶきたまへれば、

「中将の声づくるにぞあなる。夜はまだ深からむは」

とて、起きたまふなり。何ごとにかあらむ、聞こえたまふ声はせで、大臣う
ち笑ひたまひて、

「いにしへだに知らせたてまつらずなりにし、暁の別れよ。今ならひたまは
むに、心苦しからむ」

とて、とばかり語らひきこえたまふけはひども、いとをかし。女の御いらへ
は聞こえねど、ほのぼの、かやうに聞こえ戯れたまふ言の葉の趣きに、「ゆるび
なき御仲らひかな」と、聞きゐたまへり。

御格子を御手づから引き上げたまへば、気近きかたはらいたさに、立ち退き
てさぶらひたまふ。

「ここのらの齡に、まだかく騒がしき野分にこそあはざりつれ」と、ただわななきにわななきたまふ。

「大きなる木の枝などの折るる音も、いとうたてあり。御殿の瓦さへ残るまじく吹き散らすに、かくてもものしたまへること」

と、かつはのたまふ。そこら所狭かりし御勢ひのしづまりて、この君を頼もし人に思したる、常なき世なり。今もおほかたのおぼえの薄らぎたまふことはなけれど、内の大殿の御けはひは、なかなかすこし疎くぞありける。

中将、夜もすがら荒き風の音にも、すずろにもあはれなり。心にかけて恋しと思ふ人の御ことは、さしおかれて、ありつる御面影の忘れぬを、

「こは、いかにおぼゆる心ぞ。あるまじき思ひもこそ添へ。いと恐ろしきこと」と

と、みづから思ひ紛らはし、異事に思ひ移れど、なほ、ふとおぼえつつ、

「来し方行く末、ありがたくもものしたまひけるかな。かかる御仲らひに、いかで東の御方、さるものの数にて立ち並びたまひつらむ。たとしへなかりけりや。あな、いとほし」

とおぼゆ。大臣の御心ばへを、ありがたしと思ひ知りたまふ。

人柄のいとまめやかなれば、似げなさを思ひ寄らねど、「さやうならむ人をこそ、同じくは、見て明かし暮らさめ。限りあらむ命のほども、今すこしはかならず延びなむかし」と思ひ続けらる。

暁方に風すこししめりて、村雨のやうに降り出づ。

「六条院には、離れたる屋ども倒れたり」

など人びと申す。

「風の吹きまふほど、広くそこら高き心地する院に、人びと、おはします御殿のあたりにこそしげけれ、東の町などは、人少なに思されつらむ」

るかな」とおぼゆ。

人びと参りて、

「いとかめしう吹きぬべき風にはべり。良の方より吹きはべれば、この御前はのどけきなり。馬場の御殿、南の釣殿などは、危ふげになむ」

とて、とかくこと行なひのしる。

「中将は、いづこよりものしつるぞ」

「三条の宮にはべりつるを、『風いたく吹きぬべし』と、人びとの申しつれば、おぼつかなさに参りはべりつる。かしこには、まして心細く、風の音をも、今はかへりて、若き子のやうに懼ぢたまふめれば。心苦しさに、まかではべりなむ」

と申したまへば、

「げに、はや、まうでたまひね。老いもていきで、また若うなること、世にあるまじきことなれど、げに、さのみこそあれ」

など、あはれがりきこえたまひて、

「かく騒がしげにはべめるを、この朝臣さぶらへばと、思ひたまへ譲りてなむ」

と、御消息聞こえたまふ。

道すがらいりもみする風なれど、うるはしくものしたまふ君にて、三条宮と六条院とに参りて、御覧ぜられたまはぬ日なし。内の御物忌などに、えさらず籠もりたまふべき日より外は、いそがしき公事、節会などの、暇いるべく、ことしげきにあはせても、まづこの院に参り、宮よりぞ出でたまひければ、まして今日、かかる空のけしきにより、風のさきにあくがれありきたまふもあはれに見ゆ。

宮、いとうれしう、頼もしと待ち受けたまひて、

ほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す。あぢきなく、見たてまつるわが顔にも移り来るやうに、愛敬はにほひ散りて、またなくめづらしき人の御さまなり。

御簾の吹き上げらるるを、人びと押へて、いかにしたるにかあらむ、うち笑ひたまへる、いといみじく見ゆ。花どもを心苦しがりて、え見捨てて入りたまはず。御前なる人びとも、さまざまにもきよげなる姿どもは見わたさるれど、目移るべくもあらず。

「大臣のいと気遠くはるかにもてなしたまへるは、かく見る人ただにはえ思ふまじき御ありさまを、いたり深き御心にて、もし、かかることもやと思すなりけり」

と思ふに、けはひ恐ろしうて、立ち去るにぞ、西の御方より、内の御障子引き開けて渡りたまふ。

「いとうたて、あわたたしき風なめり。御格子下ろしてよ。男どもあるらむを、あらはにもこそあれ」

と聞こえたまふを、また寄りて見れば、もの聞こえて、大臣もほほ笑みて見たてまつりたまふ。親とおおぼえず、若くきよげになまめきて、いみじき御容貌の盛りなり。

女もねびととのひ、飽かぬことなき御さまもなるを、身にしむばかりおぼゆれど、この渡殿の格子も吹き放ちて、立てる所のあらはになれば、恐ろしうて立ち退きぬ。今参れるやうにうち声づくりて、簀子の方に歩み出でたまへれば、

「さればよ。あらはなりつらむ」

とて、「かの妻戸の開きたりけるよ」と、今ぞ見咎めたまふ。

「年ごろかかることのつゆなかりつるを。風こそ、げに巖も吹き上げつべきものなりけれ。さばかりの御心どもを騒がして。めづらしくうれしき目を見つ

中宮の御前に、秋の花を植ゑさせたまへること、常の年よりも見所多く、色種を尽くして、よしある黒木赤木の籬を結びませつつ、同じき花の枝ざし、姿、朝夕露の光も世の常ならず、玉かとかかやきて作りわたせる野辺の色を見るに、はた、春の山も忘れられて、涼しうおもしろく、心もあくがるるやうなり。

春秋の争ひに、昔より秋に心寄する人は数まさりけるを、名立たる春の御前の花園に心寄せし人びと、また引きかへし移ろふけしき、世のありさまに似たり。

これを御覧じつきて、里居したまふほど、御遊びなどもあらまほしけれど、八月は故前坊の御忌月なれば、心もとなく思しつつ明け暮るるに、この花の色まさるけしきどもを御覧ずるに、野分、例の年よりもおどろおどろしく、空の色変りて吹き出づ。

花どものしをるるを、いとさしも思ひしまぬ人だに、あなわりなと思ひ騒がるるを、まして、草むらの露の玉の緒乱るるままに、御心惑ひもしぬべく思したり。おほふばかりの袖は、秋の空にしもこそ欲しげなりけれ。暮れゆくままに、ものも見えず吹きまよはして、いとむくつけければ、御格子など参りぬるに、うしろめたくいみじと、花の上を思し嘆く。

南の御殿にも、前栽つくろはせたまひける折にしも、かく吹き出でて、もとあらの小萩、はしたなく待ちえたる風のけしきなり。折れ返り、露もとまるまじく吹き散らすを、すこし端近くて見たまふ。

大臣は、姫君の御方におはしますほどに、中將の君参りたまひて、東の渡殿の小障子の上より、妻戸の開きたる隙を、何心もなく見入れたまへるに、女房のあまた見ゆれば、立ちとまりて、音もせで見る。

御屏風も、風のいたく吹きければ、押し畳み寄せたるに、見通しあらはなる廂の御座にゐたまへる人、ものに紛るべくもあらず、気高くきよらに、さとに

野 分

野

分

二返りばかり歌はせたまひて、御琴は中将に譲らせたまひつ。げに、かの父大臣の御爪音に、をさをさ劣らず、はなやかにおもしろし。

「御簾のうちに、物の音聞き分く人ものしたまふらむかし。今宵は、盃など心してを。盛り過ぎたる人は、酔ひ泣きのついでに、忍ばぬこともこそ」

とのたまへば、姫君もげにあはれと聞きたまふ。

絶えせぬ仲の御契り、おろかなるまじきものなればにや、この君たちを人知れず目にも耳にもとどめたまへど、かけてさだに思ひ寄らず、この中将は、心の限り尽くして、思ふ筋にぞ、かかるついでにも、え忍び果つまじき心地すれど、さまよくもてなして、をさをさ心とけても掻きわたさず。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

いと涼しくをかしきほどなる光に、女の御さま見るにかひあり。御髪の手あたりなど、いと冷やかにあてはかなる心地して、うちとけぬさまにものをつつましと思したるけしき、いとらうたげなり。帰り憂く思しやすらふ。

「絶えず人さぶらひて、灯しつけよ。夏の月なきほどは、庭の光なき、いとものむつかしく、おぼつかなしや」

とのたまふ。

「篝火にたちそふ恋の煙こそ

世には絶えせぬ炎なりけれ

いつまでとかや。ふすぶるならでも、苦しき下燃えなりけり」

と聞こえたまふ。女君、「あやしのありさまや」と思すに、

「行方なき空に消ちてよ篝火の

たよりにたぐふ煙とならば

人のあやしと思ひはべらむこと」

とわびたまへば、「くはや」とて、出でたまふに、東の対の方に、おもしろき

笛の音、箏に吹きあはせたり。

「中将の、例のあたり離れぬどち遊ぶにぞあなる。頭中将にこそあなれ。い

とわざとも吹きなる音かな」

とて、立ちとまりたまふ。

御消息、「こなたになむ、いと影涼しき篝火に、とどめられてものする」

とのたまへれば、うち連れて三人参りたまへり。

「風の音秋になりけりと、聞こえつる笛の音に、忍ばれでなむ」

とて、御琴ひき出でて、なつかしきほどに弾きたまふ。源中将は、「盤渉調」

にいとおもしろく吹きたり。頭中将、心づかひして出だし立てがたうす。「遅し」

とあれば、弁少将、拍子打ち出でて、忍びやかに歌ふ声、鈴虫にまがひたり。

このごろ、世の人の言種に、「内の大殿の今姫君」と、ことに触れつつ言ひ散らすを、源氏の大臣聞こしめして、

「ともあれ、かくもあれ、人見るまじくて籠もりみたらむ女子を、なほざりのかことにても、さばかりにもめかし出でて、かく、人に見せ、言ひ伝へらるるこそ、心得ぬことなれ。いと際々しうものしたまふあまりに、深き心をも尋ねずもて出でて、心にもかなはねば、かくはしたなきなるべし。よろづのこゝと、もてなしからにこそ、なだらかなるものなめれ」

と、いとほしがりたまふ。

かかるにつけても、「げによくこそと、親と聞こえながらも、年ごろの御心を知りきこえず、馴れたてまつらましに、恥ぢがましきことやあらまし」と、対の姫君思し知るを、右近もいとよく聞こえ知らせけり。

憎き御心こそ添ひたれど、さりとて、御心のままに押したちてなどもてなしたまはず、いとど深き御心のみまさりたまへば、やうやうなつかしううちとけきこえたまふ。

秋になりぬ。初風涼しく吹き出でて、背子が衣もうらさびしき心地したまふに、忍びかねつつ、いとしばしば渡りたまひて、おはしまし暮らし、御琴なども習はしきこえたまふ。

五、六日の夕月夜は疾く入りて、すこし雲隠るるけしき、荻の音もやうやうあはれなるほどになりにけり。御琴を枕にて、もろともに添ひ臥したまへり。かかる類ひあらむやと、うち嘆きがちにて夜更かしたまふも、人の咎めたてまつらむことを思せば、渡りたまひなむとて、御前の篝火のすこし消えがたなるを、御供なる右近の大夫を召して、灯しつけさせたまふ。

いと涼しげなる遣水のほとりに、けしきことに広がり臥したる檀の木の下に、打松おどろおどろしからぬほどに置いて、さし退きて灯したれば、御前の方は、

篝火

篝

火

ち笑ひぬ。御返り乞へば、

「をかしきことの筋にのみまつはれてはべめれば、聞こえさせにくこそ。宣旨書きめきては、いとほしからむ」

とて、ただ、御文めきて書く。

「近きしるしなき、おぼつかなきは、恨めしく、

常陸なる駿河の海の須磨の浦に

波立ち出でよ宮崎の松」

と書きて、読みきこゆれば、

「あな、うたて。まことにみづからのにもこそ言ひなせ」

と、かたはらいたげに思したれど、

「それは聞かむ人わきまへはべりなむ」

とて、おし包みて出だしつ。

御方見て、

「をかしの御口つきや。待つとのたまへるを」

とて、いとあまえたる薰物の香を、返す返す薰きしめりたまへり。紅といふもの、いと赤らかにかいつけて、髪けづりつくろひたまへる、さる方ににぎははしく、愛敬づきたり。御対面のほど、さし過ぐしたることもあらむかし。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

や、いでや、あやしきは水無川にを」

とて、また端に、かくぞ、

「草若み常陸の浦のいかが崎

いかであひ見む田子の浦波

大川水の」

と、青き色紙一重ねに、いと草がちに、いかれる手の、その筋とも見えず、ただよひたる書きざまも下長に、わりなくゆゑばめり。行のほど、端ざまに筋交ひて、倒れぬべく見ゆるを、うち笑みつつ見て、さすがにいと細く小さく巻き結びて、撫子の花につけたり。

樋洗童しも、いと馴れてきよげなる、今参りなりけり。女御の御方の台盤所に寄りて、

「これ、参らせたまへ」

と言ふ。下仕へ見知りて、

「北の対にさぶらふ童なりけり」

とて、御文取り入る。大輔の君といふ、持て参りて、引き解きて御覽ぜさす。

女御、ほほ笑みてうち置かせたまへるを、中納言の君といふ、近くゐて、そばそば見けり。

「いと今めかしき御文のけしきにもはべめるかな」

と、ゆかしげに思ひたれば、

「草の文字は、え見知らねばにやあらむ、本末なくも見ゆるかな」

とて、賜へり。

「返りこと、かくゆゑゆゑしく書かずは、悪ろしと思ひおとされむ。やがて書きたまへ」

と、譲りたまふ。もて出でてこそあらね、若き人は、ものをかしくて、皆う

葉な交ぜられそ。あるやうあるべき身にこそあめれ」

と、腹立ちたまふ顔やう、気近く、愛敬づきて、うちそぼれたるは、さる方にをかしく罪許されたり。

ただ、いと鄙び、あやしき下人の中に生ひ出でたまへれば、もの言ふさまも知らず。ことなるゆゑなき言葉をも、声のどやかに押ししづめて言ひ出だしたるは、打ち聞き、耳異におぼえ、をかしからぬ歌語りをするも、声づかひつきづきしくて、残り思はせ、本末惜しみたるさまにてうち誦じたるは、深き筋思ひ得ぬほどの打ち聞きには、をかしかなりと、耳もとまるかし。

いと心深くよしあることを言ひゐたりとも、よろしき心地あらむと聞こゆべくもあらず、あはつけき声ざまにのたまひ出づる言葉こはごはしく、言葉たみて、わがままに誇りならひたる乳母の懐にならひたるさまに、もてなしいとあやしきに、やつるるなりけり。

いといふかひなくはあらず、三十文字あまり、本末あはぬ歌、口疾くうち続けなどしたまふ。

「さて、女御殿に参れとのたまひつるを、しぶしぶなるさまならば、ものしくもこそ思せ。夜さりまうでむ。大臣の君、天下に思すとも、この御方々のすげなくしたまはむには、殿のうちには立てりなむはや」

とのたまふ。御おぼえのほど、いと軽らかなりや。

まづ御文たてまつりたまふ。

「葦垣のま近きほどにはさぶらひながら、今まで影踏むばかりのしるしもはべらぬは、勿来の関をや据ゑさせたまへらむとなむ。知らねども、武蔵野といへばかしこけれども。あなかしこや、あなかしこや」

と、点がちにて、裏には、

「まことや、暮にも参り来むと思うたまへ立つは、厭ふにはゆるにや。いで

「いとうれしきことにこそはべるなれ。ただ、いかでもいかでも、御方々に数まへしろしめされむことをなむ、寝ても覚めても、年ごろ何ごとを思ひたまへつるにもあらず。御許しだにはべらば、水を汲みいただきても、仕うまつりなむ」

と、いとよげに、今すこしきへづれば、いふかひなしと思して、

「いとしか、おりたちて薪拾ひたまはずとも、参りたまひなむ。ただかのあえものにしけむ法の師だに遠くは」

と、をこごとにたまひなすをも知らず、同じき大臣と聞こゆるなかにも、いとよげにもものしく、はなやかなるさまして、おぼろけの人見えにくき御けしきをも見知らず、

「さて、いつか女御殿には参りはべらむずる」と聞こゆれば、

「よろしき日などやいふべからむ。よし、ことごとくは何かは。さ思はれば、今日にても」

とのたまひ捨てて渡りたまひぬ。

よき四位五位たちの、いつききこえて、うち身じろきたまふにも、いといかめしき御勢ひなるを見送りきこえて、

「いで、あな、めでたのわが親や。かかりける胤ながら、あやしき小家に生ひ出でけること」

とのたまふ。五節、

「あまりことごとしく、恥づかしげにぞおはする。よろしき親の、思ひかしづかむにぞ、尋ね出でられたまはまし」

と言ふも、わりなし。

「例の、君の、人の言ふこと破りたまひて、めざまし。今は、ひとつ口に言

人の女、かの人の子と知らるる際になれば、親兄弟の面伏せなる類ひ多かめり。まして」

とのたまひきしつる、御けしきの恥づかしきも知らず、

「何か、そは、ことごとしく思ひたまひて交らひはべらばこそ、所狭からめ。大御大壺取りにも、仕うまつりなむ」

と聞こえたまへば、え念じたまはで、うち笑ひたまひて、

「似つかはしからぬ役ななり。かくたまさかに会へる親の孝せむの心あらば、このものたまふ声を、すこしのどめて聞かせたまへ。さらば、命も延びなむかし」

と、をこめいたまへる大臣にて、ほほ笑みてのたまふ。

「舌の本性にこそははべらめ。幼くはべりし時だに、故母の常に苦しがり教へはべりし。妙法寺の別当大徳の、産屋にはべりける、あえものとなむ嘆きはべりたうびし。いかでこの舌疾さやめはべらむ」

と思ひ騒ぎたるも、いと孝養の心深く、あはれなりと見たまふ。

「その、気近く入り立ちたりけむ大徳こそは、あぢきなかりけれ。ただその罪の報いななり。唾、言吃とぞ、大乘誹りたる罪にも、数へたるかし」

とのたまひて、「子ながら恥づかしくおはする御さまに、見えたてまつらむこそ恥づかしけれ。いかに定めて、かくあやしきけはひも尋ねず迎へ寄せけむ」と思し、「人びともあまた見つき、言ひ散らさむこと」と、思ひ返したまふものから、

「女御里にもしたまふ時々、渡り参りて、人のありさまなども見ならひたまへかし。ことなることなき人も、おのづから人に交じらひ、さる方になれば、さてもありぬかし。さる心して、見えたてまつりたまひなむや」

とのたまへば、

おし張りて、五節の君とて、されたる若人のあると、双六をぞ打ちたまふ。手をいと切におしもみて、

「せうさい、せうさい」

とこふ声ぞ、いと舌疾きや。「あな、うたて」と思して、御供の人の前駆追ふをも、手かき制したまうて、なほ、妻戸の細目なるより、障子の開きあひたるを見入れたまふ。

この従姉妹も、はた、けしきはやれる、

「御返しや、御返しや」

と、筒をひねりて、とみに打ち出でず。中に思ひはありやすらむ、いとあさへたるさまでもしたり。

容貌はひちちかに、愛敬づきたるさまして、髪うるはしく、罪軽げなるを、額のいと近やかなると、声のあはつけさとにそこなはれたるなめり。取りたててよしとはなけれど、異人とあらがふべくもあらず、鏡に思ひあはせられたまふに、いと宿世心づきなし。

「かくてもものしたまふは、つきなくうひうひしくなどやある。ことしげくのみありて、訪らひまうでずや」

とのたまへば、例の、いと舌疾にて、

「かくてさぶらふは、何のもの思ひかはべらむ。年ごろ、おぼつかなく、ゆかしく思ひきこえさせし御顔、常にえ見たてまつらぬばかりこそ、手打たぬ心地しはべれ」

と聞こえたまふ。

「げに、身に近く使ふ人もさをさなきに、さやうにても見ならしたてまつらむと、かねては思ひしかど、えさしもあるまじきわざなりけり。なべての仕うまつり人こそ、とあるもかかるも、おのづから立ち交らひて、人の耳をも目を、かならずしもとどめぬものなれば、心やすかべかめれ。それだに、その

大宮よりも、常におぼつかなきことを恨みきこえたまへど、かくのたまふるがつつましくて、え渡り見たてまつりたまはず。

大臣、この北の対の今姫君を、

「いかにせむ。さかしらに迎へ率て来て。人かく誹るとて、返し送らむも、いと軽々しく、もの狂ほしきやうなり。かくて籠めおきたれば、まことにかしづくべき心あるかと、人の言ひなすなるもねたし。女御の御方などに交じらはせて、さるをこのものにないてむ。人のいとかたはなるものに言ひおとすなる容貌、はた、いとき言ふばかりにやはある」

など思して、女御の君に、

「かの人参らせむ。見苦しからむことなどは、老いしらへる女房などして、つつまず言ひ教へさせたまひて御覧ぜよ。若き人びとの言種には、な笑はせさせたまひそ。うたてあはつけきやうなり」

と、笑ひつつ聞こえたまふ。

「などか、いときことのほかにははべらむ。中将などの、いと二なく思ひはべりけむかね言に足らずといふばかりにこそははべらめ。かくのたまひ騒ぐを、はしたなう思はるるにも、かたへはかかやかしきにや」

と、いと恥づかしげにて聞こえさせたまふ。この御ありさまは、こまかにをかしげさはなくて、いとあてに澄みたるものの、なつかしきさま添ひて、おもしろき梅の花の開けさしたる朝ぼらけおぼえて、残り多かりげにほほ笑みたまへるぞ、人に異なりける、と見たてまつりたまふ。

「中将の、いとき言へど、心若きたどり少なきに」

など申したまふも、いとほしげなる人の御おぼえかな。

やがて、この御方のたよりに、たたずみおはして、のぞきたまへば、簾高く

扇を鳴らしたまへるに、何心もなく見上げたまへるまみ、らうたげにて、つらつき赤めるも、親の御目にはうつくしくのみ見ゆ。

「うたた寝はいさめきこゆるものを。などか、いとものはかなきさまにては大殿籠もりける。人びとも近くさぶらはで、あやしや。

女は、身を常に心づかひして守りたらむなむよかるべき。心やすくうち捨てざまにもてなしたる、品なきことなり。

さりとて、いときかしく身かためて、不動の陀羅尼誦みて、印つくりてみたらむも憎し。うつつの人にもあまり気遠く、もの隔てがましきなど、気高きやうとても、人にくく、心うつくしくはあらぬわざなり。

太政大臣の、后がねの姫君ならはしたまふなる教へは、よろづのことに通はしなだらめて、かどかどしきゆゑもつけじ、たどたどしくおぼめくこともあらじと、ぬるらかにこそ掟てたまふなれ。

げに、さもあることなれど、人として、心にもするわざにも、立ててなびく方は方とあるものなれば、生ひ出でたまふさまあらむかし。この君の人となり、宮仕へに出だし立てたまはむ世のけしきこそ、いとゆかしけれ」

などのたまひて、

「思ふやうに見たてまつらむと思ひし筋は、難うなりにたる御身なれど、いかで人笑はれならずしなしたてまつらむとなむ、人の上のさまさまなるを聞くごとに、思ひ乱れはべる。

試み事にねむごろがらむ人のねぎごとに、なしばしなびきたまひそ。思ふさまはべり」

など、いとらうたしと思ひつつ聞こえたまふ。

「昔は、何ごとも深くも思ひ知らで、なかなか、さしあたりていとほしかりしことの騒ぎにも、おもなくて見えたてまつりけるよ」と、今ぞ思ひ出づるに、胸ふたがりて、いみじく恥づかしき。

あたたら、大臣の、塵もつかず、この世には過ぎたまへる御身のおぼえありさまに、おもだたしき腹に、女かしづきて、げに疵なからむと、思ひやりめでたきがものしたまはぬは。

おほかたの、子の少なくて、心もとなきなめりかし。劣り腹なれど、明石の御許の産み出でたるはしも、さる世になき宿世にて、あるやうあらむとおぼゆかし。

その今姫君は、ようせずは、実の御子にもあらじかし。さすがにいとけしきあるところつきたまへる人にて、もてないたまふならむ」

と、言ひおとしたまふ。

「さて、いかが定めらるなる。親王こそまつはし得たまはむ。もとより取り分きて御仲よし、人柄も警策なる御あはひどもならむかし」

などのたまひては、なほ、姫君の御こと、飽かず口惜し。「かやうに、心にくくもてなして、いかにしなきむなど、やすからずいぶかしがらせましものを」とねたければ、位さばかりと見ざらむ限りは、許しがたく思すなりけり。

大臣なども、ねむごろに口入れかへさひたまはむにこそは、負くるやうにてもなびかめと思すに、男方は、さらに焦られきこえたまはず、心やましくなむ。

とかく思しめぐらすままに、ゆくりもなく軽らかにはひ渡りたまへり。少将も御供に参りたまふ。

姫君は、昼寝したまへるほどなり。羅の単衣を着たまひて臥したまへるさま、暑かはしくは見えず、いとらうたげにささやかなり。透きたまへる肌つきなど、いとうつくしげなる手つきして、扇を持たまへりけるながら、かひなを枕にて、うちやられたる御髪のほど、いと長くこちたくはあらねど、いとをかしき末つきなり。

人びともの後に寄り臥しつうち休みたれば、ふともおどろいたまはず。

疎みきこえたまはず、さるべき御応へも、馴れ馴れしからぬほどに聞こえかはしなどして、見るままにいと愛敬づき、薫りまさりたまへれば、なほさてもえ過ぐしやるまじく思り返す。

「さはまた、さて、ここながらかしづき据ゑて、さるべき折々に、はかなくうち忍び、ものをも聞こえて慰みなむや。かくまだ世馴れぬほどの、わづらはしさにこそ、心苦しくはありけれ、おのづから関守強くとも、ものの心知りそめ、いとほしき思ひなくて、わが心も思ひ入りなば、しげくとも障はらじかし」と思し寄る、いとけしからぬことなりや。

いよいよ心やすからず、思ひわたらむ苦しからむ。なのめに思ひ過ぐさむことの、とぎまかくさまにもかたきぞ、世づかずむつかしき御語らひなりける。

内の大殿は、この今の御女のことを、「殿の人も許さず、軽み言ひ、世にもほきたることと誹りきこゆ」と、聞きたまふに、少将の、ことのついでに、太政大臣の「さることや」ととぶらひたまひしこと、語りきこゆれば、

「さかし。そこにこそは、年ごろ、音にも聞こえぬ山賤の子迎へ取りて、ものめかしたつれ。をさをさ人の上もどきたまはぬ大臣の、このわたりのことは、耳とどめてぞおとしめたまふや。これぞ、おぼえある心地しける」

とのたまふ。少将の、

「かの西の対に据ゑたまへる人は、いとこともなきけはひ見ゆるわたりになむはべるなる。兵部卿宮など、いたう心とどめてのたまひわづらふとか。おぼろけにはあらじとなむ、人びと推し量りはべめる」

と申したまへば、

「いで、それは、かの大臣の御女と思ふばかりのおぼえのいといみじきぞ。人の心、皆さこそある世なめれ。かならずさしもすぐれじ。人びとしきほどならば、年ごろ聞こえなまし。」

「山賤の垣ほに生ひし撫子の

もとの根ざしを誰れか尋ねむ」

はかなげに聞こえないたまへるさま、げにいとなつかしく若やかなり。

「来ざらましかば」

とうち誦じたまひて、いとどしき御心は、苦しきまで、なほえ忍び果つまじく思さる。

渡りたまふことも、あまりうちしきり、人の見たてまつり咎むべきほどは、心の鬼に思しとどめて、さるべきことをし出でて、御文の通はぬ折なし。ただこの御ことのみ、明け暮れ御心にはかかりたり。

「なぞ、かくあいなきわざをして、やすからぬもの思ひをすらむ。さ思はじとて、心のままにもあらば、世の人のそしり言はむことの軽々しさ、わがためをばさるものにて、この人の御ためいとほしかるべし。限りなき心ざしといふとも、春の上の御おぼえに並ぶばかりは、わが心ながらえあるまじく」思し知りたり。「さて、その劣りの列にては、何ばかりかはあらむ。わが身ひとつこそ、人よりは異なれ、見む人のあまたが中に、かかづらはむ末にては、何のおぼえかはたけからむ。異なることなき納言の際の、二心なくて思はむには、劣りぬべきことぞ」

と、みづから思し知るに、いといとほしくて、「宮、大将などにや許してまし。さてもて離れ、いざなひ取りては、思ひも絶えなむや。いふかひなきにて、さもしてむ」と思す折もあり。

されど、渡りたまひて、御容貌を見たまひ、今は御琴教へたてまつりたまふにさへことづけて、近やかに馴れ寄りたまふ。

姫君も、初めこそむくつけく、うたてとも思ひたまひしか、「かくても、なだらかに、うしろめたき御心はあらざりけり」と、やうやう目馴れて、いとしも

まへり。

「貫河の瀬々のやはらた」と、いとなつかしく謡ひたまふ。「親避くるつまは、すこしうち笑ひつつ、わざともなく搔きなしたまひたる菅搔きのほど、いひ知らずおもしろく聞こゆ。」

「いで、弾きたまへ。才は人になむ恥ぢぬ。「想夫恋」ばかりこそ、心のうちに思ひて、紛らはす人もありけめ、おもなくて、かれこれに合はせつるなむよき」

と、切に聞こえたまへど、さる田舎の隈にて、ほのかに京人と名のりける、古大君女教へきこえければ、ひがことにもやとつつましくて、手触れたまはず。

「しばしも弾きたまはなむ。聞き取ることもや」と心もとなきに、この御琴によりぞ、近くゐざり寄りて、

「いかなる風の吹き添ひて、かくは響きはべるぞとよ」

とて、うち傾きたまへるさま、火影にいとうつくしげなり。笑ひたまひて、

「耳固からぬ人のためには、身にしむ風も吹き添ふかし」

とて、押しやりたまふ。いと心やまし。

人びと近くさぶらへば、例の戯れごともえ聞こえたまはで、

「撫子を飽かでも、この人びとの立ち去りぬるかな。いかで、大臣にも、この花園見せたてまつらむ。世もいと常なきをと思ふに、いにしへも、ものついでに語り出でたまへりしも、ただ今のこととぞおぼゆる」

とて、すこしのたまひ出でたるにも、いとあはれなり。

「撫子のとこなつかしき色を見ば

もとの垣根を人や尋ねむ

このことのわづらはしきにこそ、繭ごもりも心苦しう思ひきこゆれ」

とのたまふ。君、うち泣きて、

こき。大和琴とはかなく見せて、際もなくしおきたることなり。広く異国のことを知らぬ女のためとなむおぼゆる。

同じくは、心とどめて物などに掻き合はせて習ひたまへ。深き心とて、何ばかりもあらずながら、またまことに弾き得ることはかたきにやあらむ、ただ今は、この内大臣にならずらふ人なしかし。

ただはかなき同じ菅搔きの音に、よろづのものの音、籠もり通ひて、いふかたもなくこそ、響きのぼれ」

と語りたまへば、ほのぼの心得て、いかでと思すことなれば、いとどいぶかしくて、

「このわたりにて、さりぬべき御遊びの折など、聞きはべりなむや。あやしき山賤などのなかにも、まねぶものあまはべるることなれば、おしなべて心やすくやとこそ思ひたまへつれ。さは、すぐれたるは、さまことにやはらむ」

と、ゆかしげに、切に心に入れて思ひたまへれば、

「さかし。あづまとぞ名も立ち下りたるやうなれど、御前の御遊びにも、まづ書司を召すは、人の国は知らず、ここにはこれをものの親としたるにこそあめれ。

そのなかにも、親としつべき御手より弾き取りたまへらむは、心ことなりなむかし。ここになども、さるべからむ折にはものしたまひなむを、この琴に、手惜しまずなど、あきらかに掻き鳴らしたまはむことやかたからむ。ものの上手は、いづれの道も心やすからずのみぞあめる。

さりとも、つひには聞きたまひてむかし」

とて、調べすこし弾きたまふ。ことつひいとなく、今めかしくをかし。「これにもまされる音や出づらむ」と、親の御ゆかしさたち添ひて、このことにてさへ、「いかならむ世に、さてうちとけ弾きたまはむを聞かむ」など、思ひゐた

中将の君は、かくよきなかに、すぐれてをかしげになまめきたまへり。

「中将を厭ひたまふこそ、大臣は本意なけれ。交じりものなく、きらきらしかめるなかに、大君だつ筋にて、かたくななりとにや」

とのたまへば、

「来まさば、といふ人もはべりけるを」

と聞こえたまふ。

「いで、その御肴もてはやされむさまは願はしからず。ただ、幼きどちの結びおきけむ心も解けず、年月、隔てたまふ心むけのつらきなり。まだ下臈なり、世の聞き耳軽しと思はれば、知らず顔にて、ここに任せたまへらむに、うしろめたくはありなましや」

など、うめきたまふ。「さは、かかる御心の隔てある御仲なりけり」と聞きたまふにも、親に知られたてまつらむことのいつとなきは、あはれにいぶせく思す。

月もなきころなれば、燈籠に御殿油参れり。

「なほ、気近くて暑かはしや。篝火こそよけれ」

とて、人召して、

「篝火の台一つ、こなたに」

と召す。をかしげなる和琴のある、引き寄せたまひて、掻き鳴らしたまへば、律にいとよく調べられたり。音もいとよく鳴れば、すこし弾きたまひて、

「かやうのことは御心に入らぬ筋にやと、月ごろ思ひおとしきこえけるかな。秋の夜の月影涼しきほど、いと奥深くはあらで、虫の声に掻き鳴らし合はせたるほど、気近く今めかしきものの音なり。ことごとしき調べ、もてなししどけなしや。」

このものよ、さながら多くの遊び物の音、拍子を調べとりたるなむいとかし

「心やすくうち休み涼まむや。やうやうかやうの中に、厭はれぬべき齡にもなりにけりや」

とて、西の対に渡りたまへば、君達、皆御送りに参りたまふ。

たそかれ時のおぼおぼしきに、同じ直衣どもなれば、何ともわきまへられぬに、大臣、姫君を、

「すこし外出でたまへ」

とて、忍びて、

「少将、侍従など率てまうで来たり。いと翔けり来まほしげに思へるを、中将の、いと実法の人にて率て来ぬ、無心なめりかし。

この人びとは、皆思ふ心なきならじ。なほなほしき際をだに、窓の内なるほどは、ほどに従ひて、ゆかしく思ふべかめるわぎなれば、この家のおぼえ、うちうちのくだくだしきほどよりは、いと世に過ぎて、ことことしくなむ言ひ思ひなすべかめる。かたがたものすめれど、さすがに人の好きごと言ひ寄らむにつきなしかし。

かくてものしたまふは、いかでさやうならむ人のけしきの、深さ浅さをも見むなど、さうざうしきままに願ひ思ひしを、本意なむ叶ふ心地しける」

など、ささめきつつ聞こえたまふ。

御前に、乱れがはしき前裁なども植ゑさせたまはず、撫子の色をととのへたる、唐の、大和の、籬いとなつかしく結ひなして、咲き乱れたる夕ばえ、いみじく見ゆ。皆、立ち寄りて、心のままにも折り取らぬを、飽かず思ひつつやすらふ。

「有職どもなりな。心もちるなども、とりどりにつけてこそめやすけれ。右の中将は、ましてすこし静まりて、心恥づかしき気まさりたり。いかにぞや、おとづれ聞こゆや。はしたなくも、なさし放ちたまひそ」

などのたまふ。

る。詳しくさまは、え知りはべらず。げに、このころ珍しき世語りになむ、人びともしはべるなる。かやうのことにぞ、人のため、おのづから家損なるわざにはべりけれ」

と聞こゆ。「まことなりけり」と思して、

「いと多かめる列に、離れたらむ後るる雁を、強ひて尋ねたまふが、ふくつけきぞ。いともしきに、さやうならむものくさはひ、見出でまほしけれど、名のりももの憂き際とや思ふらむ、さらにこそ聞こえね。さても、もて離れたることにはあらじ。らうがはしくとかく紛れたまふめりしほどに、底清く澄まぬ水にやどる月は、曇りなきやうのいかでかあらむ」

と、ほほ笑みてのたまふ。中将の君も、詳しく聞きたまふことなれば、えしもまめだたず。少将と藤侍従とは、いとからしと思ひたり。

「朝臣や、さやうの落葉をだに拾へ。人悪ろき名の後の世に残らむよりは、同じかざしにて慰めむに、なでふことかあらむ」

と、弄じたまふやうなり。かやうのことにてぞ、うはべはいとよき御仲の、昔よりさすがに隙ありける。まいて、中将をいたくはしたなめて、わびさせたまふつらさを思しあまりて、「なまねたしとも、漏り聞きたまへかし」と思すなりけり。

かく聞きたまふにつけても、

「対の姫君を見せたらむ時、またあなづらはしからぬ方にもてなされなむはや。いとものきらきらしく、かひあるところつきたまへる人にて、善し悪しきけぢめも、けぎやかにもてはやし、またもて消ち軽むることも、人に異なる大臣なれば、いかにものしと思ふらむ。おぼえぬさまにて、この君をさし出でたらむに、え軽くは思さじ。いとぎびしくもてなしてむ」など思す。

夕つけゆく風、いと涼しくて、帰り憂く若き人びとは思ひたり。

いと暑き日、東の釣殿に出でたまひて涼みたまふ。中將の君もさぶらひたまふ。親しき殿上人あまたさぶらひて、西川よりたてまつれる鮎、近き川のいしぶしやうのもの、御前にて調べて参らす。例の大殿の君達、中將の御あたり尋ねて参りたまへり。

「さうざうしくねぶたかりつる、折よくものしたまへるかな」

とて、大御酒参り、氷水召して、水飯など、とりどりにさうどきつつ食ふ。風はいとよく吹けども、日のどかに曇りなき空の、西日になるほど、蝉の声などもいと苦しげに聞こゆれば、

「水の上無徳なる今日の暑かはしきかな。無礼の罪は許されなむや」
とて、寄り臥したまへり。

「いとかかるころは、遊びなどもすさまじく、さすがに、暮らしがたきこそ苦しけれ。宮仕へする若き人びと堪へがたからむな。帯も解かぬほどよ。ここにてだにうち乱れ、このころ世にあらむことの、すこし珍しく、ねぶたさ覚めぬべからむ、語りて聞かせたまへ。何となく翁びたる心地して、世間のこともおぼつかなしや」

などのたまへど、珍しきこととて、うち出で聞こえむ物語もおぼえねば、かしまりたるやうにて、皆いと涼しき高欄に、背中押しつつさぶらひたまふ。

「いかで聞きしことぞや、大臣のほか腹の娘尋ね出でて、かしづきたまふなるとまねぶ人ありしかば、まことにや」

と、弁少將に問ひたまへば、

「ことごとしく、さまで言ひなすべきことにもはげらざりけるを。この春のころほひ、夢語りしたまひけるを、ほの聞き伝へはべりける女の、『われなむかこつべきことある』と、名のり出ではべりけるを、中將の朝臣なむ聞きつけて、『まことにさやうに触ればひぬべきしるしやある』と、尋ねとぶらひはべりけ

常 夏

常

夏

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文
(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

内の大臣は、御子ども腹々いと多かるに、その生ひ出でたるおぼえ、人柄に従ひつつ、心にまかせたるやうなるおぼえ、御勢にて、皆なし立てたまふ。女はあまたもおはせぬを、女御も、かく思ししことのとどこほりたまひ、姫君も、かくこと違ふさまにてものしたまへば、いと口惜しと思す。

かの撫子を忘れたまはず、ものの折にも語り出でたまひしことなれば、

「いかになりにけむ。ものはかなかりける親の心に引かれて、らうたげなりし人を、行方知らずなりにたること。すべて女子といはむものなむ、いかにもいかにも目放つまじかりける。さかしらにわが子と言ひて、あやしきさまにてはふれやすらむ。とてもかくても、聞こえ出で来ば」

と、あはれに思しわたる。君達にも、

「もし、さやうなる名のりする人あらば、耳とどめよ。心のすさびにまかせて、さるまじきことも多かりしなかに、これは、いとしか、おしなべての際にも思はざりし人の、はかなきもの倦むじをして、かく少なかりけるもののくさはひ一つを、失ひたることの口惜しきこと」

と、常にのたまひ出づ。中ごろなどはさしもあらず、うち忘れたまひけるを、人の、さまさまにつけて、女子かしづきたまへるたぐひどもに、わが思ほすにしもかなはぬが、いと心憂く、本意なく思すなりけり。

夢見たまひて、いとよく合はする者召して、合はせたまひけるに、

「もし、年ごろ御心に知られたまはぬ御子を、人のものになして、聞こしめし出づることや」

と聞こえたりければ、

「女子の人の子になることは、をさをさなしかし。いかなることにかあらむ」
など、このころぞ、思しのたまふべかめる。

中將の君を、こなたには氣遠くもてなしきこえたまへれど、姫君の御方には、さしもさし放ちきこえたまはずならはしたまふ。

「わが世のほどは、とてもかくても同じことなれど、なからむ世を思ひやるに、なほ見つき、思ひしみぬることどもこそ、取り分きてはおぼゆべけれ」

とて、南面の御簾の内は許したまへり。台盤所、女房のなかは許したまはず。あまたおはせぬ御仲らひにて、いとやむごとなくかしづききこえたまへり。

おほかたの心もちみなども、いとものものしく、まめやかにものしたまふ君なれば、うしろやすく思し譲れり。まだいはけたる御雛遊びなどのけはひの見ゆれば、かの人の、もろともに遊びて過ぐしし年月の、まづ思ひ出でらるれば、雛の殿の宮仕へ、いとよくしたまひて、折々にうちしほたれたまひけり。

さもありぬべきあたりには、はかなしごとものたまひ触るるはあまたあれど、頼みかくべくもしなさず。さる方になどかは見ざらむと、心とまりぬべきをも、強ひてなほざりごとにしなして、なほ「かの、緑の袖を見え直してしがな」と思ふ心のみぞ、やむごとなき節にはとまりける。

あながちになどかかづらひまどはば、倒ふるる方に許したまひもしつべかれど、「つらしと思ひし折々、いかで人にもことわらせたてまつらむ」と思ひおきし、忘れがたくて、正身ばかりには、おろかならぬあはれを尽くし見せて、おほかたには焦られ思へらず。

兄の君達なども、なまねたしなどのみ思ふこと多かり。対の姫君の御ありさまを、右中將は、いと深く思ひしみて、言ひ寄るたよりもいとはかなければ、この君をぞかこち寄りけれど、

「人の上にては、もどかしきわぎなりけり」

と、つれなく応へてぞものしたまひける。昔の父大臣たちの御仲らひに似たり。

りけりかし。

「姫君の御前にて、この世馴れたる物語など、な読み聞かせたまひそ。みそか心つきたるものの娘などは、をかしとにはあらねど、かかること世にはありけりと、見馴れたまはむぞ、ゆゆしきや」

とのたまふも、こよなしと、対の御方聞きたまはば、心置きたまひつべくなむ。

上、

「心浅げなる人まねどもは、見るにもかたはらいたくこそ。『宇津保』の藤原君の女こそ、いと重りかにはかばかしき人にて、過ちなかめれど、すぐよかに言ひ出でたることもしわざも、女しきところなかめるぞ、一樣なめる」

とのたまへば、

「うつつの人も、さぞあるべかめる。人びとしく立てたる趣きことにて、よきほどにかまへぬや。よしなからぬ親の、心とどめて生ほしたてたる人の、子めかしきを生けるしるしにて、後れたること多かるは、何わざしてかしづきしぞと、親のしわざさへ思ひやらるこそ、いとほしけれ。

げに、さいへど、その人のけはひよと見えたるは、かひあり、おもだたしかし。言葉の限りまばゆくほめおきたるに、し出でたるわざ、言ひ出でたることのなかに、げにと見え聞こゆることなき、いと見劣りするわざなり。

すべて、善からぬ人に、いかで人ほめさせじ」

など、ただ「この姫君の、点つかれたまふまじく」と、よろづに思しのたまふ。

継母の腹ぎたなき昔物語も多かるを、このころ、「心見えに心づきなし」と思せば、いみじく選りつつなむ、書きとのへさせ、絵などにも描かせたまひける。

みじく気遠きものの姫君も、御心のやうにつれなく、そらおぼめきたるは世にあらじな。いぎ、たぐひなき物語にして、世に伝へさせむ」

と、さし寄りて聞こえたまへば、顔を引き入れて、

「さらずとも、かく珍かなることは、世語りにこそはなりはべりぬべかめれ」
とのたまへば、

「珍かにやおぼえたまふ。げにこそ、またなき心地すれ」

とて、寄りゐたまへるさま、いとあざれたり。

「思ひあまり昔の跡を訪ぬれど

親に背ける子ぞたぐひなき

不孝なるは、仏の道にもいみじくこそ言ひたれ」

とのたまへど、顔ももたげたまはねば、御髪をかきやりつつ、いみじく怨みたまへば、からうして、

「古き跡を訪ぬれどげになかりけり

この世にかかる親の心は」

と聞こえたまふも、心恥づかしければ、いといたくも乱れたまはず。

かくして、いかなるべき御ありさまならむ。

紫の上も、姫君の御あつらへにことつけて、物語は捨てがたく思したり。『くまのの物語』の絵にてあるを、

「いとよく描きたる絵かな」

とて御覧ず。小さき女君の、何心もなくて昼寝したまへるところを、昔のありさま思し出でて、女君は見たまふ。

「かかる童どちだに、いかにされたりけり。まろこそ、なほ例にしつべく、心のどけさは人に似ざりけれ」

と聞こえ出でたまへり。げに、たぐひ多からぬことどもは、好み集めたまへ

とのたまへば、

「げに、偽り馴れたる人や、さまざまにさも汲みはべらむ。ただいと真のこ
ととこそ思うたまへられけれ」

とて、硯をおしやりたまへば、

「こちなくも聞こえ落としてけるかな。神代より世にあることを、記しおき
けるななり。『日本紀』などは、ただかたそぼぞかし。これらにこそ道々しく詳
しきことはあらめ」

とて、笑ひたまふ。

「その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなけれ、善きも悪しき
も、世に経る人のありさまの、見るにも飽かず、聞くにもあまることを、後の
世にも言ひ伝へさせまほしき節々を、心に籠めがたくて、言ひおき始めたるな
り。善きさまに言ふとては、善きことの限り選り出でて、人に従はむとては、
また悪しきさまの珍しきことを取り集めたる、皆かたがたにつけたる、この世
の他のことならずかし。

人の朝廷の才、作りやう変はる、同じ大和の国のことなれば、昔今の変は
るべし、深きこと浅きことのけぢめこそあらめ、ひたぶるに虚言と言ひ果てむ
も、ことの心違ひてなむありける。

仏の、いとうるはしき心にて説きおきたまへる御法も、方便といふことあり
て、悟りなきものは、ここかしこ違ふ疑ひを置きつべくなむ。『方等経』の中
多かれど、言ひもてゆけば、ひとつ旨にありて、菩提と煩惱との隔たりなむ、
この、人の善き悪しきばかりのことは変はりける。

よく言へば、すべて何ごとも空しからずなりぬや」

と、物語をいとわざとのことにのたまひなしつ。

「さて、かかる古言の中に、まろがやうに実法なる痴者の物語はありや。い

語などのすきびにて、明かし暮らしたまふ。明石の御方は、さやうのことをもよしありてしなしたまひて、姫君の御方にたてまつりたまふ。

西の対には、ましてめづらしくおぼえたまふことの筋なれば、明け暮れ書き読みとなみおはす。つきなからぬ若人あまたあり。さまざまにめづらかなる人の上などを、真にや偽りにや、言ひ集めたるなかにも、「わがありさまのやうなるはなかりけり」と見たまふ。

『住吉』の姫君の、さしあたりけむ折はさるものにて、今の世のおぼえもなほ心ことなめるに、主計頭が、ほとほとしかりけむなどぞ、かの監がゆゆしさを思しなずらへたまふ。

殿も、こなたかなたにかかるものどもの散りつつ、御目に離れねば、

「あな、むつかし。女こそ、ものうるさがらず、人に欺かれむと生まれたるものなれ。ここらのなかに、真はいと少なからむを、かつ知る知る、かかるすずろごとに心移し、はかられたまひて、暑かはしき五月雨の、髪の乱るるも知らで、書きたまふよ」

とて、笑ひたまふものから、また、

「かかる世の古言ならでは、げに、何をか紛るることなきつれづれを慰めまし。さて、この偽りどものなかに、げにさもあらむとあはれを見せ、つきづきしく続けたる、はた、はかなしごとと知りながら、いたづらに心動き、らうたげなる姫君のもの思へる見るに、かた心つかし。

また、いとあるまじきことかなと見る見る、おどろおどろしくとりなしけるが目おどろきて、静かにまた聞きたびぞ、憎けれど、ふとをかしき節、あらはなるなどもあるべし。

このころ、幼き人の女房などに時々読まするを立ち聞けば、ものよく言ふものの世にあるべきかな。虚言をよくしなれたる口つきよりぞ言ひ出だすらむとおぼゆれど、さしもあらじや」

人の上を難つけ、落としめぎまのこと言ふ人をば、いとほしきものにしたまへば、

「右大将などをだに、心にききにすめるを、何ばかりかはある。近きよすがにて見むは、飽かぬことにやあらむ」

と、見たまへど、言に表はしてもなたまはず。

今はただおほかたの御睦びにて、御座なども異々にて大殿籠もる。「などてかく離れそめしぞ」と、殿は苦しがりたまふ。おほかた、何やかやともそばみきこえたまはで、年ごろかく折ふしにつけたる御遊びどもを、人伝てに見聞きたまひけるに、今日めづらしかりつることばかりをぞ、この町のおぼえきらきらしと思したる。

「その駒もすさめぬ草と名に立てる

汀の菖蒲今日や引きつる」

とおほどかに聞こえたまふ。何ばかりのことにもあらねど、あはれと思したり。

「鴉鳥に影をならぶる若駒は

いつか菖蒲に引き別るべき」

あいだちなき御ことどもなりや。

「朝夕の隔てあるやうなれど、かくて見たてまつるは、心やすくこそあれ」
戯れごとなれど、のどやかにおはする人ざまなれば、静まりて聞こえなしたまふ。

床をば譲りきこえたまひて、御几帳引き隔てて大殿籠もる。気近くなどあらむ筋をば、いと似げなかるべき筋に、思ひ離れ果てきこえたまへれば、あながちにも聞こえたまはず。

長雨例の年よりもいたくして、晴るる方なくつれづれなれば、御方々、絵物

る唐衣、今日のよそひどもなり。

こなたのは、濃き一襲に、撫子襲の汗衫などおほどかにて、おのおの挑み顔なるもてなし、見所あり。

若やかなる殿上人などは、目をたててけしきばむ。未の時に、馬場の御殿に出でたまひて、げに親王たちおはし集ひたり。手結ひの公事にはさま変りて、次將たちかき連れ参りて、さまことに今めかしく遊び暮らしたまふ。

女は、何のあやめも知らぬことなれど、舎人どもさへ艶なる装束を尽くして、身を投げたる手まどはしなどを見るぞ、をかしかりける。

南の町も通して、はるばるとあれば、あなたにもかやうの若き人どもは見けり。「打毬楽」「落蹲」など遊びて、勝ち負けの乱声どものしるも、夜に入り果てて、何事も見えずなり果てぬ。舎人どもの禄、品々賜はる。いたく更けて、人びと皆あかれたまひぬ。

大臣は、こなたに大殿籠もりぬ。物語など聞こえたまひて、

「兵部卿宮の、人よりはこよなくものしたまふかな。容貌などはすぐれねど、用意けしきなど、よしあり、愛敬づきたる君なり。忍びて見たまひつや。よしといへど、なほこそあれ」

とのたまふ。

「御弟にこそものしたまへど、ねびまさりてぞ見えたまひける。年ごろ、かく折過ぐさず渡り、睦びきこえたまふと聞きはべれど、昔の内わたりにてほの見たてまつりしのち、おぼつかなしかし。いとよくこそ、容貌などねびまさりたまひにけれ。帥の親王よくものしたまふめれど、けはひ劣りて、大君けしきにぞものしたまひける」

とのたまへば、「ふと見知りたまひにけり」と思せど、ほほ笑みて、なほあるを、良しとも悪しともかけたまはず。

かしおきて、出でたまひぬ。これかれも、「なほ」と聞こゆれば、御心にもいかが思しけむ、

「あらはれていとど浅くも見ゆるかな

菖蒲もわかず泣かれける根の

若々しく」

とばかり、ほのかにぞあめる。「手を今すこしゆるづけたらば」と、宮は好ましき御心に、いささか飽かぬことと見たまひけむかし。

楽玉など、えならぬさまにて、所々より多かり。思し沈みつる年ごろの名残なき御ありさまにて、心ゆるびたまふことも多かるに、「同じくは、人の疵つくばかりのことなくてもやみにしがな」と、いかが思さざらむ。

殿は、東の御方にもさしのぞきたまひて、

「中将の、今日の司の手結ひのついでに、男ども引き連れてものすべきさまに言ひしを、さる心したまへ。まだ明きほどに來なむものぞ。あやしく、ここにはわざとならず忍ぶることをも、この親王たちの聞きつけて、訪らひものしたまへば、おのづからことごとしくなむあるを、用意したまへ」
など聞こえたまふ。

馬場の御殿は、こなたの廊より見通すほど遠からず。

「若き人びと、渡殿の戸開けて物見よや。左の司に、いとよしある官人多かるころなり。少々の殿上人に劣るまじ」

とのたまへば、物見むことをいとをかしと思へり。

対の御方よりも、童女など、物見に渡り来て、廊の戸口に御簾青やかに掛けわたして、今めきたる裾濃の御几帳ども立てわたし、童、下仕へなどさまよふ。

菖蒲襲の相、二藍の羅の汗衫着たる童女ぞ、西の対のなめる。

好ましく馴れたる限り四人、下仕へは、棟の裾濃の裳、撫子の若葉の色した

さまにて、かやうなる御心ばへならましかば、などかはいと似げなくもあらまし。人に似ぬありさまこそ、つひに世語りにやならむ」

と、起き臥し思しなやむ。さるは、「まことにゆかしげなきさまにはもてなし果てじ」と、大臣は思しけり。なほ、さる御心癖なれば、中宮なども、いとうるはしくや思ひきこえたまへる、ことに触れつつ、ただならず聞こえ動かしなごしたまへど、やむごとなき方の、およびなくわづらはしきに、おり立ちあらはし聞こえ寄りたまはぬを、この君は、人の御さまも、気近く今めきたるに、おのづから思ひ忍びがたきに、折々、人見たてまつりつけば疑ひ負ひぬべき御もてなしなどは、うち交じるわざなれど、ありがたく思し返しつつ、さすがなる御仲なりけり。

五日には、馬場の御殿に出でたまひけるついでに、渡りたまへり。

「いかにぞや。宮は夜や更かしたまひし。いたくも馴らしきこえじ。わづらはしき気添ひたまへる人ぞや。人の心破り、ものの過ちすまじき人は、かたうこそありけれ」

など、活けみ殺しみ戒めおはする御さま、尽きせず若くきよげに見えたまふ。艶も色もこぼるばかりなる御衣に、直衣はかなく重なれるあはひも、いづこに加はれるきよらにかあらむ、この世の人の染め出だしたると見え、常の色も変へぬ文目も、今日はめづらかに、をかしくおぼゆる薫りなども、「思ふことなくは、をかしかりぬべき御ありさまかな」と姫君思す。

宮より御文あり。白き薄様にて、御手はいとよしありて書きなしたまへり。見るほどこそをかしけれ、まねび出づれば、ことなることなしや。

「今日さへや引く人もなき水隠れに

生ふる菖蒲の根のみ泣かれむ」

例にも引き出でつべき根に結びつけたまへれば、「今日の御返り」などそその

宮は、人のおはするほど、さばかりと推し量りたまふが、すこし気近きけはひするに、御心ときめきせられたまひて、えならぬ羅の帷子の隙より見入れたまへるに、一間ばかり隔てたる見わたしに、かくおぼえなき光のうちほのめくを、をかしと見たまふ。

ほどもなく紛らはして隠しつ。されどほのかなる光、艶なることをつまにもしつべく見ゆ。ほのかなれど、そびやかに臥したまへりつる様体のをかしかりつるを、飽かず思して、げに、このこと御心にしみにけり。

「鳴く声も聞こえぬ虫の思ひだに

人の消つには消ゆるものかは

思ひ知りたまひぬや」

と聞こえたまふ。かやうの御返しを、思ひまはさむもねぢけたれば、疾きばかりをぞ。

「声はせで身をのみ焦がす螢こそ

言ふよりまさる思ひなるらめ」

など、はかなく聞こえなして、御みづからは引き入りたまひにければ、いとほるかにもてなしたまふ愁はしきを、いみじく怨みきこえたまふ。

好き好きしきやうなれば、ゐたまひも明かさで、軒の雫も苦しさに、濡れ濡れ夜深く出でたまひぬ。ほととぎすなどかならずうち鳴きけむかし。うるさければこそ聞きも止めぬ。

「御けはひなどのなまめかしきは、いとよく大臣の君に似たてまつりたまへり」と、人びともめできこえけり。よべ、いと女親だちてつくろひたまひし御けはひを、うちうちは知らで、「あはれにかたじけなし」と皆言ふ。

姫君は、かくさすがなる御けしきを、

「わがみづからの憂さぞかし。親などに知られたてまつり、世の人めきたる

ほの聞きおはす。

姫君は、東面に引き入りて大殿籠もりにけるを、宰相の君の御消息伝へに、
みざり入りたるにつけて、

「いとあまり暑かはしき御もてなしなり。よろづのこと、さまに従ひてこそ
めやすけれ。ひたぶるに若びたまふべきさまにもあらず。この宮たちをさへ、
さし放ちたる人伝てに聞こえたまふまじきことなりかし。御声こそ惜しみたま
ふとも、すこし気近くだにこそ」

など、諫めきこえたまへど、いとわりなくて、ことづけてもはひ入りたまひ
ぬべき御心ばへなれば、とぎまかうぎまにわびしければ、すべり出でて、母屋
の際なる御几帳のもとに、かたはら臥したまへる。

何くれと言長き御応へ聞こえたまふこともなく、思しやすらふに、寄りたま
ひて、御几帳の帷子を一重うちかけたまふにあはせて、さと光るもの、紙燭を
さし出でたるかとあきれたり。

螢を薄きかたに、この夕つ方いと多く包みおきて、光をつつみ隠したまへり
けるを、さりげなく、とかくひきつくろふやうにて、にはかにかく掲焉に光れ
るに、あさましくて、扇をさし隠したまへるかたはら目、いとをかしげなり。

「おどろかしき光見えば、宮も覗きたまひなむ。わがむすめと思すばかりの
おぼえに、かくまでのたまふなめり。人ざま容貌など、いとかくしも具したら
むとは、え推し量りたまはじ。いとよく好きたまひぬべき心、惑はさむ」

と、かまへありきたまふなりけり。まことのわが姫君をば、かくしも、もて
騒ぎたまはじ、うたてある御心なりけり。

こと方より、やをらすべり出でて、渡りたまひぬ。

り心地悪し」とて、聞こえたまはず。

人びとも、ことにやむごとく寄せ重きなども、をさをさなし。ただ、母君の御叔父なりける、宰相ばかりの人の娘にて、心ばせなど口惜しからぬが、世に衰へ残りたるを、尋ねとりたまへる、宰相の君とて、手などもよろしく書き、おほかたも大人びたる人なれば、さるべき折々の御返りなど書かせたまへば、召し出でて、言葉などのたまひて書かせたまふ。

ものなどのたまふさまを、ゆかしと思すなるべし。

正身は、かくうたてあるもの嘆かしきの後は、この宮などは、あはれげに聞こえたまふ時は、すこし見入れたまふ時もありけり。何かと思ふにはあらず、「かく心憂き御けしき見ぬわざもがな」と、さすがにされたところつきて思しけり。

殿は、あいなくおのれ心懸想して、宮を待ちきこえたまふも知りたまはで、よろしき御返りのあるをめづらしがりて、いと忍びやかにおはしましたり。

妻戸の間に御茵参らせて、御几帳ばかりを隔てにて、近きほどなり。

いといたう心して、空薫物心にくきほどに匂はして、つくろひおはするさま、親にはあらで、むつかしきさかしら人の、さすがにあはれに見えたまふ。宰相の君なども、人の御いらへ聞こえむこともおぼえず、恥づかしくてゐたるを、「埋もれたり」と、ひきつみたまへば、いとわりなし。

夕闇過ぎて、おぼつかなき空のけしきの曇らはしきに、うちしめりたる宮の御けはひも、いと艶なり。うちよりほのめく追風も、いとどしき御匂ひのたち添ひたれば、いと深く薫り満ちて、かねて思ししよりもをかしき御けはひを、心とどめたまひけり。

うち出でて、思ふ心のほどをのたまひ続けたる言の葉、おとなおとなしく、ひたぶるに好き好きしくはあらで、いとけはひことなり。大臣、いとをかしと、

今はかく重々しきほどに、よろづのどやかに思ししづめたる御ありさまなれば、頼みきこえさせたまへる人びと、さまざまにつけて、皆思ふさまに定まり、ただよはしからで、あらまほしくて過ぐしたまふ。

対の姫君こそ、いとほしく、思ひのほかなる思ひ添ひて、いかにせむと思し乱るめれ。かの監が憂かりしさまには、なずらふべきけはひならねど、かかる筋に、かけても人の思ひ寄りきこゆべきことならねば、心ひとつに思しつつ、「様ことに疎まし」と思ひきこえたまふ。

何ごとをも思し知りにたる御齡なれば、とぎまかうぎまに思し集めつつ、母君のおはせずなりにける口惜しさも、またとりかへし惜しく悲しくおぼゆ。

大臣も、うち出でそめたまひては、なかなか苦しく思せど、人目を憚りたまひつつ、はかなきことをもえ聞こえたまはず、苦しくも思さるるままに、しげく渡りたまひつつ、御前の人遠く、のどやかなる折は、ただならずけしきばみきこえたまふごとに、胸つぶれつつ、けぎやかにはしたなく聞こゆべきにはあらねば、ただ見知らぬさまにもてなしきこえたまふ。

人さまのわららかに、気近くものしたまへば、いたくまめだち、心したまへど、なほをかしく愛敬づきたるけはひのみ見えたまへり。

兵部卿宮などは、まめやかにせめきこえたまふ。御労のほどはいくばくならぬに、さみだれになりぬる愁へをしたまひて、

「すこし気近きほどをだに許したまはば、思ふことをも、片端はるけてしかな」

と、聞こえたまへるを、殿御覧じて、

「なにかは。この君達の好きたまはむは、見所ありなむかし。もて離れてな聞こえたまひそ。御返り、時々聞こえたまへ」

とて、教へて書かせたてまつりたまへど、いとどうたておぼえたまへば、「乱

蚩

蚩

ち恨みきこえまごひありくめり。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuyra/index.html>)

またの朝、御文とくあり。悩ましがりて臥したまへれど、人びと御硯など参りて、「御返りとく」と聞こゆれば、しぶしぶに見たまふ。白き紙の、うはべはおいらかに、すすくしきに、いとめでたう書いたまへり。

「たぐひなかりし御けしきこそ、つらきしも忘れがたう。いかに人見たてまつりけむ。

うちとけて寝も見ぬものを若草の

ことあり顔にむすぼほるらむ

幼くこそものしたまひけれ」

と、さすがに親がりたる御言葉も、いと憎しと見たまひて、御返り事聞こえざらむも、人目あやしければ、ふくよかなる陸奥紙に、ただ、

「うけたまはりぬ。乱り心地の悪しうはべれば、聞こえさせぬ」

とのみあるに、「かやうのけしきは、さすがにすぐよかなり」とほほ笑みて、恨みどころある心地したまふ、うたてある心かな。

色に出でたまひてのちは、「太田の松の」と思はせたることなく、むつかしう聞こえたまふこと多かれば、いとど所狭き心地して、おきどころなきもの思ひつきて、いと悩ましうさへしたまふ。

かくて、ことの心知る人は少なうて、疎きも親しきも、むげの親さまに思ひきこえたるを、

「かうやうのけしきの漏り出でば、いみじう人笑はれに、憂き名にもあるべきかな。父大臣などの尋ね知りたまふにても、まめまめしき御心ばへにもあらざらむものから、ましていとあはつけう、待ち聞き思さむこと」

と、よろづにやすげなう思し乱る。

宮、大将などは、殿の御けしき、もて離れぬさまに伝へ聞きたまうて、いとねむごろに聞こえたまふ。この岩漏る中將も、大臣の御許しを見てこそ、かたよりにほの聞きて、まことの筋をば知らず、ただひとへにうれしくて、おりた

けはひは、ただ昔の心地して、いみじうあはれなり。

わが御心ながらも、「ゆくりかにはあはつけきこと」と思し知らるれば、いとよく思し返しつつ、人もあやしと思ふべければ、いたう夜も更かきで出でたまひぬ。

「思ひ疎みたまはば、いと心憂くこそあるべけれ。よその人は、かうほればれしうはあらぬものぞよ。限りなく、そこひ知らぬ心ざしなれば、人の咎むべきさまにはよもあらじ。ただ昔恋しき慰めに、はかなきことをも聞こえむ。同じ心に応へなどしたまへ」

と、いとこまかに聞こえたまへど、我にもあらぬさまして、いといと憂しと思いたれば、

「いとさばかりには見たてまつらぬ御心ばへを、いとこよなくも憎みたまふべかめるかな」

と嘆きたまひて、

「ゆめ、けしきなくてを」

とて、出でたまひぬ。

女君も、御年こそ過ぐしたまひにたるほどなれ、世の中を知りたまはぬなかに、すこしうち世馴れたる人のありさまをだに見知りたまはねば、これより気近きさまにも思し寄らず、「思ひの外にもありける世かな」と、嘆かしきに、いとけしきも悪しければ、人びと、御心地悩ましげに見えたまふと、もて悩みきこゆ。

「殿の御けしきの、こまやかに、かたじけなくもおはしますかな。まことの御親と聞こゆとも、さらにかばかり思し寄らぬことなくは、もてなしきこえたまはじ」

など、兵部なども、忍びて聞こゆるにつけて、いとど思はずに、心づきなき御心のありさまを、疎ましう思ひ果てたまふにも、身ぞ心憂かりける。

なかなるもの思ひ添ふ心地したまて、今日はすこし思ふこと聞こえ知らせたまひける。

女は、心憂く、いかにせむとおぼえて、わななかるけしきもしるけれど、「何か、かく疎ましとは思いたる。いとよくも隠して、人に咎めらるべくもあらぬ心のほどぞよ。さりげなくてをもて隠したまへ。浅くも思ひきこえさせぬ心ざしに、また添ふべければ、世にたぐひあるまじき心地なむするを、この訪づれきこゆる人びとには、思し落とすべくやはある。いとかう深き心ある人は、世にありがたかるべきわざなれば、うしろめたくのみこそ」とのたまふ。いとさかしらなる御親心なりかし。

雨はやみて、風の竹に生るほど、はなやかにさし出でたる月影、をかしき夜のさまもしめやかなるに、人びとは、こまやかなる御物語にかしこまりおきて、気近くもさぶらはず。

常に見たてまつりたまふ御仲なれど、かくよき折しもありがたければ、言に出でたまへるついで、御ひたぶる心にや、なつかしいほどなる御衣どものけはひは、いとよう紛らはしすべしたまひて、近やかに臥したまへば、いと心憂く、人の思はむこともめづらかに、いみじうおぼゆ。

「まことの親の御あたりならましかば、おろかには見放ちたまふとも、かかさまの憂きことはあらましや」と悲しきに、つつむとすれどこぼれ出でつつ、いと心苦しき御けしきなれば、

「かう思すこそつらけれ。もて離れ知らぬ人だに、世のことわりにて、皆許すわざなめるを、かく年経ぬる睦ましさに、かばかり見えたてまつるや、何の疎ましかるべきぞ。これよりあながちなる心は、よも見せたてまつらじ。おぼろけに忍ぶるにあまるほどを、慰むるぞや」

とて、あはれげになつかしう聞こえたまふこと多かり。まして、かやうなる

雨のうち降りたる名残の、いとものしめやかなる夕つ方、御前の若楓、柏木などの、青やかに茂りあひたるが、何となく心地よげなる空を見出したまひて、

「和してまた清し」

とうち誦じたまうて、まづ、この姫君の御さまの、匂ひやかげさを思し出でられて、例の、忍びやかに渡りたまへり。

手習などして、うちとけたまへりけるを、起き上がりたまひて、恥ぢらひたまへる顔の色あひ、いとをかし。なごやかなるけはひの、ふと昔思し出でらるるにも、忍びがたくて、

「見そめたてまつりしは、いとかうしもおぼえたまはずと思ひしを、あやしう、ただそれかと思ひまがへらるる折々こそあれ。あはれなるわざなりけり。中将の、さらに昔さまの匂ひにも見えぬならひに、さしも似ぬものと思ふに、かかる人もものしたまうけるよ」

とて、涙ぐみたまへり。箱の蓋なる御果物の中に、橘のあるをまさぐりて、

「橘の薫りし袖によそふれば

変はれる身とも思ほえぬかな

世ととももの心にかけて忘れがたきに、慰むことなく過ぎつる年ごろを、かくて見たてまつるは、夢にやとのみ思ひなすを、なほえこそ忍ぶまじけれ。思し疎むなよ」

とて、御手をとらへたまへれば、女、かやうにもならひたまはざりつるを、いとうたておぼゆれど、おほどかなるさまにてもものしたまふ。

「袖の香をよそふるからに橘の

身さへはかなくなりもこそすれ」

むつかしと思ひてうつぶしたまへるさま、いみじうなつかしう、手つきのつづつと肥えたまへる、身なり、肌つきのこまやかにうつくしげなるに、なか

や」

と、昔物語を見たまふにも、やうやう人のありさま、世の中のあるやうを見知りたまへば、いとつつましく、心と知られたてまつらむことはかたかるべう、思す。

殿は、いとどらうたしと思ひきこえたまふ。上にも語り申したまふ。

「あやしうなつかしき人のありさまにもあるかな。かのいにしへのは、あまりはるけどころなくぞありし。この君は、もののありさまも見知りぬべく、気近き心ざま添ひて、うしろめたからずこそ見ゆれ」

など、ほめたまふ。ただにしも思すまじき御心ざまを見知りたまへれば、思し寄りて、

「ものの心得つべくはものしたまふめるを、うらなくしもうちとけ、頼みきこえたまふらむこそ、心苦しけれ」

とのたまへば、

「など、頼もしげなくやはあるべき」

と聞こえたまへば、

「いでや、われにても、また忍びがたう、もの思はしき折々ありし御心ざまの、思ひ出でらるるふしぶしなくやは」

と、ほほ笑みて聞こえたまへば、「あな、心と」とおぼいて、

「うたても思し寄るかな。いと見知らずしもあらじ」

とて、わづらはしければ、のたまひさして、心のうちに、「人のかう推し量りたまふにも、いかがはあべからむ」と思し乱れ、かつは、ひがひがしう、けしからぬ我が心のほども、思ひ知られたまうけり。

心にかかれるままに、しばしば渡りたまひつつ見たてまつりたまふ。

御心に飽かざらむことは、心苦しく」

など、いとまめやかにて聞こえたまへば、苦しうて、御応へ聞こえむともおぼえたまはず。いと若々しきもうたておぼえて、

「何ごとも思ひ知りはべらざりけるほどより、親などは見ぬものにならひはべりて、ともかくも思うたまへられずなむ」

と、聞こえたまふさまのいとおいらかなれば、げにと思いて、

「さらば世のたとひの、後の親をそれと思いて、おろかならぬ心ぎしのほども、見あらはし果てたまひてむや」

など、うち語らひたまふ。思すさまのことは、まばゆければ、えうち出でたまはず。けしきある言葉は時々混ぜたまへど、見知らぬさまなれば、すずろにうち嘆かれて渡りたまふ。

御前近き呉竹の、いと若やかに生ひたちて、うちなびくさまのなつかしきに、立ちとまりたまうて、

「ませのうちに根深く植ゑし竹の子の

おのが世々にや生ひわかるべき

思へば恨めしかべいことぞかし」

と、御簾を引き上げて聞こえたまへば、ゐざり出でて、

「今さらにいかならむ世か若竹の

生ひ始めけむ根をば尋ねむ

なかなかにこそはべらめ」

と聞こえたまふを、いとあはれと思しけり。さるは、心のうちにはさも思はずかし。いかならむ折聞こえ出でむとすらむと、心もとなくあはれなれど、この大臣の御心ばへのいとありがたきを、

「親と聞こゆとも、もとより見馴れたまはぬは、えかうしもこまやかならず

見入るる人もはべらざりしにこそ」

と聞こゆれば、

「いとらうたきことかな。下臈なりとも、かの主たちをば、いかがいときははしたなめむ。公卿といへど、この人のおぼえに、かならずしも並ぶまじきこそ多かれ。さるなかにも、いとしづまりたる人なり。おのづから思ひあはする世もこそあれ。掲焉にはあらでこそ、言ひ紛らはさめ。見所ある文書きかな」
など、とみにもうち置きたまはず。

「かう何やかやと聞こゆるをも、思すところやあらむと、ややましきを、かの大臣に知られたてまつりたまはむことも、まだ若々しう何となきほどに、こら年経たまへる御仲にさし出でたまはむことは、いかがと思ひめぐらしはべる。なほ世の人のあめる方に定まりてこそは、人びとしう、さるべきついでものしたまはめと思ふを。

宮は、独りものしたまふやうなれど、人柄いといたうあだめいて、通ひたまふ所あまた聞こえ、召人とか、憎げなる名のりする人どもなむ、数あまた聞こゆる。

さやうならむことは、憎げなうて見直いたまはむ人は、いとよなだらかにもて消ちてむ。すこし心に癖ありては、人に飽かれぬべきことなむ、おのづから出で来ぬべきを、その御心づかひなむあべき。

大将は、年経たる人の、いたうねび過ぎたるを、厭ひがてにと求むなれど、それも人びとわづらはしがなるなり。さもあべいことなれば、さまさまになむ、人知れず思ひ定めかねはべる。

かうざまのことは、親などにも、さはやかに、わが思ふさまとて、語り出でがたきことなれど、さばかりの御齡にもあらず。今は、などか何ごとをも御心に分いたまはざらむ。まろを、昔さまになずらへて、母君と思ひないたまへ。

たまふべきにもあらず、またあまりもののほど知らぬやうならむも、御ありさまに違へり。

その際より下は、心ざしのおもむきに従ひて、あはれをも分きたまへ。労をも数へたまへ」

など聞こえたまへば、君はうち背きておはする、側目いとをかしげなり。撫子の細長に、このころの花の色なる御小桂、あはひ気近う今めきて、もてなしなども、さはいへど、田舎びたまへりし名残こそ、ただありに、おほどかなる方にのみは見えたまひけれ、人のありさまをも見知りたまふままに、いとさまよう、なよびかに、化粧なども、心してもてつけたまへれば、いとど飽かぬところなく、はなやかにうつくしげなり。他人と見なさむは、いと口惜しかべう思さる。

右近も、うち笑みつつ見たてまつりて、「親と聞こえむには、似げなう若くおはしますめり。さし並びたまへらむはしも、あはひめでたしかし」と、思ひおたり。

「さらに人の御消息などは、聞こえ伝ふことはべらず。先々も知らしめし御覧じたる三つ、四つは、引き返し、はしたなめきこえむもいかかとて、御文ばかり取り入れなどしはべるめれど、御返りは、さらに。聞こえさせたまふ折ばかりなむ。それをだに、苦しいことに思いたる」

と聞こゆ。

「さて、この若やかに結ばほれたるは誰がぞ。いといたう書いたるけしきかな」

と、ほほ笑みて御覧ずれば、

「かれは、執念うとどめてまかりにけるにこそ。内の大殿の中將の、このさぶらふみるこそぞ、もとより見知りたまへりける、伝へにてはべりける。また

たり。

右大将の、いとまめやかに、ことごとしきさましたる人の、「恋の山には孔子の倒ふれ」まねびつべきけしきに愁へたるも、さる方にをかしと、皆見比べたまふ中に、唐の縹の紙の、いとなつかしう、しみ深う匂へるを、いと細く小さく結びたるあり。

「これは、いかなれば、かく結ばほれたるにか」

とて、引き開けたまへり。手いとをかしうて、

「思ふとも君は知らじなわきかへり

岩漏る水に色し見えねば」

書きざま今めかしうそぼれたり。

「これはいかなるぞ」

と問ひきこえたまへど、はかばかしうも聞こえたまはず。

右近を召し出でて、

「かやうに訪づれきこえむ人をば、人選りして、応へなどはせさせよ。好き好きしうあざれがましき今やうの人の、便ないことし出でなどする、男の咎にしもあらぬことなり。

我にて思ひしにも、あな情けな、恨めしうもと、その折にこそ、無心なるにや、もしはめざましかるべき際は、けやけうなどもおぼえけれ、わざと深からで、花蝶につけたる便りごとは、心ねたうもてないたる、なかなか心立つやうにもあり。また、さて忘れぬるは、何の咎かはあらむ。

ものの便りばかりのなほざりごとに、口疾う心得たるも、さらでありぬべかりける、後の難とありぬべきわざなり。すべて、女のものつつみせず、心のまに、もののはれも知り顔づくり、をかしきことを見知らむなむ、その積もりあぢきなかるべきを、宮、大将は、おほなおほななほざりごとをうち出で

「父大臣にも知らせやしてまし」など、思し寄る折々もあり。

殿の中将は、すこし気近く、御簾のもとなどにも寄りて、御応へみづからなごするも、女はつつましく思せど、さるべきほどと人びとも知りきこえたれば、中將はすすくしく思ひも寄らず。

内の大殿の君たちは、この君に引かれて、よろづにけしきばみ、わびありくを、その方のあはれにはあらで、下に心苦しう、「まことの親にさも知られたてまつりにしがな」と、人知れぬ心にかけてたまへれど、さやうにも漏らしきこえたまはず、ひとへにうちとけ頼みきこえたまふ心むけなど、らうたげに若やかなり。似るとはなけれど、なほ母君のけはひにいとよくおぼえて、これはかどめいたるところぞ添ひたる。

更衣の今めかしう改まれるころほひ、空のけしきなどさへ、あやしうそこはかとなくをかしきを、のどやかにおはしませば、よろづの御遊びにて過ぐしたまふに、対の御方に、人びとの御文しげくなりゆくを、「思ひしこと」とをかしう思いて、ともすれば渡りたまひつつ御覧じ、さるべきには御返りそそのかしきこえたまひなどするを、うちとけず苦しいことに思いたり。

兵部卿宮の、ほどなく焦られがましきわびごとどもを書き集めたまへる御文を御覧じつけて、こまやかに笑ひたまふ。

「はやうより隔つることなう、あまたの親王たちの御中に、この君をなむ、かたみに取り分きて思ひしに、ただかやうの筋のことなむ、いみじう隔て思うたまひてやみにしを、世の末に、かく好きたまへる心ばへを見るが、をかしうもあはれにもおぼゆるかな。なほ、御返りなど聞こえたまへ。すこしもゆゑあらむ女の、かの親王よりほかに、また言の葉を交はすべき人こそ世におぼえね。いとけしきある人の御さまぞや」

と、若き人はめでたまひぬべく聞こえ知らせたまへど、つつましくのみ思い

と、花におれつつ聞こえあへり。鶯のうららかなる音に、「鳥の楽」はなやかに聞きわたされて、池の水鳥もそこはかとなくさへづりわたるに、「急」になり果つるほど、飽かずおもしろし。「蝶」は、ましてはかなきさまに飛び立ちて、山吹の籬のもとに、咲きこぼれたる花の蔭に舞ひ出づる。

宮の亮をはじめて、さるべき上人ども、禄取り続きで、童べに賜ふ。鳥には桜の細長、蝶には山吹襲賜はる。かねてしも取りあへたるやうなり。物の師どもは、白き一襲、腰差など、次ぎ次ぎに賜ふ。中将の君には、藤の細長添へて、女の装束かづけたまふ。御返り、

「きのふは音に泣きぬべくこそは。

胡蝶にも誘はれなまし心ありて

八重山吹を隔てざりせば」

とぞありける。すぐれたる御労どもに、かやうのことは堪へぬにやありけむ、思ふやうにこそ見えぬ御口つきどもなめれ。

まことや、かの見物の女房たち、宮のには、皆けしきある贈り物どもせさせたまうけり。さやうのこと、くはしければむつかし。

明け暮れにつけても、かやうのはかなき御遊びしげく、心をやりて過ぐしたまへば、さぶらふ人も、おのづからもの思ひなき心地してなむ、こなたかなたにも聞こえ交はしたまふ。

西の対の御方は、かの踏歌の折の御対面の後は、こなたにも聞こえ交はしたまふ。深き御心もちるや、浅くもいかにもあらむ、けしきいと労あり、なつかしき心ばへと見えて、人の心隔つべくものしたまはぬ人ざまなれば、いづ方にも皆心寄せきこえたまへり。

聞こえたまふいとあまたものしたまふ。されど、大臣、おぼろげに思し定むべくもあらず、わが御心にも、すくよかに親がり果つまじき御心や添ふらむ、

と切にとどめたまへば、え立ちあかれたまはで、今朝の御遊び、ましていと
おもしろし。

けふは、中宮の御読経の初めなりけり。やがてまかでたまはで、休み所とり
つつ、日の御よそひに替へたまふ人びとも多かり。障りあるは、まかでなども
したまふ。

午の時ばかりに、皆あなたに参りたまふ。大臣の君をはじめたてまつりて、
皆着きわたりたまふ。殿上人なども、残るなく参る。多くは、大臣の御勢ひに
もてなされたまひて、やむごとなく、いつくしき御ありさまなり。

春の上の御心ざしに、仏に花たてまつらせたまふ。鳥蝶に装束き分けたる童
べ八人、かたちなどことに整へさせたまひて、鳥には、銀の花瓶に桜をさし、
蝶は、金の瓶に山吹を、同じき花の房いかめしう、世になき匂ひを尽くさせた
まへり。

南の御前の山際より漕ぎ出でて、御前に出づるほど、風吹きて、瓶の桜すこ
しうち散りまがふ。いとうらかに晴れて、霞の間より立ち出でたるは、いと
あはれになまめきて見ゆ。わざと平張なども移されず、御前に渡れる廊を、楽
屋のさまにして、仮に胡床どもを召したり。

童べども、御階のもとに寄りて、花どもたてまつる。行香の人びと取り次ぎ
て、闕伽に加へさせたまふ。

御消息、殿の中将の君して聞こえたまへり。

「花園の胡蝶をさへや下草に

秋待つ虫はうとく見るらむ」

宮、「かの紅葉の御返りなりけり」と、ほほ笑みて御覧ず。昨日の女房たちも、

「げに、春の色は、え落とさせたまふまじかりけり」

びと思し分くらむかし。夜もすがら遊び明かしたまふ。返り声に「喜春楽」立ちそひて、兵部卿宮、「青柳」折り返しおもしろく歌ひたまふ。あるじの大臣も言加へたまふ。

夜も明けぬ。朝ぼらけの鳥のさへづりを、中宮はもの隔てて、ねたう聞こし召しけり。いつも春の光をこめ給へる大殿なれど、心をつくるよすがのまたなきを、飽かぬことに思す人びともありけるに、西の対の姫君、こともなき御ありさま、大臣の君も、わざと思しあがめきこえたまふ御けしきなど、皆世に聞こえ出でて、思しもしるく、心なびかしたまふ人多かるべし。

わが身さばかりと思ひ上がりたまふ際の人こそ、便りにつつ、けしきばみ、言出で聞こえたまふもありけれ、えしもうち出でぬ中の思ひに燃えぬべき若君達などもあるべし。そのうちに、ことの心を知らで、内の大殿の中将などは、好きぬべかめり。

兵部卿宮はた、年ごろおはしける北の方も亡せたまひて、この三年ばかり、独り住みにてわびたまへば、うけばりて今はけしきばみたまふ。

今朝も、いといたうそら乱れして、藤の花をかぎして、なよびさうどきたまへる御さま、いとをかし。大臣も、思ししさまかなふと、下には思せど、せめて知らず顔をつくりたまふ。

御土器のついでに、いみじうもて悩みたまうて、

「思ふ心はべらずは、まかり逃げはべりなまし。いと堪へがたしや」とすまひたまふ。

「紫のゆゑに心をしめたれば

淵に身投げむ名やは惜しけき」

とて、大臣の君に、同じかぎしを参りたまふ。いといたうほほ笑みたまひて、

「淵に身を投げつべしやとこの春は

花のあたりを立ち去らで見よ」

日を暮らす。

「風吹けば波の花さへ色見えて

こや名に立てる山吹の崎」

「春の池や井手の川瀬にかよふらむ

岸の山吹そこも匂へり」

「亀の上の山も尋ねじ舟のうちに

老いせぬ名をばここに残さむ」

「春の日のうららにさしてゆく舟は

棹のしづくも花ぞ散りける」

などやうの、はかなごとどもを、心々に言ひ交はしつつ、行く方も帰らむ里も忘れぬべう、若き人びとの心を移すに、ことわりなる水の面になむ。

暮れかかるほどに、「皇じやう」といふ楽、いとおもしろく聞こゆるに、心にもあらず、釣殿にさし寄せられて下りぬ。ここのしつらひ、いとこと削ぎたるさまに、なまめかしきに、御方々の若き人どもの、われ劣らじと尽くしたる装束、かたち、花をこき交ぜたる錦に劣らず見えわたる。世に目馴れずめづらかなる楽ども仕うまつる。舞人など、心ことに選ばせたまひて。

夜に入りぬれば、いと飽かぬ心地して、御前の庭に篝火ともして、御階のものとの苔の上に、楽人召して、上達部、親王たちも、皆おのおの弾きもの、吹きものとりどりにしたまふ。

物の師ども、ことにすぐれたる限り、双調吹きて、上に待ちとる御琴どもの調べ、いとはなやかにかき立てて、「安名尊」遊びたまふほど、「生けるかひあり」と、何のあやめも知らぬ賤の男も、御門のわたり隙なき馬、車の立処に混じりて、笑みさかえ聞きにけり。

空の色、物の音も、春の調べ、響きは、いとことにまさりけるけぢめを、人

弥生の二十日あまりのころほひ、春の御前のありさま、常よりことに尽くして匂ふ花の色、鳥の声、ほかの里には、まだ古りぬにやと、めづらしう見え聞こゆ。山の木立、中島のわたり、色まさる苔のけしきなど、若き人びとのほつかに心もとなく思ふべかめるに、唐めいたる舟造らせたまひける、急ぎ装束かせたまひて、下ろし始めさせたまふ日は、雅楽寮の人召して、舟の楽せらる。親王たち上達部など、あまた参りたまへり。

中宮、このころ里におはします。かの「春待つ園は」と励ましきこえたまへりし御返りもこのころやと思し、大臣の君も、いかでこの花の折、御覽ぜさせむと思しのたまへど、ついでなくて軽らかにはひわたり、花をもてあそびたまふべきならねば、若き女房たちの、ものめでしぬべきを舟に乗せたまうて、南の池の、こなたに通しかよはしなさせたまへるを、小さき山を隔ての関に見せたれど、その山の崎より漕ぎまひて、東の釣殿に、こなたの若き人びと集めさせたまふ。

龍頭鷁首を、唐のよそひにことごとしうしつらひて、楫取の棹さす童べ、皆みづら結ひて、唐土だたせて、さる大きな池の中にさし出でたれば、まことの知らぬ国に來たらむ心地して、あはれにおもしろく、見ならはぬ女房などは思ふ。

中島の入江の岩蔭にさし寄せて見れば、はかなき石のたたずまひも、ただ絵に描いたらむやうなり。こなたかなた霞みあひたる梢ども、錦を引きわたせるに、御前の方ははるばると見やられて、色をましたる柳、枝を垂れたる、花もえもいはぬ匂ひを散らしたり。ほかには盛り過ぎたる桜も、今盛りにはほほ笑み、廊をめぐれる藤の色も、こまやかに開けゆきにけり。まして池の水に影を写したる山吹、岸よりこぼれていみじき盛りなり。水鳥どもの、つがひを離れず遊びつつ、細き枝どもを食ひて飛びちがふ、鴛鴦の波の綾に紋を交じへたるなど、ものの絵やうにも描き取らまほしき、まことに斧の柄も朽たいつべう思ひつつ、

胡 蝶

胡

蝶

ひいたくしつ、心懸想を尽くしたまふらむかし。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuyra/index.html>)

命延ぶるほどなり。

殿の中将の君、内の大殿の君達ぞ、ことにすぐれてめやすくはなやかなる。ほのぼのと明けゆくに、雪やや散りて、そぞろ寒きに、「竹河」謡ひて、かよれる姿、なつかしき声々の、絵にも描きとどめがたからむこそ口惜しけれ。

御方々、いづれもいづれも劣らぬ袖口ども、こぼれ出でたるこちたさ、物の色あひなども、曙の空に、春の錦たち出でにける霞のうちか見えわたさる。あやしく心のうちゆく見物にぞありける。

さるは、高中子の世離れたるさま、寿詞の乱りがはしき、をこめきたることを、ことごとしくとりなしたる、なかなか何ばかりのおもしろかるべき拍子も聞こえぬものを。例の、綿かづきわたりてまかでぬ。

夜明け果てぬれば、御方々帰りわたりたまひぬ。大臣の君、すこし御殿籠もりて、日高く起きたまへり。

「中将の声は、弁少将にをさをさ劣らざめるは。あやしう有職ども生ひ出づるころほひにこそあれ。いにしへの人は、まことにかしこき方やすぐれたることも多かりけむ、情けだちたる筋は、このころの人にえしもまさらざりけむかし。中将などをば、すすくしき大やけ人にしなしてむとなむ思ひおきてし、みづからのいとあざればみたるかたくなしさを、もて離れよと思ひしかども、なほ下にはほの好きたる筋の心をこそとどむべかめれ。もてしづめ、すくよかなるうはべばかりは、うるさかめり」

など、いとうつくしと思したり。「万春楽」と、御口ずさみにのたまひて、「人びとのこなたに集ひたまへるついでに、いかで物の音こころみてしがな。私の後宴すべし」

とのたまひて、御琴どもの、うるはしき袋どもして秘めおかせたまへる、皆引き出でて、おし拭ひ、ゆるべる緒、調べさせたまひなです。御方々、心づか

をのたまひかくべくもあらず、おほかたの昔今の物語をしたまひて、「かばかりの言ふかひだにあれかし」と、あなたを見やりたまふ。

かやうにても、御蔭に隠れたる人びと多かり。皆さしのぞきわたしたまひて、「おぼつかなき日数つもる折々あれど、心のうちはおこたらずなむ。ただ限りある道の別れのみこそうしろめたけれ。『命を知らぬ』」

など、なつかしくのたまふ。いづれをも、ほどほどにつけてあはれと思したり。我はと思しあがりぬべき御身のほどなれど、さしもことごとしくもてなしたまはず、所につけ、人のほどにつけつつ、さまざまあまねくなつかしくおはしませば、ただかばかりの御心にかかりてなむ、多くの人びと年を経ける。

今年は男踏歌あり。内より朱雀院に参りて、次にこの院に参る。道のほど遠くなどして、夜明け方になりけり。月の曇りなく澄みまさりて、薄雪すこし降れる庭のえならぬに、殿上人なども、物の上手多かるころほひにて、笛の音もいとおもしろう吹き立てて、この御前はことに心づかひしたり。御方々物見に渡りたまふべく、かねて御消息どもありければ、左右の対、渡殿などに、御局しつつかはさす。

西の対の姫君は、寢殿の南の御方に渡りたまひて、こなたの姫君に御対面ありけり。上も一所におはしませば、御几帳ばかり隔てて聞こえたまふ。

朱雀院の後の御方などめぐりけるほどに、夜もやうやう明けゆけば、水駅にてこと削がせたまふべきを、例あることより、ほかにさまことに加へて、いみじくもてはやさせたまふ。

影すさまじき暁月夜に、雪はやうやう降り積む。松風木高く吹きおろし、ものすさまじくもありぬべきほどに、青色のなえばめるに、白襲の色あひ、何の飾りかは見ゆる。

かざしの綿は、何の匂ひもなきものなれど、所からにやおもしろく、心ゆき、

世の常ならぬ花を見るかな」

と独りごちたまへど、聞き知りたまはざりけむかし。

空蟬の尼衣にも、さしのぞきたまへり。うけばりたるさまにはあらず、かごやかに局住みにしなして、仏ばかりに所得させたまつりて、行なひ勤めけるさまあはれに見えて、経、仏の御飾り、はかなくしたる闕伽の具なども、をかしげになまめかしう、なほ心ばせありと見ゆる人のけはひなり。

青鈍の几帳、心ばへをかしきに、いたくみ隠れて、袖口ばかりぞ色ことなるしもなつかしければ、涙ぐみたまひて、

「『松が浦島』をはるかに思ひてぞやみぬべかりける。昔より心憂かりける御契りかな。さすがにかばかりの御睦びは、絶ゆまじかりけるよ」

などのたまふ。尼君も、ものあはれなるけはひにて、

「かかる方に頼みきこえさするしもなむ、浅くはあらず思ひたまへ知られはべりける」

と聞こゆ。

「つらき折々重ねて、心惑はしたまひし世の報いなどを、仏にかしこまりきこゆるこそ苦しけれ。思し知るや。かくいと素直にもあらぬものをと、思ひ合はせたまふこともあらじやはとなむ思ふ」

とのたまふ。

「かのあさましかりし世の古事を聞き置きたまへるなめり」
と恥づかしく、

「かかるありさまを御覧じ果てらるるよりほかの報いは、いづくにかはべらむ」

とて、まことにうち泣きぬ。いにしへよりももの深く恥づかしげさまさりて、かくもて離れたること、と思すしも、見放ちがたく思さるれど、はかなきこと

しも思したらず、今は、かくあはれに長き御心のほどを、おだしきものにうちとけ頼みきこえたまへる御さま、あはれなり。

かかる方にも、おしなべての人ならず、いとほしく悲しき人の御さまに思せば、あはれに、我だにこそはと、御心とどめたまへるも、ありがたきぞかし。御声なども、いと寒げに、うちわななきつつ語らひきこえたまふ。見わづらひたまひて、

「御衣どもの事など、後見きこゆる人ははべりや。かく心やすき御住まひは、ただいとうちとけたるさまに、含みなえたるこそよけれ。うはべばかりつくろひたる御よそひは、あいなくなむ」

と聞こえたまへば、こちごちしくさすがに笑ひたまひて、

「醍醐の阿闍梨の君の御あつかひしはべるとて、衣どももえ縫ひはべらでなむ。皮衣をさへ取られにし後、寒くはべる」

と聞こえたまふは、いと鼻赤き御兄なりけり。心うつくしといひながら、あまりうちとけ過ぎたりと思せど、ここにては、いとまめにきすくの人にておはす。

「皮衣はいとよし。山伏の蓑代衣に譲りたまひてあへなむ。さて、このいたはりなき白妙の衣は、七重にも、などか重ねたまはざらむ。さるべき折々は、うち忘れたらむこともおどろかしたまへかし。もとよりおれおれしく、たゆき心のおこたりに。まして方々の紛らはしき競ひにも、おのづからなむ」

とのたまひて、向かひの院の御倉開けさせたまひて、絹、綾などたてまつらせたまふ。

荒れたる所もなけれど、住みたまはぬ所のけはひは静かにて、御前の木立ばかりぞいとおもしろく、紅梅の咲き出でたる匂ひなど、見はやす人もなきを見わたしたまひて、

「ふるさとの春の梢に訪ね来て

上達部などは、思ふ心などものしたまひて、すずろに心懸想したまひつつ、常の年よりもことなり。

花の香誘ふ夕風、のどやかにうち吹きたるに、御前の梅やうやうひもときて、あれは誰れ時なるに、物の調べどもおもしろく、「この殿」うち出でたる拍子、いとほなやかなり。大臣も時々声うち添へたまへる「さき草」の末つ方、いとなつかしくめでたく聞こゆ。何ごとも、さしいらへしたまふ御光にはやされて、色をも音をも増すけぢめ、ことになむ分かれける。

かうののしる馬車の音を、もの隔てて聞きたまふ御方々は、蓮の中の世界に、まだ開けざらむ心地もかくやと、心やましげなり。まして、東の院に離れたまへる御方々は、年月に添へて、つれづれの数のみまされど、「世の憂きめ見えぬ山路」に思ひなずらへて、つれなき人の御心をば、何とかは見たてまつりがめむ、その他の心もとなく寂しきことはたなければ、行なひの方の人は、その紛れなく勤め、仮名のよろづの草子の学問、心に入れたまはむ人は、また願ひに従ひ、ものまめやかにはかばかしきおきてにも、ただ心の願ひに従ひたる住まひなり。騒がしき日ごろ過ぐして渡りたまへり。

常陸宮の御方は、人のほどあれば、心苦しく思して、人目の飾りばかりは、いとよくもてなしきこえたまふ。いにしへ、盛りと見えし御若髪も、年ごろに衰ひゆき、まして、滝の淀み恥づかしげなる御かたはらめなどを、いとほしと思せば、まほにも向かひたまはず。

柳は、げにこそすさまじかりけれと見ゆるも、着なしたまへる人からなるべし。光もなく黒き搔練の、さるさるしく張りたる一襲、さる織物の桂着たまへる、いと寒げに心苦し。襲の衣などは、いかにしなしたるにかあらむ。

御鼻の色ばかり、霞にも紛るまじうはなやかなるに、御心にもあらずうち嘆かれたまひて、ことさらに御几帳引きつくるひ隔てたまふ。なかなか、女はさ

「咲ける岡辺に家しあれば」

など、ひき返し慰めたる筋など書きませつつあるを、取りて見たまひつつほほ笑みたまへる、恥づかしげなり。

筆さし濡らして書きすさみたまふほどに、みざり出でて、さすがにみづからのもてなしは、かしこまりおきて、めやすき用意なるを、「なほ、人よりはことなり」と思す。白きに、けぎやかなる髪のかかりの、すこしさはらかなるほどに薄らぎにけるも、いとどなまめかしき添ひて、なつかしければ、「新しき年の御騒がれもや」と、つつましかれど、こなたに泊りたまひぬ。「なほ、おぼえことなりかし」と、方々に心おきて思す。

南の御殿には、ましてめざましがる人びとあり。まだ曙のほどに渡りたまひぬ。かうしもあるまじき夜深さぞかしと思ふに、名残もただならず、あはれに思ふ。

待ちとりたまへるはた、なまげやけしと思すべかめる心のうち、量られたまひて、

「あやしきうたた寝をして、若々しかりけるいぎたなさを、さしもおどろかしたまはで」

と、御けしきとりたまふもをかく見ゆ。ことなる御いらへもなければ、わづらはしくて、そら寝をしつつ、日高く御殿籠もり起きたり。

今日は、臨時客のことに紛らはしてぞ、面隠したまふ。上達部、親王たちなど、例の、残りなく参りたまへり。御遊びありて、引出物、禄など、二なし。そこら集ひたまへるが、我も劣らじともてなしたまへるなかにも、すこしなずらひなるだにも見えたまはぬものかな。とり放ちては、いと有職多くものしたまふころなれど、御前にては気圧されたまふも、悪しかし。何の数ならぬ下部どもなどだに、この院に参る日は、心づかひことなりけり。まして若やかなる

につけても、えしも見過ぐしたまふまじ。

かくいと隔てなく見たてまつりなれたまへど、なほ思ふに、隔たり多くあやしきが、うつつの心地もしたまはねば、まほならずもてなしたまへるも、いとをかし。

「年ごろになりぬる心地して、見たてまつるにも心やすく、本意かなひぬるを、つつみなくもてなしたまひて、あなたなどにも渡りたまへかし。いはけなき初琴習ふ人もあめるを、もろともに聞きならしたまへ。うしろめたく、あはつけき心持たる人なき所なり」

と聞こえたまへば、

「のたまはせむままにこそは」

と聞こえたまふ。さもあることぞかし。

暮れ方になるほどに、明石の御方に渡りたまふ。近き渡殿の戸押し開くるより、御簾のうちの追風、なまめかしく吹き匂はして、ものよりことに気高く思さる。正身は見えず。いづらと見まはしたまふに、硯のあたりにぎははしく、草子どもなど取り散らしたるなど取りつつ見たまふ。唐の東京錦のことことしき端さしたる茵に、をかしげなる琴うち置き、わざとめきよしある火桶に、侍従をくゆらかして、物ごとにしめたるに、衣被香の香のまがへる、いと艶なり。手習どもの乱れうちとけたるも、筋変はり、ゆるある書きざまなり。ことことしう草がちなどにもされ書かず、めやすく書きすましたり。

小松の御返りを、めづらしと見けるままに、あはれなる古事ども書きまぜて、
「めづらしや花のねぐらに木づたひて

谷の古巢を訪へる鶯

声待ち出でたる」

なども、

幼き御心にまかせて、くだくだしくぞあめる。

夏の御住まひを見たまへば、時ならぬけにや、いと静かに見えて、わぎと好ましきこともなくて、あてやかに住みたるけはひ見えわたる。

年月に添へて、御心の隔てもなく、あはれなる御仲なり。今は、あながちに近やかなる御ありさまも、もてなしきこえたまはざりけり。いと睦ましくありがたからむ妹背の契りばかり、聞こえ交はしたまふ。御几帳隔てたれど、すこし押しやりたまへば、またさておはす。

「縹は、げに、にほひ多からぬあはひにて、御髪などもいたく盛り過ぎにけり。やさしき方にあらぬと、葡萄鬘してぞつくろひたまふべき。我ならざらむ人は、見醒めしぬべき御ありさまを、かくて見るこそうれしく本意あれ。心軽き人の列にて、われに背きたまひなましかば」など、御対面の折々は、まづ、「わが心の長きも、人の御心の重きをも、うれしく、思ふやうなり」

と思しけり。こまやかに、ふる年の御物語など、なつかしう聞こえたまひて、西の対へ渡りたまひぬ。

まだいたくも住み馴れたまはぬほどよりは、けはひをかしくしなして、をかしげなる童女の姿なまめかしく、人影あまたして、御しつらひ、あるべき限りなれど、こまやかなる御調度は、いとしも調へたまはぬを、さる方にものきよげに住みなしたまへり。

正身も、あなをかしげと、ふと見えて、山吹にもてはやしたまへる御かたちなど、いとほしきさまぞしたまへる。もと思ひに沈みたまへるほどのしわざらしく、見まほしきさまぞしたまへる。もの思ひに沈みたまへるほどのしわざにや、髪の裾すこし細りて、さはらかにかけられるしも、いとものきよげに、こかしこいとけぎやかなるさましたまへるを、「かくて見ざらましかば」と思す

とて、乱れたる事どもすこしうち混ぜつつ、祝ひきこえたまふ。

「薄氷解けぬる池の鏡には

世に曇りなき影ぞ並べる」

げに、めでたき御あはひどもなり。

「曇りなき池の鏡によろづ代を

すむべき影ぞしるく見えける」

何事につけても、末遠き御契りを、あらまほしく聞こえ交はしたまふ。今日
は子の日なりけり。げに、千年の春をかけて祝はむに、ことわりなる日なり。

姫君の御方に渡りたまへれば、童女、下仕へなど、御前の山の小松引き遊ぶ。

若き人びとの心地ども、おきどころなく見ゆ。北のおとどより、わざとがまし
くし集めたる鬚籠ども、破籠などたてまつれたまへり。えならぬ五葉の枝に移
る鶯も、思ふ心あらむかし。

「年月を松にひかれて経る人に

今日鶯の初音聞かせよ

音せぬ里の」

と聞こえたまへるを、「げに、あはれ」と思し知る。言忌もえしあへたまはぬ
けしきなり。

「この御返りは、みづから聞こえたまへ。初音惜しみたまふべき方にもあら
ずかし」

とて、御硯取りまかなひ、書かせたてまつりたまふ。いとうつくしげにて、
明け暮れ見たてまつる人だに、飽かず思ひきこゆる御ありさまを、今までおぼ
つかなき年月の隔たりにけるも、「罪得がましう、心苦し」と思す。

「ひき別れ年は経れども鶯の

巢立ちし松の根を忘れめや」

年立ちかへる朝の空のけしき、名残なく曇らぬうららかなげさには、数ならぬ垣根のうちだに、雪間の草若やかに色づきはじめ、いつしかとけしきだつ霞に、木の芽もうちけぶり、おのづから人の心ものびらかにぞ見ゆるかし。まして、いとど玉を敷ける御前の、庭よりはじめ見所多く、磨きましたまへる御方々のありさま、まねびたてむも言の葉足るまじくなむ。

春のおとどの御前、とりわきて、梅の香も御簾のうちの匂ひに吹きまがひ、生ける仏の御国とおぼゆ。さすがにうちとけて、やすらかに住みなしたまへり。さぶらふ人びとも、若やかにすぐれたるは、姫君の御方にと選りたまひて、すこし大人びたる限り、なかなかよししく、装束ありさまよりはじめて、めやすくもてつけて、ここかしこに群れみつ、齒固めの祝ひして、餅鏡をさへ取り混ぜて、千年の蔭にしるき年のうちの祝ひ事どもして、そばれあへるに、大臣の君さしのぞきたまへれば、懐手ひきなほしつつ、「いとはしたなきわざかな」と、わびあへり。

「いとたたかなるみづからの祝ひ事どもかな。皆おのおの思ふことの道々あらむかし。すこし聞かせよや。われことぶきせむ」

とうち笑ひたまへる御ありさまを、年のはじめの栄えに見たてまつる。われはと思ひあがれる中将の君ぞ、

「『かねてぞ見ゆる』などこそ、鏡の影にも語らひはんべりつれ。私の祈りは、何ばかりのことをか」

など聞こゆ。

あしたのほどは人びと参り混みて、もの騒がしかりけるを、夕つ方、御方々の参座したまはむとて、心ことにひきつくろひ、化粧じたまふ御影こそ、げに見るかひあめれ。

「今朝、この人びとの戯れ交はしつる、いとうらやましく見えつるを、上にはわれ見せたてまつらむ」

初 音

初

音

などのたまひて、返しは思しもかけねば、

「返しやりてむ、とあめるに、これよりおし返したまはざらむも、ひがひがしからむ」

と、そのかしきこえたまふ。情け捨てぬ御心にて、書きたまふ。いと心やすげなり。

「返さむと言ふにつけても片敷の

夜の衣を思ひこそやれ

ことわりなりや」

とぞあめる。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

わづらひぬべう思す。恥づかしきまみなり。

「古体の歌詠みは、『唐衣』、『袂濡るる』かことこそ離れねな。まろも、その列ぞかし。さらに一筋にまつはれて、今めきたる言の葉にゆるぎたまはぬこそ、ねたきことは、はたあれ。人の中なることを、をりふし、御前などのわざとある歌詠みのなかにては、『円居』離れぬ三文字ぞかし。昔の懸想のをかしき挑みには、『あだ人』といふ五文字を、やすめどころにうち置きて、言の葉の続きたよりある心地すべかめり」

など笑ひたまふ。

「よろづの草子、歌枕、よく案内知り見尽くして、そのうちの言葉を取り出づるに、詠みつきたる筋こそ、強うは変はらざるべけれ。

常陸の親王の書き置きたまへりける紙屋紙の草子をこそ、見よとておこせたりしか。和歌の髓脳いと所狭う、病去るべきところ多かりしかば、もとよりおくれたる方の、いとどなかなか動きすべくも見えざりしかば、むつかしくて返してき。よく案内知りたまへる人の口つきにては、目馴れてこそあれ」

とて、をかしく思いたるさまぞ、いとほしきや。

上、いとまめやかにて、

「などで、返したまひけむ。書きとどめて、姫君にも見せたてまつりたまふべかりけるものを。ここにも、ものなかなりしも、虫みな損なひてければ。

見ぬ人はた、心ことにこそは遠かりけれ」

とのたまふ。

「姫君の御学問に、いと用なからむ。すべて女は、立てて好めることまうけてしみぬるは、さまよからぬことなり。何ごとも、いとつきなからむは口惜しからむ。ただ心の筋を、漂はしからずもてしづめおきて、なだらかならむのみなむ、めやすかるべかりける」

り」と、げに推し量らるるを、色には出だしたまはねど、殿見やりたまへるに、ただならず。

「いで、このかたちのよそへは、人腹立ちぬべきことなり。よきとても、物の色は限りあり、人のかたちは、おくれたるも、またなほ底ひあるものを」とて、かの末摘花の御料に、柳の織物の、よしある唐草を乱れ織れるも、いとなまめきたれば、人知れずほほ笑まれたまふ。

梅の折枝、蝶、鳥、飛びちがひ、唐めいたる白き小桂に、濃きがつややかなる重ねて、明石の御方に、思ひやり気高きを、上はめざましと見たまふ。

空蟬の尼君に、青鈍の織物、いと心ばせあるを見つけたまひて、御料にある梶子の御衣、聴し色なる添へたまひて、同じ日着たまふべき御消息聞こえめぐらしたまふ。げに、似ついたる見むの御心なりけり。

皆、御返りどもただならず。御使の祿、心々なるに、末摘、東の院におはすれば、今すこしさし離れ、艶なるべきを、うるはしくものしたまふ人にて、あるべきことは違へたまはず、山吹の桂の、袖口いたくすすけたるを、うつほにてうち掛けたまへり。御文には、いとかうばしき陸奥紙の、すこし年経、厚きが黄ばみたるに、

「いでや、賜へるは、なかなかこそ。

着てみれば恨みられけり唐衣

返しやりてむ袖を濡らして」

御手の筋、ことに奥よりにたり。いといたくほほ笑みたまひて、とみにもうち置きたまはねば、上、何ごとならむと見おこせたまへり。

御使にかづけたる物を、いと侘しくかたはらいたしと思して、御けしき悪しければ、すべりまかでぬ。いみじく、おのおのはささめき笑ひけり。かやうにわりなう古めかしう、かたはらいたきところのつきたまへるさかしらに、もて

「いと多かりけるものどもかな。方々に、うらやみなくこそものすべかりけれ」

と、上に聞こえたまへば、御匣殿に仕うまつれるも、こなたにせさせたまへるも、皆取う出させたまへり。

かかる筋はた、いとすぐれて、世になき色あひ、匂ひを染めつけたまへば、ありがたしと思ひきこえたまふ。

ここかしこの擣殿より参らせたる擣物ども御覧じ比べて、濃き赤きなど、さまざまを選らせたまひつつ、御衣櫃、衣箱どもに入れさせたまうて、おとなびたる上臈どもさぶらひて、「これは、かれは」と取り具しつつ入る。上も見たまひて、

「いづれも、劣りまさるけぢめも見えぬものどもなめるを、着たまはむ人の御かたちに思ひよそへつつたてまつれたまへかし。着たる物のさまに似ぬは、ひがひがしくもありかし」

とのたまへば、大臣うち笑ひて、

「つれなくて、人の御かたち推し量らむの御心なめりな。さては、いづれをとか思す」

と聞こえたまへば、

「それも鏡にては、いかでか」

と、さすが恥ぢらひておはす。

紅梅のいと紋浮きたる葡萄染の御小桂、今様色のいとすぐれたるとは、かの御料。桜の細長に、つややかなる搔練取り添へては、姫君の御料なり。

浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれど、匂ひやかならぬに、いと濃き搔練具して、夏の御方に、曇りなく赤きに、山吹の花の細長は、かの西の対にたてまつれたまふを、上は見ぬやうにて思しあはす。「内の大臣の、はなやかに、あなきよげとは見えながら、なまめかしう見えたる方のまじらぬに似たるなめ

中将の君にも、

「かかる人を尋ね出でたるを、用意して睦び訪らへ」

とのたまひければ、こなたに参うでたまひて、

「人数ならずとも、かかる者さぶらふと、まづ召し寄すべくなむはべりける。

御渡りのほどにも、参り仕うまつらざりけること」

と、いとまめまめしう聞こえたまへば、かたはらいたきまで、心知れる人は思ふ。

心の限り尽くしたりし御住まひなりしかど、あさましう田舎びたりしも、たとしへなくぞ思ひ比べらるるや。御しつらひよりはじめ、今めかしう気高くて、親、はらからと睦びきこえたまふ御さま、かたちよりはじめ、目もあやにおぼゆるに、今ぞ、三条も大式をあなづらはしく思ひける。まして、監が息ざしきはひ、思ひ出づるもゆゆしきこと限りなし。

豊後介の心ばへをありがたきものに君も思し知り、右近も思ひ言ふ。「おほぞうなるは、ことも怠りぬべし」とて、こなたの家司ども定め、あるべきことどもおきてさせたまふ。豊後介もなりぬ。

年ごろ田舎び沈みたりし心地に、にはかに名残もなく、いかでか、仮にても立ち出で見るべきよすがなくおぼえし大殿のうちを、朝夕に出で入りならし、人を従へ、事行なふ身となれば、いみじき面目と思ひけり。大臣の君の御心おきての、こまかにありがたうおはしますこと、いとかたじけなし。

年の暮に、御しつらひのこと、人びとの装束など、やむごとなき御つらに思しおきてたる、「かかりとも、田舎びたることや」と、山賤の方にあなづり推し量りきこえたまひて調じたるも、たてまつりたまふついでに、織物どもの、我も我もと、手を尽くして織りつつ持て参れる細長、小桂の、色々さまざまなるを御覧ずるに、

「脚立たず沈みそめはべりにけるのち、何ごともあるかなきかになむ」

と、ほのかに聞こえたまふ声ぞ、昔人にいとよくおぼえて若びたりける。ほほ笑みて、

「沈みたまひけるを、あはれとも、今は、また誰れかは」

とて、心ばへいふかひなくはあらぬ御応へと思す。右近に、あるべきことこのたまはせて、渡りたまひぬ。

めやすくものしたまふを、うれしく思して、上にも語りきこえたまふ。

「さる山賤のなかに年経たれば、いかにいとほしげならむとあなづりしを、かへりて心恥づかしきまでなむ見ゆる。かかる者ありと、いかで人に知らせて、兵部卿宮などの、この籬のうち好ましうしたまふ心乱りにしかな。好き者ども、いとうるはしだちてのみ、このわたりに見ゆるも、かかる者のくさはひのなきほどなり。いたうもてなしてしかな。なほうちあはぬ人のけしき見集めむ」

とのたまへば、

「あやしの人の親や。まづ人の心励まさむことを先に思すよ。けしからず」

とのたまふ。

「まことに君をこそ、今の心ならましかば、さやうにもてなして見つべかりけれ。いと無心にしなしてしわざぞかし」

とて、笑ひたまふに、面赤みておはする、いと若くをかしげなり。硯引き寄せたまうて、手習に、

「恋ひわたる身はそれなれど玉かつら

いかなる筋を尋ね来つらむ

あはれ」

と、やがて独りごちたまへば、「げに、深く思しける人の名残なめり」と見たまふ。

その夜、やがて大臣の君渡りたまへり。昔、光源氏などいふ御名は、聞きわたりたてまつりしかど、年ごろのうひうひしきに、さしも思ひきこえざりけるを、ほのかなる大殿油に、御几帳のほころびよりはつかに見たてまつる、いとど恐ろしくさへぞおぼゆるや。

渡りたまふ方の戸を、右近かい放てば、

「この戸口に入るべき人は、心ことにこそ」

と笑ひたまひて、廂なる御座についゐたまひて、

「灯こそ、いと懸想びたる心地すれ。親の顔はゆかしきものところ聞け。さも思さぬか」

とて、几帳すこし押しやりたまふ。わりなく恥づかしければ、そばみておはする様体など、いとめやすく見ゆれば、うれしくて、

「今すこし、光見せむや。あまり心にくし」

とのたまへば、右近、かかげてすこし寄す。

「おもなの人や」

とすこし笑ひたまふ。げにとおぼゆる御まみの恥づかしげさなり。いささかもこと人と隔てあるさまにもたまひなさず、いみじく親めきて、

「年ごろ御行方を知らで、心にかけぬ隙なく嘆きはべるを、かうて見たてまつるにつけても、夢の心地して、過ぎにし方のことども取り添へ、忍びがたきに、えなむ聞こえられざりける」

とて、御目おし拭ひたまふ。まことに悲しう思し出でらる。御年のほど、数へたまひて、

「親子の仲の、かく年経たるたぐひあらじものを。契りつらくもありけるかな。今は、ものうひうひしく、若びたまふべき御ほどにもあらじを、年ごろの御物語など聞こえまほしきに、などかおぼつかなくは」

と恨みたまふに、聞こえむこともなく、恥づかしければ、

東ととのへなどして、十月にぞ渡りたまふ。

大臣、東の御方に聞こえつけたてまつりたまふ。

「あはれと思ひし人の、ものうじして、はかなき山里に隠れるにけるを、幼き人のありしかば、年ごろも人知れず尋ねはべりしかども、え聞き出ででなむ、女になるまで過ぎにけるを、おぼえぬかたよりなむ、聞きつけたる時にだにて、移ろはしはべるなり」とて、「母も亡くなりけり。中将を聞こえつけたるに、悪しくやはある。同じごと後見たまへ。山賤めきて生ひ出でたれば、鄙びたること多からむ。さるべく、ことにふれて教へたまへ」

と、いとこまやかに聞こえたまふ。

「げに、かかる人のおはしけるを、知りきこえざりけるよ。姫君の一所ものしたまふがさうざうしきに、よきことかな」

と、おいらかにのたまふ。

「かの親なりし人は、心なむありがたきまでよかりし。御心もうしろやすく思ひきこゆれば」

などのたまふ。

「つきづきしく後む人なども、こと多からで、つれづれにはべるを、うれしかるべきこと」

になむのたまふ。

殿のうちの人は、御むすめとも知らで、

「何人、また尋ね出でたまへるならむ」

「むつかしき古者扱ひかな」

と言ひけり。

御車三つばかりして、人の姿どもなど、右近あれば、田舎びず仕立てたり。

殿よりぞ、綾、何くれとたてまつれたまへる。

上にも、今ぞ、かのありし昔の世の物語聞こえ出でたまひける。かく御心に籠めたまふことありけるを、恨みきこえたまふ。

「わりなしや。世にある人の上とてや、問はず語りは聞こえ出でむ。かかるついでに隔てぬこそは、人にはことには思ひきこゆれ」として、いとあはれげに思し出でたり。

「人の上にてあまた見しに、いと思はぬなかも、女といふものの心深きをあまた見聞きしかば、さらに好き好きしき心はつかはじとなむ思ひしを、おのづからさるまじきをもあまた見しなかに、あはれとひたぶるにらうたきかたは、またたぐひなくなむ思ひ出でらる。世にあらましかば、北の町にもものする人の列には、などか見ざらまし。人のありさま、とりどりになむありける。かどかどしう、をかしき筋などはおくれたりしかども、あてはかにらうたくもありしかな」

などのたまふ。

「さりとも、明石の列には、立ち並べたまはざらまし」

とのたまふ。なほ北の御殿をば、めざましと心置きたまへり。姫君の、いとうつくしげにて、何心もなく聞きたまふが、らうたければ、また、「ことわりぞかし」と思し返さる。

かくいふは、九月のことなりけり。渡りたまはむこと、すがすがしくもいかでかはあらむ。よろしき童女、若人など求めさす。筑紫にては、口惜しからぬ人びとも、京より散りばひ来たるなどを、たよりにつけて呼び集めなどしてさぶらはせしも、にはかに惑ひ出でたまひし騒ぎに、皆おくらしてければ、また人もなし。京はおのづから広き所なれば、市女などやうのもの、いとよく求めつつ、率て来。その人の御子などは知らせざりけり。

右近が里の五条に、まづ忍びて渡したてまつりて、人びと選りとのへ、装

いかでか知らぬ人の御あたりには交じらはむ」

と、おもむけて、苦しげに思したれど、あるべきさまを、右近聞こえ知らせ、人びとも、

「おのづから、さて人だちたまひなば、大臣の君も尋ね知りきこえたまひなむ。親子の御契りは、絶えて止まぬものなり」

「右近が、数にもはべらず、いかでか御覧じつけられむと思ひたまへしだに、仏神の御導きはべらざりけりや。まして、誰れも誰れもたひらかにだにおはしまさば」

と、皆聞こえ慰む。

「まづ御返りを」と、責めて書かせたてまつる。

「いとこよなく田舎びたらむものを」

と恥づかしく思いたり。唐の紙のいと香ばしきを取り出でて、書かせたてまつる。

「数ならぬ三稜や何の筋なれば

憂きにしもかく根をとどめけむ」

とのみ、ほのかなり。手は、はかなだち、よろぼはしけれど、あてはかにて口惜しからねば、御心落ちるにけり。

住みたまふべき御かた御覧するに、

「南の町には、いたづらなる対どもなどなし。勢ひことに住み満ちたまへれば、顕証に人しげくもあるべし。中宮おはします町は、かやうの人も住みぬべく、のどやかなれど、さてさぶらふ人の列にや聞きなさむ」と思して、「すこし埋れたれど、丑寅の町の西の対、文殿にてあるを、異方へ移して」と思す。

「あひ住みにも、忍びやかに心よくものしたまふ御方なれば、うち語らひてもありなむ」

と思しおきつ。

したまはむ。いたづらに過ぎものしたまひし代はりには、ともかくも引き助けさせたまはむことこそは、罪輕ませたまはめ」

と聞こゆ。

「いたうもかこちなすかな」

と、ほほ笑みながら、涙ぐみたまへり。

「あはれに、はかなかりける契りとなむ、年ごろ思ひわたる。かくて集へる方々のなかに、かの折の心ざしばかり思ひとどむる人なかりしを、命長くて、わが心長さをも見はべるたぐひ多かめるなかに、いふかひなくて、右近ばかりを形見に見るは、口惜しくなむ。思ひ忘るる時なきに、さてもものしたまはば、いとこそ本意かなふ心地すべけれ」

とて、御消息たてまつれたまふ。かの末摘花のいふかひなかりしを思し出づれば、さやうに沈みて生ひ出でたらむ人のありさまうしろめたくて、まづ、文のけしきゆかしく思さるるなりけり。ものまめやかに、あるべかしく書きたまひて、端に、

「かく聞こゆるを、

知らずとも尋ねて知らむ三島江に

生ふる三稜の筋は絶えじを」

となむありける。

御文、みづからまかでて、のたまふさまなど聞こゆ。御装束、人びとの料などさまざまあり。上にも語らひきこえたまへるなるべし、御匣殿などにも、設けの物召し集めて、色あひ、しぎまなど、ことなるをと、選らせたまへれば、田舎びたる目どもには、まして珍らしきまでなむ思ひける。

正身は、

「ただかことばかりにても、まことの親の御けはひならばこそうれしからめ、

と、隠しきこえたまへば、上、

「あな、わづらはし。ねぶたきに、聞き入るべくもあらぬものを」
とて、御袖して御耳塞ぎたまひつ。

「かたちなどは、かの昔の夕顔と劣らじや」
などのたまへば、

「かならずさしもいかでかものしたまはむと思ひたまへりしを、こよなうこそ生ひまさりて見えたまひしか」

と聞こゆれば、

「をかしのことや。誰ばかりとおぼゆ。この君と」

とのたまへば、

「いかでか、さまでは」

と聞こゆれば、

「したり顔にこそ思ふべけれ。我に似たらばしも、うしろやすしかし」
と、親めきてのたまふ。

かく聞きそめてのちは、召し放ちつつ、

「さらば、かの人、このわたりに渡いたてまつらむ。年ごろ、ものついでごとに、口惜しう惑はしつることを思ひ出でつるに、いとうれしく聞き出でながら、今までおぼつかなきも、かひなきことになむ。

父大臣には、何か知られむ。いとあまたもて騒がるめるが、数ならで、今はじめ立ち交じりたらむが、なかなかなることこそあらめ。我は、かうさうざうしきに、おぼえぬ所より尋ね出だしたるとも言はむかし。好き者どもの心尽くさするくさはひにて、いといたうもてなさむ」

など語らひたまへば、かつがついとうれしく思ひつつ、

「ただ御心になむ。大臣に知らせたてまつらむとも、誰れかは伝へほのめか

「若き人は、苦しとてむつかるめり。なほ年経ぬるどちこそ、心交はして睦びよかりけれ」

とのたまへば、人びと忍びて笑ふ。

「さりや。誰か、その使ひならいたまはむをば、むつからむ」

「うるさき戯れ事言ひかかりたまふを、わづらはしきに」

など言ひあへり。

「上も、年経ぬるどちうちとけ過ぎ、はた、むつかりたまはむとや。さるまじき心と見ねば、危ふし」

など、右近に語らひて笑ひたまふ。いと愛敬づき、をかしきけさへ添ひたまへり。

今はおほやけに仕へ、忙しき御ありさまにもあらぬ御身にて、世の中のどやかに思さるるままに、ただはかなき御戯れ事をのたまひ、をかくく人の心を見たまふあまりに、かかる古人をさへぞ戯れたまふ。

「かの尋ね出でたりけむや、何さまの人ぞ。尊き修行者語らひて、率て来たるか」

と問ひたまへば、

「あな、見苦しや。はかなく消えたまひにし夕顔の露の御ゆかりをなむ、見たまへつたりし」

と聞こゆ。

「げに、あはれなりけることかな。年ごろはいづくにか」

とのたまへば、ありのままには聞こえにくくて、

「あやしき山里になむ。昔人もかたへは変はらではべりければ、その世の物語し出ではべりて、堪へがたく思ひたまへりし」

など聞こえたり。

「よし、心知りたまはぬ御あたりに」

右近は、大殿に参りぬ。このことをかすめ聞こゆるついでもやとて、急ぐなりけり。御門引き入るるより、けはひことに広々として、まかで参りする車多くまよふ。数ならで立ち出づるも、まばゆき心地する玉の台なり。その夜は御前にも参らで、思ひ臥したり。

またの日、昨夜里より参れる上臈、若人どものなかに、取り分きて右近を召し出づれば、おもだたくおぼゆ。大臣も御覧じて、

「などか、里居は久しくしつるぞ。例ならず、やまめ人の、引き違へ、こまがへるやうもありかし。をかしきことなどありつらむかし」
 など、例の、むつかしう、戯れ事などのたまふ。

「まかでて、七日に過ぎはべりぬれど、をかしきことははべりがたくなむ。山踏しはべりて、あはれなる人をなむ見たまへつれたりし」

「何人ぞ」

と問ひたまふ。「ふと聞こえ出でむも、まだ上に聞かせたてまつらで、取り分き申したらむを、のちに聞きたまうては、隔てきこえけりとや思さむ」など、思ひ乱れて、

「今聞こえさせはべらむ」

とて、人びと参れば、聞こえさしつ。

大殿油など参りて、うちとけ並びおはします御ありさまども、いと見るかひ多かり。女君は、二十七八にはなりたまひぬらむかし、盛りにきよらにねびまさりたまへり。すこしほど経て見たてまつるは、「また、このほどにこそ、にほひ加はりたまひにけれ」と見えたまふ。

かの人をいとめでたし、劣らじと見たてまつりしかど、思ひなしにや、なほこよなきに、「幸ひのなきとあるとは、隔てあるべきわざかな」と見合はせらる。

大殿籠もるとて、右近を御脚参りに召す。

参り集ふ人のありさまども、見下さるる方なり。前より行く水をば、初瀬川といふなりけり。右近、

「二本の杉のたちどを尋ねずは

古川野辺に君を見ましや

うれしき瀬にも」

と聞こゆ。

「初瀬川はやくのことは知らねども

今日の逢ふ瀬に身さへ流れぬ」

と、うち泣きておはするさま、いとめやすし。

「容貌はいとかくめでたくきよげながら、田舎び、こちこちしうおはせましかば、いかに玉の瑕ならまし。いで、あはれ、いかでかく生ひ出でたまひけむ」と、おとどをうれしく思ふ。

母君は、ただいと若やかにおほどかにて、やはやはとぞ、たをやぎたまへりし。これは気高く、もてなしなど恥づかしげに、よしめきたまへり。筑紫を心にくく思ひなすに、皆、見し人は里びにたるに、心得がたくなむ。

暮るれば、御堂に上りて、またの日も行なひ暮らしたまふ。

秋風、谷より遙かに吹きのぼりて、いと肌寒きに、ものいとあはれなる心どもには、よろづ思ひ続けられて、人並々ならむこともありがたきことと思ひ沈みつるを、この人の物語のついでに、父大臣の御ありさま、腹々の何ともあるまじき御子ども、皆ものめかしなしたてたまふを聞けば、かかる下草頼もしくぞ思しなりぬる。

出づとても、かたみに宿る所も問ひ交はして、もしまた追ひ惑はしたらむ時と、危ふく思ひけり。右近が家は、六条の院近きわたりなりければ、ほど遠からで、言ひ交はすもたつき出で来ぬる心地しけり。

たらしく悲しうて、家かまどをも捨て、男女の頼むべき子どもにも引き別れてなむ、かへりて知らぬ世の心地する京にまうで来し。

あが御許、はやくよきさまに導ききこえたまへ。高き宮仕へしたまふ人は、おのづから行き交じりたるたよりものしたまふらむ。父大臣に聞こしめされ、数まへられたまふべきたばかり、思し構へよ」

と言ふ。恥づかしう思いて、うしろ向きたまへり。

「いでや、身こそ数ならねど、殿も御前近く召し使ひたまへば、ものの折ごとに、『いかにならせたまひにけむ』と聞こえ出づるを、聞こしめし置きて、『われいかで尋ねきこえむと思ふを、聞き出でたてまつりたらば』となむ、のたまはする」

と言へば、

「大臣の君は、めでたくおはしますとも、さるやむごとなき妻どもおはしますなり。まづまことの親とおはする大臣にを知らせたてまつりたまへ」
など言ふに、ありしさまなど語り出でて、

「世に忘れがたく悲しきことになむ思して、『かの御代はりに見たてまつらむ。子も少なきがさうざうしきに、わが子を尋ね出でたると人には知らせて』と、そのかみよりのたまふなり。

心の幼かりけることは、よろづにもものつつましかりしほどにて、え尋ねても聞こえで過ごししほどに、少式になりたまへるよしは、御名にて知りなき。まかり申しに、殿に参りたまへりし日、ほの見たてまつりしかども、え聞こえで止みにき。

さりととも、姫君をば、かのありし夕顔の五条にぞとどめたてまつりたまへらむとぞ思ひし。あな、いみじや。田舎人にておはしまさましょ」

など、うち語らひつつ、日一日、昔物語、念誦などしつ。

「いとかしこきことかな。たゆみなく祈り申しはべる験にこそはべれ」と言ふ。いと騒がしう、夜一夜行なふなり。

明けぬれば、知れる大徳の坊に下りぬ。物語、心やすくとなるべし。姫君のいたくやつれたまへる、恥づかしげに思したるさま、いとめでたく見ゆ。

「おぼえぬ高き交じらひをして、多くの人をなむ見集むれど、殿の上の御かたちに似る人おはせじとなむ、年ごろ見たてまつるを、また、生ひ出でたまふ姫君の御さま、いとことわりにめでたくおはします。かしづきたてまつりたまふさまも、並びなかめるに、かうやつれたまへる御さまの、劣りたまふまじく見えたまふは、ありがたうなむ。

大臣の君、父みかどの御時より、そこらの女御、后、それより下は残るなく見たてまつり集めたまへる御目にも、当代の御母后と聞こえしと、この姫君の御かたちとをなむ、『よき人とはこれを言ふにやあらむとおぼゆる』と聞こえたまふ。見たてまつり並ぶるに、かの後の宮をば知りきこえず、姫君はきよらにおはしませど、まだ、片なりにて、生ひ先ぞ推し量られたまふ。

上の御かたちは、なほ誰か並びたまはむとなむ見たまふ。殿も、すぐれたりと思しためるを、言に出でては、何かは数へのうちには聞こえたまはむ。『我に並びたまへるこそ、君はおほけなけれ』となむ、戯れきこえたまふ。

見たてまつるに、命延ぶる御ありさまどもを、またさるたぐひおはしましたなむやとなむ思ひはべるに、いづくか劣りたまはむ。ものは限りあるものなれば、すぐれたまへりとて、頂きを離れたる光やおはする。ただ、これを、すぐれたりとは聞こゆべきなめりかし」

と、うち笑みて見たてまつれば、若い人もうれしと思ふ。

「かかる御さまを、ほとほとあやしき所に沈めたてまつりぬべかりしに、あ

たてまつれば、今は思ひのごと、大臣の君の、尋ねたてまつらむの御心ざし深かめるに、知らせたてまつりて、幸ひあらせたてまつりたまへ」
など申しけり。

国々より、田舎人多く詣でたりけり。この国の守の北の方も、詣でたりけり。いかめしく勢ひたるをうらやみて、この三条が言ふやう、

「大悲者には、異事も申さじ。あが姫君、大弐の北の方、ならずは、当国の受領の北の方になしたてまつらむ。三条らも、随分に榮えて、返り申しは仕うまつらむ」

と、額に手を当てて念じ入りてをり。右近、「いとゆゆしくも言ふかな」と聞きて、

「いと、いたくこそ田舎びにけれな。中将殿は、昔の御おぼえだにいかがおはしましたし。まして、今は、天の下を御心にかけてたまへる大臣にて、いかばかりいつかしき御仲に、御方しも、受領の妻にて、品定まりておはしまさむよ」と言へば、

「あなかま。たまへ。大臣たちもしばし待て。大弐の御館の上の、清水の御寺、観世音寺に参りたまひし勢ひは、帝の行幸にやは劣れる。あな、むくつけ」とて、なほさらに手をひき放たず、拝み入りてをり。

筑紫人は、三日籠もらむと心ざしたまへり。右近は、さしも思はざりけれど、かかるついで、のどかに聞こえむとて、籠もるべきよし、大徳呼びて言ふ。御あかし文など書きたる心ばへなど、さやうの人はくくださうわきまへければ、常のことにて、

「例の藤原の瑠璃君といふが御ためにたてまつる。よく祈り申したまへ。その人、このころなむ見たてまつり出でたる。その願も果たしたてまつるべし」と言ふを聞くも、あはれなり。法師、

づらはしと思へども、

「いでや、聞こえてもかひなし。御方は、はや亡せたまひにき」

と言ふままに、二、三人ながらむせかへり、いとむつかしく、せきかねたり。

日暮れぬと、急ぎたちて、御燈明の事どもしたため果てて、急がせば、なかないと心あわたたしく立ち別る。「もろともにや」と言へど、かたみに供の人のあやしと思ふべければ、この介にも、ことのさままだに言ひ知らせあへず。われも人もことに恥づかしくはあらで、皆下り立ちぬ。

右近は、人知れず目とどめて見るに、なかにうつくしげなるうしろでの、いといったうやつれて、卯月の単衣めくものに着こめたまへる髪の透影、いとあたらしくめでたく見ゆ。心苦しう悲しと見たてまつる。

すこし足なれたる人は、とく御堂に着きにけり。この君をもてわづらひきこえつつ、初夜行なふほどにぞ上りたまへる。いと騒がしく人詣で混みてののしる。右近が局は、仏の右の方に近き間にしたり。この御師は、まだ深からねばにや、西の間に遠かりけるを、

「なほ、ここにおはしませ」

と、尋ね交はし言ひたれば、男どもをばとどめて、介にかうかうと言ひあはせて、こなたに移したてまつる。

「かくあやしき身なれど、ただ今の大殿になむさぶらひはべれば、かくかすかなる道にても、らうがはしきことははべらじと頼みはべる。田舎びたる人ならば、かやうの所には、よからぬなま者どもの、あなづらはしうするも、かたじけなきことなり」

とて、物語いとせまほしけれど、おどろおどろしき行なひの紛れ、騒がしきにもよほされて、仏拝みたてまつる。右近は心のうちに、

「この人を、いかで尋ねきこえむと申しわたりつるに、かつがつ、かくて見

とて、寄り来たり。田舎びたる搔練に衣など着て、いといたう太りにけり。わが齢もいとどおぼえて恥づかしけれど、

「なほ、さし覗け。われをば見知りたりや」

とて、顔さし出でたり。この女の手を打ちて、

「あが御許にこそおはしましたけれ。あな、うれしともうれし。いづくより参りたまひたるぞ。上はおはしますや」

と、いとおどろおどろしく泣く。若き者にて見なれし世を思ひ出づるに、隔て来にける年月数へられて、いとあはれなり。

「まづ、おとどはおはすや。若君は、いかがなりたまひにし。あてきと聞こえしは」

とて、君の御ことは、言ひ出でず。

「皆おはします。姫君も大人になりておはします。まづ、おとどに、かくなむと聞こえむ」

とて入りぬ。

皆、驚きて、

「夢の心地もするかな」

「いとつらく、言はむかたなく思ひきこゆる人に、対面しぬべきことよ」

とて、この隔てに寄り来たり。氣遠く隔てつる屏風だつもの、名残なくおし開けて、まづ言ひやるべき方なく泣き交はす。老い人は、ただ、

「わが君は、いかがなりたまひにし。ここらの年ごろ、夢にてもおはしますむ所を見むと、大願を立つれど、遙かなる世界にて、風の音にてもえ聞き伝へたてまつらぬを、いみじく悲しと思ふに、老いの身の残りにとどまりたるも、いと心憂けれど、うち捨てたてまつりたまへる若君の、らうたくあはれにておはしますを、冥途のほだしにもてわづらひきこえてなむ、またたきはべる」

と言ひ続ければ、昔その折、いふかひなかりしことよりも、応へむ方なくわ

さるは、かの世とともに恋ひ泣く右近なりけり。年月に添へて、はしたなき交じらひのつきなくなりゆく身を思ひなやみて、この御寺になむたびたび詣でける。

例ならひにければ、かやすく構へたりけれど、徒歩より歩み堪へがたくて、寄り臥したるに、この豊後介、隣の軟障のもとに寄り来て、参り物なるべし、折敷手づから取りて、

「これは、御前に参らせたまへ。御台などうちあはで、いとかたはらいたしや」

と言ふを聞くに、「わが並の人にはあらじ」と思ひて、物のはさまより覗けば、この男の顔、見し心地す。誰とはえおぼえず。いと若かりしほどを見しに、太り黒みてやつれたれば、多くの年隔てたる目には、ふとしも見分かぬなりけり。

「三条、ここに召す」

と呼び寄する女を見れば、また見し人なり。

「故御方に、下人なれど、久しく仕うまつりなれて、かの隠れたまへりし御住みかまでありし者なりけり」

と見なして、いみじく夢のやうなり。主とおぼしき人は、いとゆかしけれど、見ゆべくも構へず。思ひわびて、

「この女に問はむ。兵藤太といひし人も、これにこそあらめ。姫君のおはするにや」

と思ひ寄るに、いと心もとなくて、この中隔てなる三条を呼ばすれど、食ひ物に心入れて、とみにも来ぬ、いと憎しとおぼゆるも、うちつけなりや。

からうして、

「おぼえずこそはべれ。筑紫の国に、二十年ばかり経にける下衆の身を、知らせたまふべき京人よ。人違へにやはべらむ」

「いかなる罪深き身にて、かかる世にさすらふらむ。わが親、世に亡くなりたまへりとも、われをあはれと思さば、おはすらむ所に誘ひたまへ。もし、世におはせば、御顔見せたまへ」

と、仏を念じつつ、ありけむさまをだにおぼえねば、ただ、「親おはせましかば」とばかりの悲しさを、嘆きわたりたまへるに、かくさしあたりて、身のわりなきままに、取り返しいみじくおぼえつつ、からうして、椿市といふ所に、四日といふ巳の時ばかりに、生ける心地もせで、行き着きたまへり。

歩むともなく、とかくつくろひたれど、足のうら動かれず、わびしければ、せむかたなくて休みたまふ。この頼もし人なる介、弓矢持ちたる人二人、さては下なる者、童など二、四人、女ばらある限り三人、壺装束して、樋洗めく者、古き下衆女二人ばかりとぞある。

いとかすかに忍びたり。大御燈明のことなど、ここにてし加へなどするほどに日暮れぬ。家あるじの法師、

「人宿したてまつらむとする所に、何人のものしたまふぞ。あやしき女どもの、心にまかせて」

とむつかるを、めざましく聞くほどに、げに、人びと来ぬ。

これも徒歩よりなめり。よろしき女二人、下人どもぞ、男女、数多かむめる。馬四つ、五つ牽かせて、いみじく忍びやつしたれど、きよげなる男どもなどあり。

法師は、せめてここに宿さまほしくして、頭搔きありく。いとほしけれど、また、宿り替へむもさま悪しくわづらはしければ、人びとは奥に入り、他に隠しなどして、かたへは片つ方に寄りぬ。軟障などひき隔てておはします。

この来る人も恥づかしげもなし。いたうかいひそめて、かたみに心づかひしたり。

九条に、昔知れりける人の残りたりけるを訪らひ出でて、その宿りを占め置きて、都のうちといへど、はかばかしき人の住みたるわたりにもあらず、あやしき市女、商人のなかにて、いぶせく世の中を思ひつつ、秋にもなりゆくままに、来し方行く先、悲しきこと多かり。

豊後介といふ頼もし人も、ただ水鳥の陸に惑へる心地して、つれづれにならはぬありさまのたづきなきを思ふに、帰らむにもはしたなく、心幼く出で立ちにけるを思ふに、従ひ来たりし者どもも、類に触れて逃げ去り、本の国に帰り散りぬ。

住みつくべきやうもなきを、母おとど、明け暮れ嘆きいとほしがれば、

「何か。この身は、いとやすくはべり。人一人の御身に代へたてまつりて、いづちもいづちもまかり失せなむに咎あるまじ。我らいみじき勢ひになりても、若君をさるものの中にはふらしたてまつりては、何心地かせまし」

と語らひ慰めて、

「神仏こそは、さるべき方にも導き知らせたてまつりたまはめ。近きほどに、八幡の宮と申すは、かしこにても参り祈り申したまひし松浦、筥崎、同じ社なり。かの国を離れたまふとても、多くの願立て申したまひき。今、都に帰りて、かくなむ御験を得てまかり上りたると、早く申したまへ」

とて、八幡に詣でさせたてまつる。そののわたり知れる人に言ひ尋ねて、五師とて、早く親の語らひし大徳残れるを呼びとりて、詣でさせたてまつる。

「うち次ぎては、仏の御なかには、初瀬なむ、日本のうちには、あらたなる験現したまふと、唐土にだに聞こえあむなり。まして、わが国のうちにこそ、遠き国の境とても、年経たまへれば、若君をば、まして恵みたまひてむ」

とて、出だし立てたてまつる。ことさらに徒歩よりと定めたり。ならばぬ心地に、いとわびしく苦しけれど、人の言ふままに、ものもおぼえで歩みたまふ。

「憂きことに胸のみ騒ぐ響きには

響の灘もさはらざりけり」

「川尻といふ所、近づきぬ」

と言ふにぞ、すこし生き出づる心地する。例の、舟子ども、

「唐泊より、川尻おすほどは」

と歌ふ声の、情けなきも、あはれに聞こゆ。

豊後介、あはれになつかしう歌ひすさみて、

「いとかなしき妻子も忘れぬ」

とて、思へば、

「げにぞ、皆うち捨ててける。いかなりぬらむ。はかばかしく身の助けと思ふ郎等どもは、皆率て来にけり。我を悪しと思ひて、追ひまどはして、いかがしなすらむ」と思ふに、「心幼くも、顧みせで、出でにけるかな」

と、すこし心のどまりてぞ、あさましき事を思ひ続けるに、心弱くうち泣かれぬ。

「胡の地の妻児をば虚しく棄て捐てつ」

と誦ずるを、兵部の君聞きて、

「げに、あやしのわざや。年ごろ従ひ来つる人の心にも、にはかに違ひて逃げ出でにしを、いかに思ふらむ」

と、さまざま思ひ続けらるる。

「帰る方とて、そこ所と行き着くべき故里もなし。知れる人と言ひ寄るべき頼もしき人もおぼえず。ただ一所の御ためにより、ここの年つき住み馴れつる世界を離れて、浮べる波風にただよひて、思ひめぐらす方なし。この人も、いかにしたてまつらむとするぞ」

と、あきれておぼゆれど、「いかがはせむ」とて、急ぎ入りぬ。

は、この監に同じ心ならずとて、仲違ひにたり。この監にあたまれては、いささかの身じろきせむも、所狭くなむあるべき。なかなかなる目をや見む」

と、思ひわづらひにたれど、姫君の人知れず思いたるさまの、いと心苦しくて、生きたらじと思ひ沈みたまへる、ことわりとおぼゆれば、いみじきことを思ひ構へて出で立つ。妹たちも、年ごろ経ぬるよるべを捨てて、この御供に出で立つ。

あてきと言ひしは、今は兵部の君といふぞ、添ひて、夜逃げ出でて舟に乗りける。大夫の監は、肥後に帰り行きて、四月二十日のほどに、日取りて来むとするほどに、かくて逃ぐるなりけり。

姉のおもとは、類広くなりて、え出で立たず。かたみに別れ惜しみて、あひ見むことの難きを思ふに、年経つる故里とて、ことに見捨てがたきこともなし。ただ、松浦の宮の前の渚と、かの姉おもとの別るるをなむ、顧みせられて、悲しかりける。

「浮島を漕ぎ離れても行く方や

いづく泊りと知らずもあるかな」

「行く先も見えぬ波路に舟出して

風にまかする身こそ浮きたれ」

いとあとはかなき心地して、うつぶし臥したまへり。

「かく、逃げぬるよし、おのづから言ひ出で伝へば、負けじ魂にて、追ひ来なむ」と思ふに、心も惑ひて、早舟といひて、さまことになむ構へたりければ、思ふ方の風さへ進みて、危ふきまで走り上りぬ。響の灘もなだらかに過ぎぬ。

「海賊の舟にやあらむ。小さき舟の、飛ぶやうにて来る」

など言ふ者あり。海賊のひたぶるならむよりも、かの恐ろしき人の追ひ来るにやと思ふに、せむかたなし。

下りて行く際に、歌詠ままほしかりければ、やや久しう思ひめぐらして、
「君にもし心違はば松浦なる

鏡の神をかけて誓はむ

この和歌は、仕うまつりたりとなむ思ひたまふる」

と、うち笑みたるも、世づかずうひうひしや。あれにもあらねば、返すべくも思はねど、娘どもに詠ますれど、

「まろは、ましてものもおぼえず」

とてゐたれば、いと久しきに思ひわびて、うち思ひけるままに、

「年を経て祈る心の違ひなば

鏡の神をつらしとや見む」

とわななかし出でたるを、

「待てや。こはいかに仰せらるる」

と、ゆくりかに寄り来たるけはひに、おびえて、おとど、色もなくなりぬ。
娘たち、さはいへど、心強く笑ひて、

「この人の、さまことにものしたまふを、引き違へ、いづらは思はれむを、
なほ、ほけほけしき人の、神かけて、聞こえひがめたまふなめりや」

と解き聞かす。

「おい、さり、さり」とうなづきて、

「をかしき御口つきかな。なにがしら、田舎びたりといふ名こそはべれ、口
惜しき民にははべらず。都の人とても、何ばかりかあらむ。みな知りてはべり。
な思しあなづりそ」

とて、また、詠まむと思へれども、堪へずやありけむ、往ぬめり。

次郎が語らひ取られたるも、いと恐ろしく心憂くて、この豊後介を責むれば、
「いかがは仕まつるべからむ。語らひあはすべき人もなし。まれまれの兄弟

三十ばかりなる男の、丈高くものしく太りて、きたなげなけれど、思ひなし疎ましく、荒らかなる振る舞ひなど、見るもゆゆしくおぼゆ。色あひ心地よげに、声いたう嗔れてさへづりゐたり。懸想人は夜に隠れたるをこそ、よばひとは言ひけれ、さまかへたる春の夕暮なり。秋ならねども、あやしかりけりと見ゆ。

心を破らじとて、祖母おとど出で会ふ。

「故少弐のいと情けび、きらきらしくものしたまひしを、いかでかあひ語らひ申さむと思ひたまへしかども、さる心ざしをも見せ聞こえずはべりしほどに、いと悲しくて、隠れたまひにしを、その代はりに、一向に仕うまつるべくなむ、心ざしを励まして、今日は、いとひたぶるに、強ひてさぶらひつる。

このおはしますらむ女君、筋ことにうけたまはれば、いとかたじけなし。ただ、なにがしらが私の君と思ひ申して、いただきになむささげたてまつるべき。おとどもしぶしぶにおはしげなることは、よからぬ女どもあまたあひ知りてはべるを聞こしめし疎むななり。さりととも、すやつばらを、人並みにはしはべりなむや。わが君をば、後の位に落としたてまつらじものをや」

など、いとよげに言ひ続く。

「いかがは。かくのたまふを、いと幸ひありと思ひたまふるを、宿世つたなき人にやはべらむ、思ひ憚ることはべりて、いかでか人に御覧ぜられむと、人知れず嘆きはべるめれば、心苦しう見たまへわづらひぬる」

と言ふ。

「さらに、な思し憚りそ。天下に、目つぶれ、足折れたまへりとも、なにがしは仕うまつりやめてむ。国のうちの仏神は、おのれになむ靡きたまへる」
など、誇りゐたり。

「その日ばかり」と言ふに、「この月は季の果てなり」など、田舎びたることを言ひ逃る。

「いかで、かかることを聞かで、尼になりなむとす」

と言はせられたれば、いよいよあやふがりて、おしてこの国に越え来ぬ。

この男子どもを呼びとりて、語らふことは、

「思ふさまになりなば、同じ心に勢ひを交はすべきこと」

など語らふに、二人は赴きにけり。

「しばしこそ、似げなくあはれと思ひきこえけれ、おのおの我が身のよるべと頼まむに、いと頼もしき人なり。これに悪しくせられては、この近き世界にはめぐらひなむや」

「よき人の御筋といふとも、親に数まへられたてまつらず、世に知らでは、何のかひかはあらむ。この人のかくねむごろに思ひきこえたまへるこそ、今は御幸ひなれ」

「さるべきにてこそは、かかる世界にもおはしけめ。逃げ隠れたまふとも、何のたけきことかはあらむ」

「負けじ魂に、怒りなば、せぬことどもしてむ」

と言ひ脅せば、「いといみじ」と聞きて、中の兄なる豊後介なむ、

「なほ、いとたいだいしく、あたらしきことなり。故少弐ののたまひしこともあり。とかく構へて、京に上げたてまつりてむ」

と言ふ。娘どもも泣きまどひて、

「母君のかひなくてさすらへたまひて、行方をだに知らぬかはりに、人なみなみにて見たてまつらむとこそ思ふに」

「さるものの中に混じりたまひなむこと」

と思ひ嘆くをも知らで、「我はいとおぼえ高き身」と思ひて、文など書いておこす。手などきたなげなう書いて、唐の色紙、香ばしき香に入れしめつつ、をかしく書きたりと思ひたる言葉ぞ、いとたみたりける。みづからも、この家の次郎を語らひとりて、うち連れて来たり。

聞きついつつ、好いたる田舎人ども、心かけ消息がる、いと多かり。ゆゆしくめざましくおぼゆれば、誰も誰も聞き入れず。

「容貌などは、さてもありぬべけれど、いみじきかたはのあれば、人にも見せで尼になして、わが世の限りは持たらむ」

と言ひ散らしたれば、

「故少弐の孫は、かたはなむあんなる」

「あたらしものを」

と、言ふなるを聞くもゆゆしく、

「いかさまにして、都に率てたてまつりて、父大臣に知らせたてまつらむ。

いときなきほどを、いとらうたしと思ひきこえたまへりしかば、さりともおろかには思ひ捨てきこえたまはじ」

など言ひ嘆くほど、仏神に願を立ててなむ念じける。

娘どもも男子どもも、所につけたるよすがども出で来て、住みつきにたり。

心のうちにこそ急ぎ思へど、京のことはいや遠ざかるやうに隔たりゆく。もの思し知るままに、世をいと憂きものに思して、年三などしたまふ。二十ばかりになりたまふままに、生ひととのほりて、いとあたらしくめでたし。

この住む所は、肥前国とぞいひける。そのわたりにもいささか由ある人は、まづこの少弐の孫のありさまを聞き伝えて、なほ、絶えず訪れ来るも、いといみじう、耳かしかましきまでなむ。

大夫監とて、肥後国に族広くて、かしこにつけてはおぼえあり、勢ひいかめしき兵ありけり。むくつけき心のなかに、いささか好きたる心混じりて、容貌ある女を集めて見むと思ひける。この姫君を聞きつけて、

「いみじきかたはありとも、我は見隠して持たらむ」

といとねむごろに言ひかかるを、いとむくつけく思ひて、

夢などに、いとたまさかに見えたまふ時などもあり。同じさまなる女など、添ひたまうて見えたまへば、名残心地悪しく悩みなどしければ、

「なほ、世に亡くなりたまひにけるなめり」

と思ひなるも、いみじくのみなむ。

少弐、任果てて上りなどするに、遙けきほどに、ことなる勢ひなき人は、たゆたひつつ、すがすがしくも出で立たぬほどに、重き病して、死なむとする心地にも、この君の十ばかりにもなりたまへるさまの、ゆゆしきまでをかしげなるを見たてまつりて、

「我さへうち捨てたてまつりて、いかなるさまにはふれたまはむとすらむ。

あやしき所に生ひ出でたまふも、かたじけなく思ひきこゆれど、いつしかも京に率てたてまつりて、さるべき人にも知らせたてまつりて、御宿世にまかせて見たてまつらむにも、都は広き所なれば、いと心やすかるべしと、思ひいそぎつるを、ここながら命堪へずなりぬること」

と、うしろめたがる。男子三人あるに、

「ただこの姫君、京に率てたてまつるべきことを思へ。わが身の孝をば、な思ひそ」

となむ言ひ置きける。

その人の御子とは、館の人にも知らせず、ただ「孫のかしづくべきゆゑある」とぞ言ひなしければ、人に見せず、限りなくかしづききこゆるほどに、にはかに亡せぬれば、あはれに心細くて、ただ京の出で立ちをすれど、この少弐の仲悪しかりける国の人多くなどして、とぎまかうさまに、懼ぢ憚りて、われにもあらで年を過ぐすに、この君、ねびととのひたまふままに、母君よりもまさりてきよらに、父大臣の筋さへ加はればにや、品高くうつくしげなり。心ばせおほどかにあらまほしうものしたまふ。

「まだ、よくも見なれたまはぬに、幼き人をとどめたてまつりたまはむも、うしろめたかるべし」

「知りながら、はた、率て下りねと許したまふべきにもあらず」

など、おのがじし語らひあはせて、いとうつくしう、ただ今から気高きよらなる御さまを、ことなるしつらひなき舟に乗せて漕ぎ出づるほどは、いとあはれになむおぼえける。

幼き心地に、母君を忘れず、折々に、

「母の御もとへ行くか」

と問ひたまふにつけて、涙絶ゆる時なく、娘どもも思ひこがるるを、「舟路ゆゆし」と、かつは諫めけり。

おもしろき所々を見つつ、

「心若うおはせしものを、かかる路をも見せたてまつるものにもがな」

「おはせましかば、われらは下らざらまし」

と、京の方を思ひやらるるに、帰る浪もうらやましく、心細きに、舟子どもの荒々しき声にて、

「うらがなしくも、遠く来にけるかな」

と、歌ふを聞くままに、二人さし向ひて泣きけり。

「舟人もたれを恋ふとか大島の

うらがなしげに声の聞こゆる」

「来し方も行方も知らぬ沖に出でて

あはれいづくに君を恋ふらむ」

鄙の別れに、おのがじし心をやりて言ひける。

金の岬過ぎて、「われは忘れず」など、世ともの言種になりて、かしこに到り着きては、まいて遙かなるほどを思ひやりて、恋ひ泣きて、この君をかしづきものにて、明かし暮らす。

年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔を、つゆ忘れたまはず、心々なる人のありさまどもを、見たまひ重ねるにつけても、「あらましかば」と、あはれに口惜しくのみ思し出づ。

右近は、何の人数ならねど、なほ、その形見と見たまひて、らうたきものにしたれば、古人の数に仕うまつり馴れたり。須磨の御移ろひのほどに、対の上の御方に、皆人びと聞こえ渡したまひしほどより、そなたにさぶらふ。心よくかいひそめたるものに、女君も思したれど、心のうちには、

「故君ものしたまはましかば、明石の御方ばかりのおぼえには劣りたまはざらまし。さしも深き御心ざしなかりけるをだに、落としあぶさず、取りしたためたまふ御心長さなりければ、まいて、やむごとなき列にこそあらざらめ、この御殿移りの数のうちには交じらひたまひなまし」

と思ふに、飽かず悲しくなむ思ひける。

かの西の京にとまりし若君をだに行方も知らず、ひとへにものを思ひつつみ、また、「今さらにかひなきことによりて、我が名漏らすな」と、口がためたまひしを憚りきこえて、尋ねても訪づれきこえざりしほどに、その御乳母の男、少式になりて、行きければ、下りにけり。かの若君の四つになる年ぞ、筑紫へは行きける。

母君の御行方を知らむと、よろづの神仏に申して、夜昼泣き恋ひて、さるべき所々を尋ねきこえけれど、つひにえ聞き出でず。

「さらばいかかはせむ。若君をだにこそは、御形見に見たてまつらめ、あやしき道に添へたてまつりて、遙かなるほどにおはせむことの悲しきこと。なほ、父君にほのめかさむ」

と思ひけれど、さるべきたよりもなきうちに、

「母君のおはしけむ方も知らず、尋ね問ひたまはば、いかが聞こえむ」

玉 鬘

玉

鬘

しばしこそ、「さのたまひしものを」など、情けつくれど、うはべこそあれ、つらきこと多かり。とあるもかかるも世の道理なれば、身一つの憂きことにて、嘆き明かし暮らす。ただ、この河内守のみぞ、昔より好き心ありて、すこし情けがりける。

「あはれにのたまひ置きし、数ならずとも、思し疎までのたまはせよ」
など追従し寄りて、いとあさましき心の見えければ、

「憂き宿世ある身にて、かく生きとまりて、果て果ては、めづらしきことどもを聞き添ふるかな」と、人知れず思ひ知りて、人にさなむとも知らせで、厄になりにけり。

ある人びと、いふかひなしと、思ひ嘆く。守も、いとつらう、

「おのれを厭ひたまふほどに。残りの御齡は多くものしたまふらむ。いかでか過ぐしたまふべき」

などぞ、あいなさかしらやなどぞ、はべるめる。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

とて、賜へれば、かたじけなくて持て行きて、

「なほ、聞こえたまへ。昔にはすこし思しのくことあらむと思ひたまふるに、同じやうなる御心のなつかしさを、いとどありがたき。すさびごとぞ用なきことと思へど、えこそすくよかに聞こえ返さね。女にては、負けきこえたまへらむに、罪ゆるされぬべし」

など言ふ。今は、ましていと恥づかしう、よろづのこと、うひうひしき心地すれど、めづらしきにや、え忍ばれざりけむ、

「逢坂の関やいかなる関なれば

しげき嘆きの仲を分くらむ

夢のやうになむ」

と聞こえたり。あはれもつらさも、忘れぬふしと思し置かれたる人なれば、折々は、なほ、のたまひ動かしけり。

かかるほどに、この常陸守、老いの積もりにや、悩ましくのみして、もの心細かりければ、子どもに、ただこの君の御ことをのみ言ひ置きて、

「よろづのこと、ただこの御心にのみ任せて、ありつる世に変はらで仕うまつれ」

とのみ、明け暮れ言ひけり。

女君、「心憂き宿世ありて、この人にさへ後れて、いかなるさまにはふれ惑ふべきにかあらむ」と思ひ嘆きたまふを見るに、

「命の限りあるものなれば、惜しみ止むべき方もなし。いかでか、この人の御ために残し置く魂もがな。わが子どもの心も知らぬを」

と、うしろめたう悲しきことに、言ひ思へど、心にえ止めぬものにて、亡せぬ。

にてかひなし。女も、人知れず昔のこと忘れねば、とりかへして、ものあはれなり。

「行くと来とせき止めがたき涙をや

絶えぬ清水と人は見るらむ

え知りたまはじかし」と思ふに、いとかひなし。

石山より出でたまふ御迎へに右衛門佐参りてぞ、まかり過ぎしかしこまりなご申す。昔、童にて、いとむつまじうらうたきものにしたまひしかば、かうぶりなど得しまで、この御徳に隠れたりしを、おぼえぬ世の騒ぎありしころ、ものの聞こえに憚りて、常陸に下りしをぞ、すこし心置きて年ごろは思しけれど、色にも出だしたまはず、昔のやうにこそあらねど、なほ親しき家人のうちには数へたまひけり。

紀伊守といひしも、今は河内守にぞなりにける。その弟の右近の将監解けて御供に下りしをぞ、とりわきてなし出でたまひければ、それにぞ誰も思ひ知りて、「などてすこしも、世に従ふ心をつかひけむ」など、思ひ出でける。

佐召し寄せて、御消息あり。「今は思し忘れぬべきことを、心長くもおはするかな」と思ひるたり。

「一日は、契り知られしを、さは思し知りけむや。

わくらばに行き逢ふ道を頼みしも

なほかひなしや潮ならぬ海

関守の、さもうらやましく、めざましかりしかな」

とあり。

「年ごろのとだえも、うひうひしくなりにけれど、心にはいつとなく、ただ今の心地するならひになむ。好き好きしう、いとど憎まれむや」

伊予介といひしは、故院崩れさせたまひて、またの年、常陸になりて下りしかば、かの帚木もいざなはれにけり。須磨の御旅居も遙かに聞きて、人知れず思ひやりきこえぬにしもあらざりしかど、伝へ聞こゆべきよすがだになくて、筑波嶺の山を吹き越す風も、浮きたる心地して、いささかの伝へだになくて、年月かさなりにけり。限れることもなかりし御旅居なれど、京に帰り住みたまひて、またの年の秋ぞ、常陸は上りける。

関入る日しも、この殿、石山に御願果しに詣でたまひけり。京より、かの紀伊守などいひし子ども、迎へに来たる人びと、「この殿かく詣でたまふべし」と告げければ、「道のほど騒がしかりなむものぞ」とて、まだ暁より急ぎけるを、女車多く、所狭うゆるぎ来るに、日たけぬ。

打出の浜来るほどに、「殿は、栗田山越えたまひぬ」とて、御前の人びと、道もさりあへず来込みぬれば、関山に皆下りゐて、ここかしこの杉の下に車どもかき下ろし、木隠れに居かしこまりて過ぐしたてまつる。車など、かたへは後らかし、先に立てなどしたれど、なほ、類広く見ゆ。

車十ばかりぞ、袖口、物の色あひなども、漏り出でて見えたる、田舎びず、よしありて、斎宮の御下りなにぞやうの折の物見車思し出でらる。殿も、かく世に榮え出でたまふめづらしさに、数もなき御前ども、皆目とどめたり。

九月晦日なれば、紅葉の色々こきませ、霜枯れの草むらむらをかしう見えわたるに、関屋より、さとくづれ出でたる旅姿どもの、色々の襖のつきづきしき縫物、括り染めのさまも、さるかたにをかしう見ゆ。御車は簾下ろしたまひて、かの昔の小君、今、右衛門佐なるを召し寄せて、

「今日の御関迎へは、え思ひ捨てたまはじ」

などのたまふ御心のうち、いとあはれに思し出づること多かれど、おほぞう

関 屋

関

屋

どにて、おほかたにも渡りたまふに、さしのぞきなどしたまひつつ、いとあなづらはしげにもてなしきこえたまはず。

かの大弐の北の方、上りて驚き思へるさま、侍従が、うれしきものの、今しばし待ちきこえざりける心浅さを、恥づかしう思へるほどなどを、今すこし問はず語りもせまほしけれど、いと頭いたう、うるさく、もの憂ければなむ。今またもついであらむ折に、思ひ出でて聞こゆべき、とぞ。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

まふを、

「そこになむ渡したてまつるべき。よろしき童女など、求めさぶらはせたまへ」

など、人びとの上まで思しやりつつ、訪らひきこえたまへば、かくあやしき蓬のもとには、置き所なきまで、女ばらも空を仰ぎてなむ、そなたに向きて喜びきこえける。

なげの御すさびにても、おしなべたる世の常の人をば、目止め耳立てたまはず、世にすこしこれとは思ほえ、心地にとまる節あるあたりを尋ね寄りたまふものと、人の知りたるに、かく引き違へ、何ごともなのめにだにあらぬ御ありさまを、ものめかし出でたまふは、いかなりける御心にかありけむ。これも昔の契りなめりかし。

今は限りと、あなづり果てて、さまさまに迷ひ散りあかれし上下の人びと、我も我も参らむと争ひ出づる人もあり。心ばへなど、はた、埋もれいたきまでよくおはする御ありさまに、心やすくならひて、ことなることなきなま受領などやうの家にある人は、ならばはずはしたなき心地するもありて、うちつけの心みえに参り帰り、君は、いにしへにもまさりたる御勢のほどにて、ものの思ひやりもまして添ひたまひにければ、こまやかに思しておきてたるに、にほひ出でて、宮の内やうやう人目見え、木草の葉もただすぐくあはれに見えなされしを、遣水かき払ひ、前裁のもとだちも涼しうしなしなどして、ことなるおぼえなき下家司の、ことに仕へまほしきは、かく御心とどめて思さるることなめりと見取りて、御けしき賜はりつつ、追従し仕うまつる。

二年ばかりこの古宮に眺めたまひて、東の院といふ所になむ、後は渡したてまつりたまひける。対面したまふことなどは、いとかたけれど、近きしめのほ

も、さまざまあはれになむ。今、のどかにぞ鄙の別れに衰へし世の物語も聞こえ尽くすべき。年経たまへらむ春秋の暮らしがたきなども、誰にかは愁へたまはむと、うらもなくおぼゆるも、かつは、あやしうなむ」

など聞こえたまへば、

「年を経て待つしるしなきわが宿を

花のたよりに過ぎぬばかりか」

と忍びやかにうちみじろきたまへるけはひも、袖の香も、「昔よりはねびまさりたまへるにや」と思さる。

月入り方になりて、西の妻戸の開きたるより、障はるべき渡殿だつ屋もなく、軒のつまも残りなければ、いとはなやかにさし入りたれば、あたりあたり見ゆるに、昔に変はらぬ御しつらひのさまなど、忍草にやつれたる上の見るめよりは、みやびかに見ゆるを、昔物語に塔こぼちたる人もありけるを思しあはするに、同じさまにて年古りにけるもあはれなり。ひたぶるにもものづつみしたるけはひの、さすがにあてやかなるも、心にくく思されて、さる方にて忘れじと心苦しく思ひしを、年ごころさまごまの思ひに、ほれぼれしくて隔てつるほど、つらしと思はれつらむと、いとほしく思す。

かの花散里も、あざやかに今めかしうなどは花やぎたまはぬ所にて、御目移しこよなからぬに、咎多う隠れにけり。

祭、御禊などのほど、御いそぎどもにことつけて、人のたてまつりたる物いろいろに多かるを、さるべき限り御心加へたまふ。中にもこの宮にはこまやかに思し寄りて、むつましき人びとに仰せ言賜ひ、下部どもなど遣はして、蓬払はせ、めぐりの見苦しきに、板垣といふもの、うち堅め繕はせたまふ。かう尋ね出でたまへりと、聞き伝へむにつけても、わが御ため面目なければ、渡りたまふことはなし。御文いとこまやかに書きたまひて、二条院近き所を造らせた

づかしき御ありさまにて対面せむも、いとつつましく思したり。大式の北の方のたてまつり置きし御衣どもをも、心ゆかず思されしゆかりに、見入れたまはざりけるを、この人びとの、香の御唐櫃に入れたりけるが、いとなつかしき香したるをたてまつりければ、いかがはせむに、着替へたまひて、かの煤けたる御几帳引き寄せておはす。

入りたまひて、

「年ごろの隔てにも、心ばかりは変はらずなむ、思ひやりきこえつるを、さしもおどろかいたまはぬ恨めしさに、今までこころみきこえつるを、杉ならぬ木立のしるさに、え過ぎでなむ、負けきこえにける」

とて、帷子をすこしかきやりたまへれば、例の、いとつつましげに、とみにも応へきこえたまはず。かくばかり分け入りたまへるが浅からぬに、思ひ起こしてぞ、ほのかに聞こえ出でたまひける。

「かかる草隠れに過ぐしたまひける年月のあはれも、おろかならず、また変はらぬ心ならひに、人の御心のうちもたどり知らずながら、分け入りはべりつる露けさなどを、いかが思す。年ごろのおこたり、はた、なべての世に思しゆるすらむ。今よりのちの御心になはざらむなむ、言ひしに違ふ罪も負ふべき」
など、さしも思されぬことも、情け情けしう聞こえなしたまふことども、あむめり。

立ちとどまりたまはむも、所のさまよりはじめ、まばゆき御ありさまなれば、つきづきしうのたまひすぐして、出でたまひなむとす。引き植ゑしならねど、松の木高くなりける年月のほどもあはれに、夢のやうなる御身のありさまも思し続けらる。

「藤波のうち過ぎがたく見えつるは

松こそ宿のしるしなりけれ

数ふれば、こよなう積もりぬらむかし。都に変はりにけることの多かりける

し老人なむ、変はらぬ声にてはべりつる」

と、ありさま聞こゆ。

いみじうあはれに、

「かかるしげき中に、何心地して過ぐしたまふらむ。今まで訪はざりけるよ」と、わが御心の情けなきも思し知らる。

「いかがすべき。かかる忍びあるきも難かるべきを、かかるついでならでは、え立ち寄らじ。変はらぬありさまならば、げにさこそはあらめと、推し量らるる人ざまになむ」

とはのたまひながら、ふと入りたまはむこと、なほつつましう思さる。ゆゑある御消息もいと聞こえまほしけれど、見たまひしほどの口遅さも、まだ変らずは、御使の立ちわづらはむもいとほしう、思しとどめつ。惟光も、

「さらにえ分けさせたまふまじき、蓬の露けさになむはべる。露すこし払はせてなむ、入らせたまふべき」

と聞こゆれば、

「尋ねても我こそ訪はめ道もなく

深き蓬のもとの心を」

と独りごちて、なほ下りたまへば、御先の露を、馬の鞭して払ひつつ入れたてまつる。

雨そそきも、なほ秋の時雨めきてうちそそけば、

「御傘さぶらふ。げに、木の下露は、雨にまさりて」

と聞こゆ。御指貫の裾は、いたうそほちぬめり。昔だにあるかなきかなりし中門など、まして形もなくなりて、入りたまふにつけても、いと無徳なるを、立ちまじり見る人なきぞ心やすかりける。

姫君は、さりととも待ち過ぐしたまへる心もしるく、うれしけれど、いと恥

動くけしきなり。わづかに見つけたる心地、恐ろしくさへおぼゆれど、寄りて、声づくれば、いともの古りたる声にて、まづしはぶきを先にたてて、

「かれは誰れぞ。何人ぞ」

と問ふ。名のりして、

「侍従の君と聞こえし人に、対面賜はらむ」

と言ふ。

「それは、ほかになむものしたまふ。されど、思しわくまじき女なむはべる」と言ふ声、いたうねび過ぎたれど、聞きし老人と聞き知りたり。

内には、思ひも寄らず、狩衣姿なる男、忍びやかにもてなし、なごやかなれば、見ならはずなりにける目にて、「もし、狐などの変化にや」とおぼゆれど、近う寄りて、

「たしかになむ、うけたまはらまほしき。変はらぬ御ありさまならば、尋ねきこえさせたまふべき御心ざしも、絶えずなむおはしますめるかし。今宵も行き過ぎがてに、止まらせたまへるを、いかが聞こえさせむ。うしろやすくを」

と言へば、女どもうち笑ひて、

「変はらせたまふ御ありさまならば、かかる浅茅が原を移ろひたまはでははべりなむや。ただ推し量りて聞こえさせたまへかし。年経たる人の心にも、たぐひあらじとのみ、めづらかなる世をこそは見たてまつり過ぎしはべれ」

と、ややくづし出でて、問はず語りもしつべきが、むつかしければ、

「よしよし。まづ、かくなむ、聞こえさせむ」

とて参りぬ。

「などかいと久しかりつる。いかにぞ。昔のあとも見えぬ蓬のしげさかな」とのたまへば、

「しかしかなむ、たどり寄りてはべりつる。侍従が叔母の少将といひはべり

しげく森のやうなるを過ぎたまふ。

大きな松に藤の咲きかかりて、月影になよびたる、風につきてきと匂ふがなつかしく、そこはかとなき香りなり。橋に変はりてをかしければ、さし出でたまへるに、柳もいたうしだりて、築地も障はらねば、乱れ伏したり。

「見し心地する木立かな」と思すは、早う、この宮なりけり。いとあはれにて、おし止めさせたまふ。例の、惟光はかかる御忍びありきに後れねば、さぶらひけり。召し寄せて、

「ここは、常陸の宮ぞかしな」

「しかはべる」

と聞こゆ。

「ここにありし人は、まだや眺むらむ。訪らふべきを、わざとものせむも所狭し。かかるついでに、入りて消息せよ。よく尋ね入りてを、うち出でよ。人違へしては、をこならむ」

とのたまふ。

ここには、いとど眺めまさるころにて、つくづくとおはしけるに、昼寝の夢に故宮の見えたまひければ、覚めて、いと名残悲しく思して、漏り濡れたる廂の端つ方おし拭はせて、ここかしこの御座引きつくろはせなどしつつ、例ならず世づきたまひて、

「亡き人を恋ふる袂のひまなきに

荒れたる軒のしづくさへ添ふ」

も、心苦しきほどになむありける。

惟光入りて、めぐるめぐる人の音する方やと見るに、いささかの人氣もせず。

「さればこそ、往き来の道に見入るれど、人住みげもなきものを」と思ひて、帰り参るほどに、月明くさし出でたるに、見れば、格子二間ばかり上げて、簾

命こそ知りはべらね」

など言ふに、

「いづら。暗うなりぬ」

と、つぶやかかれて、心も空にて引き出づれば、かへり見のみせられける。

年ごろわびつつも行き離れざりつる人の、かく別れぬることを、いと心細う思すに、世に用ゐらるまじき老人さへ、

「いでや、ことわりぞ。いかでか立ち止まりたまはむ。われらも、えこそ念じ果つまじけれ」

と、おのが身々につけたるたよりども思ひ出でて、止まるまじう思へるを、人悪ろく聞きおはす。

霜月ばかりになれば、雪、霰がちにて、ほかには消ゆる間もあるを、朝日、夕日をふせぐ蓬葎の蔭に深う積もりて、越の白山思ひやらるる雪のうちに、出で入る下人だになくて、つれづれと眺めたまふ。はかなきことを聞こえ慰め、泣きみ笑ひみ紛らはしつる人さへなくて、夜も塵がましき御帳のうちも、かたはらさびしく、もの悲しく思さる。

かの殿には、めづらし人に、いとどもの騒がしき御ありさまにて、いとやむごとなく思されぬ所々には、わざともえ訪れたまはず。まして、「その人はまだ世にやおはすらむ」とばかり思し出づる折もあれど、尋ねたまふべき御心ざしも急がであり経るに、年変はりぬ。

卯月ばかりに、花散里を思ひ出できこえたまひて、忍びて対の上に御暇聞こえて出でたまふ。日ごろ降りつる名残の雨、いますこしそそきて、をかしきほどに、月さし出でたり。昔の御ありき思し出でられて、艶なるほどの夕月夜に、道のほど、よろづのこと思し出でておはするに、形もなく荒れたる家の、木立

など言ひ知らするを、げにと思すも、いと悲しくて、つくづくと泣きたまふ。されど、動くべうもあらねば、よろづに言ひわづらひ暮らして、

「さらば、侍従をだに」

と、日の暮るるままに急げば、心あわたたしくて、泣く泣く、

「さらば、まづ今日は、かう責めたまふ送りばかりにまうではべらむ。かの聞こえたまふもことわりなり。また、思しわづらふもさることにはべれば、中に見たまふるも心苦しくなむ」

と、忍びて聞こゆ。

この人さへうち捨ててむとするを、恨めしうもあはれにも思せど、言ひ止むべき方もなくて、いとど音をのみたけきことにてもものしたまふ。

形見に添へたまふべき身馴れ衣も、しほなれたれば、年経ぬるしるし見せたまふべきものなくて、わが御髪の落ちたりけるを取り集めて、鬘にしたまへるが、九尺余ばかりにて、いとぎよらなるを、をかしげなる箱に入れて、昔の薫衣香のいとかうばしき、一壺具して賜ふ。

「絶ゆまじき筋を頼みし玉かづら

思ひのほかにかけ離れぬる

故ままの、のたまひ置きしこともありしかば、かひなき身なりとも、見果ててむとこそ思ひつれ。うち捨てらるるもことわりなれど、誰に見ゆづりてかと、恨めしうなむ」

とて、いみじう泣いたまふ。この人も、ものも聞こえやらず。

「ままの遺言は、さらにも聞こえさせず、年ごろの忍びがたき世の憂さを過ぐしはべりつるに、かくおぼえぬ道にいぎなはれて、遙かにまかりあくがるること」とて、

「玉かづら絶えてもやまじ行く道の

手向の神もかけて誓はむ

「出で立ちなむことを思ひながら、心苦しきありさまの見捨てたてまつりがたきを。侍従の迎へになむ参り来たる。心憂く思し隔てて、御みづからこそあからさまにも渡らせたまはね、この人をだに許させたまへとてなむ。などかうあはれげなるさまには」

とて、うちも泣くべきぞかし。されど、行く道に心をやりて、いと心地よげなり。

「故宮おはせしとき、おのれをば面伏せなりと思し捨てたりしかば、疎々しきやうになりそめにしかど、年ごろも、何かは。やむごとなきさまに思しあがり、大将殿などおはしまし通ふ御宿世のほどを、かたじけなく思ひたまへられしかばなむ、むつびきこえさせむも、憚ること多くて、過ぐしはべるを、世の中のかく定めもなかりければ、数ならぬ身は、なかなか心やすくはべるものなりけり。及びなく見たてまつりし御ありさまの、いと悲しく心苦しきを、近きほどはおこたる折も、のどかに頼もしくなむはべりけるを、かく遙かにまかりなむとすれば、うしろめたくあはれになむおぼえたまふ」

など語らへど、心解けてもいらへたまはず。

「いとうれしきことなれど、世に似ぬさまにて、何かは。かうながらこそ朽ちも失せめとなむ思ひはべる」

とのみのたまへば、

「げに、しかなむ思さるべけれど、生ける身を捨て、かくむくつけき住まひするたぐひははべらずやあらむ。大将殿の造り磨きたまはむにこそは、引きかへ玉の台にもなりかへらめとは、頼もしうははべれど、ただ今は、式部卿宮の御むすめよりほかに、心分けたまふ方もなかなり。昔より好き好きしき御心にて、なほざりに通ひたまひける所々、皆思し離れにたなり。まして、かうものはかなきさまにて、藪原に過ぐしたまへる人をば、心きよく我を頼みたまへるありさまと尋ねきこえたまふこと、いとかたくなむあるべき」

もあらずかし。詳しくは聞こえじ。いとほしう、もの言ひさがなきやうなり。冬になりゆくままに、いとど、かき付かむかたなく、悲しげに眺め過ぎたまふ。かの殿には、故院の御料の御八講、世の中ゆすりてしたまふ。ことに僧などは、なべてのは召さず、才すぐれ行なひにしみ、尊き限りを選らせたまひければ、この禅師の君参りたまへりけり。

帰りざまに立ち寄りたまひて、

「しかしか。権大納言殿の御八講に参りてはべるなり。いとかしこう、生ける浄土の飾りに劣らず、いかめしうおもしろきことどもの限りをなむしたまひつる。仏菩薩の変化の身にこそものしたまふめれ。五つの濁り深き世に、などて生まれたまひけむ」

と言ひて、やがて出でたまひぬ。

言少なに、世の人に似ぬ御あはひにて、かひなき世の物語をだにえ聞こえ合はせたまはず。「さても、かばかりつたなき身のありさまを、あはれにおぼつかなくて過ぐしたまふは、心憂の仏菩薩や」と、つらうおぼゆるを、「げに、限りなめり」と、やうやう思ひなりたまふに、大弐の北の方、にはかに来たり。

例はさしもむつびぬを、誘ひ立てむの心にて、たてまつるべき御装束など調じて、よき車に乗りて、面もち、けしき、ほこりかにも思ひなげなるさまして、ゆくりもなく走り来て、門開けさするより、人悪ろく寂しきこと、限りもなし。左右の戸もみなよろぼひ倒れにければ、男ども助けてとかく開け騒ぐ。いづれか、この寂しき宿にもかならず分けたる跡あなる三つの径と、たどる。

わづかに南面の格子上げたる間に寄せたれば、いとどはしたなしと思したれど、あさましう煤けたる几帳さし出でて、侍従出で来たり。容貌など、衰へにけり。年ごろいたうつひえたれど、なほものきよげによしあるさまして、かたじけなくとも、取り変へつべく見ゆ。

大弐の北の方、

「さればよ。まさに、かくたづきなく、人悪ろき御ありさまを、数まへたまふ人はありなむや。仏、聖も、罪軽きをこそ導きよくしたまふなれ、かかる御ありさまにて、たけく世を思し、宮、上などのおはせし時のままにならひたまへる、御心おごりの、いとほしきこと」

と、いとどをこがましげに思ひて、

「なほ、思ほし立ちね。世の憂き時は、見えぬ山路をこそは尋ぬなれ。田舎などは、むつかしきものと思しやるらめど、ひたぶるに人悪ろげには、よも、もてなしきこえじ」

など、いと言よく言へば、むげに屈んじにたる女ばら、

「さもなびきたまはなむ。たけきこともあるまじき御身を、いかに思して、かく立てたる御心ならむ」

と、もどきつぶやく。

侍従も、かの大弐の甥だつ人、語らひつきて、とどむべくもあらざりければ、心よりほかに出で立ちて、

「見たてまつり置かむが、いと心苦しきを」

とて、そそのかしきこゆれど、なほ、かくかけ離れて久しうなりたまひぬる人に頼みをかけたまふ。御心のうちに、「さりとも、あり経ても、思し出づるついであらじやは。あはれに心深き契りをしたまひしに、わが身は憂くて、かく忘られたるにこそあれ、風のつてにても、我かくいみじきありさまを聞きつきたまはば、かならず訪らひ出でたまひてむ」と、年ごろ思しければ、おほかたの御家居も、ありしよりけにあさましけれど、わが心もて、はかなき御調度どもなども取り失はせたまはず、心強く同じさまにて念じ過ごしたまふなりけり。

音泣きがちに、いと思し沈みたるは、ただ山人の赤き木の実一つを顔に放たぬと見えたまふ、御側目などは、おぼろけの人の見たてまつりゆるすべきに

べる」

と聞こえけり。この侍従も、常に言ひもよほせど、人にいどむ心にはあらで、ただこちたき御ものづつみなれば、さもむつびたまはぬを、ねたしとなむ思ひける。

かかるほどに、かの家主、大弐になりぬ。娘どもあるべきさまに見置きて、下りなむとす。この君を、なほも誘はむの心深くて、

「はるかに、かくまかりなむとするに、心細き御ありさまの、常にしも訪らひきこえねど、近き頼みはべりつるほどこそあれ、いとあはれにうしろめたくなむ」

など、言よがるを、さらに受け引きたまはねば、

「あな、憎。ことごとしや。心一つに思し上がるとも、さる藪原に年経たまふ人を、大将殿も、やむごとなくしも思ひきこえたまはじ」

など、怨じうけひけり。

さるほどに、げに世の中に赦されたまひて、都に帰りたまふと、天の下の喜びにて立ち騒ぐ。我もいかで、人より先に、深き心ぎしを御覽ぜられむとのみ、思ひきほふ男、女につけて、高きをも下れるをも、人の心ばへを見たまふに、あはれに思し知ること、さまざまなり。かやうに、あわたたしきほどに、さらに思ひ出でたまふけしき見えで月日経ぬ。

「今は限りなりけり。年ごろ、あらぬさまなる御さまを、悲しういみじきことを思ひながらも、萌え出づる春に逢ひたまはなむと念じわたりつれど、たびしかはらなどまで喜び思ふなる、御位改まりなどするを、よそにのみ聞くべきなりけり。悲しかりし折のうれはしきは、ただわが身一つのためになれるとおぼえし、かひなき世かな」と、心くだけで、つらく悲しければ、人知れず音のみ泣きたまふ。

時々のまさぐりものにしたまふ。

古歌とても、をかしきやうに選り出で、題をも読人をもあらはし心得たるこそ見所もありけれ、うるはしき紙屋紙、陸奥紙などのふくだめるに、古言どもの目馴れたるなどは、いとすさまじげなるを、せめて眺めたまふ折々は、ひき広げたまふ。今の世の人のすめる、経うち読み、行なひなどいふことは、いと恥づかしくしたまひて、見たてまつる人もなければ、数珠など取り寄せたまはず。かやうにうるはしくぞものしたまひける。

侍従などいひし御乳母子のみこそ、年ごろあくがれ果てぬ者にてさぶらひつれど、通ひ参りし齋院亡せたまひなどして、いと堪へがたく心細きに、この姫君の母北の方のはらから、世におちぶれて受領の北の方になりたまへるありけり。

娘どもかしづきて、よろしき若人どもも、「むげに知らぬ所よりは、親どももまうで通ひしを」と思ひて、時々行き通ふ。この姫君は、かく人疎き御癖なれば、むつましくも言ひ通ひたまはず。

「おのれをばおとしめたまひて、面伏せに思したりしかば、姫君の御ありさまの心苦しげなるも、え訪らひきこえず」

など、なま憎げなる言葉ども言ひ聞かせつつ、時々聞こえけり。

もとよりありつきたるさやうの並々の人は、なかなかよき人の真似に心をつくろひ、思ひ上がるも多かるを、やむごとなき筋ながらも、かうまで落つべき宿世ありければにや、心すこしなほなほしき御叔母にぞありける。

「わがかく劣りのさまにて、あなづらはしく思はれたりしを、いかで、かかる世の末に、この君を、わが娘どもの使ひ人になしてしがな。心ばせなどの古びたる方こそあれ、いとうしろやすき後見ならむ」と思ひて、

「時々ここに渡らせたまひて。御琴の音もうけたまはらまほしがる人なむは

はかなきことにても、見訪らひきこゆる人はなき御身なり。ただ、御兄の禅師の君ばかりぞ、まれにも京に出でたまふ時は、さしのぞきたまへど、それも、世になき古めき人にて、同じき法師といふなかにも、たづきなく、この世を離れたる聖にもしたまひて、しげき草、蓬をだに、かき払はむものとも思ひ寄りたまはず。

かかるままに、浅茅は庭の面も見えず、しげき蓬は軒を争ひて生ひのぼる。葎は西東の御門を閉ぢこめたるぞ頼もしけれど、崩れがちなるめぐりの垣を馬、牛などの踏みならしたる道にて、春夏になれば、放ち飼ふ総角の心さへぞ、めざましき。

八月、野分荒かりし年、廊どもも倒れ伏し、下の屋どもの、はかなき板葺なりしなどは、骨のみわづかに残りて、立ちとまる下衆だになし。煙絶えて、あはれにいみじきこと多かり。

盗人などいふひたぶる心ある者も、思ひやりの寂しければにや、この宮をば不要のものに踏み過ぎて、寄り来ざりければ、かくいみじき野良藪なれども、さすがに寝殿のうちばかりは、ありし御しつらひ変らず、つややかに掻い掃きなどする人もなし。塵は積もれど、紛るることなきうるはしき御住まひにて、明かし暮らしたまふ。

はかなき古歌、物語などやうのすさびごとにてこそ、つれづれをも紛らはし、かかる住まひをも思ひ慰むるわざなめれ、さやうのことにも心遅くものしたまふ。わざと好ましからねど、おのづからまた急ぐことなきほどは、同じ心なる文通はしなどうちしてこそ、若き人は木草につけても心を慰めたまふべけれど、親のもてかしづきたまひし御心掟のままに、世の中をつつましきものに思して、まれにも言通ひたまふべき御あたりをも、さらに馴れたまはず、古りにたる御厨子開けて、『唐守』、『藐姑射の刀自』、『かぐや姫の物語』の絵に描きたるをぞ、

ぬもありて、月日に従ひては、上下人数少なくなりゆく。

もとより荒れたりし宮の内、いとど狐の棲みかになりて、うとましよう、気遠き木立に、梟の声を朝夕に耳ならしつ、人気にこそ、さやうのものもせかれ、て影隠しけれ、木霊など、けしからぬものども、所得て、やうやう形を現はし、ものわびしきことのみ数知らぬに、まれまれ残りてさぶらふ人は、

「なほ、いとわりなし。この受領どもの、おもしろき家造り好むが、この宮の木立を心につけて、放ちたまはせてむやと、ほとりにつきて、案内し申さずるを、さやうにせさせたまひて、いとかう、もの恐ろしからぬ御住まひに、思し移ろはなむ。立ちとまりさぶらふ人も、いと堪へがたし」

など聞こゆれど、

「あな、いみじや。人の聞き思はむこともあり。生ける世に、しか名残なきわぎ、いかがせむ。かく恐ろしげに荒れ果てぬれど、親の御影とまりたる心地する古き住みかと思ふに、慰みてこそあれ」

と、うち泣きつつ、思しもかけず。

御調度どもを、いと古代になれたるが、昔やうにてうるはしきを、なまものゆゑ知らむと思へる人、さるもの要じて、わぎとその人かの人にせさせたまへると尋ね聞きて、案内するも、おのづからかかる貧しきあたりと思ひあなづりて言ひ来るを、例の女ばら、

「いかがはせむ。そこそは世の常のこと」

とて、取り紛らはしつ、目に近き今日明日の見苦しさを繕はむとする時もあるを、いみじう諫めたまひて、

「見よと思ひたまひてこそ、しおかせたまひけめ。などてか、軽々しき人の家の飾りとはなきむ。亡き人の御本意違はむが、あはれなること」

とのたまひて、さるわぎはせさせたまはず。

藻塩垂れつつわびたまひしころほひ、都にも、さまざまに思し嘆く人多かりしを、さても、わが御身の抛り所あるは、一方の思ひこそ苦しげなりしか、二条の上なども、のどやかにて、旅の御住みかをもおぼつかなからず、聞こえ通ひたまひつつ、位を去りたまへる仮の御よそひをも、竹の子の世の憂き節を、時々につけてあつかひきこえたまふに、慰めたまひけむ、なかなか、その数と人にも知られず、立ち別れたまひしほどの御ありさまをも、よそのことに思ひやりたまふ人びとの、下の心くだきたまふたぐひ多かり。

常陸宮の君は、父親王の亡せたまひにし名残に、また思ひあつかふ人もなき御身にて、いみじう心細げなりしを、思ひかけぬ御ことの出で来て、訪らひきこえたまふこと絶えざりしを、いかめしき御勢にこそ、ことにもあらず、はかなきほどの御情けばかりと思したりしかど、待ち受けたまふ袂の狭きに、大空の星の光を盪の水に映したる心地して過ぐしたまひしほどに、かかる世の騒ぎ出で来て、なべての世憂く思し乱れしまぎれに、わざと深からぬ方の心ざしはうち忘れたるやうにて、遠くおはしましにしのち、ふりはへてもえ尋ねきこえたまはず。その名残に、しばしは、泣く泣くも過ぐしたまひしを、年月経るままに、あはれにさびしき御ありさまなり。

古き女ばらなどは、

「いでや、いと口惜しき御宿世なりけり。おぼえず神仏の現はれたまへらむやうなりし御心ばへに、かかるよすがも人は出でおはするものなりけりと、ありがたう見たてまつりしを、おほかたの世の事といひながら、また頼む方なき御ありさまこそ、悲しけれ」

と、つぶやき嘆く。さる方にありつきたりしあなたの年ごろは、いふかひなきさびしさに目なれて過ぐしたまふを、なかなかすこし世づきてならひにける年月に、いと堪へがたく思ひ嘆くべし。すこしも、さてありぬべき人びとは、おのづから参りつきてありしを、皆次々に従ひて行き散りぬ。女ばらの命堪へ

蓬 生

蓬

生

と、いとまめやかにのたまふを、いといとほしと思して、寄りて、拭ごひたまへば、

「平中がやうに色どり添へたまふな。赤からむはあへなむ」と、戯れたまふさま、いとをかしき妹背と見えたまへり。

日のいとうらかなるに、いつしかと霞みわたれる梢どもの、心もとなきなかにも、梅はけしきばみ、ほほ笑みわたれる、とりわきて見ゆ。階隠のもとの紅梅、いととく咲く花にて、色づきにけり。

「紅の花ぞあやなくうとまるる

梅の立ち枝はなつかしけれど

いでや」

と、あいなくうちうめかれたまふ。

かかる人びとの末々、いかなりけむ。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

「さへづる春は」

と、からうしてわななかし出でたり。

「さりや。年経ぬるしるしよ」と、うち笑ひたまひて、「夢かとぞ見る」

と、うち誦じて出でたまふを、見送りて添ひ臥したまへり。口おほひの側目より、なほ、かの末摘花、いとにほひやかにさし出でたり。見苦しのわざやと思さる。

二条院におはしたれば、紫の君、いともうつくしき片生ひにて、「紅はかうなつかしきもありけり」と見ゆるに、無紋の桜の細長、なよらかに着なして、何心もなくものしたまふさま、いみじうらうたし。古代の祖母君の御なごりにて、齒黒めもまだしかりけるを、ひきつくろはせたまへれば、眉のけぎやかになりたるも、うつくしうきよらなり。「心から、などか、かう憂き世を見あつかふらむ。かく心苦しきものも見てゐたらで」と、思しつつ、例の、もろともに雛遊びしたまふ。

絵など描きて、色どりたまふ。よろづにをかしうすさび散らしたまひけり。我も描き添へたまふ。髪いと長き女を描きたまひて、鼻に紅をつけて見たまふに、画に描きても見ま憂きさましたり。わが御影の鏡台にうつれるが、いときよらなるを見たまひて、手づからこの赤鼻を描きつけ、にほはして見たまふに、かくよき顔だに、さてまじれらむは見苦しかるべかりけり。姫君、見て、いみじく笑ひたまふ。

「まろが、かくかたはになりなむ時、いかならむ」とのたまへば、

「うたてこそあらめ」

とて、さもや染みつかむと、あやふく思ひたまへり。そら拭ごひをして、

「さらにこそ、白まね。用なきすさびわざなりや。内にいかにのたまはむとすらむ」

など、口々に言ふ。姫君も、おぼろけならでし出でたまひつるわざなれば、ものに書きつけて置きたまへりけり。

朔日のほど過ぎて、今年、男踏歌あるべければ、例の、所々遊びののしりたまふに、もの騒がしけれど、寂しき所のあはれに思しやらるれば、七日の日の節会果てて、夜に入りて、御前よりまかだたまひけるを、御宿直所にやがてとまりたまひぬるやうにて、夜更かしておはしたり。

例のありさまよりは、けはひうちそよめき、世づいたり。君も、すこしたをやぎたまへるけしきもてつけたまへり。「いかにぞ、改めてひき変へたらむ時」とぞ、思しつづけらるる。

日さし出づるほどに、やすらひなして、出でたまふ。東の妻戸、おし開けたれば、向ひたる廊の、上もなくあばれたれば、日の脚、ほどなくさし入りて、雪すこし降りたる光に、いとけぎやかに見入れらる。

御直衣などたてまつるを見出だして、すこしさし出でて、かたはら臥したまへる頭つき、こぼれ出でたるほど、いとめでたし。「生ひなほりを見出でたらむ時」と思されて、格子引き上げたまへり。

いとほしかりしもの懲りに、上げも果てたまはで、脇息をおし寄せて、うちかけて、御鬢ぐきのしどけなきをつくろひたまふ。わりなう古めきたる鏡台の、唐櫛笥、搔上の箱など、取り出でたり。さすがに、男の御具さへほのぼのあるを、されてをかしと見たまふ。

女の御装束、「今日は世づきたり」と見ゆるは、ありし箱の心葉を、さながらなりけり。さも思しよらず、興ある紋つきてしるき表着ばかりぞ、あやしと思しける。

「今年だに、声すこし聞かせたまへかし。侍たるものはさし置かれて、御けしきの改まらむなむゆかしき」とのたまへば、

「取り隠さむや。かかるわざは人のするものにやあらむ」

と、うちうめきたまふ。「何に御覽せさせつらむ。我さへ心なきやうに」と、いと恥づかしくて、やをら下りぬ。

またの日、上にさぶらへば、台盤所にさしのぞきたまひて、

「くはや。昨日の返り事。あやしく心ばみ過ぐさるる」

とて、投げたまへり。女房たち、何ごとならむと、ゆかしがる。

「ただ梅の花の色のごと、三笠の山のをとめをば捨てて」

と、歌ひすさびて出でたまひぬるを、命婦は「いとをかし」と思ふ。心知らぬ人びとは、

「なぞ、御ひとりゑみは」と、とがめあへり。

「あらず。寒き霜朝に、搔練好める花の色あひや見えつらむ。御つづしり歌のいとほしき」と言へば、

「あながちなる御ことかな。このなかには、にほへる花もなかめり」

「左近の命婦、肥後の采女や混じらひつらむ」

など、心も得ず言ひしろふ。

御返りたてまつりたれば、宮には、女房つどひて、見めでけり。

「逢はぬ夜をへだつるなかの衣手に

重ねていとど見もし見よとや」

白き紙に、捨て書いたまへるしもぞ、なかなかをかしげなる。

晦日の日、夕つ方、かの御衣箱に、「御料」とて、人のたてまつれる御衣一領、葡萄染の織物の御衣、また山吹か何ぞ、いろいろ見えて、命婦ぞたてまつりたる。「ありし色あひを悪ろしとや見たまひけむ」と思ひ知らるれど、「かれはた、紅の重々しかりしをや。さりとも消えじ」と、ねび人どもは定むる。

「御歌も、これよりのは、道理聞こえて、したたかにこそあれ」

「御返りは、ただをかしき方にこそ」

御よそひとて、わざとはべるめるを、はしたなうはえ返しはべらず。ひとり引き籠めはべらむも、人の御心違ひはべるべければ、御覽ぜさせてこそは」と聞こゆれば、

「引き籠められなむは、からかりなまし。袖まきほさむ人もなき身にいとうれしき心ぎしにこそは」

とのたまひて、ことにもの言はれたまはず。「さても、あさましの口つきや。これこそは手づからの御ことの限りなめれ。侍従こそとり直すべかめれ。また、筆のしりとりる博士ぞなかべき」と、言ふかひなく思す。心を尽くして詠み出でたまひつらむほどを思すに、

「いともかしこき方とは、これをも言ふべかりけり」

と、ほほ笑みて見たまふを、命婦、面赤みて見たてまつる。

今様色の、えゆるすまじく艶なう古めきたる直衣の、裏表ひとしうこまやかなる、いとなほなほしう、つまづまぞ見えたる。「あさまし」と思すに、この文をひろげながら、端に手習ひすさびたまふを、側目に見れば、

「なつかしき色ともなしに何にこの

すゑつむ花を袖に触れけむ

色濃き花と見しかども」

など、書きけがしたまふ。花のとがめを、なほあるやうあらむと、思ひ合はする折々の、月影などを、いとほしきものから、をかしう思ひなりぬ。

「紅のひと花衣うすくとも

ひたすら朽す名をし立てずは

心苦しの世や」

と、いといたう馴れてひとりごつを、よきにはあらねど、「かうやうのかいなでにだにあらましかば」と、返す返す口惜し。人のほどの心苦しきに、名の朽ちなむはさすがなり。人びと参れば、

ど、もてなしに隠されて、口惜しうはあらざりきかし。劣るべきほどの人なりや。げに品にもよらぬわざなりけり。心ばせのなだらかに、ねたげなりしを、負けて止みにしかな」と、ものの折ごとには思し出づ。

年も暮れぬ。内の宿直所におはしますに、大輔の命婦参れり。御梳櫛などには、懸想だつ筋なく、心やすきものの、さすがにのたまひたはぶれなどして、使ひならしたまへれば、召しなき時も、聞こゆべき事ある折は、参う上りけり。

「あやしきことのはべるを、聞こえさせざらむもひがひがしう、思ひたまへわづらひて」

と、ほほ笑みて聞こえやらぬを、

「何さまのことぞ。我にはつつむことあらじと、なむ思ふ」とのたまへば、

「いかがは。みづからの愁へは、かしこくとも、まづこそは。これは、いと聞こえさせにくくなむ」

と、いたう言籠めたれば、

「例の、艶なる」と憎みたまふ。

「かの宮よりはべる御文」とて、取り出でたり。

「まして、これは取り隠すべきことかは」

とて、取りたまふも、胸つぶる。

陸奥紙の厚肥えたるに、匂ひばかりは深うしめたまへり。いとよう書きおほせたり。歌も、

「唐衣君が心のつらければ

袂はかくぞそぼちつつのみ」

心得ずうちかたぶきたまへるに、包みに、衣箱の重りかに古代なるうち置きで、おし出でたり。

「これを、いかでかは、かたはらいたく思ひたまへざらむ。されど、朔日の

わがかうて見馴れけるは、故親王のうしろめたしとたぐへ置きたまひけむ魂のしるべなめり」とぞ思さるる。

橘の木の埋もれたる、御隨身召して払はせたまふ。うらやみ顔に、松の木のおのれ起きかへりて、さとこぼるる雪も、「名に立つ末の」と見ゆるなどを、「いと深からずとも、なだらかなるほどにあひしらはむ人もがな」と見たまふ。

御車出づべき門は、まだ開けざりければ、鍵の預かり尋ね出でたれば、翁のいといみじきぞ出で来たる。娘にや、孫にや、はしたなる大ききの女の、衣は雪にあひて煤けまどひ、寒しと思へるけしき、深うて、あやしきものに火をただほのかに入れて袖ぐくみに持たり。翁、門をえ開けやらねば、寄りてひき助くる、いとかたくななり。御供の人、寄りてぞ開けつる。

「降りにける頭の雪を見る人も
劣らず濡らす朝の袖かな

『幼き者は形蔽れず』

とうち誦じたまひても、鼻の色に出でて、いと寒しと見えつる御面影、ふと思ひ出でられて、ほほ笑まれたまふ。「頭中将に、これを見せたらむ時、いかなることをよそへ言はむ、常にうかがひ来れば、今見つけられなむ」と、術なう思す。

世の常なるほどの、異なることなきならば、思ひ捨てても止みぬべきを、さだかに見たまひて後は、なかなかあはれにいみじくて、まめやかなるさまに、常に訪れたまふ。

黒貂の皮ならぬ、絹、綾、綿など、若い人どもの着るべきものたぐひ、かの翁のためまで、上下思しやりてたてまつりたまふ。かやうのまめやかごとも恥づかしげならぬを、心やすく、「さる方の後見にて育まむ」と思ほしとりて、さまことに、さならぬうちとけわざもしたまひけり。

「かの空蟬の、うちとけたりし宵の側目には、いと悪ろかりし容貌ざまなれ

やうなれど、昔物語にも、人の御装束をこそまづ言ひためれ。

聴し色のわりなう上白みたる一襲、なごりなう黒き桂重ねて、表着には黒貂の皮衣、いときよらに香ばしきを着たまへり。古代のゆゑづきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御よそひには、似げなうおどろおどろしきこと、いともてはやされたり。されど、げに、この皮なうて、はた、寒からましと見ゆる御顔ざまなるを、心苦しと見たまふ。

何ごとも言はれたまはず、我さへ口閉ぢたる心地したまへど、例のしじまも心みむと、とかう聞こえたまふに、いたう恥ぢらひて、口おほひしたまへるさへ、ひなび古めかしう、ことごとしく、儀式官の練り出でたる臂もちおぼえて、さすがにうち笑みたまへるけしき、はしたなうすすろびたり。いとほしくあはれにて、いとど急ぎ出でたまふ。

「頼もしき人なき御ありさまを、見そめたる人には、疎からず思ひむつびたまはむこそ、本意ある心地すべけれ。ゆるしなき御けしきなれば、つらう」など、ことつけて、

「朝日さす軒の垂氷は解けながら

などかつららの結ばほるらむ」

とのたまへど、ただ「むむ」とうち笑ひて、いと口重げなるもいとほしければ、出でたまひぬ。

御車寄せたる中門の、いといたうゆがみよろぼひて、夜目にこそ、しるきながらもよろづ隠ろへたること多かりけれ、いとあはれにさびしく荒れまどへるに、松の雪のみ暖かげに降り積める、山里の心地して、ものあはれなるを、「かの人びとの言ひし葎の門は、かうやうなる所なりけむかし。げに、心苦しくうたげならむ人をここに据ゑて、うしろめたう恋しと思はばや。あるまじきもの思ひは、それに紛れなむかし」と、「思ふやうなる住みかに合はぬ御ありさまは、取るべきかたなし」と思ひながら、「我ならぬ人は、まして見忍びてむや。

すくよかにて、何の栄えなきをぞ、口惜しう思す。

からうして明けぬるけしきなれば、格子手づから上げたまひて、前の前裁の雪を見たまふ。踏みあげたる跡もなく、はるばると荒れわたりて、いみじう寂しげなるに、ふり出でて行かむこともあはれにて、

「をかしきほどの空も見たまへ。尽きせぬ御心の隔てこそ、わりなけれ」と、恨みきこえたまふ。まだほの暗けれど、雪の光にいとどきよらに若う見えたまふを、若い人ども笑みさかえて見たてまつる。

「はや出でさせたまへ。あぢきなし。心うつくしきこそ」
など教へきこゆれば、さすがに、人の聞こゆることをえいなびたまはぬ御心にて、とかう引きつくろひて、ゐざり出でたまへり。

見ぬやうにて、外の方を眺めたまへれど、後目はただならず。「いかにぞ、うちとけまさりの、いささかもあらばうれしからむ」と思すも、あながちなる御心なりや。

まづ、居丈の高く、を背長に見えたまふに、「さればよ」と、胸つぶれぬ。うちつぎて、あなかたはと見ゆるものは、鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色づきたること、ことのほかにうたてあり。色は雪恥づかしく白うて真青に、額つきこよなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、おほかたおどろおどろしう長きなるべし。痩せたまへること、いとほしげにさらぼひて、肩のほどなどは、いたげなるまで衣の上まで見ゆ。「何に残りなう見あらはしつらむ」と思ふものから、めづらしきさまのしたれば、さすがに、うち見やられたまふ。

頭つき、髪のかかりはしも、うつくしげにめでたしと思ひきこゆる人びとも、をさをさ劣るまじう、桂の裾にたまりて引かれたるほど、一尺ばかりあまりたらむと見ゆ。着たまへるものどもをさへ言ひたつるも、もの言ひさがなき

あるにや。見てしがな」と思ほせど、けぎやかにとりなさむもまばゆし。うちとけたる宵居のほど、やをら入りたまひて、格子のはさまより見たまひけり。されど、みづからは見えたまふべくもあらず。几帳など、いたく損なはれたるものから、年経にける立ちど変はらず、おしやりなど乱れねば、心もとなく、御達四、五人ゐたり。御台、秘色やうの唐土のものなれど、人悪ろきに、何のくさはひもなくあはれげなる、まかでて人びと食ふ。

隅の間ばかりにぞ、いと寒げなる女ばら、白き衣のいひしらず煤けたるに、きたなげなる褶引き結ひつけたる腰つき、かたくなしげなり。さすがに櫛おし垂れて挿したる額つき、内教坊、内侍所のほどに、かかる者どもあるはやと、をかし。かけても、人のあたりに近うふるまふ者とも知りたまはざりけり。

「あはれ、さも寒き年かな。命長ければ、かかる世にもあふものなりけり」とて、うち泣くもあり。

「故宮おはしましし世を、などてからしと思ひけむ。かく頼みなくても過ぐるものなりけり」

とて、飛び立ちぬべくふるふもあり。

さまざまに人悪ろきことどもを、愁へあへるを聞きたまふも、かたはらいたければ、たちのきて、ただ今おはするやうにて、うちたたきたまふ。

「そそや」など言ひて、火とり直し、格子放ちて入れたてまつる。

侍従は、齋院に参り通ふ若人にて、この頃はなかりけり。いよいよあやしうひなびたる限りにて、見ならはぬ心地ぞする。

いとど、愁ふなりつる雪、かきたれいみじう降りけり。空の気色はげしう、風吹き荒れて、大殿油消えにけるを、ともしつくる人もなし。かの、ものに襲はれし折思し出でられて、荒れたるさまは劣らざめるを、ほどの狭う、人氣のすこしあるなどに慰めたれど、すごう、うたていざとき心地する夜のさまなり。

をかしうもあはれにも、やうかへて、心とまりぬべきありさまを、いと埋れ

ものの音ども、常よりも耳かしかましくて、かたがたいどみつつ、例の御遊びならず、大箏策、尺八の笛などの大声を吹き上げつつ、太鼓をさへ高欄のもとにまろばし寄せて、手づからうち鳴らし、遊びおはさうず。御いとまなきやうにて、せちに思す所ばかりにこそ、盗まはれたまへれ、かのわたりには、いとおぼつかなくて、秋暮れ果てぬ。なほ頼み来しかひなくて過ぎゆく。

行幸近くなりて、試楽などののしるころぞ、命婦は参れる。

「いかにぞ」など、問ひたまひて、いとほしとは思したり。ありさま聞こえて、

「いとかう、もて離れたる御心ばへは、見たまふる人さへ、心苦しく」など、泣きぬばかり思へり。「心にくくもてなして止みなむと思へりしことを、くたいてける、心もなくこの人の思ふらむ」をさへ思す。正身の、ものは言はで、思しうづもれたまふらむさま、思ひやりたまふも、いとほしければ、

「いとまなきほどぞや。わりなし」と、うち嘆いたまひて、「もの思ひ知らぬやうなる心ぎまを、懲らさむと思ふぞかし」

と、ほほ笑みたまへる、若ううつくしげなれば、我もうち笑まるる心地して、「わりなの、人に恨みられたまふ御齡や。思ひやり少なう、御心のままならむも、ことわり」と思ふ。

この御いそぎのほど過ぐしてぞ、時々おはしける。

かの紫のゆかり、尋ねとりたまひて、そのうつくしみに心入りたまひて、六条わたりにだに、離れまさりたまふめれば、まして荒れたる宿は、あはれに思しおこたらずながら、もの憂きぞ、わりなかりけると、ところせき御もの恥ぢを見あらはさむの御心も、ことになうて過ぎゆくを、またうちかへし、「見まさりするやうもありかし。手さぐりのたどたどしきに、あやしう、心得ぬことも

事ども多く定めらるる日にて、内にさぶらひ暮らしたまひつ。

かしこには、文をだにと、いとほしく思し出でて、夕つ方ぞありける。雨降り出でて、ところせくもあるに、笠宿りせむと、はた、思されずやありけむ。かしこには、待つほど過ぎて、命婦も、「いといとほしき御さまかな」と、心憂く思ひけり。正身は、御心のうちに恥づかしう思ひたまひて、今朝の御文の暮れぬれど、なかなか、咎とも思ひわきたまはざりけり。

「夕霧の晴るるけしきもまだ見ぬに

いぶせさそふる宵の雨かな

雲間待ち出でむほど、いかに心もとなう」

とあり。おはしますまじき御けしきを、人びと胸つぶれて思へど、

「なほ、聞こえさせたまへ」

と、そのかしあへれど、いとど思ひ乱れたまへるほどにて、え型のやうにも続けたまはねば、「夜更けぬ」とて、侍従ぞ、例の教へきこゆる。

「晴れぬ夜の月待つ里を思ひやれ

同じ心に眺めせずとも」

口々に責められて、紫の紙の、年経にければ灰おくれ古めいたるに、手はさすがに文字強う、中さだの筋にて、上下等しく書いたまへり。見るかひなううち置きたまふ。

いかに思ふらむと思ひやるも、安からず。

「かかることを、悔しなどは言ふにやあらむ。さりとていかがはせむ。我は、さりとも、心長く見果ててむ」と、思しなす御心を知らねば、かしこにはいみじうぞ嘆いたまひける。

大臣、夜に入りてまかだたまふに、引かれたてまつりて、大殿におはしましぬ。行幸のことを興ありと思ほして、君たち集りて、のたまひ、おのおの舞ども習ひたまふを、そのころのことにて過ぎゆく。

正身は、ただ我にもあらず、恥づかしくつつましきよりほかのことまたなければ、「今はかかるぞあはれなるかし、まだ世馴れぬ人、うちかしづかれたる」と、見ゆるしたまふものから、心得ず、なまいとほしとおぼゆる御さまなり。何ごとにつけてかは御心のとまらむ、うちうめかれて、夜深う出でたまひぬ。命婦は、「いかならむ」と、目覚めて、聞き臥せりけれど、「知り顔ならじ」とて、「御送りに」とも、声づくらず。君も、やをら忍びて出でたまひにけり。

二条院におはして、うち臥したまひても、「なほ思ふにかなひがたき世にこそ」と、思しつづけて、軽らかならぬ人の御ほどを、心苦しとぞ思しける。思ひ乱れておはするに、頭中将おはして、

「こよなき御朝寝かな。ゆるあらむかしとこそ、思ひたまへらるれ」と言へば、起き上がりたまひて、

「心やすき独り寝の床にて、ゆるびにけりや。内よりか」とのたまへば、

「しか。まかではべるままなり。朱雀院の行幸、今日なむ、楽人、舞人定めらるべきよし、昨夜うけたまはりしを、大臣にも伝へ申さむとてなむ、まかではべる。やがて帰り参りぬべうはべり」

と、いそがしげなれば、

「さらば、もろともに」

とて、御粥、強飯召して、客人にも参りたまひて、引き続きたれど、一つにたてまつりて、

「なほ、いとねぶたげなり」

と、とがめ出でつつ、

「隠いたまふこと多かり」

とぞ、恨みきこえたまふ。

君は、人の御ほどを思せば、「されくつがへる今様のよしばみよりは、こよなう奥ゆかしう」と思さるるに、いたうそそのかされて、みぎり寄りたまへるけはひ、忍びやかに、えひの香いとなつかしう薫り出でて、おほどかなるを、「さればよ」と思す。年ごろ思ひわたるさまなど、いとよくのたまひつづくれど、まして近き御答へは絶えてなし。「わりなのわざや」と、うち嘆きたまふ。

「いくそたび君がしじまにまけぬらむ

ものな言ひそと言はぬ頼みに

のたまひも捨ててよかし。玉だすき苦し」

とのたまふ。女君の御乳母子、侍従とて、はやりかなる若人、「いと心もとなう、かたはらいたし」と思ひて、さし寄りて、聞こゆ。

「鐘つきとぢめむことはさすがにて

答へまうきぞかつはあやなき」

いと若びたる声の、ことに重りかならぬを、人伝てにはあらぬやうに聞こえなせば、「ほどよりはあまえて」と聞きたまへど、

「めづらしきが、なかなか口ふたがるわざかな

言はぬをも言ふにまさると知りながら

おしこめたるは苦しかりけり」

何やかやと、はかなきことなれど、をかしきさまにも、まめやかにものたまへど、何のかひなし。

「いとかかるも、さまかはり、思ふ方ことにものしたまふ人にや」と、ねたくて、やをら押し開けて入りたまひにけり。

命婦、「あな、うたて。たゆめたまへる」と、いとほしければ、知らず顔にて、わが方へ往にけり。この若人ども、はた、世にたぐひなき御ありさまの音聞きに、罪ゆるしきこえて、おどろおどろしうも嘆かれず、ただ、思ひもよらずにはかにて、さる御心もなきをぞ、思ひける。

「人にも聞こえむやうも知らぬを」

とて、奥ぎまへみざり入りたまふさま、いとうひうひしげなり。うち笑ひて、
「いと若々しうおはしますこそ、心苦しけれ。限りなき人も、親などおはしてあつかひ後見きこえたまふほどこそ、若びたまふもことわりなれ、かばかり心細き御ありさまに、なほ世を尽きせず思し憚るは、つきなうこそ」と教へきこゆ。

さすがに、人の言ふことは強うもいなびぬ御心にて、

「答へきこえて、ただ聞け、とあらば。格子など鎖してはありなむ」とのたまふ。

「簀子などは便なうはべりなむ。おしたちて、あはあはしき御心などは、よも」

など、いとよく言ひなして、二間の際なる障子、手づからいと強く鎖して、御茵うち置きひきつくろふ。

いとつつましげに思したれど、かやうの人にも言ふらむ心ばへなども、夢に知りたまはざりければ、命婦のかう言ふを、あるやうこそはと思ひてものしたまふ。乳母だつ老い人などは、曹司に入り臥して、夕までひしたるほどなり。若き人、二、三人あるは、世にめでられたまふ御ありさまを、ゆかしきものと思ひきこえて、心げさうしあへり。よろしき御衣たてまつり変へ、つくろひきこゆれば、正身は、何の心げさうもなくておはす。

男は、いと尽きせぬ御さまを、うち忍び用意したまへる御けはひ、いみじうなまめきて、「見知らむ人にこそ見せめ、栄えあるまじきわたりを、あな、いとほし」と、命婦は思へど、ただおほどかにもものしたまふをぞ、「うしろやすう、さし過ぎたることは見えたてまつりたまはじ」と思ひける。「わが常に責められたてまつる罪さりごとに、心苦しき人の御もの思ひや出でこむ」など、やすからず思ひゐたり。

うまめやかにのたまふに、「聞き入れざらむも、ひがひがしかるべし。父親王おはしける折にだに、旧りにたるあたりとて、おとなひきこゆる人もなかりけるを、まして、今は浅茅分くる人も跡絶えたるに」。

かく世にめづらしき御けはひの、漏りにほひくるをば、なま女ばらなども笑み曲げて、「なほ聞こえたまへ」と、そそのかしたてまつれど、あさましうものづつみしたまふ心にて、ひたぶるに見も入れたまはぬなりけり。

命婦は、「さらば、さりぬべからむ折に、物越しに聞こえたまはむほど、御心につかずは、さても止みねかし。また、さるべきにて、仮にもおはし通はむを、とがめたまふべき人なし」など、あだめきたるはやり心はうち思ひて、父君にも、かかる事なども言はざりけり。

八月二十余日、宵過ぐるまで待たるる月の心もとなきに、星の光ばかりさやけく、松の梢吹く風の音心細くて、いにしへの事語り出でて、うち泣きなどしたまふ。「いとよき折かな」と思ひて、御消息や聞こえつらむ、例のいと忍びておはしたり。

月やうやう出でて、荒れたる籬のほどとましくうち眺めたまふに、琴そそのかさされて、ほのかにかき鳴らしたまふほど、けしうはあらず。「すこし、け近う今めきたる気をつけばや」とぞ、乱れたる心には、心もとなく思ひるたる。人目しなき所なれば、心やすく入りたまふ。命婦を呼ばせたまふ。今しもおどろき顔に、

「いとかたはらいたきわざかな。しかしかこそ、おはしましたなれ。常に、かう恨みきこえたまふを、心になはぬ由をのみ、いなびきこえはべれば、『みづからことわりも聞こえ知らせむ』と、のたまひわたるなり。いかが聞こえ返さむ。なみなみのたはやすき御ふるまひならねば、心苦しきを。物越しにて、聞こえたまはむこと、聞こしめせ」

と言へば、いと恥づかしと思ひて、

のたまふ。

わらは病みにわづらひたまひ、人知れぬもの思ひの紛れも、御心のいとまなきやうにて、春夏過ぎぬ。

秋のころほひ、静かに思いつづけて、かの砧の音も耳につきて聞きにくかりしさへ、恋しう思し出でらるるままに、常陸宮にはしばしば聞こえたまへど、なほおぼつかなうのみあれば、世づかず、心やましよう、負けては止まじの御心さへ添ひて、命婦を責めたまふ。

「いかなるやうぞ。いとかかる事こそ、まだ知らね」

と、いともものしと思ひてのたまへば、いとほしと思ひて、

「もて離れて、似げなき御事とも、おもむけはべらず。ただ、おほかたの御ものづつみのわりなきに、手をえさし出でたまはぬとなむ見たまふる」と聞こゆれば、

「それこそは世づかぬ事なれ。物思ひ知るまじきほど、独り身をえ心にまかせぬほどこそ、ことわりなれ、何事も思ひしづまりたまへらむ、と思ふこそ。そこはかとなく、つれづれに心細うのみおぼゆるを、同じ心に答へたまはむは、願ひかなふ心地なむすべき。何やかやと、世づける筋ならで、その荒れたる簀子にたたずまほしきなり。いとうたて心得ぬ心地するを、かの御許しなくとも、たばかれかし。心苛られし、うたてあるもてなしには、よもあらじ」

など、語らひたまふ。

なほ世にある人のありさまを、おほかたなるやうにて聞き集め、耳とどめたまふ癖のつきたまへるを、さうさうしき宵居など、はかなきついでに、さる人こそとばかり聞こえ出でたりしに、かくわざとがましようのたまひわたれば、「なまわづらはしく、女君の御ありさまも、世づかはしく、よしめきなどもあらぬを、なかなかなる導きに、いとほしき事や見えむなむ」と思ひけれど、君のか

その後、こなたかなたより、文などやりたまふべし。いづれも返り事見え、おぼつかなく心やましきに、「あまりうたてもあるかな。さやうなる住まひする人は、もの思ひ知りたるけしき、はかなき本草、空のけしきにつけても、とりなしなどして、心ばせ推し測らるる折々あらむこそあはれなるべけれ、重しとても、いとかうあまり埋もれたらむは、心づきなく、悪びたり」と、中將は、まいて心焦られしけり。例の、隔てきこえたまはぬ心にて、

「しかしかの返り事は見たまふや。試みにかすめたりしこそ、はしたなくて止みにしか」

と、憂ふれば、「さればよ、言ひ寄りにけるをや」と、ほほ笑まれて、

「いさ、見むとしも思はねばにや、見るとしもなし」

と、答へたまふを、「人わきしける」と思ふに、いとねたし。

君は、深うしも思はぬことの、かう情けなきを、すさまじく思ひなりたまひにしかど、かうこの中將の言ひありきけるを、「言多く言ひなれたらむ方にぞ靡かむかし。したり顔にて、もとのことを思ひ放ちたらむけしきこそ、憂はしかるべけれ」と思ひて、命婦をまめやかに語らひたまふ。

「おぼつかなく、もて離れたる御けしきなむ、いと心憂き。好き好きしき方に疑ひ寄せたまふにこそあらめ。さりとも、短き心ばへつかはぬものを。人の心のどやかなることなくて、思はずにのみあるになむ、おのづからわがあやまちにもなりぬべき。心のどかにて、親はらからのもてあつかひ恨むるもなう、心やすからむ人は、なかなかむらうたかるべきを」とのたまへば、

「いでや、さやうにをかしき方の御笠宿りには、えしもやと、つきなげにこそ見えはべれ。ひとへにもものづつみし、ひき入りたる方はしも、ありがたうものしたまふ人になむ」

と、見るありさま語りきこゆ。「らうらうじう、かどめきたる心はなきなめり。いと子めかしうおほどかならむこそ、らうたくはあるべけれ」と思し忘れず、

「かう慕ひありかば、いかにせさせたまはむ」と聞こえたまふ。

「まことは、かやうの御歩きには、隨身からこそはかばかしきこともあるべけれ。後らさせたまはでこそあらめ。やつれたる御歩きは、軽々しき事も出で来なむ」

と、おし返しいさめたてまつる。かうのみ見つけらるるを、ねたしと思せど、かの撫子はえ尋ね知らぬを、重き功に、御心のうちに思し出づ。

おのおの契れる方にも、あまえて、え行き別れたまはず、一つ車に乗りて、月のをかしきほどに雲隠れたる道のほど、笛吹き合せて大殿におはしぬ。

前駆なども追はせたまはず、忍び入りて、人見ぬ廊に御直衣ども召して、着替へたまふ。つれなう、今来るやうにて、御笛ども吹きすさびておはすれば、大臣、例の聞き過ぐしたまはで、高麗笛取り出でたまへり。いと上手におはすれば、いとおもしろう吹きたまふ。御琴召して、内にも、この方に心得たる人びとに弾かせたまふ。

中務の君、わざと琵琶は弾けど、頭の君心かけたるをもて離れて、ただこのたまさかなる御けしきのなつかしきをば、え背ききこえぬに、おのづから隠れなくて、大宮などもよろしからず思しなりたれば、もの思はしく、はしたなき心地して、すさまじげに寄り臥したり。絶えて見たてまつらぬ所に、かけ離れなむも、さすがに心細く思ひ乱れたり。

君たちは、ありつる琴の音を思し出でて、あはれげなりつる住まひのさまなども、やう変へてをかしう思ひつづけ、「あらましがごとくに、いとをかしうらうたき人の、さて年月を重ねるたらむ時、見そめて、いみじう心苦しうは、人にももて騒がるばかりや、わが心もさま悪しからむ」などさへ、中将は思ひけり。この君のかう気色ばみありきたまふを、「まさに、さては、過ぐしたまひてむや」と、なまねたう危ふがりけり。

む」

と聞こゆれば、たち返り、うち笑ひて、

「異人の言はむやうに、咎なあらはされそ。これをあだあだしきふるまひと
言はば、女のありさま苦しからむ」

とのたまへば、「あまり色めいたりと思して、折々かうのたまふを、恥づかし」
と思ひて、ものも言はず。

寢殿の方に、人のけはひ聞くやうもやと思して、やをら立ち退きたまふ。透
垣のただすこし折れ残りたる隠れの方に、立ち寄りたまふに、もとより立てる
男ありけり。「誰れならむ。心かけたる好き者ありけり」と思して、蔭につきて
立ち隠れたまへば、頭中将なりけり。

この夕つ方、内よりもろともにまかでたまひける、やがて大殿にも寄らず、
二条院にもあらで、引き別れたまひけるを、いづちならむと、ただならで、我
も行く方あれど、後につきてうかがひけり。あやしき馬に、狩衣姿のないがし
ろにて来ければ、え知りたまはぬに、さすがに、かう異方に入りたまひぬれば、
心も得ず思ひけるほどに、ものの音に聞きついて立てるに、帰りや出でたまふ
と、下待つなりけり。

君は、誰ともえ見分きたまはで、我と知られじと、抜き足に歩みたまふに、
ふと寄りて、

「ふり捨てさせたまへるつらさに、御送り仕うまつりつるは。

もろともに大内山は出でつれど

入る方見せぬいさよひの月」

と恨むるもねたけれど、この君と見たまふ、すこしをかしうなりぬ。

「人の思ひよらぬことよ」と憎む憎む、

「里わかぬかげをば見れどゆく月の

いるさの山を誰れか尋ぬる」

とて、召し寄するも、あいなう、いかが聞きたまはむと、胸つぶる。

ほのかに掻き鳴らしたまふ、をかしう聞こゆ。何ばかり深き手ならねど、ものの音がらの筋ことなるものなれば、聞きにくくも思されず。

「いといたう荒れわたりて寂しき所に、さばかりの人の、古めかしう、ところせく、かしづき据ゑたりけむ名残なく、いかに思ほし残すことなからむ。かやうの所にこそは、昔物語にもあはれなることどもありけれ」など思ひ続けても、ものや言ひ寄らまし、と思せど、うちつけにや思さむと、心恥づかしくて、やすらひたまふ。

命婦、かどある者にて、いたう耳ならさせたてまつらじ、と思ひければ、

「曇りがちにはべるめり。客人の来むとはべりつる、いとひ顔にもこそ。いま心のどかにを。御格子参りなむ」

とて、いたうもそそのかきで帰りたれば、

「なかなかなるほどにても止みぬるかな。もの聞き分くほどにもあらで、ねたう」

とのたまふけしき、をかしと思したり。

「同じくは、け近きほどの立ち聞きせさせよ」

とのたまへど、「心にくくて」と思へば、

「いでや、いとかすかなるありさまに思ひ消えて、心苦しげにものしたまふめるを、うしろめたきさまにや」

と言へば、「げに、さもあること。にはかに我も人もうちとけて語らふべき人の際は、際とこそあれ」など、あはれに思さるる人の御ほどなれば、

「なほ、さやうのけしきをほのめかせ」と、語らひたまふ。

また契りたまへる方やあらむ、いと忍びて帰りたまふ。

「上の、まめにおはしますと、もてなやみきこえさせたまふこそ、をかしう思うたまへらるる折々はべれ。かやうの御やつれ姿を、いかでかは御覧じつけ

らひ人と思へる」と聞こゆれば、

「三つの友にて、今一種やうたてあらむ」とて、「我に聞かせよ。父親王の、さやうの方にいとよしづきてもものしたまうければ、おしなべての手にはあらじ、となむ思ふ」とのたまへば、

「さやうに聞こし召すばかりにはあらずやはべらむ」

と言へど、御心とまるばかり聞こえなすを、

「いたうけしきばましや。このころのおぼろ月夜に忍びてもものせむ。まかだよ」

とのたまへば、わづらはしと思へど、内わたりものどやかなる春のつれづれにまかでぬ。

父の大輔の君は他にぞ住みける。ここには時々ぞ通ひける。命婦は、継母のあたりは住みもつかず、姫君の御あたりをむつびて、ここには来るなりけり。

のたまひもしるく、十六夜の月をかしきほどにおはしたり。

「いと、かたはらいたきわぎかな。ものの音澄むべき夜のさまにもはべらぎめるに」と聞こゆれど、

「なほ、あなたにわたりて、ただ一声も、もよほしきこえよ。むなしくて帰らむが、ねたかるべきを」

とのたまへば、うちとけたる住みかに据ゑたてまつりて、うしろめたうかたじけなしと思へど、寝殿に参りたれば、まだ格子もさながら、梅の香をかしきを見出だしたまふ。よき折かな、と思ひて、

「御琴の音、いかにまさりはべらむと、思ひたまへらるる夜のけしきに、誘はれはべりてなむ。心あわたたしき出で入りに、えうけたまはらぬこそ口惜しけれ」と言へば、

「聞き知る人こそあなれ。百敷に行き交ふ人の聞くばかりやは」

思へどもなほ飽かざりし夕顔の露に後れし心地を、年月経れど、思し忘れず、
ここもかしこも、うちとけぬ限りの、気色ばみ心深きかたの御いごましきに、
け近くうちとけたりしあはれに、似るものなう恋しく思ほえたまふ。

いかで、こととしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人の、つつましき
ことなからむ、見つけてしがなと、こりずまに思しわたれば、すこしゆゑづき
て聞こゆるわたりは、御耳とどめたまはぬ隈なきに、さてもやと、思し寄るば
かりのけはひあるあたりにこそ、一行をもほのめかしたまふめるに、なびきき
こえずもて離れたるは、をさをさあるまじきぞ、いと目馴れたるや。

つれなう心強きは、たとしへなう情けおくるるまめやかさなど、あまりもの
のほど知らぬやうに、さても過ぐしはせず、名残なくくづほれて、なほなほ
しき方に定まりなどするもあれば、のたまひさしつるも多かりける。

かの空蟬を、ものの折々には、ねたう思し出づ。萩の葉も、さりぬべき風の
たよりある時は、おどろかしたまふ折もあるべし。火影の乱れたりしさまは、
またさやうにても見まほしく思す。おほかた、名残なきもの忘れをぞ、えした
まはざりける。

左衛門の乳母とて、大弐のさしつぎに思いたるがむすめ、大輔の命婦とて、
内にさぶらふ、わかむどほりの兵部大輔なるむすめなりけり。いといたう色好
める若人にてありけるを、君も召し使ひなどしたまふ。母は筑前守の妻にて、
下りにければ、父君のもとを里にて行き通ふ。

故常陸親王の、末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御女、心細
くて残りゐたるを、ものついでに語りきこえければ、あはれのことやとて、
御心とどめて問ひ聞きたまふ。

「心ばへ容貌など、深き方はえ知りはべらず。かいひそめ、人疎うもてなし
たまへば、さべき宵など、物越しにてぞ、語らひはべる。琴をぞなつかしき語

未摘花

未
摘
花

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文
(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuyya/index.html>)

近は異人なりければ、「思ひ隔てて、御ありさまを聞かせぬなりけり」と、泣き恋ひけり。右近はた、かしかましく言ひ騒がむを思ひて、君も今さらに漏らさじと忍びたまへば、若君の上をだにえ聞かず、あさましく行方なくて過ぎゆく。

君は、「夢をだに見ばや」と思しわたるに、この法事したまひてまたの夜、ほのかに、かのありし院ながら、添ひたりし女のさまも同じやうにて見えければ、「荒れたりし所に住みけむ物の、我に見入れけむたよりに、かくなりぬること」と、思し出づるにもゆゆしくなむ。

伊予介、神無月の朔日ごろに下る。女房の下らむにとて、たむけ心ことにせさせたまふ。また、内々にもわざとしたまひて、こまやかにをかきさまなる櫛、扇多くして、幣などわざとがましくて、かの小桂も遣はず。

「逢ふまでの形見ばかりと見しほどに　　ひたすら袖の朽ちにけるかな
こまかなることどもあれど、うるさければ書かず。」

御使、帰りにけれど、小君して、小桂の御返りばかりは聞こえさせたり。

「蝉の羽もたちかへてける夏衣　　かへすを見てもねは泣かれけり」

「思へど、あやしう人に似ぬ心強さにても、ふり離れぬるかな」と思ひ続けたまふ。今日ぞ冬立つ日なりけるもしるくうちしぐれて、空の気色いとあはれなり。眺め暮らしたまひて、

「過ぎにしも今日別るるも二道に　　行く方知らぬ秋の暮かな」

なほ、かく人知れぬことは苦しかりけりと、思し知りぬらむかし。かやうのくだくだしきことは、あながちに隠ろへ忍びたまひしもいとほしくて、みな漏らしとどめたるを、「など、帝の御子ならむからに、見む人さへ、かたほならずものほめがちなる」と、作りごとめきてとりなす人ものしたまひければなむ。あまりもの言ひさがなき罪、さりどころなく。

り。

かの人の四十九日、忍びて比叡の法華堂にて、事そがず、装束よりはじめて、さるべきものども、こまかに、誦経などせさせたまひぬ。経、仏の飾りまでおろかならず、惟光が兄の阿闍梨、いと尊き人にて、二なうしけり。

御書の師にて、睦しく思す文章博士召して、願文作らせたまふ。その人となって、あはれと思ひし人のほかなきさまになりたるを、阿弥陀仏に譲りきこゆるよし、あはれげに書き出でたまへれば、

「ただかくながら、加ふべきことはべらざめり」と申す。

忍びたまへど、御涙もこぼれて、いみじく思したれば、

「何人ならむ。その人と聞こえもなく、かう思し嘆かすばかりなりけむ宿世の高さ」

と言ひけり。忍びて調ぜさせたまへりける装束の袴を取り寄せさせたまひて、

「泣く泣くも今日は我が結ふ下紐を　　いづれの世にかとけて見るべき」

「このほどまでは漂ふなるを、いづれの道に定まりて赴くらむ」と思ほしやりつつ、念誦をいとあはれにしたまふ。頭中将を見たまふにも、あいなく胸騒ぎて、かの撫子の生ひ立つありさま、聞かせまほしけれど、かことに怖ぢて、うち出でたまはず。

かの夕顔の宿りには、いづ方にと思ひ惑へど、そのままにえ尋ねきこえず。右近だに訪れねば、あやしと思ひ嘆きあへり。確かならねど、けはひをさばかりにやと、ささめきしかば、惟光をかちけれど、いとかけ離れ、気色なく言ひなして、なほ同じごと好き歩きければ、いとど夢の心地して、「もし、受領の子どもの好き好きしきが、頭の君に怖ぢきこえて、やがて、率て下りにけるにや」とぞ、思ひ寄りける。

この家あるじぞ、西の京の乳母のむすめなりける。三人その子はありて、右

思し忘れぬるか、試みに、

「承り、悩むを、言に出でては、えこそ、

問はぬをもなどか、問はでほどふるに　いかばかりかは思ひ乱るる　『益田』
はまことになむ」

と聞こえたり。めづらしきに、これもあはれ忘れたまはず。

「生けるかひなきや、誰が言はましことにか。

空蟬の世は憂きものと知りにしを　また言の葉にかかる命よ　はかなしや」

と、御手もうちわななかるるに、乱れ書きたまへる、いとどうつくしげなり。

なほ、かのもぬけを忘れたまはぬを、いとほしうもをかしうも思ひけり。

かやうに憎からずは、聞こえ交はせど、け近くとは思ひよらず、さすがに、
言ふかひなからずは見えたてまつりてやみなむ、と思ふなりけり。

かの片つ方は、蔵人少将をなむ通はず、と聞きたまふ。「あやしや。いかに
思ふらむ」と、少将の心のうちもいとほしく、また、かの人の気色もゆかしけ
れば、小君して、「死に返り思ふ心は、知りたまへりや」と言ひ遣はず。

「ほのかにも軒端の荻を結ばずは　露のかことを何にかけまし」

高やかなる荻に付けて、「忍びて」とのたまへれど、「取り過ちて、少将も
見つけて、我なりけりと思ひあはせば、さりとて、罪ゆるしてむ」と思ふ、御
心おごりぞ、あいなかりける。

少将のなき折に見すれば、心憂しと思へど、かく思し出でたるも、さすがに
て、御返り、口ときばかりをかことにて取らす。

「ほのめかす風につけても下荻の　半ばは霜にむすぼほれつつ」

手は悪しげなるを、紛らはしさればみて書いたるさま、品なし。火影に見し
顔、思し出でらる。「うちとけで向ひゐたる人は、え疎み果つまじきさまもし
たりしかな。何の心ばせありげもなく、さうどき誇りたりしよ」と思し出づる
に、憎からず。なほ、こりずまにまたもあだ名立ちぬべき、御心のすさびなめ

かのありし院にこの鳥の鳴きしを、いと恐ろしと思ひたりしさまの、面影にらうたく思し出でらるれば、

「年はいくつにかものしたまひし。あやしく世の人に似ず、あえかに見えたまひしも、かく長かるまじくてなりけり」とのたまふ。

「十九にやなりたまひけむ。右近は、亡くなりける御乳母の捨て置きてはべりければ、三位の君のらうたがりたまひて、かの御あたり去らず、生ほしたたまひしを思ひたまへ出づれば、いかでか世にはべらむずらむ。いとしも人にと、悔しくなむ。ものはかなげにもものしたまひし人の御心を、頼もしき人にて、年ごろならひはべりけること」と聞こゆ。

「はかなびたるこそは、らうたけれ。かしこく人になびかぬ、いと心づきなきわざなり。自らはかばかしくすくよかならぬ心ならひに、女はただやはらかに、とりはづして人に欺かれぬべきが、さすがにもづつみし、見む人の心には従はむなむ、あはれにて、我が心のままにとり直して見むに、なつかしくおぼゆべき」などのたまへば、

「この方の御好みには、もて離れたまはざりけり、と思ひたまふるにも、口惜しくはべるわざかな」とて泣く。

空のうち曇りて、風冷やかなるに、いといたく眺めたまひて、

「見し人の煙を雲と眺むれば　夕べの空もむつまじきかな」

と独りごちたまへど、えさし答へも聞こえず。かやうにて、おはせましかば、と思ふにも、胸塞がりておぼゆ。耳かしかましかりし砧の音を、思し出づるさへ恋しくて、「正に長き夜」とうち誦じて、臥したまへり。

かの、伊予の家の小君、参る折あれど、ことにありしやうなる言伝てもしたまはねば、憂しと思し果てにけるを、いとほしと思ふに、かくわづらひたまふを聞きて、さすがにうち嘆きけり。遠く下りなどするを、さすがに心細ければ、

まだ少将にもものしたまひし時、見初めたてまつらせたまひて、三年ばかりは、志あるさまに通ひたまひしを、去年の秋ごろ、かの右の大殿より、いと恐ろしきことの聞こえ参で来しに、物怖ぢをわりなくしたまひし御心に、せむかたなく思し怖ぢて、西の京に、御乳母住みはべる所になむ、はひ隠れたまへりし。それもいと見苦しきに、住みわびたまひて、山里に移ろひなむと思したりしを、今年よりは塞がりける方にはべりければ、違ふとて、あやしき所にもものしたまひしを、見あらはされたてまつりぬることと、思し嘆くめりし。世の人に似ず、ものづつみをしたまひて人に物思ふ気色を見えむを、恥づかしきものにしたまひて、つれなくのみもてなして、御覽ぜられたてまつりたまふめりしか」
と、語り出づるに、「さればよ」と、思しあはせて、いよいよあはれまさりぬ。

「幼き人惑はしたりと、中將の愁へしは、さる人や」と問ひたまふ。

「しか。一昨年春ぞ、ものしたまへりし。女にて、いとらうたげになむ」と語る。

「さて、いづこにぞ。人にさとは知らせで、我に得させよ。あとはかなく、いみじと思ふ御形見に、いとうれしかるべくなむ」とのたまふ。「かの中將にも伝ふべけれど、言ふかひなきかこと負ひなむ。とぎまかうさまにつけて、育まむに咎あるまじきを。そのあらむ乳母などにも、ことぎまに言ひなして、ものせよかし」など語らひたまふ。

「さらば、いとうれしくなむはべるべき。かの西の京にて生ひ出でたまはむは、心苦しくなむ。はかばかしく扱ふ人なしとて、かしこに」など聞こゆ。

夕暮の静かなるに、空の気色いとあはれに、御前の前裁枯れ枯れに、虫の音も鳴きかれて、紅葉のやうやう色づくほど、絵に描きたるやうにおもしろきを見わたして、心よりほかにをかしき交じらひかなと、かの夕顔の宿りを思ひ出づるも恥づかし。竹の中に家鳩といふ鳥の、ふつつかに鳴くを聞きたまひて、

ど、なかなか、いみじくなまめかしくて、ながめがちに、ねをのみ泣きたまふ。見たてまつりとがむる人もありて、「御物の怪なめり」など言ふもあり。

右近を召し出でて、のどやかなる夕暮に、物語などしたまひて、

「なほ、いとなむあやしき。などでその人と知られじとは、隠いたまへりしぞ。まことに海人の子なりとも、さばかりに思ふを知らで、隔てたまひしかばなむ、つらかりし」とのたまへば、

「などでか、深く隠しきこえたまふことははべらむ。いつのほどにてかは、何ならぬ御名のりを聞こえたまはむ。初めより、あやしうおぼえぬさまなりし御ことなれば、『現ともおぼえずなむある』とのたまひて、『御名隠しも、さばかりにこそは』と聞こえたまひながら、『なほざりにこそ紛らはしたまふらめ』となむ、憂きことに思したりし」と聞こゆれば、

「あいなかりける心比べどもかな。我は、しか隔つる心もなかりき。ただ、かやうに人に許されぬ振る舞ひをなむ、まだ慣らはぬことなる。内に諫めのたまはするをはじめ、つつむこと多かる身にて、はかなく人にたはぶれごとを言ふも、所狭う、取りなしうるさき身のありさまになむあるを、はかなかりし夕べより、あやしう心にかかりて、あながちに見たてまつりしも、かかるべき契りこそはものしたまひけめと思ふも、あはれになむ。またうち返し、つらうおぼゆる。かう長かるまじきにては、など、さしも心に染みて、あはれとおぼえたまひけむ。なほ詳しく語れ。今は、何ごとを隠すべきぞ。七日七日に仏描かせても、誰が為とか、心のうちにも思はむ」とのたまへば、

「何か、隔てきこえさせはべらむ。自ら、忍び過ぐしたまひしことを、亡き御うしろに、口さがなくやは、と思うたまふばかりになむ。

親たちは、はや亡せたまひにき。三位中将となむ聞こえし。いとらうたきものに思ひきこえたまへりしかど、我が身のほどの心もとなさを思すめりしに、命さへ堪へたまはずなりにしのち、はかなきものたよりにて、頭中将なむ、

りなし。御祈り、方々にひまなくののしる。祭、祓、修法など、言ひ尽くすべくもあらず。世にたぐひなくゆゆしき御ありさまなれば、世に長くおはしますまじきにやと、天の下の人の騒ぎなり。

苦しき御心地にも、かの右近を召し寄せて、局など近くたまひて、さぶらはせたまふ。惟光、心地も騒ぎ惑へど、思ひのどめて、この人のたづきなしと思ひたるを、もてなし助けつつさぶらはす。

君は、いささかひまありて思さるる時は、召し出でて使ひなどすれば、ほどなく交じらひつきたり。服、いと黒くして、容貌などよからねど、かたはに見苦しからぬ若人なり。

「あやしう短かかりける御契りにひかされて、我も世にえあるまじきなめり。年ごろの頼み失ひて、心細く思ふらむ慰めにも、もしながらへば、よろづに育まむとこそ思ひしか、ほどなくまたたち添ひぬべきが、口惜しくもあるべきかな」

と、忍びやかにのたまひて、弱げに泣きたまへば、言ふかひなきことをばおきて、「いみじく惜し」と思ひきこゆ。

殿のうちの人、足を空にて思ひ惑ふ。内より、御使、雨の脚よりもけにしげし。思し嘆きおはしますを聞きたまふに、いとかたじけなくて、せめて強く思しなる。大殿も経営したまひて、大臣、日々に渡りたまひつつ、さまさまのことをせさせたまふ、しるしにや、二十余日、いと重くわづらひたまひつれど、ことなる名残のこらず、おこたるさまに見えたまふ。

穢らひ忌みたまひしも、一つに満ちぬる夜なれば、おぼつかながらせたまふ御心、わりなくて、内の御宿直所に参りたまひなです。大殿、我が御車にて迎へたてまつりたまひて、御物忌なにやと、むつかしう慎ませたてまつりたまふ。我にもあらず、あらぬ世によみがへりたるやうに、しばしはおぼえたまふ。

九月二十日のほどにぞ、おこたり果てたまひて、いといたく面瘦せたまへれ

ひ参りなむ」と言ふ。

「道理なれど、さなむ世の中はある。別れと言ふもの、悲しからぬはなし。とあるもかかるも、同じ命の限りあるものになむある。思ひ慰めて、我を頼め」と、のたまひこしらへて、「かく言ふ我が身こそは、生きとまるまじき心地すれ」

とのたまふも、頼もしげなしや。

惟光、「夜は、明け方になりはべりぬらむ。はや帰らせたまひなむ」

と聞こゆれば、返りみのみせられて、胸もつと塞がりて出でたまふ。

道いと露けきに、いとどしき朝霧に、いづこともなく惑ふ心地したまふ。ありしながらうち臥したりつるさま、うち交はしたまへりしが、我が御紅の御衣の着られたりつるなど、いかなりけむ契りにかと道すがら思さる。御馬にも、はかばかしく乗りたまふまじき御さまなれば、また、惟光添ひ助けておはしまさするに、堤のほどにて、御馬よりすべり下りて、いみじく御心地惑ひければ、「かかる道の空にて、はふれぬべきにやあらむ。さらに、え行き着くまじき心地なむする」

とのたまふに、惟光心地惑ひて、「我がはかばかしくは、さのたまふとも、かかる道に率て出でたてまつるべきかは」と思ふに、いと心あわたたしければ、川の水に手を洗ひて、清水の観音を念じたてまつりても、すべなく思ひ惑ふ。君も、しひて御心を起こして、心のうちに仏を念じたまひて、また、とかく助けられたまひてなむ、二条院へ帰りたまひける。

あやしう夜深き御歩きを、人びと、「見苦しきわざかな。このごろ、例よりも静心なき御忍び歩きの、しきるなかにも、昨日の御気色の、いと悩ましう思したりしに。いかでかく、たどり歩きたまふらむ」と、嘆きあへり。

まことに、臥したまひぬるままに、いといたく苦しがりたまひて、二、三日になりぬるに、むげに弱るやうにしたまふ。内にも、聞こしめし、嘆くこと限

も、危かりし物懲りに、いかにせむと思しわづらへど、なほ悲しさのやる方なく、「ただ今の骸を見では、またいつの世にかありし容貌をも見む」と、思念じて、例の大夫、隨身を具して出でたまふ。

道遠くおぼゆ。十七日の月さし出でて、河原のほど、御前駆の火もほのかるに、鳥辺野の方など見やりたるほどなど、ものむつかしきも、何ともおぼえたまはず、かき乱る心地したまひて、おはし着きぬ。

あたりさへすぎきに、板屋のかたはらに堂建てて行へる尼の住まひ、いとあはれなり。御燈明の影、ほのかに透きて見ゆ。その屋には、女一人泣く声のみして、外の方に、法師ばら二、三人物語しつつ、わざとの声立てぬ念仏ぞする。寺々の初夜も、みな行ひ果てて、いとしめやかなり。清水の方ぞ、光多く見え、人のけはひもしげかりける。この尼君の子なる大徳の声尊くて、経うち読みたるに、涙の残りなく思さる。

入りたまへれば、火取り背けて、右近は屏風隔てて臥したり。いかにわびしからむと、見たまふ。恐ろしきけもおぼえず、いとらうたげなるさまして、まだいささか変りたるところなし。手をとらへて、

「我に今一たび声をだに聞かせたまへ。いかなる昔の契りにかありけむ、しばしのほどに、心を尽くしてあはれに思ほえしを、うち捨てて、惑はしたまふが、いみじきこと」

と、声も惜しまず、泣きたまふこと、限りなし。

大徳たちも、誰とは知らぬに、あやしと思ひて、皆、涙落としけり。

右近を、「いぎ、二条へ」とのたまへど、

「年ごろ、幼くはべりしより、片時たち離れたてまつらず、馴れきこえつる人に、にはかに別れたてまつりて、いづこにか帰りはべらむ。いかになりたまひにきとか、人にも言ひはべらむ。悲しきことをばさるものにて、人に言ひ騒がれはべらむが、いみじきこと」と言ひて、泣き惑ひて、「煙にたぐひて、慕

と、語りきこゆるままに、いといみじと思して、

「我も、いと心地悩ましく、いかなるべきにかとなむおぼゆる」とのたまふ。

「何か、さらに思ほしものせさせたまふ。さるべきにこそ、よろづのことはべらめ。人にも漏らさじと思うたまふれば、惟光おり立ちて、よろづはものはべる」など申す。

「さかし。さ皆思ひなせど、浮かびたる心のすさびに、人をいたづらになしつるかごと負ひぬべきが、いとからきなり。少将の命婦などにも聞かすな。尼君ましてかやうのことなど、諫めらるるを、心恥づかしくなむおぼゆべき」と、口かためたまふ。

「さらぬ法師ばらなどにも、皆、言ひなすさま異にはべる」と聞こゆるにぞ、かかりたまへる。

ほの聞く女房など、「あやしく、何ごとならむ、穢らひのよしのたまひて、内にも参りたまはず、また、かくささめき嘆きたまふ」と、ほのぼのあやしがる。

「さらに事なくしなせ」と、そのほどの作法のたまへど、

「何か、ことごとしくすべきにもはべらず」

とて立つが、いと悲しく思さるれば、

「便なしと思ふべけれど、今一度、かの亡骸を見ざらむが、いといぶせかるべきを、馬にてもものせむ」

とのたまふを、いとたいだいしきこととは思へど、

「さ思されむは、いかがせむ。はや、おはしまして、夜更けぬ先に帰らせおはしませ」

と申せば、このごろの御やつれにまうけたまへる、狩の御装束着替へなどして出でたまふ。

御心地かきくらし、いみじく堪へがたければ、かくあやしき道に出で立ちて

などのたまふ。中将、

「さらば、さるよしをこそ奏しはべらめ。昨夜も、御遊びに、かしこく求めたてまつらせたまひて、御気色悪しくはべりき」と聞こえたまひて、立ち返り、「いかなる行き触れにかからせたまふぞや。述べやらせたまふことこそ、まことと思うたまへられね」

と言ふに、胸つぶれたまひて、

「かく、こまかにはあらで、ただ、おぼえぬ穢らひに触れたるよしを、奏したまへ。いとこそたいだいしくはべれ」

と、つれなくのたまへど、心のうちには、言ふかひなく悲しきことを思すに、御心地も悩ましければ、人に目も見合せたまはず。蔵人弁を召し寄せて、まめやかにかかるよしを奏せさせたまふ。大殿などにも、かかることありて、え参らぬ御消息など聞こえたまふ。

日暮れて、惟光参れり。かかる穢らひありとのたまひて、参る人びとも、皆立ちながらまかづれば、人しげからず。召し寄せて、

「いかにぞ。今はと見果てつや」

とのたまふままに、袖を御顔に押しあてて泣きたまふ。惟光も泣く泣く、

「今は限りにこそはものしたまふめれ。長々と籠もりはべらむも便なきを、明日なむ、日よろしくはべれば、とかくの事、いと尊き老僧の、あひ知りてはべるに、言ひ語らひつけはべりぬる」と聞こゆ。

「添ひたりつる女はいかに」とのたまへば、

「それなむ、また、え生くまじくはべるめる。我も後れじと惑ひはべりて、今朝は谷に落ち入りぬとなむ見たまへつる。『かの故里人に告げやらむ』と申せど、しばし思ひしづめよと、ことのさま思ひめぐらしてとなむ、こしらへおきはべりつる」

とて、右近を添へて乗すれば、徒歩より、君に馬はたてまつりて、くくり引き上げなどして、かつは、いとあやしく、おぼえぬ送りなれど、御気色のいみじきを見たてまつれば、身を捨てて行くに、君は物もおぼえたまはず、我がのさまにて、おはし着きたり。

人びと、「いづこより、おはしますにか。なやましげに見えさせたまふ」など言へど、御帳の内に入りたまひて、胸をおさへて思ふに、いといみじければ、「などで、乗り添ひて行かざりつらむ。生き返りたらむ時、いかなる心地せむ。見捨てて行きあかれにけりと、つらくや思はむ」と、心惑ひのなかにも、思ほすに、御胸せきあぐる心地したまふ。御頭も痛く、身も熱き心地して、いと苦しく、惑はれたまへば、「かくはかなくて、我もいたづらになりぬるなめり」と思す。

日高くなれど、起き上がりたまはねば、人びとあやしがりて、御粥などそそのかしきこゆれど、苦しくて、いと心細く思さるるに、内より御使あり。昨日、え尋ね出でたてまつらざりしより、おぼつかながらせたまふ。大殿の君達参りたまへど、頭中将ばかりを、「立ちながら、こなたに入りたまへ」とのたまひて、御簾の内ながらのたまふ。

「乳母にてはべる者の、この五月のころほひより、重くわづらひはべりしが、頭剃り忌むこと受けなどして、そのしるしにや、よみがへりたりしを、このごろ、またおこりて、弱くなむなりにたる、『今一度、とぶらひ見よ』と申したりしかば、いときなきよりなづきひし者の、今はのきぎみに、つらしとや思はむ、と思うたまへてまかれりしに、その家なりける下人の、病しけるが、にはかに出であへで亡くなりけるを、怖ぢ憚りて、日を暮らしてなむ取り出ではべりけるを、聞きつけはべりしかば、神事なるころ、いと不便なること、と申すうたまへかしこまりて、え参らぬなり。この暁より、しはぶき病みにやはらむ、頭いと痛くて苦しくはべれば、いと無礼にて聞こゆること」

の事どももせさせむ。願なども立てさせむとて、阿闍梨ものせよ、と言ひつるは「とのたまふに、

「昨日、山へまかり上りにけり。まづ、いとめづらかなることにもはべるかな。かねて、例ならず御心地ものせさせたまふことやはべりつらむ」

「さることもなかりつ」とて、泣きたまふさま、いとをかしげにらうたく、見たてまつる人もいと悲しくて、おのれもよよと泣きぬ。

さいへど、年うちねび、世の中のとあることと、しほじみぬる人こそ、ものをりふしは頼もしかりけれ、いづれもいづれも若きどちにて、言はむ方もなけれど、

「この院守などに聞かせむことは、いと便なかるべし。この人一人こそ睦しくもあらめ、おのづから物言ひ漏らしつべき眷属も立ちまじりたらむ。まづ、この院を出でおはしましね」と言ふ。

「さて、これより人少なる所はいかであらむ」とのたまふ。

「げに、さぞはべらむ。かの故里は、女房などの、悲しびに堪へず、泣き惑ひはべらむに、隣しげく、とがむる里人多くはべらむに、おのづから聞こえはべらむを、山寺こそ、なほかやうのこと、おのづから行きまじり、物紛るることとはべらめ」と、思ひまはして、「昔、見たまへし女房の、尼にてはべる東山の辺に、移したてまつらむ。惟光が父の朝臣の乳母にはべりし者の、みづはぐみて住みはべるなり。あたりは、人しげきやうにはべれど、いとかごかにはべり」と聞こえて、明けはなるほどの紛れに、御車寄す。

この人をえ抱きたまふまじければ、上席におしくくみて、惟光乗せたてまつる。いとささやかにて、疎ましげもなく、らうたげなり。したたかにしもえせねば、髪はこぼれ出でたるも、目くれ惑ひて、あさましう悲し、と思せば、なり果てむさまを見むと思せど、

「はや、御馬にて、二条院へおはしまさむ。人騒がしくなりはべらぬほどに」

ぼゆ。うち思ひめぐらすに、こなたかなた、けどほく疎ましきに、人声はせず、「などで、かくはかなき宿りは取りつるぞ」と、悔しさもやらむ方なし。

右近は、物もおぼえず、君につと添ひたてまつりて、わななき死ぬべし。「また、これもいかならむ」と、心そらにて捉へたまへり。我一人さかしき人にて、思しやる方ぞなきや。

火はほのかにまたたきて、母屋の際に立てたる屏風の上、ここかしこの隈々しくおぼえたまふに、物の足音、ひしひしと踏み鳴らしつつ、後ろより寄り来る心地す。「惟光、とく参らなむ」と思す。ありか定めぬ者にて、ここかしこ尋ねけるほどに、夜の明くるほどの久しきは、千夜を過ぐさむ心地したまふ。

からうして、鳥の声はるかに聞こゆるに、「命をかけて、何の契りに、かかる目を見るらむ。我が心ながら、かかる筋に、おほけなくあるまじき心の報いに、かく、来し方行く先の例となりぬべきことはあるなめり。忍ぶとも、世にあること隠れなくて、内に聞こし召さむをはじめて、人の思ひ言はむこと、よからぬ童べの口ずさびになるべきなめり。ありありて、をこがましき名をとるべきかな」と、思しめぐらす。

からうして、惟光朝臣参れり。夜中、暁といはず、御心に従へる者の、今宵しもさぶらはで、召しにさへおこたりつるを、憎しと思すものから、召し入れて、のたまひ出でむことのおへなきに、ふとも物言はれたまはず。右近、大夫のけはひ聞くに、初めよりのこと、うち思ひ出でられて泣くを、君もえ堪へたまはで、我一人さかしがり抱き持たまへりけるに、この人に息をのべたまひてぞ、悲しきことも思されける、とばかり、いといたく、えもとどめず泣きたまふ。

ややためらひて、「ここに、いとあやしきことのあるを、あさましと言ふにもあまりてなむある。かかるとみの事には、誦経などをこそはすなれとて、そ

面影に見えて、ふと消え失せぬ。

「昔の物語などにこそ、かかることは聞け」と、いとめづらかにむくつけけれど、まづ、「この人いかになりぬるぞ」と思ほす心騒ぎに、身の上も知られたまはず、添ひ臥して、「やや」とおどろかしたまへど、ただ冷えに冷え入って、息はとく絶え果てにけり。言はむかたなし。頼もしく、いかにと言ひ触れたまふべき人もなし。法師などをこそは、かかる方の頼もしきものには思すべけれど、さこそ強がりたまへど、若き御心にて、いふかひなくなりぬるを見たまふに、やるかたなくて、つと抱きて、

「あが君、生き出でたまへ。いといみじき目な見せたまひそ」

とのたまへど、冷え入りにたれば、けはひものうとくなりゆく。

右近は、ただ「あな、むつかし」と思ひける心地みな冷めて、泣き惑ふさまいといみじ。

南殿の鬼の、なにがしの大臣おびやかしかけるたとひを思し出でて、心強く、「さりとも、いたづらになり果てたまはじ。夜の声はおどろおどろし。あなかま」

と諫めたまひて、いとあわたたしきに、あきれたる心地したまふ。
この男を召して、

「ここに、いとあやしう、物に襲はれたる人のなやましげなるを、ただ今、惟光朝臣の宿る所にまかりて、急ぎ参るべきよし言へ、と仰せよ。なにがし阿闍梨、そこにもものするほどならば、ここに来べきよし、忍びて言へ。かの尼君などの聞かむに、おどろおどろしく言ふな。かかる歩き許さぬ人なり」

など、物のたまふやうなれど、胸塞がりて、この人を空しくしなしてむことのいみじく思さるるに添へて、大方のむくむくしき、たとへむ方なし。

夜中も過ぎにけむかし、風のやや荒々しう吹きたるは。まして、松の響き、木深く聞こえて、気色ある鳥のから声に鳴きたるも、ふくろうはこれにやとお

「紙燭さして参れ。『隨身も、弦打ちして、絶えず声づくれ』と仰せよ。人離れたる所に、心とけて寝ぬるものか。惟光朝臣の来たりつらむは」と、問はせたまへば、

「さぶらひつれど、仰せ言もなし。暁に御迎へに参るべきよし申してなむ、まかではべりぬる」と聞こゆ。この、かう申す者は、滝口なりければ、弓弦いとつきづきしくうち鳴らして、「火あやふし」と言ふ言ふ、預りが曹司の方里去ぬなり。内を思しやりて、「名対面は過ぎぬらむ、滝口の宿直奏し、今こそ」と、推し量りたまふは、まだ、いたう更けぬにこそは。

帰り入りて、探りたまへば、女君はさながら臥して、右近はかたはらにうつぶし臥したり。

「こはなぞ。あな、もの狂ほしの物怖ぢや。荒れたる所は、狐などやうのもの、人をおびやかさむとて、け恐ろしう思はするならむ。まろあれば、さやうのものにはおどされじ」とて、引き起こしたまふ。

「いとうたて、乱り心地の悪しうはべれば、うつぶし臥してはべるや。御前にこそわりなく思さるらめ」と言へば、

「そよ。なかうは」とて、かい探りたまふに、息もせず。引き動かしたまへど、なよなよとして、我にもあらぬさまなれば、「いといたく若びたる人にて、物にけどられぬるなめり」と、せむかたなき心地したまふ。

紙燭持て参れり。右近も動くべきさまにもあらねば、近き御几帳を引き寄せ

て、
「なほ持て参れ」

とのたまふ。例ならぬことにて、御前近くもえ参らぬ、つつまじきに、長押にもえ上らず。

「なほ持て来や、所に従ひてこそ」

とて、召し寄せて見たまへば、ただこの枕上に、夢に見えつる容貌したる女、

も苦しき御ありさまを、すこし取り捨てばや」と、思ひ比べられたまひける。宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに、御枕上に、いとをかしげなる女みて、

「己がいとめでたしと見たてまつるをば、尋ね思ほさで、かく、ことなることなき人を率ておはして、時めかしたまふこそ、いとめざましくつらけれ」

とて、この御かたはらの人をかき起こさむとす、と見たまふ。

物に襲はるる心地して、おどろきたまへれば、火も消えにけり。うたて思さるれば、太刀を引き抜きて、うち置きたまひて、右近を起こしたまふ。これも恐ろしと思ひたるさまにて、参り寄れり。

「渡殿なる宿直人起こして、『紙燭さして参れ』と言へ」とのたまへば、

「いかでかまからむ。暗うて」と言へば、

「あな、若々し」と、うち笑ひたまひて、手をたたきたまへば、山彦の答ふる声、いとうとまし。人え聞きつけて参らぬに、この女君、いみじくわななきまどひて、いかさまにせむと思へり。汗もしとどになりて、我かの気色なり。

「物怖ぢをなむわりなくせさせたまふ本性にて、いかに思さるるにか」と、

右近も聞こゆ。「いとか弱くて、昼も空をのみ見つるものを、いとほし」と思して、

「我、人を起こさむ。手たたけば、山彦の答ふる、いとうるさし。ここに、しばし、近く」

とて、右近を引き寄せたまひて、西の妻戸に出でて、戸を押し開けたまへれば、渡殿の火も消えにけり。

風すこしうち吹ききたるに、人は少なくて、さぶらふ限りみな寝たり。この院の預りの子、むつましく使ひたまふ若き男、また上童一人、例の隨身ばかりぞありける。召せば、御答へして起きたれば、

とのたまへば、後目に見おこせて、

「光ありと見し夕顔のうは露は たそかれ時のそら目なりけり」

とほのかに言ふ。をかしと思しなす。げに、うちとけたまへるさま、世になく、所から、まいてゆゆしきまで見えたまふ。

「尽きせず隔てたまへるつらさに、あらはさじと思ひつるものを。今だに名のりしたまへ。いとむくつけし」

とのたまへど、「海人の子なれば」とて、さすがにうちとけぬさま、いとあいだれたり。

「よし、これも我からなめり」と、怨みかつは語らひ、暮らしたまふ。

惟光、尋ねきこえて、御くだものなど参らす。右近が言はむこと、さすがにいとほしければ、近くもえさぶらひ寄らず。「かくまでたどり歩きたまふ、をかしう、さもありぬべきありさまにこそは」と推し量るにも、「我がいとよく思ひ寄りぬべかりしことを、譲りきこえて、心ひろさよ」など、めざましう思ひをる。

たとしへなく静かなる夕べの空を眺めたまひて、奥の方は暗うものむつかしと、女は思ひたれば、端の簾を上げて、添ひ臥したまへり。夕映えを見交はして、女も、かかるありさまを、思ひのほかにあやしき心地はしながら、よろづの嘆き忘れて、すこしうちとけゆく気色、いとらうたし。つと御かたはらに添ひ暮らして、物をいと恐ろしと思ひたるさま、若う心苦し。格子とく下ろしたまひて、大殿油参らせて、「名残りなくなりたる御ありさまにて、なほ心のうちの隔て残したまへるなむつらき」と、恨みたまふ。

「内に、いかに求めさせたまふらむを、いづこに尋ぬらむ」と、思しやりて、かつは、「あやしの心や。六条わたりにも、いかに思ひ乱れたまふらむ。恨みられむに、苦しう、ことわりなり」と、いとほしき筋は、まづ思ひきこえたまふ。何心もなきさしむかひを、あはれと思すままに、「あまり心深く、見る人

とて、もの恐ろしうすごげに思ひたれば、「かのさし集ひたる住まひの慣らひならむ」と、をかしく思す。

御車入れさせて、西の対に御座などよそふほど、高欄に御車ひきかけて立ちたまへり。右近、艶なる心地して、来し方のことなども、人知れず思ひ出でけり。預りいみじく経営しありく気色に、この御ありさま知りはてぬ。

ほのぼのと物見ゆるほどに、下りたまひぬめり。かりそめなれど、清げにしつらひたり。

「御供に人もさぶらはざりけり。不便なるわぎかな」とて、むつまじき下家司にて、殿にも仕うまつる者なりければ、参りよりて、「さるべき人召すべきにや」など、申さすれど、

「ことさらに人来まじき隠れ家求めたるなり。さらに心よりほかに漏らすな」と口がためさせたまふ。

御粥など急ぎ参らせたれど、取り次ぐ御まかなひうち合はず。まだ知らぬことなる御旅寝に、「息長川」と契りたまふことよりほかのことなし。

日たくるほどに起きたまひて、格子手づから上げたまふ。いといたく荒れて、人目もなくはるばると見渡されて、木立いとうとましくものふりたり。け近き草木などは、ことに見所なく、みな秋の野らにて、池も水草に埋もれたれば、いとけうとげになりになる所かな。別納の方にぞ、曹司などして、人住むべかめれど、こなたは離れたり。

「けうとくもなりにける所かな。さりとて、鬼なども我をば見許してむ」とのたまふ。

顔はなほ隠したまへれど、女のいとつらしと思へれば、「げに、かばかりにて隔てあらむも、ことのさまに違ひたり」と思して、

「夕露に紐とく花は玉鉾の　　たよりに見えし縁にこそありけれ　　露の光や
いかに」

明け方も近うなりにけり。鳥の声などは聞こえて、御嶽精進にやあらむ、ただ翁びたる声にぬかづくぞ聞こゆる。起ち居のけはひ、堪へがたげに行ふ。いとあはれに、「朝の露に異ならぬ世を、何をむさぼる身の祈りにか」と、聞きたまふ。「南無当来導師」とぞ拝むなる。

「かれ、聞きたまへ。この世とのみは思はざりけり」と、あはれがりたまひて、

「優婆塞が行ふ道をしるべにて 来む世も深き契り違ふな」

長生殿の古き例はゆゆしくて、翼を交さむとは引きかへて、弥勒の世をかねたまふ。行く先の御頼め、いとこちたし。

「前の世の契り知らるる身の憂さに 行く末かねて頼みがたきよ」

かやうの筋なども、さるは、心もとなかめり。

いさよふ月に、ゆくりなくあくがれむことを、女は思ひやすらひ、とかくのたまふほど、にはかに雲隠れて、明け行く空いとをかし。はしたなきほどにならぬ先にと、例の急ぎ出でたまひて、軽らかにうち乗せたまへれば、右近ぞ乗りぬる。

そのわたり近きなにかしの院におはしまし着きて、預り召し出づるほど、荒れたる門の忍ぶ草茂りて見上げられたる、たとしへなく木暗し。霧も深く、露けきに、簾をさへ上げたまへれば、御袖もいたく濡れにけり。

「まだかやうなることを慣らはざりつるを、心尽くしなることにもありけるかな。

いにしへもかくやは人の惑ひけむ 我がまだ知らぬしののめの道

慣らひたまへりや」

とのたまふ。女、恥ぢらひて、

「山の端の心も知らで行く月は うはの空にて影や絶えなむ 心細く」

ぢかかやかむよりは、罪許されてぞ見えける。

ごほごほと鳴る神よりもおどろおどろしく、踏み轟かす唐臼の音も枕上とおぼゆる。「あな、耳かしかまし」と、これにぞ思さるる。何の響きとも聞き入れたまはず、いとあやしうめざましき音なひとのみ聞きたまふ。くだくだしきことのみ多かり。

白妙の衣うつ砧の音も、かすかにこなたかなた聞きわたされ、空飛ぶ雁の声、取り集めて、忍びがたきこと多かり。端近き御座所なりければ、遣戸を引き開けて、もろともに見出だしたまふ。ほどなき庭に、されたる呉竹、前栽の露は、なほかかる所も同じごときらめきたり。虫の声々乱りがはしく、壁のなかの蟋蟀だに間遠に聞き慣らひたまへる御耳に、さし当てたるやうに鳴き乱るるを、なかなかさまかへて思さるるも、御心ざし一つの浅からぬに、よろづの罪許さるるなめりかし。

白き袷、薄色のなよかなるを重ねて、はなやかならぬ姿、いとらうたげにあえかなる心地して、そこと取り立ててすぐれたることもなければ、細やかにたをたをして、ものうち言ひたるけはひ、あな心苦しと、ただいとらうたく見ゆ。心ばみたる方をすこし添へたらば、と見たまひながら、なほうちとけて見まほしく思さるれば、

「いざ、ただこのわたり近き所に、心安くて明かさむ。かくてのみは、いと苦しかりけり」とのたまへば、

「いかでか。にはかならむ」

と、いとおいらかに言ひてゐたり。この世のみならぬ契りなどまで頼めたまふに、うちとくる心ばへなど、あやしくやう変はりて、世馴れたる人とおぼえねば、人の思はむ所もえ憚りたまはで、右近を召し出でて、隨身を召させたまひて、御車引き入れさせたまふ。このある人びとも、かかる御心ざしのおろかならぬを見知れば、おぼめかしながら、頼みかけきこえたり。

「なほ、あやしう。かくのたまへど、世づかぬ御もてなしなれば、もの恐ろしくこそあれ」

と、いと若びて言へば、「げに」と、ほほ笑まれたまひて、
「げに、いづれか狐なるらむな。ただはかられたまへかし」

と、なつかしげにのたまへば、女もいみじくなびきて、さもありぬべく思ひたり。「世になく、かたはなることなりとも、ひたぶるに従ふ心は、いとあはれげなる人」と見たまふに、なほ、かの頭中将の常夏疑はしく、語りし心ざま、まづ思ひ出でられたまへど、「忍ぶるやうこそは」と、あながちにも問ひ出でたまはず。

気色ばみて、ふと背き隠るべき心ざまなどはなければ、「かれがれにとだえ置かむ折こそは、さやうに思ひ変ることもあらめ、心ながらも、すこし移ろふことあらむこそあはれなるべけれ」とさへ、思しけり。

八月十五夜、隈なき月影、隙多かる板屋、残りなく漏り来て、見慣らひたまはぬ住まひのさまも珍しきに、暁近くなりにはけるなるべし、隣の家々、あやしきしづの男の声々、目覚まして、

「あはれ、いと寒しや」

「今年こそ、なりはひにも頼むところすくなく、田舎の通ひも思ひかけねば、いと心細けれ。北殿こそ、聞きたまふや」

など、言ひ交はすも聞こゆ。

いとあはれなるおのがじしの営みに起き出でて、そそめき騒ぐもほどなきを、女いと恥づかしく思ひたり。

艶だち気色ばまむ人は、消えも入りぬべき住まひのさまなめりかし。されど、のどかに、つらきも憂きもかたはらいたきことも、思ひ入れたるさまならで、我がもてなしありさまは、いとあてはかにこめかしくて、またなくらうがはしき隣の用意なきを、いかなる事とも聞き知りたるさまならねば、なかなか、恥

ともの狂ほしく、さまで心とどむべきことのさまにもあらずと、いみじく思ひ
さましたまふに、人のけはひ、いとあさましくやはらかにおほどきて、もの深
く重き方はおくれて、ひたぶるに若びたるものから、世をまだ知らぬにもあら
ず。いとやむごとなきにはあるまじ、いづくにいとかうしもとまる心ぞ、と返
す返す思す。

いとことさらめきて、御装束をもやつれたる狩の御衣をたてまつり、さまを
変へ、顔をもほの見せたまはず、夜深きほどに、人をしづめて出で入りなどし
たまへば、昔ありけむものの変化めきて、うたて思ひ嘆かるれど、人の御けは
ひ、はた、手さぐりもしるべきわざなりければ、「誰ればかりにかはあらむ。
なほこの好き者のし出でつるわざなめり」と、大夫を疑ひながら、せめてつれ
なく知らず顔にて、かけて思ひよらぬさまに、たゆまずあざれありけば、いか
なることにかと心得がたく、女方もあやしうやう違ひたるもの思ひをなむしけ
る。

君も、「かくうらなくたゆめてはひ隠れなば、いづこをはかりとか、我も尋
ねむ。かりそめの隠れがと、はた見ゆめれば、いづ方にもいづ方にも、移ろひ
ゆかむ日を、いつとも知らじ」と思すに、追ひまどはして、なのめに思ひなし
つべくは、ただかばかりのすさびにても過ぎぬべきことを、さらにさて過ぐし
てむと思されず。

人目を思して、隔ておきたまふ夜な夜などは、いと忍びがたく、苦しきま
でおぼえたまへば、「なほ誰れとなくて二条院に迎へてむ。もし聞こえありて
便なかるべきことなりとも、さるべきにこそは。我が心ながら、いとかく人に
しむことはなきを、いかなる契りにかはありけむ」など思ほしよる。

「いざ、いと心安き所にて、のどかに聞こえむ」
など、語らひたまへば、

ただ、我れどちと知らせて、物など言ふ若きおもとのはべるを、そらおぼれしてなむ、隠れまかり歩く。いとよく隠したりと思ひて、小さき子どもなどはべるが言誤りしつべきも、言ひ紛らはして、また人なきさまを強ひてつくりはべる」など、語りて笑ふ。

「尼君の訪ひにもせむついでに、かいま見せさせよ」とのたまひけり。かりにても、宿れる住ひのほどを思ふに、「これこそ、かの人の定め、あなづりし下の品ならめ。その中に、思ひの外にをかしきこともあらば」など、思すなりけり。

惟光、いささかのことも御心に違はじと思ふに、おのれも隈なき好き心にて、いみじくたばかりまどひ歩きつつ、しひておはしまさせ初めてけり。このほどのこと、くだくだしければ、例のもらしつ。

女、さしてその人と尋ね出でたまはねば、我も名のりをしたまはで、いとわりなくやつれたまひつつ、例ならず下り立ちありきたまふは、おろかに思されぬなるべし、と見れば、我が馬をばたてまつりて、御供に走りありく。

「懸想人のいとものげなき足もとを、見つけられてはべらむ時、からくもあるべきかな」とわぶれど、人に知らせたまはぬままに、かの夕顔のしるべせし隨身ばかり、さては、顔むげに知るまじき童一人ばかりぞ、率ておはしける。

「もし思ひよる気色もや」とて、隣に中宿りをだにしたまはず。女も、いとあやしく心得ぬ心地のみして、御使に人を添へ、暁の道をうかがはせ、御ありか見せむと尋ぬれど、そこはかとなくまどはしつつ、さすがに、あはれに見ではえあるまじく、この人の御心にかかりたれば、便なく軽々しきことと、思ほし返しわびつつ、いとしばしおはします。

かかる筋は、まめ人の乱るる折もあるを、いとめやすくしづめたまひて、人のとがめきこゆべき振る舞ひはしたまはざりつるを、あやしきまで、今朝のほど、昼間の隔ても、おぼつかなくなど、思ひわづらはれたまへば、かつは、い

つるあたりは、ほどほどにつけて、我がかなしと思ふむすめを、仕うまつらせばやと願ひ、もしは、口惜しからずと思ふ妹など持たる人は、卑しきにても、なほ、この御あたりにさぶらはせむと、思ひ寄らぬはなかりけり。

まして、さりぬべきついでの御言の葉も、なつかしき御気色を見たてまつる人の、すこし物の心思ひ知るは、いかがはおろかに思ひきこえむ。明け暮れうちとけてしもおはせぬを、心もとなきことに思ふべかめり。

まことや、かの惟光が預かりのかいま見は、いとよく案内見とりて申す。

「その人とは、さらにえ思ひえはべらず。人にいみじく隠れ忍ぶる気色になむ見えはべるを、つれづれなるままに、南の半部ある長屋にわたり来つつ、車の音すれば、若き者どもの覗きなどすべかめるに、この主とおぼしきも、はひわたる時はべかめる。容貌なむ、ほのかなれど、いとらうたげにはべる。

一日、前駆追ひて渡る車のはべりしを、覗きて、童女の急ぎて、『右近の君こそ、まづ物見たまへ。中将殿こそ、これより渡りたまひぬれ』と言へば、また、よろしき大人出で来て、『あなかま』と、手かくものから、『いかでさは知るぞ、いで、見む』とて、はひ渡る。打橋だつものを道にてなむ通ひはべる。急ぎ来るものは、衣の裾を物に引きかけて、よろぼひ倒れて、橋よりも落ちぬべければ、『いで、この葛城の神こそ、さがしうしおきたれ』と、むつかりて、物覗きの心も冷めぬめりき。『君は、御直衣姿にて、御隨身どももありし。なにがし、くれがし』と数へしは、頭中将の隨身、その小舎人童をなむ、しるしに言ひはべりし』など聞こゆれば、

「たしかにその車をぞ見まし」

とのたまひて、「もし、かのあはれに忘れざりし人にや」と思ほしよるも、いと知らまほしげなる御気色を見て、

「私の懸想もいとよくしおきて、案内も残るところなく見たまへおきながら、

秋にもなりぬ。人やりならず、心づくしに思し乱ることどもありて、大殿には、絶え間置きつつ、恨めしくのみ思ひ聞こえたまへり。

六条わたりにも、とけがたかりし御気色をおもむけ聞こえたまひて後、ひき返し、なのめならむはいとほしかし。されど、よそなりし御心惑ひのやうに、あながちなる事はなきも、いかなることにかと見えたり。

女は、いとものをあまりなるまで、思ししめたる御心ぎまにて、齢のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜がれの寝覚め寝覚め、思ししをるること、いとさまざまなり。

霧のいと深き朝、いたくそそのかされたまひて、ねぶたげなる気色に、うち嘆きつつ出でたまふを、中将のおもと、御格子一間上げて、見たてまつり送りたまへ、とおぼしく、御几帳引きやりたれば、御頭もたげて見出だしたまへり。

前栽の色々乱れたるを、過ぎがてにやすらひたまへるさま、げにたぐひなし。廊の方へおはするに、中将の君、御供に参る。紫苑色の折にあひたる、薄物の裳、鮮やかに引き結ひたる腰つき、たをやかになまめきたり。

見返りたまひて、隅の間の高欄に、しばし、ひき据ゑたまへり。うちとけたらぬもてなし、髪の下がりば、めざましくも、と見たまふ。

「咲く花に移るてふ名はつつめども　折らで過ぎ憂き今朝の朝顔　いかがすべき」

とて、手をとらへたまへれば、いと馴れてとく、

「朝霧の晴れ間も待たぬ気色にて　花に心を止めぬとぞ見る」
と、おほやけごとにぞ聞こえなす。

をかしげなる侍童の、姿このましよう、ことさらめきたる、指貫の裾、露けげに、花の中に混りて、朝顔折りて参るほどなど、絵に描かまほしげなり。

大方に、うち見たてまつる人だに、心とめたてまつらぬはなし。物の情け知らぬ山がつも、花の蔭には、なほやすらはまほしきにや、この御光を見たてま

うらもなく待ちきこえ顔なる片つ方人を、あはれと思さぬにしもあらねど、つれなくて聞きみたらむことの恥づかしければ、「まづ、こなたの心見果てて」と思すほどに、伊予介上りぬ。

まづ急ぎ参れり。舟路のしわざとて、すこし黒みやつれたる旅姿、いとふつつかに心づきなし。されど、人もいやしからぬ筋に、容貌などねびたれど、きよげにて、ただならず、気色よしづきてなどぞありける。

国の物語など申すに、「湯桁はいくつ」と、問はまほしく思せど、あいなくまばゆくて、御心のうちに思し出づることもさまざまなり。

「ものまめやかなる大人を、かく思ふも、げにをこがましく、うしろめたきわざなりや。げに、これぞ、なのめならぬ片はなべかりける」と、馬頭の諫め思し出でて、いとほしきに、「つれなき心はねたけれど、人のためは、あはれ」と思しなさる。

「娘をばさるべき人に預けて、北の方をば率て下りぬべし」と、聞きたまふに、ひとかたならず心あわたたしくて、「今一度はえあるまじきことにや」と、小君を語らひたまへど、人の心を合せたらむことにてだに、軽らかにえしも紛れたまふまじきを、まして、似げなきことに思ひて、今さらに見苦しかるべし、と思ひ離れたり。

さすがに、絶えて思ほし忘れなむことも、いと云ふかひなく、憂かるべきことに思ひて、さるべき折々の御答へなど、なつかしく聞こえつつ、なげの筆づかひにつけたる言の葉、あやしくうたげに、目とまるべきふし加へなどして、あはれと思しぬべき人のけはひなれば、つれなくねたきものの、忘れがたきに思す。

いま一方は、主強くなるとも、変らずうちとけぬべく見えしさまなるを頼みて、とかく聞きたまへど、御心も動かさずぞありける。

はかばかしくも申しはべらず。『いと忍びて、五月のころほひよりものしたまふ人なむあるべけれど、その人とは、さらに家の内の人になに知らせず』となむ申す。時々、中垣のかいま見しはべるに、げに若き女どもの透影見えはべり。褶だつもの、かことばかり引きかけて、かしづく人はべるなめり。昨日、夕日のなごりなくさし入りてはべりしに、文書くとてみてはべりし人の、顔こそいとよくはべりしか。もの思へるけはひして、ある人びとも忍びてうち泣くさまなどなむ、しるく見えはべる」

と聞こゆ。君うち笑みたまひて、「知らばや」と思ほしたり。

おぼえこそ重かるべき御身のほどなれど、御よはひのほど、人のなびきめできこえたるさまなど思ふには、好きたまはざらむも、情けなくさうぎうしかるべしかし、人のうけひかぬほどにてだに、なほ、さりぬべきあたりのことは、このましようおぼゆるものを、と思ひをり。

「もし、見たまへ得ることもやはべると、はかなきついで作り出でて、消息など遣はしたりき。書き馴れたる手して、口とく返り事などはべりき。いと口惜しうはあらぬ若人どもなむはべるめる」

と聞こゆれば、

「なほ言ひ寄れ。尋ね寄らでは、さうぎうしかりなむ」とのたまふ。

かの、下が下と、人の思ひ捨てし住まひなれど、その中にも、思ひのほかには口惜しからぬを見つけたらばと、めづらしく思ほすなりけり。

さて、かの空蟬のあさましくつれなきを、この世の人には違ひて思すに、おいらかならましかば、心苦しき過ちにてもやみぬべきを、いとねたく、負けてやみなむを、心にかからぬ折なし。かやうの並々までは思ほしかからざりつるを、ありし雨夜の品定めの後、いぶかしく思ほしなる品々あるに、いとど隈なくなりぬる御心なめりかし。

「さらば、その宮仕人ななり。したり顔にももの馴れて言へるかな」と、「めざましかるべき際にやあらむ」と思せど、さして聞こえかかれる心の、憎からず過ぐしがたきぞ、例の、この方には重からぬ御心なめるかし。御畳紙にいたうあらぬさまに書き変へたまひて、

「寄りてこそそれかとも見めたそかれに　　ほのぼの見つる花の夕顔」
ありつる御隨身して遣はす。

まだ見ぬ御さまなりけれど、いとしく思ひあてられたまへる御側目を見過ぐさで、さしおどろかしけるを、答へたまはほど経ければ、なまはしたなきに、かくわざとめかしければ、あまえて、「いかに聞こえむ」など言ひしろふべかめれど、めざましと思ひて、隨身は参りぬ。

御前駆の松明ほのかにて、いと忍びて出でたまふ。半蔀は下ろしてけり。隙々より見ゆる灯の光、螢よりけにほのかにあはれなり。

御心ぎしの所には、木立前栽など、なべての所に似ず、いとのだかに心にくく住みなしたまへり。うちとけぬ御ありさまなどの、気色ことなるに、ありつる垣根思ほし出でらるべくもあらずかし。

翌朝、すこし寝過ぐしたまひて、日さし出づるほどに出でたまふ。朝けの姿は、げに人のめできこえむも、ことわりなる御さまなりけり。

今日もこの蔀の前渡りしたまふ。来し方も過ぎたまひけむわたりなれど、ただはかなき一ふしに御心とまりて、「いかなる人の住み処ならむ」とは、往き来に御目とまりたまひけり。

惟光、日頃ありて参れり。

「わづらひはべる人、なほ弱げにはべれば、とかく見たまへあつかひてなむ」など、聞こえて、近く参り寄りて聞こゆ。

「仰せられしのちなむ、隣のこと知りてはべる者、呼びて問はせはべりしかど、

「いはけなかりけるほどに、思ふべき人びとのうち捨ててものしたまひにけるなごり、育む人あまたあるやうなりしかど、親しく思ひ睦ぶる筋は、またなくなむ思ほえし。人となりて後は、限りあれば、朝夕にしもえ見たてまつらず、心のままに訪らひ参づることはなけれど、なほ久しう対面せぬ時は、心細くおぼゆるを、『さらぬ別れはなくもがな』」

となむ、こまやかに語らひたまひて、おし拭ひたまへる袖のにほひも、いと所狭きまで薰り満ちたるに、げに、よに思へば、おしなべたらぬ人の御宿世ぞかすと、尼君をもどかすと見つる子ども、皆うちしほたれけり。

修法など、またまた始むべきことなど掟てのたまはせて、出でたまふとて、惟光に紙燭召して、ありつる扇御覧ずれば、もて馴らしたる移り香、いと染み深うなつかしくて、をかしうすさみ書きたり。

「心あてにそれかとぞ見る白露の　光そへたる夕顔の花」

そこはかとなく書き紛らはしたるも、あてはかにゆゑづきたれば、いと思ひのほか、をかしうおぼえたまふ。惟光に、

「この西なる家は何人の住むぞ。問ひ聞きたりや」

とのたまへば、例のうるさき御心とは思へども、えさは申さで、

「この五、六日ここにはべれど、病者のことを思うたまへ扱ひはべるほどに、隣のことはえ聞きはべらず」

など、はしたなやかに聞こゆれば、

「憎しとこそ思ひたれな。されど、この扇の、尋ぬべきゆゑありて見ゆるを。」

なほ、このわたりの心知れらむ者を召して問へ」

とのたまへば、入りて、この宿守なる男を呼びて問ひ聞く。

「揚名介なる人の家になむはべりける。男は田舎にまかりて、妻なむ若く事好みて、はらからなど宮仕人にて来通ふ、と申す。詳しきことは、下人のえ知りはべらぬにやあらむ」と聞こゆ。

「これに置きて参らせよ。枝も情けなげなめる花を」

とて取らせたれば、門開けて惟光朝臣出で来たるして、奉らす。

「鍵を置きまどはしはべりて、いと不便なるわざなりや。もののあやめ見たまへ分くべき人もはべらぬわたりなれど、らうがはしき大路に立ちおはしまし
て」とかしこまり申す。

引き入れて、下りたまふ。惟光が兄の阿闍梨、婿の三河守、娘など、渡り集
ひたるほどに、かくおはしましたる喜びを、またなきことにかしこまる。

尼君も起き上がりて、

「惜しげなき身なれど、捨てがたく思うたまへつることは、ただ、かく御前
にさぶらひ、御覽ぜらるることの変りはべりなむことを口惜しく思ひたまへ、
たゆたひしかど、忌むことのしるしによみがへりてなむ、かく渡りおはします
を、見たまへはべりぬれば、今なむ阿弥陀仏の御光も、心清く待たればべるべ
き」

など聞こえて、弱げに泣く。

「日ごろ、おこたりがたくものせらるるを、安からず嘆きわたりつるに、か
く、世を離るるさまにもしたまへば、いとあはれに口惜しうなむ。命長くて、
なほ位高くなど見なしたまへ。さてこそ、九品の上にも、障りなく生まれたま
はめ。この世にすこし恨み残るは、悪ろきわざとなむ聞く」など、涙ぐみての
たまふ。

かたほなるをだに、乳母やうの思ふべき人は、あさましうまほに見なすもの
を、まして、いと面立たしう、なづさひ仕うまつりけむ身も、いたはしうかた
じけなく思ほゆべかめれば、すすろに涙がちなり。

子どもは、いと見苦しと思ひて、「背きぬる世の去りがたきやうに、みづか
らひそみ御覽ぜられたまふ」と、つきしろひ目くはす。

君は、いとあはれと思ほして、

六条わたりの御忍び歩きのところ、内よりまかでたまふ中宿りに、大弐の乳母のいたくわづらひて尼になりにける、とぶらはむとて、五条なる家尋ねておはしたり。

御車入るべき門は鎖したりければ、人して惟光召させて、待たせたまひけるほど、むつかしげなる大路のさまを見わたしたまへるに、この家のかたはらに、桧垣といふもの新しうして、上は半部四五間ばかり上げわたして、簾などもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの透影、あまた見えて覗く。立ちさまよふらむ下つ方思ひやるに、あながちに丈高き心地ぞする。いかなる者の集へるならむと、やうかはりて思さる。

御車もいたくやつしたまへり、前駆も追はせたまはず、誰れとか知らむとうちとけたまひて、すこしさし覗きたまへれば、門は葎のやうなる、押し上げたる、見入れのほどなく、ものはかなき住まひを、あはれに、「何処かさして」と思ほしなせば、玉の台も同じことなり。

切懸だつ物に、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉開けたる。

「遠方人にも申す」

と独りごちたまふを、御隨身ついで、

「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ咲きはべりける」

と申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、このもかのも、あやしきうちよろぼひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに這ひまつはれたるを、

「口惜しの花の契りや。一房折りて参れ」

とのたまへば、この押し上げたる門に入りて折る。さすがに、されたる遣戸口に、黄なる生絹の単袴、長く着なしたる童の、をかしげなる出で来て、うち招く。白き扇のいたうこがしたるを、

夕 顔

夕

顔

とて、恥づかしめたまふ。左右に苦しう思へど、かの御手習取り出でたり。さすがに、取りて見たまふ。かのもぬけを、いかに、伊勢をの海人のしほなれてや、など思ふもただならず、いとよろづに乱れて、西の君も、もの恥づかしき心地してわたりたまひにけり。また知る人もなきことなれば、人知れずうちながめてゐたり。小君の渡り歩くにつけても、胸のみ塞がれど、御消息もなし。あさましと思ひ得る方もなくて、されたる心に、ものあはれなるべし。

つれなき人も、さこそしづむれ、いとあさはかにもあらぬ御気色を、ありしながらのわが身ならばと、取り返すものならねど、忍びがたければ、この御畳紙の片つ方に、

「空蟬の羽に置く露の木隠れて

忍び忍びに濡るる袖かな」

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文
(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

いとわりなければ、下にはべりつるを、人少ななりとて召ししかば、昨夜参う上りしかど、なほえ堪ふまじくなむ」

と、憂ふ。答へも聞かで、

「あな、腹々。今聞こえむ」とて過ぎぬるに、からうして出でたまふ。なほかかる歩きは軽々しくあやしかりけりと、いよいよ思し懲りぬべし。

小君、御車の後にて、二条院におはしましぬ。ありさまのたまひて、「幼かりけり」とあはめたまひて、かの人の心を爪弾きをしつつ恨みたまふ。いとほしうて、ものもえ聞こえず。

「いと深う憎みたまふべかめれば、身も憂く思ひ果てぬ。などか、よそにても、なつかしき答へばかりはしたまふまじき。伊予介に劣りける身こそ」

など、心づきなしと思ひてのたまふ。ありつる小桂を、さすがに、御衣の下に引き入れて、大殿籠もれり。小君を御前に臥せて、よろづに恨み、かつは、語らひたまふ。

「あこは、らうたけれど、つらきゆかりにこそ、え思ひ果つまじけれ」

とまめやかにのたまふを、いとわびしと思ひたり。

しばしうち休みたまへど、寝られたまはず。御硯急ぎ召して、さしはへたる御文にはあらで、畳紙に手習のやうに書きすさびたまふ。

「空蝉の身をかへてける木のもとに　なほ人がらのなつかしきかな」

と書きたまへるを、懐に引き入れて持たり。かの人もいかに思ふらむと、いとほしけれど、かたがた思ほしかへして、御ことつけもなし。かの薄衣は、小桂のいとなつかしき人香に染めるを、身近くならして見ゐたまへり。

小君、かしこに行きたれば、姉君待ちつけて、いみじくのたまふ。

「あさましかりしに、とかう紛らはしても、人の思ひけむことさりとどころなきに、いとなむわりなき。いとかう心幼きを、かつはいかに思ほすらむ」

もえまかすまじくなむありける。また、さるべき人びとも許されじかすと、かねて胸いたくなむ。忘れて待ちたまへよ」など、なほなほしく語らひたまふ。

「人の思ひはべらむことの恥づかしきになむ、え聞こえさすまじき」とうらもなく言ふ。

「なべて、人に知らせばこそあらめ、この小さき上人に伝へて聞こえむ。気色なくもてなしたまへ」

など言ひおきて、かの脱ぎすべしたると見ゆる薄衣を取りて出でたまひぬ。

小君近う臥したるを起こしたまへば、うしろめたう思ひつつ寝ければ、ふとおどろきぬ。戸をやをら押し開くるに、老いたる御達の声にて、

「あれは誰ぞ」

とおどろおどろしく問ふ。わづらはしくて、

「まろぞ」と答ふ。

「夜中に、こは、なぞ外歩かせたまふ」

ときかしがりて、外ざまへ来。いと憎くて、

「あらず。ここもとへ出づるぞ」

とて、君を押し出でたてまつるに、暁近き月、隈なくさし出でて、ふと人の影見えければ、

「またおはするは、誰ぞ」と問ふ。

「民部のおもとなめり。けしうはあらぬおもとの丈だちかな」

と言ふ。丈高き人の常に笑はるるを言ふなりけり。老人、これを連ねて歩きけると思ひて、

「今、ただ今立ちならびたまひなむ」

と言ふ言ふ、我もこの戸より出でて来。わびしければ、えはた押し返さで、渡殿の口にかい添ひて隠れ立ちたまへれば、このおもときし寄りて、

「おもとは、今宵は、上にやさぶらひたまひつる。一昨日より腹を病みて、

思ひ分かれず、やをら起き出でて、生絹なる単衣を一つ着て、すべり出でにけり。

君は入りたまひて、ただひとり臥したるを心やすく思す。床の下に二人ばかりぞ臥したる。衣を押しやりて寄りたまへるに、ありしけはひよりは、ものものしくおぼゆれど、思ほしうも寄らずかし。いぎたなきさまなどぞ、あやしく変はりて、やうやう見あらはしたまひて、あさましく心やましけれど、「人違へとたどりて見えむも、をこがましく、あやしと思ふべし、本意の人を尋ね寄らむも、かばかり逃るる心あめれば、かひなう、をこにこそ思はめ」と思す。かのをかしかりつる灯影ならば、いかがはせむに思しなるも、悪ろき御心浅さなめりかし。

やうやう目覚めて、いとおぼえずあさましきに、あきれたる気色にて、何の心深いとほしき用意もなし。世の中をまだ思ひ知らぬほどよりは、さればみたる方にて、あえかにも思ひまどはず。我とも知らせじと思ほせど、いかにしてかかることぞと、後に思ひめぐらさむも、わがためには事にもあらねど、あのつらき人の、あながちに名をつつむも、さすがにいとほしければ、たびたびの御方違へにことつけたまひしさまを、いとよう言ひなしたまふ。たどらむ人は心得つべけれど、まだいと若き心地に、さこそさし過ぎたるやうなれど、えしも思ひ分かず。

憎しとはなけれど、御心とまるべきゆゑもなき心地して、なほかのうれたき人の心をいみじく思す。「いづくにはひ紛れて、かたくなしと思ひゐたらむ。かく執念き人はありがたきものを」と思すしも、あやにくに、紛れがたう思ひ出でられたまふ。この人の、なま心なく、若やかなるけはひもあはれなれば、さすがに情け情けしく契りおかせたまふ。

「人知りたることよりも、かやうなるは、あはれも添ふこととなむ、昔人も言ひける。あひ思ひたまへよ。つつむことなきにしもあらねば、身ながら心に

「若君はいづくにおはしますならむ。この御格子は鎖してむ」とて、鳴らすなり。

「静まりぬなり。入りて、さらば、たばかれ」とのたまふ。

この子も、いもうとの御心はたわむところなくまめだちたれば、言ひあはせむ方なくて、人少なならむ折に入れたてまつらむと思ふなりけり。

「紀伊守の妹もこなたにあるか。我にかいま見せさせよ」とのたまへど、

「いかでか、さははべらむ。格子には几帳添へてはべり」と聞こゆ。

さかし、されどもをかしく思せど、「見つとは知らせじ、いとほし」と思して、夜更くることの心もとなさをのたまふ。

こたみは妻戸を叩きて入る。皆人びと静まり寝にけり。

「この障子口に、まろは寝たらむ。風吹きとほせ」とて、畳広げて臥す。御達、東の廂にいとあまた寝たるべし。戸放ちつる童もそなたに入りて臥しぬれば、とばかり空寝して、灯明かき方に屏風を広げて、影ほのかなるに、やをら入れたてまつる。

「いかにぞ、をこがましきこともこそ」と思すに、いとおつましけれど、導くままに、母屋の几帳の帷子引き上げて、いとやをら入りたまふとすれど、皆静まれる夜の、御衣のけはひやはらかなるしも、いとしかりけり。

女は、さこそ忘れたまふをうれしきに思ひなせど、あやしく夢のやうなることを、心に離るる折なきころにて、心とけたる寝だに寝られずなむ、昼はながめ、夜は寝覚めがちなれば、春ならぬ木の芽も、いとなく嘆かしきに、碁打ちつる君、「今宵は、こなたに」と、今めかしくうち語らひて、寝にけり。

若き人は、何心なくいとようまどろみたるべし。かかるけはひの、いと香ばしくうち匂ふに、顔をもたげたるに、単衣うち掛けたる几帳の隙間に、暗けれど、うち身じろき寄るけはひ、いとしかるし。あさましくおぼえて、ともかくも

ど、

「いで、このたびは負けにけり。隅のところ、いでいで」と指をかがめて、
「十、二十、三十、四十」などかぞふるさま、伊予の湯桁もたどたどしかるま
じう見ゆ。すこし品おくれたり。

たとしへなく口おほひて、さやかにも見せねど、目をしつめたまへれば、お
のづから側目も見ゆ。目すこし腫れたる心地して、鼻などもあざやかなるとこ
ろなうねびれて、にほはしきところも見えず。言ひ立つれば、悪ろきによれる
容貌をいいたうもてつけて、このまされる人よりは心あらむと、目とどめつ
べきさましたり。

にぎははしう愛敬づきをかしげなるを、いよいよほこりにうちとけて、笑
ひなどそぼるれば、にほひ多く見えて、さる方にいとをかしき人ざまなり。あ
はつけしとは思しながら、まめならぬ御心は、これもえ思し放つまじかりけり。

見たまふかぎりの人は、うちとけたる世なく、ひきつくるひ側めたるうはべ
をのみこそ見たまへ、かくうちとけたる人のありさまかいま見などは、まだし
たまはざりつることなれば、何心もなうさやかなるはいとほしながら、久しう
見たまはまほしきに、小君出で来る心地すれば、やをら出でたまひぬ。

渡殿の戸口に寄りゐたまへり。いとかたじけなしと思ひて、

「例ならぬ人はべりて、え近うも寄りはべらず」

「さて、今宵もや帰してむとする。いとあさましよう、からうこそあべけれ」
とのたまへば、

「などでか。あなたに帰りはべりなば、たばかりはべりなむ」と聞こゆ。

「さもなびかしつべき気色にこそはあらめ。童なれど、ものの心ばへ、人の
気色見つべくしづまれるを」と、思すなりけり。

碁打ち果てつるにやあらむ、うちそよめく心地して、人びとあかるるけはひ
などすなり。

入りぬ。御達、

「あらはなり」と言ふなり。

「なぞ、かう暑きに、この格子は下ろされたる」と問へば、

「昼より、西の御方の渡らせたまひて、碁打たせたまふ」と言ふ。

さて向かひるたらむを見ばや、と思ひて、やをら歩み出でて、簾のはさまに入りたまひぬ。

この入りつる格子はまだ鎖さねば、隙見ゆるに、寄りて西ざまに見通したまへば、この際に立てたる屏風、端の方おし畳まれたるに、紛るべき几帳なども、暑ければにや、うち掛けて、いとよく見入れらる。

火近う灯したり。母屋の中柱に側める人やわが心かくると、まづ目とどめたまへば、濃き綾の単襲なめり。何にかあらむ表に着て、頭つき細やかに小さき人の、ものげなき姿ぞしたる。顔などは、差し向かひたらむ人などにも、わざと見ゆまじうもてなしたり。手つき痩せ痩せにて、いたうひき隠しためり。

いま一人は、東向きにて、残るところなく見ゆ。白き羅の単襲、二藍の小桂だつもの、ないがしろに着なして、紅の腰ひき結へる際まで胸あらはに、ぼうぞくなるもてなしなり。いと白うをかしげに、つぶつぶと肥えて、そぞろかなる人の、頭つき額つきものあざやかに、まみ口つき、いと愛敬づき、はなやかなる容貌なり。髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、下り端、肩のほどきよげに、すべていとねぢけたるところなく、をかしげなる人と見えたり。

むべこそ親の世になくは思ふらめと、をかしく見たまふ。心地ぞ、なほ静かなる気を添へばやと、ふと見ゆる。かどなきにはあるまじ。碁打ち果てて、けちさすわたり、心とげに見えて、きはぎはとさうどけば、奥の人はいと静かにのどめて、

「待ちたまへや。そこは持にこそあらめ。このわたりの劫をこそ」など言へ

寝られたまはぬままには、「我は、かく人に憎まれてもならばぬを、今宵なむ、初めて憂しと世を思ひ知りぬれば、恥づかしくて、ながらふまじうこそ、思ひなりぬれ」などのたまへば、涙をさへこぼして臥したり。いとらうたしと思す。手さぐりの、細く小さきほど、髪の毛いと長からざりしけはひのさまかよひたるも、思ひなしにやあはれなり。あながちにかかづらひたどり寄らむも、人悪ろかるべく、まめやかにめざましと思し明かしつつ、例のやうにもものたまひまつはさず。夜深う出でたまへば、この子は、いといとほしく、さうざうしと思ふ。

女も、並々ならずかたはらいたしと思ふに、御消息も絶えてなし。思し懲りにけると思ふにも、「やがてつれなくて止みたまひなましかば憂からまし。しひていとほしき御振る舞ひの絶えざらむもうたてあるべし。よきほどに、かくて閉ぢめてむ」と思ふものから、ただならず、ながめがちなり。

君は、心づきなしと思しながら、かくてはえ止むまじう御心にかかり、人悪ろく思ほしわびて、小君に、「いとつらうも、うれたうもおぼゆるに、しひて思ひ返せど、心にしも従はず苦しきを。さりぬべきを見て、対面すべくたばかれ」とのたまひわたれば、わづらはしけれど、かかる方にてても、のたまひまつはすは、うれしうおぼえけり。

紀伊守国に下りなどして、女どちのどやかなる夕闇の道たどしげなる紛れに、わが車にて率てたてまつる。

この子も幼きを、いかならむと思せど、さのみもえ思しのどむまじければ、さりげなき姿にて、門など鎖さぬ先にと、急ぎおはす。

人見ぬ方より引き入れて、降ろしたてまつる。童なれば、宿直人などもことに見入れ追従せず、心やすし。

東の妻戸に、立てたてまつりて、我は南の隅の間より、格子叩きののしりて

空 蝉

空

蝉

と聞こゆ。いとほしと思へり。

「よし、あこだに、な捨てそ」

とのたまひて、御かたはらに臥せたまへり。若くなつかしき御ありさまを、うれしくめでたしと思ひたれば、つれなき人よりは、なかなかあはれに思さるとぞ。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

るは、いみじく忌むなるものを」と言ひおどして、「『心地悩ましければ、人びと避けずおさへさせてなむ』と聞こえさせよ。あやしと誰も誰も見るらむ」と言ひ放ちて、心の中には、「いと、かく品定まりぬる身のおぼえならで、過ぎにし親の御けはひとまれるふるさとながら、たまさかにも待ちつけたてまつらば、をかしようもやあらまし。しひて思ひ知らぬ顔に見消つも、いかにほど知らぬやうに思すらむ」と、心ながらも、胸いたく、さすがに思ひ乱る。「とてもかくても、今は言ふかひなき宿世なりければ、無心に心づきなくて止みなむ」と思ひ果てたり。

君は、いかにたばかりなさむと、まだ幼きをうしろめたく待ち臥したまへるに、不用なるよしを聞こゆれば、あさましくめづらかなりける心のほどを、「身もいと恥づかしくこそなりぬれ」と、いとほしき御気色なり。とばかりものたまはず、いたくうめきて、憂しと思したり。

「帚木の心を知らで園原の 道にあやなく惑ひぬるかな 聞こえむ方こそなけれ」

とのたまへり。女も、さすがに、まどろまざりければ、

「数ならぬ伏屋に生ふる名の憂さに あるにもあらず消ゆる帚木」と聞こえたり。

小君、いとほしさに眠たくもあらでまどひ歩くを、人あやしと見るらむ、とわびたまふ。

例の、人びとはいぎたなきに、一所すずろにすさまじく思し続けらるれど、人に似ぬ心ぎまの、なほ消えず立ち上れりける、とねたく、かかるにつけてこそ心もとまれと、かつは思しながら、めざましくつらければ、さばれと思せども、さも思し果つまじく、

「隠れたらむ所に、なほ率て行け」とのたまへど、

「いとむつかしげにさし籠められて、人あまたはべるめれば、かしこげに」

ともわが身からこそと思ひて、うちとけたる御答へも聞こえず。ほのかなりし御けはひありさまは、「げに、なべてにやは」と、思ひ出できこえぬにはあらねど、「をかしきさまを見えたてまつりても、何にかはなるべき」など、思ひ返すなりけり。

君は思しおこたる時の間もなく、心苦しくも恋しくも思し出づ。思へりし気色などのいとほしさも、晴るけむ方なく思しわたる。軽々しく這ひ紛れ立ち寄りたまはむも、人目しげからむ所に、便なき振る舞ひやあらはれむと、人のためもいとほしく、と思しわづらふ。

例の、内に日数経たまふころ、さるべき方の忌み待ち出でたまふ。にはかにまかでたまふまねして、道のほどよりおはしましたり。

紀伊守おどろきて、遣水の面目とかしこまり喜ぶ。小君には、昼より、「かくなむ思ひよれる」とのたまひ契れり。明け暮れまつはし馴らしたまひければ、今宵もまづ召し出でたり。

女も、さる御消息ありけるに、思したばかりつらむほどは、浅くしも思ひなされねど、さりとて、うちとけ、人げなきありさまを見えたてまつりても、あぢきなく、夢のやうにて過ぎにし嘆きを、またや加へむ、と思ひ乱れて、なほさて待ちつけきこえさせむことのまばゆければ、小君が出でて往ぬるほどに、「いとけ近ければ、かたはらいたし。なやましければ、忍びてうち叩かせなごせむに、ほど離れてを」

とて、渡殿に、中将といひしが局したる隠れに、移ろひぬ。

さる心して、人とく静めて、御消息あれど、小君は尋ねあはず。よろづの所求め歩いて、渡殿に分け入りて、からうしてたどり来たり。いとあさましくつらし、と思ひて、

「いかにかひなしと思さむ」と、泣きぬばかり言へば、

「かく、けしからぬ心ばへは、つかふものか。幼き人のかかること言ひ伝ふ

またの日、小君召したれば、参るとて御返り乞ふ。

「かかる御文見るべき人もなし、と聞こえよ」

とのたまへば、うち笑みて、

「違ふべくものたまはざりしものを。いかが、さは申さむ」

と言ふに、心やましく、残りなくのたまはせ、知らせてけると思ふに、つらきこと限りなし。

「いで、およすけたることは言はぬぞよき。さは、な参りたまひそ」とむつかられて、

「召すには、いかでか」とて、参りぬ。

紀伊守、好き心にこの継母のありさまをあたらしきものに思ひて、追従しありければ、この子をもてかしづきて、率てありく。

君、召し寄せて、

「昨日待ち暮らししを。なほあひ思ふまじきなめり」

と怨じたまへば、顔うち赤めてゐたり。

「いづら」とのたまふに、しかしかと申すに、

「言ふかひなのことや。あさまし」とて、またも賜へり。

「あこは知らじな。その伊予の翁よりは、先に見し人ぞ。されど、頼もしげなく頸細しとて、ふつつかなる後見まうけて、かく侮りたまふなめり。さりとも、あこはわが子にてをあれよ。この頼もし人は、行く先短かりなむ」

とのたまへば、「さもやありけむ、いみじかりけることかな」と思へる、をかしと思す。

この子をまつはしたまひて、内にも率て参りなどしたまふ。わが御匣殿にのたまひて、装束などもせさせ、まことに親めきてあつかひたまふ。

御文は常にあり。されど、この子もいと幼し、心よりほかに散りもせば、軽々しき名さへとり添へむ身のおぼえを、いとつきなかるべく思へば、めでたきこ

このほどは大殿にのみおはします。なほいとかき絶えて、思ふらむことのとほしく御心にかかりて、苦しく思しわびて、紀伊守を召したり。

「かの、ありし中納言の子は、得させてむや。らうたげに見えしを。身近く使ふ人にせむ。上にも我奉らむ」とのたまへば、

「いとかしこき仰せ言にはべるなり。姉なる人にのたまひむ」

と申すも、胸つぶれて思せど、

「その姉君は、朝臣の弟や持たる」

「さもはべらず。この二年ばかりぞ、かくてものははべれど、親のおきてに違へりと思ひ嘆きて、心ゆかぬやうになむ、聞きたまふる」

「あはれのことや。よろしく聞こえし人ぞかし。まことによしや」とのたまへば、

「けしうははべらざるべし。もて離れてうとうとしくはべれば、世のたとひにて、睦びはべらず」と申す。

さて、五六日ありて、この子率て参れり。こまやかにをかしとはなけれど、なまめきたるさまして、あて人と見えたり。召し入れて、いとなつかしく語らひたまふ。童心地に、いとめでたくうれしと思ふ。いもうとの君のことも詳しく問ひたまふ。さるべきことは答へ聞こえなどして、恥づかしげにしづまりたれば、うち出でにくし。されど、いとよく言ひ知らせたまふ。

かかることこそはと、ほの心得るも、思ひの外なれど、幼な心地に深くしもたどらず。御文を持って来たれば、女、あさましきに涙も出で来ぬ。この子の思ふらむこともはしたなくて、さすがに、御文を面隠しに広げたり。いと多くて、

「見し夢を逢ふ夜ありやと嘆くまに　目さへあはでどころも経にける　寝る夜なければ」

など、目も及ばぬ御書きざまも、霧り塞がりて、心得ぬ宿世うち添へりける身を思ひ続けて臥したまへり。

君は、またかやうのついであらむこともいとかたく、さしはへてはいかでか、御文なども通はむことのいとわりなきを思すに、いと胸いたし。奥の中將も出でて、いと苦しければ、許したまひても、また引きとどめたまひつつ、

「いかでか、聞こゆべき。世に知らぬ御心のつらさも、あはれも、浅からぬ世の思ひ出では、さまざまめづらかなるべき例かな」

とて、うち泣きたまふ気色、いとなまめきたり。鶏もしばしば鳴くに、心あわたたしくて、

「つれなきを恨みも果てぬしののめに　とりあへぬまでおどろかすらむ」
女、身のありさまを思ふに、いとつきなくまばゆき心地して、めでたき御もてなしも、何ともおぼえず、常はいとすすくしく心づきなしと思ひあなづる伊予の方の思ひやられて、「夢にや見ゆらむ」と、そら恐ろしくつつまし。

「身の憂さを嘆くにあかで明くる夜は　とり重ねてぞ音もなかれける」
ことと明くなれば、障子口まで送れたまふ。内も外も人騒がしければ、引き立てて、別れたまふほど、心細く、隔つる関と見えたり。

御直衣など着たまひて、南の高欄にしばしうち眺めたまふ。西面の格子そそき上げて、人びと覗くべかめる。簀子の中のほどに立てたる小障子の上より仄かに見えたまへる御ありさまを、身にしむばかり思へる好き心どもあめり。

月は有明にて、光をさまれるものから、かげけぎやかに見えて、なかなかをかしき曙なり。何心なき空のけしきも、ただ見る人から、艶にもすぐくも見ゆるなりけり。人知れぬ御心には、いと胸いたく、ことつてやらむすがだになきをと、かへりみがちにて出でたまひぬ。

殿に帰りたまひても、とみにもまどろまれたまはず。またあひ見るべき方なきを、まして、かの人の思ふらむ心のうち、いかならむと、心苦しく思ひやりたまふ。「すぐれたることはなけれど、めやすくもつけてもありつる中の品かな。隈なく見集めたる人の言ひしことは、げに」と思し合はせられけり。

「その際々を、まだ知らぬ、初事ぞや。なかなか、おしなべたる列に思ひなしたまへるなむうたてありける。おのづから聞きたまふやうもあらむ。あながちなる好き心は、さらにならはぬを。さるべきにや、げに、かくあはめられたてまつるも、ことわりなる心まどひを、みづからもあやしきまでなむ」

など、まめだちてよろづにのたまへど、いとたぐひなき御ありさまの、いよいようちとけきこえむことわびしければ、すくよかに心づきなしとは見えたてまつるとも、さる方の言ふかひなきにて過ぐしてむと思ひて、つれなくのみもてなしたり。人柄のたをやぎたるに、強き心をしひて加へたれば、なよ竹の心地して、さすがに折るべくもあらず。

まことに心やましくて、あながちなる御心ばへを、言ふ方なしと思ひて、泣くさまなど、いとあはれなり。心苦しくはあれど、見ざらましかば口惜しからまし、と思す。慰めがたく、憂しと思へれば、

「など、かく疎ましきものにしも思すべき。おぼえなきさまなるしもこそ、契りあるとは思ひたまはめ。むげに世を思ひ知らぬやうに、おぼほれたまふなむ、いとつらき」と恨みられて、

「いとかく憂き身のほどの定まらぬ、ありしなからの身に、かかる御心ばへを見ましかば、あるまじき我が頼みにて、見直したまふ後瀬をも思ひたまへ慰めましを、いとかう仮なる浮き寝のほどを思ひはべるに、たぐひなく思うたまへ惑はるるなり。よし、今は見きとなかけそ」

とて、思へるさま、げにいとことわりなり。おろかならず契り慰めたまふこと多かるべし。

鶏も鳴きぬ。人びと起き出でて、

「いといぎたなかりける夜かな」

「御車ひき出でよ」

など言ふなり。守も出で来て、

「女などの御方違へこそ。夜深く急がせたまふべきかは」など言ふもあり。

も、さらに浅くはあらじと、思ひなしたまへ」

と、いとやはらかにのたまひて、鬼神も荒だつまじきけはひなれば、はしたなく、「ここに、人」とも、えののしらず。心地はた、わびしく、あるまじきことと思へば、あさましく、「人違へにこそはべるめれ」と言ふも息の下なり。

消えまどへる気色、いと心苦しくうたげなれば、をかしと見たまひて、

「違ふべくもあらぬ心のしるべを、思はずにもおぼめいたまふかな。好きがましきさまには、よに見えたてまつらじ。思ふことすこし聞こゆべきぞ」

とて、いと小さやかなれば、かき抱きて障子のもと出でたまふにぞ、求めつる中将だつ人来あひたる。

「やや」とのたまふに、あやしくて探り寄りたるにぞ、いみじく匂ひみちて、顔にもくゆりかかる心地するに、思ひ寄りぬ。あさまじう、こはいかなることぞと思ひまどはるれど、聞こえむ方なし。並々の人ならばこそ、荒らかにも引きかなぐらめ、それだに人のあまた知らむは、いかがあらむ。心も騒ぎて、慕ひ来たれど、動もなくて、奥なる御座に入りたまひぬ。

障子をひきたてて、「暁に御迎へにものせよ」とのたまへば、女は、この人の思ふらむことさへ、死ぬばかりわりなきに、流るるまで汗になりて、いと悩ましげなる、いとほしけれど、例の、いづこより取う出たまふ言の葉にかあらむ、あはれ知らるばかり、情け情けしくのたまひ尽くすべかめれど、なほいとあさまじきに、

「現とおおぼえずこそ。数ならぬ身ながらも、思しくたしける御心ばへのほども、いかが浅くは思うたまへざらむ。いとかやうなる際は、際とこそはべなれ」

とて、かくおし立ちたまへるを、深く情けなく憂しと思ひ入りたるさまも、げにいとほしく、心恥づかしきけはひなれば、

「ここにぞ臥したる。客人は寝たまひぬるか。いかに近からむと思ひつるを、されど、け遠かりけり」

と言ふ。寝たりける声のしどけなき、いとよく似通ひたれば、いもうとと聞きたまひつ。

「廂にぞ大殿籠もりぬる。音に聞きつる御ありさまを見たてまつりつる、げにこそめでたかりけれ」と、みそかに言ふ。

「昼ならましかば、覗きて見たてまつりてまし」

とねぶたげに言ひて、顔ひき入れつる声す。「ねたう、心とどめても問ひ聞けかし」とあぢきなく思す。

「まろは端に寝はべらむ。あなくるし」

とて、灯かかげなどすべし。女君は、ただこの障子口筋交ひたるほどにぞ臥したるべき。

「中将の君はいづくにぞ。人げ遠き心地して、もの恐ろし」

と言ふなれば、長押の下に、人びと臥して答へすなり。

「下に湯におりて。『ただ今参らむ』とはべる」と言ふ。

皆静まりたるけはひなれば、掛金を試みに引きあけたまへれば、あなたよりは鎖ざりけり。几帳を障子口には立てて、灯はほの暗きに、見たまへば唐櫃だつ物どもを置きたれば、乱りがはしき中を、分け入りたまへれば、ただ一人いときさやかにて臥したり。なまわづらはしけれど、上なる衣押しやるまで、求めつる人と思へり。

「中将召しつればなむ。人知れぬ思ひの、しるしある心地して」

とのたまふを、ともかくも思ひ分かれず、物に襲はるる心地して、「や」とおびゆれど、顔に衣のさはりて、音にも立てず。

「うちつけに、深からぬ心のほどと見たまふらむ、ことわりなれど、年ごろ思ひわたる心のうちも、聞こえ知らせむとてなむ。かかるをりを待ち出でたる

りぬべく、けしうははべらぬを、殿上なども思ひたまへかけながら、すがすがしうはえ交じらひはべらぎめる」と申す。

「あはれのことや。この姉君や、まうとの後の親」

「さなむはべる」と申すに、

「似げなき親をも、まうけたりけるかな。主上にも聞こし召しおきて、『宮仕へに出だし立てむと漏らし奏せし、いかになりにけむ』と、いつぞやのたまはせし。世こそ定めなきものなれ」と、いとおよすけのたまふ。

「不意に、かくてもものはべるなり。世の中といふもの、さのみこそ、今も昔も、定まりたることはべらね。中についても、女の宿世は浮かびたるなむ、あはれにはべる」など聞こえさす。

「伊予介は、かしづくや。君と思ふらむな」

「いかがは。私の主とこそは思ひてはべるめるを、好き好きしきことと、なにがしよりはじめて、うけひきはべらずなむ」と申す。

「さりとも、まうとたちのつきづきしく今めきたらむに、おろしたてむやは。

かの介は、いとよしありて気色ばめるをや」など、物語したまひて、

「いづかたにぞ」

「皆、下屋におろしはべりぬるを、えやまかりおりあへざらむ」と聞こゆ。

酔ひすすみて、皆人びと簀子に臥しつつ、静まりぬ。

君は、とけても寝られたまはず、いたづら臥しと思さるるに御目覚めて、この北の障子のあなたに人のけはひするを、「こなたや、かくいふ人の隠れたる方ならむ、あはれや」と御心とどめて、やをら起きて立ち聞きたまへば、ありつる子の声にて、

「ものけたまはる。いづくにおはしますぞ」

と、かれたる声のかしきにて言へば、

にくからず。さすがに忍びて、笑ひなどするけはひ、ことさらびたり。格子を上げたりけれど、守、「心なし」とむつかりて下しつれば、火灯したる透影、障子の上より漏りたるに、やをら寄りたまひて、「見ゆや」と思せど、隙もなければ、しばし聞きたまふに、この近き母屋に集ひるたるなるべし、うちささめき言ふことどもを聞きたまへば、わが御上なるべし。

「いといたうまめだちて。まだきに、やむごとなきよすが定まりたまへるこそ、さうぎうしかめれ」 「されど、さるべき隈には、よくこそ、隠れ歩きたまふなれ」

など言ふにも、思すことのみ心にかかりたまへば、まづ胸つぶれて、「かやうのついでにも、人の言ひ漏らさむを、聞きつけたらむ時」などおぼえたまふ。ことなることなければ、聞きさしたまひつ。式部卿宮の姫君に朝顔奉りたまひし歌などを、すこしほほゆがめて語るも聞こゆ。「くつろぎがましく、歌誦じがちにもあるかな、なほ見劣りはしなむかし」と思す。

守出で来て、灯籠掛け添へ、灯明くかかげなどして、御くだものばかり参れり。

「とばり帳も、いかにぞは。さる方の心もとなくては、めざましきあるじならむ」とのたまへば、

「何よけむとも、えうけたまはらず」と、かしこまりてさぶらふ。端つ方の御座に、仮なるやうにて大殿籠もれば、人びとも静まりぬ。

あるじの子ども、をかしげにてあり。童なる、殿上のほどに御覧じ馴れたるもあり。伊予介の子もあり。あまたある中に、いとけはひあてはかにて、十二、三ばかりなるもあり。

「いづれかいづれ」など問ひたまふに、

「これは、故衛門督の末の子にて、いとかなしくしはべりけるを、幼きほどに後れはべりて、姉なる人のよすがに、かくてはべるなり。才などもつきはべ

とて大殿籠もれり。「いと悪しきことなり」と、これかれ聞こゆ。

「紀伊守にて親しく仕うまつる人の、中川のわたりなる家なむ、このころ水せき入れて、涼しき蔭にはべる」と聞こゆ。

「いとよかなり。悩ましきに、牛ながら引き入れつべからむ所を」

とのたまふ。忍び忍びの御方違へ所は、あまたありぬべけれど、久しくほど経て渡りたまへるに、方塞げて、ひき違へ他ざまへと思さむは、いとほしきなるべし。紀伊守に仰せ言賜へば、承りながら、退きて、

「伊予守の朝臣の家に慎むことはべりて、女房なむまかり移れるころにて、狭き所にはべれば、なめげなることやはべらむ」

と、下に嘆くを聞きたまひて、

「その人近からむなむ、うれしかるべき。女遠き旅寝は、もの恐ろしき心地すべきを。ただその几帳のうしろに」とのたまへば、

「げに、よろしき御座所にも」とて、人走らせやる。いと忍びて、ことさらにことごとしからぬ所をと、急ぎ出でたまへば、大臣にも聞こえたまはず、御供にも睦ましき限りしておはしましぬ。

「にはかに」とわぶれど、人も聞き入れず。寝殿の東面払ひあけさせて、かりそめの御しつらひしたり。水の心ばへなど、さる方にをかしくしなしたり。田舎家だつ柴垣して、前栽など心とめて植ゑたり。風涼しくて、そこはかとなき虫の声々聞こえ、螢しげく飛びまがひて、をかしきほどなり。

人びと、渡殿より出でたる泉にのぞきゐて、酒呑む。あるじも看求むと、こゆるぎのいそぎありくほど、君はのどやかに眺めたまひて、かの、中の品に取り出でて言ひし、この並ならむかしと思し出づ。

思ひ上がれる気色に聞きおきたまへる女なれば、ゆかしくて耳とどめたまへるに、この西面にぞ人のけはひする。衣の音なひはらはらとして、若き声ども

の折につきなく、目にとまらぬなどを、推し量らず詠み出でたる、なかなか心後れて見ゆ。

よろづのことに、などかは、さても、とおぼゆる折から、時々、思ひわかぬばかりの心にては、よしほみ情け立たざらむなむ目やすかるべき。

すべて、心に知れらむことをも、知らず顔にもてなし、言はまほしからむことをも、一つ二つのふしは過ぐすべくなむあべかりける」

と言ふにも、君は、人一人の御ありさまを、心の中に思ひつづけたまふ。「これに足らずまたさし過ぎたることなくものしたまひけるかな」と、ありがたきにも、いとど胸ふたがる。

いづ方により果つともなく、果て果てはあやしきことどもになりて、明かしたまひつ。

からうして今日は日のけしきも直れり。かくのみ籠もりさぶらひたまふも、大殿の御心いとほしければ、まかでたまへり。

おほかたの気色、人のけはひも、けぎやかにけ高く、乱れたるところまじらず、なほこれこそは、かの人びとの捨てがたく取り出でしまめ人には頼まれぬべけれ、と思すものから、あまりうるはしき御ありさまの、とけがたく恥づかしげに思ひしづまりたまへるをさうざうしくて、中納言の君、中務などやうの、おしなべたらぬ若人どもに、戯れ言などのたまひつつ、暑さに乱れたまへる御ありさまを、見るかひありと思ひきこえたり。

大臣も渡りたまひて、うちとけたまへれば、御几帳隔てておはしまして、御物語聞こえたまふを、「暑きに」とにがみたまへば、人びと笑ふ。「あなかま」とて、脇息に寄りおはす。いとやすらかなる御振る舞ひなりや。

暗くなるほどに、「今宵、中神、内よりは塞がりてはべりけり」と聞こゆ。

「さかし、例は忌みたまふ方なりけり」「二条の院にも同じ筋にて、いづくにか違へむ。いと悩ましきに」

『逢ふことの夜をし隔てぬ仲ならば

ひる間も何かまばゆからまし』

さすがに口疾くなどははべりき」

と、しづしづと申せば、君達あさましと思ひて、「そら言」とて笑ひたまふ。

「いづこのさる女かあるべき。おいらかに鬼とこそ向かひるたらめ。むくつ
けきこと」

と爪弾きをして、「言はむ方なし」と、式部をあはめ憎みて、

「すこしよろしからむことを申せ」と責めたまへど、

「これよりめづらしきことはさぶらひなむや」とてをり。

「すべて男も女も悪ろ者は、わづかに知れる方のことを残りなく見せ尽くさ
むと思へるこそ、いとほしけれ。

三史五経、道々しき方を、明らかに悟り明かさむこそ、愛敬なからめ、など
かは、女といはむからに、世にあることの公私につけて、むげに知らずいたら
ずしもあらむ。わざと習ひまねばねど、すこしもかどあらむ人の、耳にも目にも
とまること、自然に多かるべし。

さるままには、真名を走り書いて、さるまじきどちの女文に、なかば過ぎて
書きすすめたる、あなうたて、この人のたをやかならましかばと見えたり。心
地にはさしも思はざらめど、おのづからこはごはしき声に読みなされなどしつ
つ、ことさらびたり。上臆の中にも、多かることぞかし。

歌詠むと思へる人の、やがて歌にまつはれ、をかしき古言をも初めより取り
込みつつ、すさまじき折々、詠みかけたるこそ、ものしきことなれ。返しせね
ば情けなし、えせざらむ人ははしたなからむ。

さるべき節会など、五月の節に急ぎ参る朝、何のあやめも思ひしづめられぬ
に、えならぬ根を引きかけ、九日の宴に、まづ難き詩の心を思ひめぐらして暇
なき折に、菊の露をかこち寄せなどやうの、つきなき営みにあはせ、さならで
もおのづから、げに後に思へばをかしくもあはれにもあべかりけることの、そ

げに消息文にも仮名といふもの書きませず、むべむべしく言ひまはしはべるに、おのづからえまかり絶えて、その者を師としてなむ、わづかなる腰折文作ることなど習ひはべりしかば、今にその恩は忘れはべらねど、なつかしき妻子とうち頼まむには、無才の人、なま悪ろならむ振る舞ひなど見えむに、恥づかしくなむ見えはべりし。まいて君達の御ため、はかばかしくしたたかなる御後見は、何にかせさせたまはむ。はかなし、口惜し、とかつ見つつも、ただわが心につき、宿世の引く方はべるめれば、男しもなむ、仔細なきものははべめる」

と申せば、残りを言はせむとて、「さてきてをかしかりける女かな」とすかいたまふを、心は得ながら、鼻のわたりをこづきて語りなす。

「さて、いと久しくまからざりしに、もののたよりに立ち寄りてはべれば、常のうちとけるたる方にははべらで、心やましき物越しにてなむ逢ひてはべる。ふすぶるにやと、をこがましくも、また、よきふしなりとも思ひたまふるに、このさかし人はた、軽々しきもの怨じすべきにもあらず、世の道理を思ひとりて恨みざりけり。

声もはやりかにて言ふやう、

『月ごろ、風病重きに堪へかねて、極熱の草薬を服して、いと臭きによりなむ、え対面賜はらぬ。目のあたりならずとも、さるべからむ雑事らは承らむ』

と、いとあはれにむべむべしく言ひはべり。答へに何とかは。ただ、『承りぬ』とて、立ち出ではべるに、さうぎうしくやおぼえけむ、

『この香失せなむ時に立ち寄りたまへ』と高やかに言ふを、聞き過ぐさむもいとほし、しばしやすらふべきに、はたはべらねば、げにそのにはひさへ、はなやかにたち添へるも術なくて、逃げ目をつかひて、

『ささがにのふるまひしるき夕暮れに　　ひるま過ぐせといふがあやなさ
いかなることつけぞや』

と、言ひも果てず走り出ではべりぬるに、追ひて、

かれはたえしも思ひ離れず、折々人やりならぬ胸焦がるる夕べもあらむとおぼえはべり。これなむ、え保つまじく頼もしげなき方なりける。

されば、かのさがな者も、思ひ出である方に忘れがたけれど、さしあたりて見むにはわづらはしく、よくせずは、飽きたきこともありなむや。琴の音すすめけむかどかどしきも、好きたる罪重かるべし。この心もとなきも、疑ひ添ふべければ、いづれとつひに思ひ定めずなりぬるこそ。世の中や、ただかくこそ。とりどりに比べ苦しかるべき。このさまざまのよき限りをとり具し、難ずべきくきはひまぜぬ人は、いづこにかはあらむ。吉祥天女を思ひかけむとすれば、法気づき、くすしからむこそ、また、わびしかりぬべけれ」とて、皆笑ひぬ。

「式部がところによ、けしきあることはあらむ。すこしづつ語り申せ」と責めらる。

「下が下の中には、なでふことか、聞こし召しどころはべらむ」と言へど、頭の君、まめやかに「遅し」と責めたまへば、何事をとり申さむと思ひめぐらすに、

「まだ文章生にはべりし時、かしこき女の例をなむ見たまへし。かの、馬頭の申したまへるやうに、公事をも言ひあはせ、私さまの世に住まふべき心おきてを思ひめぐらさむ方もいたり深く、才の際なまなまの博士恥づかしく、すべて口あかすべくなむはべらざりし。

それは、ある博士のもとに学問などしはべるとて、まかり通ひしほどに、あるじのむすめども多かりと聞きたまへて、はかなきついでに言ひ寄りてはべりしを、親聞きつけて、盃持て出でて、『わが両つの途歌ふを聴け』となむ、聞こえごちはべりしかど、をさをさうちとけてもまからず、かの親の心を憚りて、さすがにかかづらひはべりしほどに、いとあはれに思ひ後見、寢覚の語らひにも、身の才つき、おほやけに仕うまつるべき道々しきことを教へて、いとときよ

の見たまふるわたりより、情けなくうたてあることをなむ、さるたよりありてかすめ言はせたりける、後にこそ聞きはべりしか。

さる憂きことやあらむとも知らず、心には忘れずながら、消息などもせで久しくはべりしに、むげに思ひしをれて心細かりければ、幼き者などもありしに思ひわづらひて、撫子の花を折りておこせたりし」とて涙ぐみたり。

「さて、その文の言葉は」と問ひたまへば、「いさや、ことなることもなかりきや。」

『山がつの垣ほ荒るとも折々に あはれはかけよ撫子の露』

思ひ出でしままにまかりたりしかば、例のうらもなきものから、いと物思ひ顔にて、荒れたる家の露しげきを眺めて、虫の音に競へるけしき、昔物語めきておぼえはべりし。

『咲きまじる色はいづれと分かねども なほ常夏にしくものぞなき』

大和撫子をばさしおきて、まづ『塵をだに』など、親の心をとる。

『うち払ふ袖も露けき常夏に あらし吹きそふ秋も来にけり』

とはかなげに言ひなして、まめまめしく恨みたるさまも見えず。涙をもらし落としても、いと恥づかしくつつましげに紛らはし隠して、つらきをも思ひ知りけりと見えむは、わりなく苦しきものと思ひたりしかば、心やすくて、またとだえ置きはべりしほどに、跡もなくこそかき消ちて失せにしか。

まだ世にあらば、はかなき世にぞさすらふらむ。あはれと思ひしほどに、わづらはしげに思ひまとはすけしき見えましかば、かくもあくがらさざらまし。こよなきとだえおかず、さるものにしなして長く見るやうもはべりなまし。かの撫子のらうたくはべりしかば、いかで尋ねむと思ひたまふるを、今もえこそ聞きつけはべらね。

これこそそのたまへるはかなき例なめれ。つれなくてつらしと思ひけるも知らで、あはれ絶えざりしも、益なき片思ひなりけり。今やうやう忘れゆく際に、

さても見る限りはをかしくもありぬべし。時々にも、さる所にて忘れぬよすがと思ひたまへむには、頼もしげなくさし過ぐいたり心おかれて、その夜のことにつけてこそ、まかり絶えにしか。

この二つのことを思うたまへあはするに、若き時の心にだに、なほさやうにもて出でたることは、いとあやしく頼もしげなくおぼえはべりき。今より後は、ましてさのみなむ思ひたまへらるべき。御心のままに、折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見る玉笹の上の霰などの、艶にあえかなる好き好きしさのみこそ、をかしく思さるらめ、今さりとて、七年あまりがほどに思し知りはべなむ。なにがしがいやしき諫めにて、好きたわめらむ女に心おかせたまへ。過ちして、見む人のかたくななる名をも立てつべきものなり」

と戒む。中将、例のうなづく。君すこしかた笑みて、さることとは思すべかめり。

「いづ方につけても、人悪ろくはしたなかりける身物語かな」とて、うち笑ひおはさうず。

中将、「なにがしは、痴者の物語をせむ」とて、「いと忍びて見そめたりし人の、さても見つべかりしけはひなりしかば、ながらふべきものとしも思ひたまへざりしかど、馴れゆくままに、あはれとおぼえしかば、絶え絶え忘れぬものに思ひたまへしを、さばかりになれば、うち頼めるけしきも見えき。頼むにつけては、恨めしと思ふこともあらむと、心ながらおぼゆるをりをりもはべりしを、見知らぬやうにて、久しきとだえをも、かうたまさかなる人とも思ひたらず、ただ朝夕にもてつけたらむありさまに見えて、心苦しかりしかば、頼めわたることなどもありきかし。

親もなく、いと心細げにて、さらばこの人こそはと、事にふれて思へるさまもらうたげなりき。かうのどけきにおだしくて、久しくまからざりしころ、こ

こよなく心とまりはべりき。この人亡せて後、いかがはせむ、あはれながらも過ぎぬるはかひなくて、しばしばまかり馴るるには、すこしまばゆく艶に好ましきことは、目につかぬ所あるに、うち頼むべくは見えず、かれがれにのみ見せはべるほどに、忍びて心交はせる人ぞありけらし。

神無月のころほひ、月おもしろかりし夜、内よりまかではべるに、ある上人来あひて、この車にあひ乗りてはべれば、大納言の家にかかり泊まらむとするに、この人言ふやう、『今宵人待つらむ宿なむ、あやしく心苦しき』とて、この女の家はた、避きぬ道なりければ、荒れたる崩れより池の水かげ見えて、月だに宿る住処を過ぎむもさすがにて、下りはべりぬかし。

もとよりさる心を交はせるにやありけむ、この男いたくすすろきて、門近き廊の簀子だつものに尻かけて、とばかり月を見る。菊いとおもしろく移ろひわたり、風に競へる紅葉の乱れなど、あはれと、げに見えたり。

懐なりける笛取り出でて吹き鳴らし、『蔭もよし』などつづしり謡ふほどに、よく鳴る和琴を、調べととのへたりける、うるはしく掻き合はせたりしほど、けしうはあらずかし。律の調べは、女のものやはらかに掻き鳴らして、簾の内より聞こえたるも、今めきたる物の声なれば、清く澄める月に折つきなからず。男いたくめでて、簾のもとに歩み来て、

『庭の紅葉こそ、踏み分けたる跡もなけれ』などねたます。菊を折りて、

『琴の音も月もえならぬ宿ながら　つれなき人をひきやとめける

悪ろかめり』など言ひて、『今ひと声、聞きはやすべき人のある時、手な残いたまひそ』など、いたくあざれかかれば、女、いたう声つくろひて、

『木枯に吹きあはすめる笛の音を　ひきとどむべき言の葉ぞなき』

となまめき交はすに、憎くなるをも知らで、また、箏の琴を盤渉調に調べて、今めかしく掻い弾きたる爪音、かどなきにはあらねど、まばゆき心地なむしはべりし。ただ時々うち語らふ宮仕へ人などの、あくまでさればみ好きたるは、

心やありけむと、さしも見たまへざりしことなれど、心やましきままに思ひはべりしに、着るべき物、常よりも心とどめたる色あひ、しぎまいとあらまほしくて、さすがにわが見捨ててむ後をさへなむ、思ひやり後見たりし。

さりとも、絶えて思ひ放つやうはあらじと思うたまへて、とかく言ひはべりしを、背きもせずと、尋ねまどはさむとも隠れ忍びず、かかやかしからず答へつつ、ただ、『ありしながらは、えなむ見過ぐすまじき。あらためてのどかに思ひならばなむ、あひ見るべき』など言ひしを、さりともえ思ひ離れじと思ひたまへしかば、しばし懲らさむの心にて、『しかあらためむ』とも言はず、いたく綱引きて見せしあひだに、いといたく思ひ嘆きて、はかなくなりはべりしかば、戯れにくくなむおぼえはべりし。

ひとへにうち頼みたらむ方は、さばかりにてありぬべくなむ思ひたまへ出でらるる。はかなきあだ事をもまことの大事をも、言ひあはせたるにかひなからず、龍田姫と言はむにもつきなからず、織女の手にも劣るまじくその方も具して、うるさくなむはべりし」

とて、いとあはれと思ひ出でたり。中将、

「そのたなばたの裁ち縫ふ方をのどめて、長き契りにぞあえまし。げに、その龍田姫の錦には、またしくものあらじ。はかなき花紅葉といふも、をりふしの色あひつきなく、はかばかしからぬは、露のはえなく消えぬるわざなり。さあるにより、難き世とは定めかねたるぞや」

と、言ひはやしたまふ。

「さて、また同じころ、まかり通ひし所は、人も立ちまさり心ばせまことにゆゑありと見えぬべく、うち詠み、走り書き、搔い弾く爪音、手つき口つき、みなたどたどしからず、見聞きわたりはべりき。見る目もこともなくはべりしかば、このさがな者を、うちとけたる方にて、時々隠ろへ見はべりしほどは、

べければ、かたみに背きぬべききざみになむある』

とねたげに言ふに、腹立たしくなりて、憎げなることどもを言ひはげまはべるに、女もえをさめぬ筋にて、指ひとつを引き寄せて喰ひてはべりしを、おどろおどろしくかこちて、

『かかる疵さへつきぬれば、いよいよ交じらひをすべきにもあらず。辱めたまふめる官位、いとどしく何につけてかは人めかむ。世を背きぬべき身なめり』など言ひ脅して、『さらば、今日こそは限りなめれ』と、この指をかがめてまかでぬ。

『手を折りてあひ見しことを数ふれば　これひとつやは君が憂きふし　えうらみじ』

など言ひはべれば、さすがにうち泣きて、

『憂きふしを心ひとつに数へきて　こや君が手を別るべきをり』
など、言ひしろひはべりしかど、まことには変るべきこととも思ひたまへずながら、日ごろ経るまで消息も遣はさず、あくがれまかり歩くに、臨時の祭の調楽に、夜更けていみじう霏降る夜、これかれまかりあかるる所にて、思ひめぐらせば、なほ家路と思はむ方はまたなかりけり。

内わたりの旅寝すさまじかるべく、気色ばめるあたりはそぞろ寒くや、と思ひたまへられしかば、いかが思へると、気色も見がてら、雪をうち払ひつつ、なま人悪ろく爪喰はるれど、さりともし宵日ごろの恨みは解けなむ、と思つたまへしに、火ほのかに壁に背け、萎えたる衣どもの厚肥えたる、大いなる籠のうち掛けて、引き上ぐべきものの帷子などうち上げて、今宵ばかりやと、待ちけるさまなり。さればよと、心おごりするに、正身はなし。さるべき女房どもばかりとまりて、『親の家に、この夜さりなむ渡りぬる』と答へはべり。

艶なる歌も詠まず、気色ばめる消息もせで、いとひたや籠もりに情けなかりしかば、あへなき心地して、さがなく許しなかりしも、我を疎みねと思ふ方の

く疑ひはべりしもうるさくて、かく数ならぬ身を見も放たで、などかくしも思ふらむと、心苦しき折々もはべりて、自然に心をさめらるるやうになむはべりし。

この女のあるやう、もとより思ひいたらざりけることにも、いかでこの人のためにはと、なき手を出だし、後れたる筋の心をも、なほ口惜しくは見えじと思ひはげみつつ、とにかくにつけて、ものまめやかに後見、つゆにても心に違ふことはなくもがなと思へりしほどに、進める方と思ひしかど、とかくになびきてなよびゆき、醜き容貌をも、この人に見や疎まれむと、わりなく思ひつくるひ、疎き人に見えば、面伏せにや思はむと、憚り恥ぢて、みさをにもてつけて見馴るるままに、心もけしうはあらずはべりしかど、ただこの憎き方一つなむ、心をさめずはべりし。

そのかみ思ひはべりしやう、かうあながちに従ひ怖ぢたる人なめり、いかで懲るばかりのわざして、おどして、この方もすこしよろしくもなり、さがなきもやめむと思ひて、まことに憂しなども思ひて絶えぬべき気色ならば、かばかり我に従ふ心ならば思ひ懲りなむと思うたまへ得て、ことさらに情けなくつれなきさまを見せて、例の腹立ち怨ずるに、

『かくおぞましくは、いみじき契り深くとも、絶えてまた見じ。限りと思はば、かくわりなきもの疑ひはせよ。行く先長く見えむと思はば、つらきことありとも、念じてなのために思ひなりて、かかる心だに失せなば、いとあはれとなむ思ふべき。人並々にもなり、すこしおとなびむに添へて、また並ぶ人なくあるべき』やうなど、かしこく教へたつるかなと思ひたまへて、われたけく言ひそしはべるに、すこしうち笑ひて、

『よろづに見立てなく、ものげなきほどを見過ぐして、人数なる世もやと待つ方は、いとのだかに思ひなされて、心やましくもあらず。つらき心を忍びて、思ひ直らむ折を見つけむと、年月を重ねむあいな頼みは、いと苦しくなむある

め、ふとしも見え分かれず。かかれど、人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の怒れる魚の姿、唐国のはげしき獣の形、目に見えぬ鬼の顔などの、おどろおどろしく作りたる物は、心にまかせてひとときは目驚かして、実には似ざらめど、さてありぬべし。

世の常の山のたたずまひ、水の流れ、目に近き人の家居ありさま、げにと見え、なつかしくやはらいだる形などを静かに描きまぜて、すくよかならぬ山の景色、木深く世離れて畳みなし、け近き籬の内をば、その心しらひおきてなどをなむ、上手はいと勢ひことに、悪ろ者は及ばぬ所多かめる。

手を書きたるにも、深きことはなくて、ここかしの、点長に走り書き、そこはかとなく気色ばめるは、うち見るにかどかどしく気色だちたれど、なほまことの筋をこまやかに書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆれど、今ひとたびとり並べて見れば、なほ実になむよりける。

はかなきことだにかくこそはべれ。まして人の心の、時にあたりて気色ばめらむ見る目の情けをば、え頼むまじく思うたまへ得てはべる。そのはじめのこと、好き好きしくとも申しはべらむ」

とて、近くゐる寄れば、君も目覚ましたまふ。中将いみじく信じて、頬杖をつきて向かひゐたまへり。法の師の世のことわり説き聞かせむ所の心地するも、かつはをかしけれど、かかるついでは、おのおの睦言もえ忍びとどめずなむありける。

「はやう、まだいと下臆にはべりし時、あはれと思ふ人はべりき。聞こえさせつるやうに、容貌などいとまほにもはべらざりしかば、若きほどの好き心には、この人をとまりにとも思ひとどめはべらず、よるべとは思ひながら、さうざうしくて、とかく紛れはべりしを、もの怨じをいたくしはべりしかば、心づきなく、いとかからで、おいらかならましかばと思ひつつ、あまりいと許しな

また、なのめに移ろふ方あらむ人を恨みて、気色ばみ背かむ、はたをこがましかりなむ。心は移ろふ方ありとも、見そめし心ぎしいとほしく思はば、さる方のよすがに思ひてもありぬべきに、さやうならむたぢろきに、絶えぬべきわざなり。

すべて、よろづのことなだらかに、怨ずべきことをば見知れるさまにほのめかし、恨むべからむふしをも憎からずかすめなさば、それにつけて、あはれもまさりぬべし。多くは、わが心も見る人からをさまりもすべし。あまりむげにうちゆるべ見放ちたるも、心安くうたきやうなれど、おのづから軽き方にぞおぼえはべるかし。繋がぬ舟の浮きたる例も、げにあやなし。さははべらぬか」と言へば、中将うなづく。

「さしあたりて、をかしともあはれとも心に入らむ人の、頼もしげなき疑ひあらむこそ、大事なるべけれ。わが心あやまちなくて見過ぐさば、さし直してもなか見ざらむとおぼえたれど、それさしもあらじ。ともかくも、違ふべきふしあらむを、のどやかに見忍ばむよりほかに、ますことあるまじかりけり」と言ひて、わが妹の姫君は、この定めにかなひたまへりと思へば、君のうちねぶりに言葉ませたまはぬを、さうざうしく心やましと思ふ。馬頭、物定め博士になりて、ひひらきむたり。中将は、このことわり聞き果てむと、心入れて、あへしらひるたまへり。

「よろづのことによそへて思せ。木の道の匠のよろづの物を心にまかせて作り出だすも、臨時のもてあそび物の、その物と跡も定まらぬは、そばつきさればみたるも、げにかうもしつべかりけりと、時につけつつさまを変へて、今めかしきに目移りてをかしきもあり。大事として、まことにうるはしき人の調度の飾りとする、定まれるやうある物を難なくし出づることなむ、なほまことの物の上手は、さまことに見え分かれはべる。

また絵所に上手多かれど、墨がきに選ばれて、次々にさらに劣りまさるけぢ

ゑよし心ばせうち添へたらむをば、よろこびに思ひ、すこし後れたる方あらむをも、あながちに求め加へじ。うしろやすくのどけき所だに強くは、うはべの情けは、おのづからもてつけつべきわざをや。

艶にも恥ぢして、恨み言ふべきことも見知らぬさまに忍びて、上はつれなくみさをつくり、心一つに思ひあまる時は、言はむかたなくすぎき言の葉、あはれなる歌を詠みおき、しのぼるべき形見をとどめて、深き山里、世離れたる海づらなどにはひ隠れぬるをりかし。童にはべりし時、女房などの物語読みしを聞きて、いとあはれに悲しく、心深きことかなと、涙をさへなむ落としはべりし。今思ふには、いと軽々しく、ことさらびたることなり。心ざし深からむ男をおきて、見る目の前につらきことありとも、人の心を見知らぬやうに逃げ隠れて、人をまどはし、心を見むとするほどに、長き世のもの思ひになる、いとあぢきなきことなり。

『心深しや』など、ほめたてられて、あはれ進みぬれば、やがて尼になりぬかし。思ひ立つほどは、いと心澄めるやうにて、世に返り見すべくも思へらず。

『いで、あな悲し。かくはた思しなりにけるよ』などやうに、あひ知れる人來とぶらひ、ひたすらに憂しとも思ひ離れぬ男、聞きつけて涙落とせば、使ふ人、古御達など、『君の御心は、あはれなりけるものを。あたら御身を』など言ふ。みづから額髪をかきさぐりて、あへなく心細ければ、うちひそみぬかし。忍ぶれど涙こぼれそめぬれば、折々ごとにえ念じえず、悔しきこと多かめるに、仏もなかなか心ぎたなしと、見たまひつべし。濁りにしめるほどよりも、なま浮かびにては、かへりて悪しき道にも漂ひぬべくぞおぼゆる。絶えぬ宿世浅からで、尼にもなさで尋ね取りたらむも、やがてその思ひ出でうらめしきふしあらざらんや。

あしくもよくもあひ添ひて、とあらむ折もかからむきざみをも、見過ぐしたらむ仲こそ、契り深くあはれならめ、我も人も、うしろめたく心おかれじやは。

言ひ寄れど、息の下にひき入れ言少ななるが、いとよくもて隠すなりけり。なよびかに女しと見れば、あまり情けにひきこめられて、とりなせば、あだめく。これをはじめの難とすべし。

事が中に、なのめなるまじき人の後見の方は、ものあはれ知り過ぐし、はかなきついで的情けあり、をかしきに進める方なくてもよかるべしと見えたるに、また、まめまめしき筋を立てて耳はさみがちに美さうなき家刀自の、ひとへにうちとけたる後見ばかりをして、朝夕の出で入りにつけても、公私の人のたたずまひ、善き悪しきことの、目にも耳にもとまるありさまを、疎き人に、わざとうちまねばむやは。近くて見む人の聞きわき思ひ知るべからむに語りも合はせばやと、うちも笑まれ、涙もさしぐみ、もしは、あやなきおほやけ腹立たしく、心ひとつに思ひあまることなど多かるを、何にかは聞かせむと思へば、うちそむかれて、人知れぬ思ひ出で笑ひもせられ、『あはれ』とも、うち独りごたるるに、『何ごとぞ』など、あはつかにさし仰ぎゐたらむは、いかがは口惜しからぬ。

ただひたふるに子めきて柔らかならむ人を、とかくひきつくろひてはなどか見ざらむ。心もとなくとも、直し所ある心地すべし。げに、さし向ひて見むほどは、さてもらうたき方に罪ゆるし見るべきを、立ち離れてさるべきことをも言ひやり、をりふしにし出でむわざのあだ事にもまめ事にも、わが心と思ひ得ることなく深きいたりなからむは、いと口惜しく頼もしげなき咎や、なほ苦しからむ。常はすこしそばそばしく心づきなき人の、をりふしにつけて出でばえするやうもありかし」

など、隈なきもの言ひも、定めかねていたくうち嘆く。

「今は、ただ、品にもよらじ。容貌をばさらにも言はじ。いと口惜しくねぢけがましきおぼえだになくは、ただひとへにもそのままやかに、静かなる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼み所には思ひおくべかりける。あまりのゆ

「いでや、上の品と思ふにだに難げなる世を」と、君は思すべし。白き御衣どものなよらかなるに、直衣ばかりをしどけなく着なしたまひて、紐などもち捨てて、添ひ臥したまへる御火影、いとめでたく、女にて見たてまつらまほし。この御ためには上が上を選び出でて、なほ飽くまじく見えたまふ。

さまさまの人の上どもを語り合はせつつ、

「おほかたの世につけて見るには咎なきも、わがものとうち頼むべきを選らむに、多かる中にも、えなむ思ひ定むまじかりける。をのこのおほやけに仕うまつり、はかばかしき世のかためとなるべきも、まことの器ものとなるべきを取り出ださむには、かたかるべしかし。されど、賢しとても、一人二人世の中をまつりごちしるべきならねば、上は下に輔けられ、下は上になびきて、こと広きに譲ろふらむ。

狭き家の内のあるじとすべき人一人を思ひめぐらすに、足らはで悪しかるべき大事どもなむ、かたがた多かる。とあればかかり、あふさきるさにて、なめにさてもありぬべき人の少なきを、好き好きしき心のすさびにて、人のありさまをあまた見合はせむの好みならねど、ひとへに思ひ定むべきよるべとすばかりに、同じくは、わが力入りをし直しひきつくろふべき所なく、心にかなふやうにもやと、選りそめつる人の、定まりがたきなるべし。

かならずしもわが思ふにかなはねど、見そめつる契りばかりを捨てがたく思ひとまる人は、ものまめやかなりと見え、さて、保たるる女のためも、心にくく推し量らるるなり。されど、何か、世のありさまを見たまへ集むるままに、心に及ばずいとゆかしきこともなしや。君達の上なき御選びには、まして、いかばかりの人かは足らひたまはむ。

容貌きたなげなく、若やかなるほどの、おのがじしは塵もつかじと身をもてなし、文を書けど、おほどかに言選りをし、墨つきほのかに心もとなく思はせつつ、またさやかにも見てしがなとすべなく待たせ、わづかなる声聞くばかり

受領と言ひて、人の国のことにかかづらひ宮みて、品定まりたる中にも、またきぎみきぎみありて、中の品のけしうはあらぬ、選り出でつべきころほひなり。なまなまの上達部よりも非参議の四位どもの、世のおぼえ口惜しからず、もとの根ざし卑しからぬ、やすらかに身をもてなしふるまひたる、いとかはらかなりや。

家の内に足らぬことなど、はたなかめるままに、省かずまばゆきまでもてかしづける女などの、おとしめがたく生ひ出づるもあまたあるべし。宮仕へに出で立ちて、思ひかけぬ幸ひとり出づる例ども多かりかし」など言へば、

「すべて、にぎははしきによるべきななり」とて、笑ひたまふを、

「異人の言はむやうに、心得ず仰せらる」と、中将憎む。

「元の品、時世のおぼえうち合ひ、やむごとなきあたりの内々のもてなしけはひ後れたらむは、さらにも言はず、何をしてかく生ひ出でけむと、言ふかひなくおぼゆべし。うち合ひてすぐれたらむもことわり、これこそはさるべきこととおぼえて、めづらかなることと心も驚くまじ。なにがしが及ぶべきほどならねば、上が上はうちおきはべりぬ。

さて、世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひの外にらうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ、限りなくめづらしくはおぼえめ。いかで、はたかかりけむと、思ふより違へることなむ、あやししく心とまるわざなる。

父の年老い、ものむつかしげに太りすぎ、兄の顔憎げに、思ひやりことなることなき閨の内に、いといたく思ひあがり、はかなくし出でたることわざも、ゆゑなからず見えたらむ、片かどにても、いかが思ひの外にをかしからざらむ。

すぐれて疵なき方の選びにこそ及ばざらめ、さる方にて捨てがたきものをは」とて、式部を見やれば、わが妹どものよろしき聞こえあるを思ひてのたまふにや、とや心得らむ、ものも言はず。

び出だすに、『それ、しかあらじ』と、そらにいかがは推し量り思ひくたさむ。まことかとも見もてゆくに、見劣りせぬやうは、なくなむあるべき」

と、うめきたる気色も恥づかしげなれば、いとなべてはあらねど、われ思し合はすることやあらむ、うちほほ笑みて、

「その、片かどもなき人は、あらむや」とのたまへば、

「いと、さばかりならむあたりには、誰れかはすかされ寄りはべらむ。取るかたなく口惜しき際と、優なりとおぼゆばかりすぐれたるとは、数等しくこそはべらめ。人の品高く生まれぬれば、人にもてかしづかれて、隠るること多く、自然にそのけはひこよなかるべし。中の品になむ、人の心々、おのがじしの立てたるおもむきも見えて、分かるべきことかたがた多かるべき。下のきざみといふ際になれば、ことに耳たたずかし」

とて、いと隈なげなる気色なるも、ゆかしくて、

「その品々や、いかに。いづれを三つの品に置いてか分くべき。元の品高く生まれながら、身は沈み、位みじかくて人げなき。またなほ人の上達部などまでなり上り、我は顔にて家の内を飾り、人に劣らじと思へる。そのけぢめをば、いかが分くべき」

と問ひたまふほどに、左の馬の頭、藤式部の丞、御物忌に籠もらむとて参れり。世の好き者にて物よく言ひとほれるを、中将待ちとりて、この品々をわきまへ定め争ふ。いと聞きにくきこと多かり。

「なり上れども、もとよりさるべき筋ならぬは、世人の思へることも、さは言へど、なほことなり。また、元はやむごとなき筋なれど、世に経るたづき少なく、時世に移ろひて、おぼえ衰へぬれば、心は心としてこと足らず、悪ろびたることども出でくるわざなめれば、とりどりにことわりて、中の品にぞ置くべき。」

しがあれば、

「さりぬべき、すこしは見せむ。かたはなるべきもこそ」と、許したまはねば、

「そのうちとけてかたはらいたしと思されむこそゆかしけれ。おしなべたるおほかたのは、数ならねど、程々につけて、書き交はしつつも見はべりなむ。おのがじし、恨めしき折々、待ち顔ならむ夕暮れなどのこそ、見所はあらめ」と怨ずれば、やむごとなくせちに隠したまふべきなどは、かやうにおほぞうなる御厨子などにうち置き散らしたまふべくもあらず、深くとり置きたまふべかめれば、二の町の心安きなるべし、片端づつ見るに、「かくさまざまなる物どもこそはべりけれ」とて、心あてに「それか、かれか」など問ふなかに、言ひ当つるもあり、もて離れたることをも思ひ寄せて疑ふも、をかしと思せど、言少なにてとかく紛らはしつつ、とり隠したまひつ。

「そこにこそ多く集へたまふらめ。すこし見ばや。さてなむ、この厨子も心よく開くべき」とのたまへば、

「御覧じ所あらむこそ、難くはべらめ」など聞こえたまふついでに、「女の、これはしもと難つくまじきは、難くもあるかなと、やうやうなむ見たまへ知る。ただうはべばかりの情けに、手走り書き、をりふしの答へ心得て、うちしなどばかりは、随分によろしきも多かりと見たまふれど、そもまことにその方を取り出でむ選びにかならず漏るまじきは、いと難しや。わが心得たることばかりを、おのがじし心をやりて、人をば落としめなど、かたはらいたきこと多かり。親など立ち添ひもてあがめて、生ひ先籠れる窓の内なるほどは、ただ片かどを聞き伝へて、心を動かすこともあめり。容貌をかしくうちおほどき、若やかにて紛ることなきほど、はかなきすさびをも、人まねに心を入るることもあるに、おのづから一つゆゑづけてし出づることもあり。

見る人、後れたる方をば言ひ隠し、さてありぬべき方をばつくろひて、まね

光源氏、名のみことことしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかる好きごとどもを、末の世にも聞き伝へて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひける隠ろへごとをさへ、語り伝へけむ人のもの言ひさがなきよ。さるは、いといたく世を憚り、まめだちたまひけるほど、なよびかにをかしきことはなくて、交野の少将には笑はれたまひけむかし。

まだ中将などにもものしたまひし時は、内にのみさぶらひようしたまひて、大殿には絶え絶えまかだたまふ。忍ぶの乱れやと、疑ひきこゆることもありしかど、さしもあだめき目馴れたるうちつけの好き好きしさなどは好ましからぬ御本性にて、まれには、あながちに引き違へ心尽くしなることを、御心に思しとどむる癖なむ、あやにくにて、さるまじき御振る舞ひもうち混じりける。

長雨晴れ間なきころ、内の御物忌さし続きて、いとど長居さぶらひたまふを、大殿にはおぼつかなく恨めしく思したれど、よろづの御よそひ何くれとめづらしきさまに調じ出でたまひつつ、御息子の君たちただこの御宿直所の宮仕へを勤めたまふ。

宮腹の中将は、なかに親しく馴れきこえたまひて、遊び戯れをも人よりは心安く、なれなれしく振る舞ひたり。右大臣のいたはりかしづきたまふ住み処は、この君もいとももの憂くして、好きがましきあだ人なり。

里にても、わが方のしつらひまばゆくして、君の出で入りしたまふにうち連れきこえたまひつつ、夜昼、学問をも遊びをももろともにして、をさをさ立ちおくれず、いづくにてもまつはれきこえたまふほどに、おのづからかしこまりもえおかず、心のうちに思ふことをも隠しあへずなむ、睦れきこえたまひける。

つれづれと降り暮らして、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさをさ人少なに、御宿直所も例よりはのどやかなる心地するに、大殿油近くて書どもなど見たまふ。近き御厨子なる色々の紙なる文どもを引き出でて、中将わりなくゆか

帶 木

帶

木

真木柱 藤袴 行幸 野分 篝火 常夏 蛩 胡蝶 初音 玉鬘 関屋 蓬生 未摘花 夕顔 空蝉 帚木

三〇 四二 六四 七九 八三 一〇一 一一七 一三四 一四六 一七九 一八四 二〇二 二二六 二六〇 二六九 三〇一